スラヴ世界における文化の越境と交錯

(研究課題番号 15310171)

平成15年度~平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))研究成果報告書

平成19年2月

研究代表者 諫 早 勇 一 (同志社大学言語文化教育研究センター教授)

スラヴ世界における文化の越境と交錯

平成15年度~平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))研究成果報告書

スラヴ世界における文化の越境と交錯

はしがき

諫早勇一

スラヴ世界は、言語的共通性の高いスラヴ諸語で結ばれ、共族意識の強い諸民族から成り立つ求心性の強い世界だが、同時にナショナリズムとそれを超える大義との相克に引き裂かれ、国境という人為的な境界を超えた文化の交錯が、長い時代を通して日常的に行われていた世界でもある。

本研究はスラヴ世界におけるこうした文化の越境と交錯を具体的に検証するために、民族意識が覚醒した 18-19 世紀と、諸民族がつぎつぎに独立して民族国家を形成していった 1920 - 30 年代を二つの柱として取り上げた。この 2 つの時代は、ナショナルな気分が高揚すると同時に、それを超えたスラヴという存在が明確に意識され、スラヴ世界における文化の越境と交錯が顕著に見られる時代だからだ。

そして、前者の時代においては、近代文章語の成立をめぐる問題、国民文学の形成とナショナリズムとのかかわり、ナショナリズムと、汎スラヴ主義などそれを超える大義との葛藤に焦点を当てて研究を開始したが、後者の時代においては、ソヴィエト・ロシアと周辺スラヴ諸国との文化的対決、亡命者などの越境者がスラヴ文化の交錯に果たした役割などを視野に収めつつ、文学・美術・映画・演劇などの諸芸術に具体的に見られる文化の越境と交錯を検証していった。

さて、今日スラヴ諸国ではロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、チェコ語などさまざまな言語が使われているが、これらの言語は何百年も前から現在のような形で存在したわけではない。スラヴ諸語のなかには実際に消滅してしまった言語もあるし、現在その存在が危機に瀕している言語もある。また、一旦存在が危うくされながら、民族復興運動の高揚によって自己を確立した言語もある。こうしたスラヴ諸語の運命への関心、とりわけ近代文章語の成立とナショナリズムのかかわりへの関心は、言語分野担当者(服部、三谷、フィアラ)の共通するところとなった。

このように 18-19 世紀にかけての時代は、なによりも民族意識が高揚した時代だったが、スラヴ諸国において、そのナショナリズムは一国・一民族の枠にとどまらず、しばしばより広い概念、すなわち汎スラヴィズム、スラヴ・メシアニズムを志向していた。石川の論はこうした汎スラヴ主義の系譜をたどったものだし、松本の論もドストエフスキイにおける汎スラヴ主義の淵源を極めようとしている。そして、日野の著した多くの論文も、ウクライナにおける国民文学誕生期にかかわっている。民族を超える大義とナショナリズムとの相克のダイナミズムは、本研究で一定の研究成果を得たといえるだろう。

最後に民族国家がつぎつぎと誕生した 1920-30 年代だが、この時代はロシア革命が大量の亡命者をスラヴ諸国に送り出した時代でもあった。諫早はこうした亡命者と受け入れたスラヴ諸国との関係を文化全般にわたって考察したが、楯岡はとくに演劇に焦点を絞って、この時代のロシア演劇の越境について論考をまとめている。また、メーリニコワは、ロシア映画に見られるスラヴ人のイメージを通時的に比較検証して、ロシア人にとってのスラヴ・イメージについて興味深い結論を導き出し、大平はとくにブックデザインに焦点を当てて、ロシアとチェコスロヴァキアのアヴァンギャルド芸術の相互関係についてユニークな考察を加えた。全体として、この時代の「スラヴ世界の越境と交錯」については、かなり具体的な成果が得られたといってよい。

以下の論集は、このような4年間にわたる共同研究の成果を具体化したものだが、本研究では2003年秋より半年に1回ずつ研究会を開催して、研究分担者が研究の中間報告を行い、他のメンバーのコメントを受けて、さらに研究を発展させるという作業も行ってきた。研究会の記録は次ページ以下に掲げてあるが、ここに参加して研究に貴重な示唆を与えてくれた5名のゲストスピーカーのかたがた(望月哲男・北海道大学スラブ研究センター教授、Andrei Malchukov・神戸大学国際文化学部外国人研究員、福間加容・天理大学非常勤講師、岩本和久・稚内北星学園大学情報メディア学部教授、中村唯史・山形大学人文学部助教授:なお、肩書は報告当時のもの)には、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

専門の違う 10 名のメンバーによる共同研究は、さまざまな困難に直面したが、また思いがけない刺激を受けるエキサイティングな場でもあった。4 年間研究をともにしてくれた研究分担者とともに、このささやかな成果を喜びたい。

研究組織

研究代表者:諫早勇一(同志社大学・言語文化教育研究センター・教授)

研究分担者: Melnikova Irina (同志社大学・言語文化教育研究センター・教授)

松本賢一(同志社大学・言語文化教育研究センター・助教授)(ただし、平成

18年度は在外研究のため分担を外れた)

服部文昭(京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授)

三谷惠子(京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授)

石川達夫(神戸大学・国際文化学部・教授)

楯岡求美(神戸大学・国際文化学部・助教授)

大平陽一(天理大学・国際文化学部・助教授)

日野貴夫 (天理大学・国際文化学部・助教授)

Fiala Karel (福井県立大学・学術教養センター・教授)

交付決定額(配分額)(金額単位:千円)

	直接経費	間接経費	合 計
平成15年度	3,800	0	3,800
平成16年度	2,800	0	2,800
平成17年度	2,800	0	2,800
平成18年度	4,200	0	4,200
総計	13,600	0	13,600

研究会の記録

1.2003年11月8日(土)

報告 望月哲男・北海道大学スラブ研究センター教授「スラヴ学の構築に向けて:社会主義リアリズム論の現在」

2.2004年6月12日(土)

報告 三谷惠子「上ソルブ語の語彙の変遷と動詞派生名詞~スラヴ語比較形態論にむけて~」

諫早勇一「中東欧諸国における亡命ロシア文化」

3.2004年11月13日(土)

報告 服部文昭「17世紀前半のロシア語に見る動詞過去時制の一考察」 松本賢一「露土戦争とドストエフスキイ」 Andrei Malchukov·神戸大学国際文化学部外国人研究員「Russian interference in Tungusic languages in an areal-typological perspective」

4.2005年7月2日(土)

報告 楯岡求美「フョードル・コミッサルジェフスキーとイギリスにおけるチェーホフ 受容」

福間加容・天理大学非常勤講師「ロシアにおける日本美術の受容」

5.2005年11月5日(土)

報告 Irina Melnikova「Киномиф о «Славянском братстве»」

Karel Fiala「チェコ語と日本語の情報構造」

6.2006年9月21日(木)

報告 大平陽一「チェコ・アヴァンギャルドのブックデザインについて―カレル・タイゲを中心に」

石川達夫「スラヴ語・スラヴ文化を衰滅から救え!——汎スラヴ主義の起源と展開——」

岩本和久・稚内北星学園大学情報メディア学部教授「ペレーヴィン『妖怪の聖なる書』にみるロシア・イメージの構築」

中村唯史・山形大学人文学部助教授「ビートフ『アルメニアの授業』考:マンデリシターム、バフチンとの関連で」

研究発表

(1) 学会誌等

諫早勇一、同化と共生——中東欧諸国における亡命ロシア文化序説——、『言語文化』第9巻第1号、2006.8、pp.97-115.

諫早勇一、『キング、クィーンそしてジャック』のベルリン――大都市小説とはなにか――、 科学研究費補助金研究成果報告書『両大戦間のドイツにおけるゲルマンとスラブの文化接触とその歴史的意義』、2006.3、pp.5-20.

諫早勇一、RUSSIAN BERLIN、『言語文化』第8巻第2号、2005.12、pp.313-353

諫早勇一、文集『道標転換』と雑誌『道標転換』——帰国運動とのかかわりから、『言語文化』第7巻第2号、2004.12、pp.267-283.

諫早勇一、都市の見取り図 ナボコフのベルリン、『言語文化』第 6 巻第 4 号、2004.3、pp.553-571.

Ирина Мельникова, Харбинский соловей и московские стиляги: кино, музыка и проблема культурной идентичности. Часть 1. «Мой соловей»、『言語文化』第8巻第4号、2006.3、pp.691-718.

Ирина Мельникова, Образ японца в советском кино 30-60х годов、科学研究費補助金研究成果報告書『視覚メディアにあらわれた日露相互のイメージと表象—日露理解のために』、2005.3、pp.55-73.

松本賢一、ワイマール期ドイツにおけるドストエフスキイ流行の一側面――メラー ファン デン ブルックとドストエフスキイ――、科学研究費補助金研究成果報告書『両大戦間のドイツにおけるゲルマンとスラブの文化接触とその歴史的意義』、2006.3、pp.48-68. 松本賢一、ニコライ・ストラーホフと「施し」の問題(2)『言語文化』第8巻第2号、2005.12、pp.285-312.

松本賢一、ニコライ・ストラーホフと「施し」の問題(1)『言語文化』第7巻第4号、 2005.3、pp.387-414.

松本賢一、ドストエフスキイにおける братство の概念について、『言語文化』第6巻第2号、2003.12、pp.181-200.

松本賢一、『冬に記す夏の印象』における個と全体の関係について、『むうざ』第 22 号、2003.12、pp.4-17.

服部文昭、古代ロシア語とは――その萌芽期におけるハイブリッド性の多様さと重層性から――、科学研究費補助金研究成果報告書『古代ロシア語文語萌芽期の第二段階におけるハイブリッド性の多様さと重層性について』、2006、pp.11-21.

Фумиаки Хаттори, К вопросу о древнерусской системе прошедшего времени в живой речи XII века, Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese Contributions to the Thirteenth International Congress of Slavists, 2003, pp.57-67.

三谷惠子、GRESTI, ITI, HODITI—南スラヴ語における 3 つの移動動詞について、『Dynamis』(京都大学人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座論集) Vol. 9、2005、pp.54-96.

三谷惠子、Bila jednom jedna zemlja...—旧ユーゴ各地のメディア、言語、そしてアイデンティティー、沼野充義編『ポスト共産主義時代のクロノトポス——サントリー文化財団助成「ポスト共産主義時代のロシア東欧文化」研究会成果論集』(東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室) 2005.11、pp.55-77.

三谷惠子、ドゥブロヴニクと中世バルカン世界—ストンの買収をめぐる歴史と文献への考察+ミロラド・パヴィッチ『ドゥブロヴニクの晩餐』、『Dynamis』 Vol. 8、2004、pp.91-126. 三谷惠子、上ソルブ語の語彙目録(レキシコン)の変化と標準語形成の過程、『西スラブ論集』第7号、2004、pp.4-18.

三谷惠子、完了形と過去時制—古チャ方言の用法に見る南スラヴ語の動詞体系の変化、 『Dynamis』Vol.7, 2003, pp.57-75.

三谷惠子、中世スラヴ法文献の統語論的特徴——スラヴ語比較統語論のために、『ロシア語ロシア文学研究』第 35 号、2003.10、p.11-18.

Keiko Mitani , Perfect u staročakavskom jeziku. Uporaba i gramatičko značenje u

sprednjovjekovnim tekstovima, Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese Contributions to the Thirteenth International Congress of Slavists, 2003, pp.39-56.

三谷惠子、ロシア語動詞の「体」——ゲルマニストのための案内、Sprachwissenschaft Kyoto No. 2, 2003, pp.21-40.

石川達夫、チェコにおける言語の複数性と民族的アイデンティティ――「チェコ民族復興運動」期を中心に――、科学研究費補助金研究成果報告書『ヨーロッパ文化のアイデンティティと民族意識――多言語・多文化世界のダイナミズム』、2006.2、pp.1-49

石川達夫、ナチズムに反対したチェコのドイツ人の運命は?――ポスト共産主義時代のタブー緩和の中で――、沼野充義編『ポスト共産主義時代のクロノトポス――サントリー文化財団助成「ポスト共産主義時代のロシア東欧文化」研究会成果論集』(東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室) 2005.11、pp.48-54

石川達夫、マサリクとロシア――ヨーロッパから見たロシア、T・G・マサリク『ロシアとヨーロッパ――ロシアにおける精神潮流の研究』第3巻(成文社)所収、2005.8、pp.429-436石川達夫、ロボットとは何か?――チャペックにおける近代的人間の極限態、国際文化学部研究・教育プロジェクト報告書『近代を超えるもの――欧米近代の周縁から』(神戸大学国際文化学部)、2004.4、pp.1-8.

楯岡求美、イマジネーションの祝祭—メイエルホリドが歌舞伎に見たもの、『国文学』1月号、2007.1、pp.84-87.

楯岡求美、ロシア演劇と『酸素』、『ユーラシア研究』第 33 号、2005、pp.27-31.

楯岡求美、自己のルーツを探す旅 —モスクワ、サンクト・ペテルブルグ—、Theatre Year-Book 2005 Theatre Abroad (諸外国の演劇事情)、2005、pp.242-246.

楯岡求美、過去という異文化—ロシア現代演劇 2003 - 2004 シーズンを中心に、科学研究費補助金・基盤研究(B)『転換期ロシアの文芸における時空間イメージの総合的研究』研究成果報告書、2005、pp.61-82.

楯岡求美、二十世紀とロシア演劇—アヴァンギャルドと普遍性の夢—、『近代』(神戸大学 近代発行会)第95号、2005.9、pp.183-196.

楯岡求美、劇空間としてのサンクト・ペテルブルグ――目で見る都市散歩、『しゃりばり』 12 月号、2003、pp.48-53.

大平陽一、非意図性としての ファクトゥーラ 、『天理大学報』第 213 輯、2006、pp.21-36. 大平陽一、エイゼンシュテインとヴィゴツキイ、『アゴラ』(天理大学地域文化研究センター紀要)第 3 号、2005、pp.55-77.

大平陽一、スクリーンと観客、『アゴラ』第1号、2003、pp.59-74.

大平陽一、エイゼンシュテインの知的映画論の変容——知的モンタージュ・内的独白・感覚的思考——、『ALBA』2003 年号、2003、pp.121-143.

日野貴夫、外国語学習への誘い―ロシア語、『奈良新聞』、2006.8

Хино Т., Смирнова, Т.В., XIV кансайский конкурс русского языка, *Русский язык за рубежом* No.1, 2006.3

Хіно Т., Проблеми перекладу «Енеїди» Івана Котляревського японською мовою, *Все світ* — *журнал іноземної літератури*— 9-10, 2004.10, pp.43-46.

Хіно Т., Бондаренко І.П., Третя зустріч Шевченка з японцями, *Все світ – журнал іноземної літератури*— 9-10, 2004.10, pp.41-42.

Хіно Т., Леся Українка и Япония: Аспекти нового прочитання, *Все світ – журнал іноземної літератури*— 8, 2004.8, pp.24-26.

Хіно Т., Бондаренко І.П., Японці знайомляться з українською мовою, *Все світ — журнал іноземної літератури*— 5-6, 2004.6. pp.32-35.

Хіно Т., Бондаренко І.П., Перший українсько-японський словник, *Все світ — журнал іноземної літератури*— 3-4, 2004.4, pp.45-51.

Хино Т., Пономарёва З.Н., Холодно ли в русском доме холодным зимним вечером? – О преподавании русского языка японским студентам–, *Русский язык за рубежом* No. 1, 2004.3, pp.53-59.

Fiala, K., FSP as an assumed WO factor in Japanese, *Proceedings of the Third Conference on Japanese Language and Language Teaching*, A cura di Aldo Tollini. Libreria editrice Cafoscariana. Venetia, 2006, pp.62-75.

カレル・フィアラ、京都市とプラハ市、『京都市編 京都市研究・京都 19. 特集京都創生 —外から見た京都—』、2006.3、pp.96-102.

Fiala, K., Hajičová (eds.) FSP as a supposed WO factor in Japanese, *Proceedings of XVII International Congress of Linguists*, Prague, 2003.

(2)口頭発表

諫早勇一、Russian Berlin—二つの文化の共生をめぐって、科学研究費補助金「ソヴィエト全体主義における文化と政治権力の相克および共生に関する超越・横断的研究」第2回研究合宿(ホテルサンシャイン鬼怒川:2006.2.23)

諫早勇一、Russian Berlin、日本ロシア文学会関西支部春季研究発表会(同志社大学:2005.6.4) 諫早勇一、文集『道標転換』と雑誌『道標転換』、北海道大学スラブ研究センター・ロシア 文化研究セミナー(北海道大学:2005.2.15)

諫早勇一、スクリーン上のナボコフ——映画と小説の間:『マーシェンカ』、日本ナボコフ協会 2006 年 6 月大会 (東京大学: 2004.6.5)

諫早勇一、都市の見取り図 ナボコフのベルリン、北海道大学スラブ研究センターセミナー(北海道大学:2003.9.30)

Ирина Мельникова, Харбинский соловей, Институт Востоковедения Академии наук. 8-я ежегодная конференция «История и культура Японии» (Москва, РГГУ, 2006.2.15)

Ирина Мельникова, Пространство города в литературе горожан, Институт Востоковедения Академии наук. 7-я ежегодная конференция «История и культура Японии» (Москва, РГГУ, 2005.2.16)

Irina Melnikova, Contact as Musical Performance — Mutual Representation of Russian-Japanese Encounter in Feature Film, 4-th International Convention of Asian Scholars (Shanghai : 2005.8.22) Ирина Мельникова, Русский герой в японском кино, Институт Востоковедения Академии наук. 6-я ежегодная конференция «История и культура Японии» (Москва, РГГУ, 2004.2.17) Irina Melnikova, Alternative Representation in International Relations — Constructing the Screen Image of the Ideal Partner, European Association for Japanese Studies, 10-th Conference (Warsaw: 2003.8.29)

Кэнъити Мацумото, Оборотная сторона «идеи» в романе «Подросток», XXXI Международные чтения «Достоевский и мировая культура» (Санкт-Петербурк: 2006.11.20) Кэнъити Мацумото, Достоевский и Акутагава, Международная научно-практическая конференция. «Новгородика. К 100-летию Д.С.Лихачева» (Великий Новгород: 2006.9.21) Кэнъити Мацумото, Стюарт Милль, Страхов Н.Н. и Достоевский, Международная научная конференция и XVI съезд англистов «Литература Великобритании и романский мир (Великий Новгород: 2006.9.20)

Кэнъити Мацумото, К вопросу о двойственности идеи Раскольникова, XXI-е Международные Старорусские Чтения «Достоевский и современность» (Старая Русса: 2006.5.22)

松本賢一、ストラーホフと「施し」の問題、日本ロシア文学会関西支部秋季研究発表会(香川大学:2005.11.12)

松本賢一、ドストエフスキイとクリミア戦争、ロシア・ソヴェート文学研究会(大阪: 2005.9.24)

松本賢一、ドストエフスキイと「同胞愛」、ロシア・ソヴェート文学研究会(大阪: 2003.12.6) Keiko Mitani, From 'Balkan' with Love. Verbal representation of Russia in Serbian Society, 北海道大学スラブ研究センター冬期シンポジウム(北海道大学: 2006.12.15)

三谷惠子、バルカン諸国におけるロシア語の位置、JSSEES およびロシア東欧学会合同シンポジウム(青山学院大学:2006.11.18)

Keiko Mitani, Balkan as a Sign, 北海道大学スラブ研究センター冬期国際シンポジウム(北海道大学: 2005.12.15)

石川達夫、マサリクの『ロシアとヨーロッパ』——汎スラヴ主義とロシアに対する西スラヴの思想家の応答——、「日本西スラヴ学研究会」主催講演会(東京大学:2006.6.17)

楯岡求美、ジョルジュ・ピエトフについて、日本演劇学会ミニ・シンポジウム(成城大学: 2006.6.24)

楯岡求美、大祖国戦争と演劇における祖国防衛のテーマ―アレクサンドル・コルネイチュ

ク作『前線』—、日本ロシア文学会ワークショップ「近現代ロシアの文化的ナショナリズム」(稚内北星学園大学:2004.10.2)

楯岡求美、日本作品の「正しい解釈」について一ロシアにおける日本戯曲の上演から、文 化政策研究会セミナー「舞台芸術における異文化の出会い」(大阪国際会議場:2004.7.29) 大平陽一、エイゼンシュテインの知的映画論と理念の伝達について、天理大学国際文化学 部地域文化研究センター共同研究《理念・哲学・スピリットの世代間継承および地域内あ るいは地域間伝達プロセスの研究》第1回共同研究会(天理大学:2006.9.13)

カレル・フィアラ、言語学から見た日本語の語順、福井県立大学学術教養センター研究会 (2006.12.13)

Fiala, K., FSP and Japanese Studies, 80 years of the Prague School(Prague: 2006.9.27)

Fiala, K., Czech translation of The Tale of Genji, Citlivost v japonské kultuře(

Prague: 2006.9.22)

Fiala, K., FSP – an assumed WO factor in Czech and Japanese, The Third Conference on Japanese Language and Language Teaching(Rome: 2005.3.17)

カレル・フィアラ、『源氏物語』チェコ語訳の試み―翻訳の可能性と限界を考える、国際日本文学研究集会(大阪大学大学院:2003.12.6)

Fiala, K., FSP as a supposed WO Factor in Japanese, XVII International Congress of Linguists(Prage:2003.7)

(3)出版物

Юичи Исахайя, Набоков и Набоковедение: девяностые годы. *Империя N: Набоков и наследники*, Новое литературное обозрение, 2006, pp.181-192.

ブライアン・ボイド著、諫早勇一訳、『ナボコフ伝 ロシア時代』(上下) みすず書房、2003.11、728pp.

Нагаи Кафу. Соперницы (перевод Ирины Мельниковой), Азбука-классика, 2005.

Ирина Мельникова, Сливовый календарь любви, *Тысяча Журавлей: Антология японской классической литературы VIII-XIX вв*, Азбука-классика, 2004, pp.825-840.

Тигриное око: Антология современной японской литературы. Современная японская историческая новелла (перевод Людмилы Ермаковой и Ирины Мельниковой), Издательство «Иностранка», 2004, 458pp.

Цуга Тэйсё. О том, как лук обернулся белой птицей (перевод Ирины Мельниковой). *Мистическая Япония*, Спб, 2003, pp.234-266.

三谷惠子、Vladimir Ilich dorabotalsia do bessonnicy - ロシア語の do-V-sia 動詞についての記述的考察、『実験音声学と一般言語学 城生佰太郎博士還暦記念論文集』、東京堂、2006、pp.453-461.

三谷惠子、科学研究費補助金による課題研究報告書『南スラヴ語史の考察―14~15世紀の

言語とその文化史的背景を中心に』、2006.3、i~v+106pp.

T・G・マサリク著、石川達夫・長與進訳『ロシアとヨーロッパ――ロシアにおける精神 潮流の研究』第3巻、成文社、2005.8、474pp.

T・G・マサリク著、石川達夫・長與進訳『ロシアとヨーロッパ――ロシアにおける精神潮流の研究』第2巻、成文社、2004.6、508pp.

石川達夫、『プラハ歴史散策——黄金の劇場都市』、講談社 + a 新書、2004.1、221pp.

楯岡求美、都市を読む/都市になる サンクト・ペテルブルグはいかにつくられるか、『記憶する都市』(国際シンポジウム「記憶する都市―神戸の街路から新しい人間科学を」実行委員会編)、かもがわ書店、2006.7、pp.166-175.

井上優、楯岡求美、村田真一、安宅りさ子、小椋彩共著、『近代演劇と越境(1) 特集 コミッサルジェフスキー』、日本学術振興会「人文・社会振興のためのプロジェクト」研究領域 -1「越境と多文化」研究報告集 No.3、2006、76pp.

楯岡求美、メイエルホリドの演劇性——チェーホフ、コメディア・デラルテとの出会い、 『講座文学 演劇とパフォーマンス』、岩波書店、2004.2、pp.145-164.

箭内匡、足立ラーベ加代、大平陽一、ヌリア・ロペス、前田茂共著、『映画的思考の冒険』、 世界思想社、2006.6、238pp.

大平陽一、都市消費文化と帝政ロシアの無声映画、『都市と芸術の「ロシア」』、水声社、2005.4、pp.141-160.

Přiběh prince Gendžiho III、(Karel Fiala 訳)、Paseka, 2007.1, 440pp.

Příběh prince Gendžiho II、(Karel Fiala 訳)、Paseka, 2005.3, 320pp.

カレル・フィアラ、『源氏物語』チェコ語訳の試み――翻訳の可能性と限界を考える――、 井伊春樹編『海外における源氏物語の世界―翻訳と研究―』、風間書房、2005、pp.68-95.

目 次

はしがき		i
亡命ロシアの新聞・雑誌 中東欧諸国における第一次亡命ロシア文化試論	諫早勇一	1
東方問題とドストエフスキイの汎スラヴ主義の淵源	松本賢一	22
スラヴ語・スラヴ文化を衰滅から救え! 汎スラヴ主義の起源と展開	石川達夫	39
下ソルプ語の現在 『地域言語または少数言語のための欧州憲章』の ソルプ語への適用と WITAJ 計画の現状	三谷惠子	65
Славянские народы в зеркале советского кино Ирина	Мельникова	88
ロシア演劇における近代化と異文化接触 メイエルホリドとコミッサルジェフスキーの場合	楯岡求美 11	15
イズム!イズム! カレル・タイゲのプックデザインにおける 諸潮流の輻輳	大平陽一	129

亡命ロシアの新聞・雑誌

中東欧諸国における第一次亡命ロシア文化試論

諫 早 勇 一

1.はじめに

ロシア革命とつづく内戦以降、大量の難民・亡命者がロシアを離れ、世界各国に仮の宿を求めるが(この時期の亡命者を通常「第一波」の亡命者、あるいは「第一次」 亡命者と呼ぶ) ボリシェヴィキ政権の崩壊が遠くないと考え、やがて自分たちも祖国 に帰国できるにちがいないと信じたかれらの多くは、祖国から遠くない国々、具体的にはドイツや中東欧諸国に居を定めた。

ドイツにおける第一次亡命ロシア文化については、その首都ベルリンに焦点を当てて、拙稿「RUSSIAN BERLIN」「で概観したから、ここでは中東欧諸国における第一次亡命ロシア文化について検討したいが、そのさいまず念頭に置かなければならないのは、序論で論じたように、亡命ロシア人に対するそれぞれの国の接し方の違い、待遇の違いだろう。序論ではそれを「共生」と「同化」というキーワードをもとに考察したが、こうした亡命者に対する接し方の違いが、各国における亡命文化のありようにどのような影響を与えたかを論じた序論を受けて、本論では、中東欧諸国における亡命文化の特徴と相違点を、亡命ロシア人たちが刊行していた新聞・雑誌を材料に検証していきたい。

さて、ここで新聞・雑誌など定期刊行物が亡命文化に占める重要性について、幾人 かの研究者の言を引きながら確認しておこう。

まず、Raeffはこう述べる。「1917年以前のロシアは、文化的創造の伝達にあたって、単行本よりも定期刊行物にはるかに依存してきた」が、「このことは亡命にかんしても当てはまる」³と。さらに彼はこうも語っている。「定期刊行物は、もっともたやすく利用できる創造的、学問的な出版物」であり、それは「亡命ロシアの文化的統一を維持するための枠組み、もっとも効果的な場を提供していた」⁴と。

また、ジルコフは亡命ロシアのジャーナリズムを分析して、それは「亡命ロシアの社会的、政治的、文化的生活の年代記」、「ロシア社会の伝統の維持者」として機能していただけでなく、亡命者たちにとって「社会的、政治的、文化的空間を創造し、組織する」役割も担っていたことを指摘し、亡命ロシアのジャーナリズムは「亡命者の文化的環境の形成」に重要な影響をおよぼす「独自の文化現象」⁵だったと結論付けている。

かんたんにまとめるなら、亡命ロシアの定期刊行物は、あるいはコミュニティ内の情報伝達機能(人探し欄や、催し物欄など)、あるいは政党・各種団体などの機関誌的役割を果たしながらも、同時に亡命者たちに自分たちの属している社会(地域社会だけでなく、共通する身分・信条などによって形成される社会をも含む)を意識させる機能を持ち、その組織内での文化の継承・創造に深くかかわっていた、といえるだろう。亡命ロシアのさまざまな新聞・雑誌を概観することは、それを刊行していた社会における亡命ロシア文化の特質を考えることと直接につながっている。

さて、第一次亡命者たちは、ヨーロッパだけでなく、アジア、南北アメリカ、オー ストラリア、アフリカなど世界中に広がり、各地で自分たちの新聞・雑誌を刊行して、 そのタイトル数は 1917 年から 68 年まで 50 年あまりの間に 3000 を超えていたと言わ れるが、その多くは(主として経済的理由から)短命だった。そのなかで長命を誇っ た代表的な新聞には、パリで刊行されていた『最新ニュース』(Последние новости: 1920-40)、『ルネサンス』(Возрождение: 1925-40)、ベルリンの『舵』(Руль: 1920-31)、 リガの『今日』(Сегодня: 1919-40)、ベオグラードの『新時代』(Новое время: 1921-30) があり、雑誌にはパリの『現代雑記』(Современные записки: 1920-40)、プラハの『ロ シアの意志』(Воля России: 1920-1932)などがあるが、ここでは中東欧諸国における新 聞・雑誌に焦点を絞るため、パリやベルリンで刊行されていた定期刊行物については 論じない。そして、とくにチェコスロヴァキアを代表する雑誌『ロシアの意志』、ユー ゴスラヴィアを象徴するような新聞『新時代』 リガを中心としたバルト諸国を代表す る新聞『今日』、ブルガリアで一時期刊行されていた雑誌『ロシア思想』(Русская мысль: 1921-27)、ポーランドで刊行されていた新聞『自由のために!』(За свободу!: 1920-32、 なお、当初のタイトルは『自由』Свобода)に論点を集中させて、そこに反映された亡 命ロシア文化の諸相を比較検証したい。中東欧諸国で刊行されていた亡命ロシアの新 聞・雑誌は、なににもまして中東欧諸国における亡命文化の特徴や相違点を映し出し ているはずだから。

2.チェコスロヴァキアと『ロシアの意志』

1.エスエル・ゼムゴール・「ロシア行為」

序論で述べたように⁷、チェコスロヴァキアは大統領マサリクの提唱で実現した「ロシア行為」(チェコスロヴァキア在住の亡命ロシア人学者・学生に資金援助を行うものだが、実際にはチェコスロヴァキアに住んでいない文化人、チェコスロヴァキア国外の組織にも援助が与えられていた)によって、亡命者たちに暖かい援助の手を差し伸べたが、その援助は 1927 年まで、おもにゼムゴール3emrop⁸と呼ばれる組織を介して行われていた。

第一次大戦中に民間の援助組織として生まれ、革命後閉鎖されたゼムゴールは、内戦時

には白軍と行動をともにし、白軍が敗れた後は、亡命先のさまざまな国で再建されて、難民・亡命者たちの生活援助を行ったが、プラハでは 1921 年 3 月に結成されている(ここでの正式名称はОбъединение российских земских и городских деятелей) 9。ただ、この「プラハのゼムゴール」Пражский Земгорは当初から政治的色彩が強い、具体的にはエスエル寄りだと言われ10、ここを経て行われる援助も、エスエルの意志に左右されているとみなされてきた。そして、チェコスロヴァキアにおいてエスエルがこのように力を持っていた背景には、大統領マサリクの政治的信念も無関係ではなかった。

革命前ロシアに滞在していたマサリクは、チェコ人、スロヴァキア人の独立への支持を求めたが、それに共感してくれる勢力は限られていた。そして、その限られた勢力が後にチェコスロヴァキア政府の支持を得ることとなるが、その重要な部分がエスエル(社会主義者・革命家党)だったという¹¹。十月革命を支持できなかったマサリクだが、かといって彼は帝政の復古をめざす君主派、保守派を支持していたわけではない。彼のシンパシーはむしろ左翼リベラルといわれるような人びと(盟友ミリュコーフに代表されるようなカデット左派とエスエル)に向けられていた¹²。それゆえ、チェコスロヴァキアで歓迎される亡命者が、一定の政治的傾向を持っていたとしても不思議ではない¹³。

さらにまた、内戦時チェコスロヴァキア軍団がエスエル政府の側について戦った事情もあって、チェコスロヴァキア軍団が祖国に帰還したとき、多くのエスエル党員も一緒にチェコスロヴァキアにやってきた¹⁴。こうして、1920 年代初めのプラハには、エスエルの指導者チェルノフ率いる「エスエルのセンター」¹⁵ができ上がり、そこが大統領マサリクの後ろ盾を受けて、亡命者への資金援助にも大きな力を発揮することになる。

これから論じる定期刊行物にかんしても、このことは大きな意味を持っている。なぜなら新聞・雑誌のような定期的な刊行に当たっては、恒常的な資金が必要であり、とりわけ財政的な苦境にあった亡命者にとって、「ロシア行為」のような潤沢な資金援助にあずかれるかどうかは、死活問題だったからだ。プラハで刊行されていた『ロシアの意志』、ベルリンで刊行され、後にパリに移った新聞『日々』(Дни: 1922-25 ベルリン、1925-28 パリ)のように、エスエル勢力によって編集され、チェコスロヴァキア政府から多大の援助を受けた定期刊行物は、カデット右派が中心だったベルリンの新聞『舵』などから、やっかみ半分の攻撃を受けていたというが¹⁶、それも仕方ないことだろう。亡命ロシア人にとって干天の慈雨のような「ロシア行為」も、一面では亡命者内部の軋みを引き起こす要因にもなっていた。

2.新聞『ロシアの意志』

『ロシアの意志』は 1920 年 9 月 12 日、日刊の新聞として創刊された。編集者はもちろんB・M・ゼンジーノフ、B・M・レーベジェフ、O・C・ミノール、E・E・ラザレフといったエスエルの活動家たちだった。ただ、日刊紙としては短命で、1921 年 10

月 9 日に刊行された第 327 号で廃刊になっているが、その原因はおもにエスエルのリーダーたちの意見の対立にあったという¹⁷。

創刊当時、日刊紙『ロシアの意志』は基本的にエスエル党の機関紙だった。したがって、ニュースよりもエスエルの政治的宣伝が多く紙面を飾っていた¹⁸。そもそもエスエルの基本的立場は反ボリシェヴィキであると同時に反君主派で、民衆とくに農民による革命を支持していたから、たとえば、創刊後まもない 1920 年 11 月にウランゲリ軍が敗れて、白軍が敗走すると、『舵』など他の亡命系新聞とは反対に、『ロシアの意志』はその敗北に喝采する。かれらにとっては、ボリシェヴィキの一時的な(かれらにはそう思えた)勝利より、帝政復活をめざす白軍の勝利のほうがはるかに脅威だったからだ。さらに、白軍の敗北による内戦の終結は、他国による干渉の危険をなくし、ロシア国内の民族自決のチャンスを増すようにも考えられた¹⁹。チェコスロヴァキアを拠点とするエスエルの主張は、しばしば反ソヴィエト的というより、親ソヴィエト的にさえ映る。

なお、この時期エスエル党の活動はソヴィエト国内でも続いていたから、新聞『ロシアの意志』は亡命者ばかりでなく、ソヴィエト国内の読者も念頭に置いて刊行されていた。そして、実際タリン経由の秘密ルートで新聞はソヴィエト国内に運ばれ、同じルートを逆にたどってソヴィエトからのニュース・手紙も国外に運ばれていたが、後にソヴィエトの秘密エージェントがパリのエスエル本部に潜入して以来、このルートが暴かれて利用できなくなったばかりか、1922年のエスエル党員の裁判で証拠として用いられ、ソヴィエト国内でのエスエル党壊滅のきっかけともなったという²⁰。新聞『ロシアの意志』が刊行されていた一年あまりの期間は、後の時代のようにソヴィエト・ロシアと亡命ロシアが高い壁で仕切られていた時代ではなく、両者の間にさまざまな接触があった時代だと言えるだろう。

さて、『ロシアの意志』といえば、文芸評論を担当したマルク・スローニムを忘れることはできない²¹。彼の本領は雑誌『ロシアの意志』において発揮されるが、新聞『ロシアの意志』の充実においても、彼は少なからぬ貢献をしたとされている。常設の文芸欄もなく、文学作品を載せることもなかった最初の年、みずからマヤコフスキイについての論を寄せたスローニムは、文芸欄・批評欄の充実をはかり、政治に傾斜した新聞の紙面に新風を吹き込んだのだから²²。

最後にチェコスロヴァキアの新聞事情にも触れておこう。日刊紙『ロシアの意志』が短命に終わった後、チェコスロヴァキアには注目に値するような亡命ロシアの新聞は生まれていないが、このことは、亡命ロシアに占めるチェコスロヴァキアの重要性を考えるときいささか奇妙に感じられる²³。だが、だからといってこの国に住む亡命ロシア人がロシア語新聞を読んでいなかったわけではない。ストルーヴェによれば、自国に有力なロシア語新聞を持たないプラハの亡命ロシア人たちは、パリで出ていた『最新ニュース』や『ルネサンス』、あるいはベルリンの『舵』、リガの『今日』などを講

読しており、実際『今日』はプラハに特派員を常駐させてチェコスロヴァキア内のニュースも載せていたから、格別な不便は感じていなかったという²⁴。亡命ロシア文化を考えるとき、地域的なコミュニティを超えた文化の越境も無視することができない。

3.雑誌『ロシアの意志』

1921年10月に日刊紙としての使命を終えた『ロシアの意志』は、翌22年1月週刊誌として再出発をはかり、9月からは月刊の「政治・文学雑誌」に衣替えする。そして、編集者もレーベジェフを除いて入れ替わって、新たにスローニム、B・B・スホムリン、(1924年からは)E・A・スタリンスキイが加わり、同じエスエルの編集になる『現代雑記』、『日々』とは対照的な「エスエル左派」の雑誌として存在感を増していく。こうして、同じエスエルの編集者たちがむしろ政治的な主張を抑えることによって成功した『現代雑記』とは反対に、独自の政治的主張を正面に掲げた『ロシアの意志』は、革命前の「厚い雑誌」(総合雑誌)の伝統を引き継ぐ有力雑誌として、『現代雑記』と並び称される独自の地位を確保し、1932年まで(亡命雑誌としては例外的な)長命を誇った。

雑誌『ロシアの意志』の成功が、スローニムの担当した文芸欄に多くを負っていることはすでに言い古されたことだし、それについては私も論じたことがある²⁵。だが、若い世代の文学に注目し、ソヴィエト・ロシアの文学を積極的に紹介したスローニムの立場は、けっして彼個人の嗜好だけに拠るものではなく、チェコスロヴァキアという風土、エスエルの政治的見解とも密接に結びついていた。ここでは、そこに焦点を当てながら雑誌『ロシアの意志』の意味を再検討してみたい。

まず、スローニムのソヴィエト文学志向を考えるとき、われわれは雑誌『ロシアの意志』自体が、全体としてソヴィエト・ロシアに積極的に目を向けていたことを忘れてはならない。「われわれは、ボリシェヴィキ独裁と共産主義的な歪曲に反対し、一貫して、粘り強く民主的社会主義を擁護する。だが、われわれはソヴィエト体制批判だけに閉じこもるのではなく、ロシアに顔を向けていたい、すなわち、ボリシェヴィキ体制の表の顔の背後で起きているプロセスを探求したいと願っている」という言葉26は、かれらの姿勢をよく表すものだろう。エスエルは、白軍や外国の軍隊の介入によって武力でボリシェヴィキ政権打倒をめざすのではなく、ソヴィエト国内での農民を中心とした民衆の反乱によってボリシェヴィキ政権が倒れることを期待していたから、どの勢力にも増してソヴィエトの国内情勢に関心を抱いていた。スローニムがソヴィエト文学に向けた積極的な関心は、こうしたエスエルとしての政治信念と切り離して考えることはできない。

こうして、ソヴィエト文学の動向に深い関心を抱いたスローニムは、『ロシアの意志』誌上で積極的にソヴィエト文学を紹介していくが、このことは『ロシアの意志』をほかの亡命系雑誌と峻別する特徴ともなった。パステルナークの叙事詩「シュミット海軍大尉」、マヤコフスキイの戯曲「風呂」をはじめ、バーベリ、ピリニャークらの短篇の紹介など、こ

の雑誌が同時代のソヴィエト文学の紹介に果たした役割はきわめて大きかった27。

さらに、スローニムはソヴィエト文学についての豊富な知識をもとに、亡命文学を貶めてソヴィエト文学を称える論陣を張る。『ロシアの意志』の 1924 年第 4 号に掲げた記事「文芸評論:生きた文学と死んだ批評」(Литературные отклики: живая литература и мертвые критики)では、亡命文学の側に立つギッピウスに対抗してこう述べる。亡命文学には、「この 6 年の間に、一つとして新しい知的な、あるいは文学的な流れはなかったし、一つの新しい詩の流派もなく、一人の偉大な散文作家、一人の重要な詩人も出なかった」 28 と。また、1928 年第 7 号の「文学日記」(Литературный дневник)では、自分のスタイルや流派を創り出す独自の生命を持った亡命文学は「われわれの側には存在しない。よかれ悪しかれ、これは否定しようのない事実だから、クヌートたちが何と言おうと、パリはロシア文学の首都ではなく、たんなる郡にすぎない」 29 と、その主張をいっそう明確にしている。

このようなスローニムの主張が、自己肯定するしか道のない亡命文学者たちに、自分たちの顔をいま一度熟視する鏡を突きつけたことは確かだろう。だが、スローニムが亡命作家たち、とりわけブーニン、クプリーン、メレシコフスキイらの古い作家たちを軽視した³⁰理由が、その文学的評価より政治的信念に左右されていたことも否定できない。1930年代に入り、ソヴィエト文学が 20年代の輝きを失ってもなおソヴィエト文学の優位を謳いつづけた³¹スローニムの目は、やはり政治に曇らされていたといわざるをえない。

さて、雑誌『ロシアの意志』のもうひとつの文学的貢献としては、ブーニンら古い作家たちへの冷遇とは対照的に、若い世代³²の作家・詩人たちを積極的に登用したことがかならず挙げられる³³。だが、このことも「ロシアのオクスフォード」³⁴と呼ばれた学生の町プラハと切り離して考えることはできない。たとえば、若い世代の作家・詩人たちは『ロシアの意志』にデビューすることによって認知され、パリの『現代雑記』にも作品が掲載されるようになったとしばしば語られるが³⁵、実際にはプラハに数多く存在していた学生雑誌、『学生時代』³⁶(Студенческие годы: 1922-25)、『わが道を』³⁷(Своими путями: 1924-26)などにまず掲載され、それがきっかけになって『ロシアの意志』に採用されることも少なくなかった³⁸。若い世代に好意的だった『ロシアの意志』の背後には、それを支える環境があったことを忘れてはならない。

以上のように、雑誌『ロシアの意志』は中東欧諸国で生まれた亡命ロシア人雑誌としては抜群の存在感を誇り、亡命文学界にも大きく貢献したが、あまりに政治的だったがゆえに、逆に政治に翻弄されてしまう。すなわち、ゼムゴールが支配していた「ロシア行為」が 1927 年チェコスロヴァキア外務省の管轄とされると、援助額は減額され³⁹、同年編集部はパリに移った⁴⁰。こうして財政的基盤を失った『ロシアの意志』は、チェコスロヴァキア政府がしだいにソヴィエト・ロシアとのつながりを深めていくなかで、1932 年第 4/6 号をもって廃刊に追い込まれる。それはチェコスロヴァキアがソヴィエト連邦を承認する 2 年前のことだった。

3. ユーゴスラヴィアと『新時代』

1.保守王国ユーゴスラヴィア

チェコスロヴァキアが、エスエルに代表されるような左翼的な亡命者の拠点だったとしたら、ユーゴスラヴィア 41 は保守的な亡命者、とくに君主派の拠点だったといえるだろう。それにはロシア帝室と親戚関係にあった国王アレクサンダルの意向も無視できない(カーリンスキーは「当時アレクサンダルー世の治める君主制国家で、はるかに保守的だったユーゴスラヴィア政府は、皇帝に忠実であると確証できるロシア文化人にまず救いの手をさしのべた」 42 と語っている)が、ほかにもさまざまな要素が働いていた。まず、この国にやってきた難民・亡命者たちの多くは、コンスタンチノープル周辺にいた白軍兵士だったから、当然のように軍人が多かった 43 。アザーロフによれば、亡命者の約半数が軍人だったという 44 。しかも、ウランゲリらはふたたびボリシェヴィキと戦うことを夢見ていたから、この国には白軍の司令部が置かれ 45 、1924 年 9 月にはスレムスキ・カルロヴツィでロシア全軍人同盟(POBC)まで結成されている。このような軍人優位の強烈な反ボリシェヴィキ感情が、保守的な土壌の育成に一役買っていたことは言を俟たない。

つぎに、序論でも触れたように⁴⁶、宗教関係者が多かったことも重要な要素だ。ロシア人亡命者の多くは正教のセルビアに定住し、カトリックが優勢だったスロヴェニアやクロアチア、イスラムが優勢だったボスニア、ヘルツェゴヴィナにはあまり住まなかったといわれる⁴⁷が、セルビアのスレムスキ・カルロヴツィには亡命聖職者たちが多数集まり、ここにモスクワの総主教座からは独立したロシア亡命正教会を設立する⁴⁸。革命を憎悪する聖職者たちが亡命者の精神生活にとりわけ強い影響力をもったこの国が、左翼的なインテリに敵対的な雰囲気をつくり出したことも十分納得できるだろう。実際、チェコスロヴァキアとは対照的に、エスエルの組織とされるゼムゴールは、この国では弱い力しかもたなかったという⁴⁹。

ソヴィエト・ロシアとはほとんど交渉をもたずに⁵⁰、独特の保守的な雰囲気をつくり上げたユーゴスラヴィアの亡命ロシア人社会は、当然のように、おのれにふさわしい定期刊行物を生み出すだろう。こうして生まれたのが新聞『新時代』だった。

2.新聞『新時代』

新聞『新時代』の起源は 19 世紀にまで遡る。1868 年にペテルブルグで創刊された同名の新聞は、はじめリベラルだったが⁵¹、1876 年チェーホフの友人として文学史に残るアレクセイ・スヴォーリンの手に移ってから、保守派の有力紙として名を高めていく⁵²。そして、1912 年スヴォーリンが亡くなると、編集は息子のミハイル・スヴォーリンに受け継がれるが、革命の年 1917 年に廃刊となる⁵³。

有力な寄稿者の一人だったレンニコフの回想によれば、ロシアから脱出する直前、黒海沿岸のノヴォロシイスクで、セルビア政府から『新時代』復刊の財政援助をするという知らせを受けたという。しかし、1920年ベオグラードに着くと、その話を確認してくれる人もなく、復刊は頓挫しかけたが、結局篤志家の援助を得ることができて、1921年4月22日創刊号が世に出る⁵⁴。編集・出版者は革命前と同様ミハイル・スヴォーリンだった。

Raeffによれば、平均的な亡命者は保守的な君主派だったにもかかわらず、亡命定期刊行物で長命だったものは、たいていリベラル派、穏健社会主義者の編集によるもので、これは編集者の経験の差、バランス感覚の差だったという⁵⁵。しかし、『新時代』は、パリの左翼的亡命者から「黒い群れ」(черная стая)と罵られながらも⁵⁶、パリの『ルネサンス』と並ぶ保守派の新聞として 10 年近い命を永らえることができた。それを支えたものが、ユーゴスラヴィアの亡命ロシア人たちの保守的な思想風土だったことは疑いないだろう。

さて、『新時代』は『ロシアの意志』同様に、明確な政治的立場を打ち出すが、それはリベラル派とは異なり、十月革命だけでなく二月革命も否定するという立場であり⁵⁷、「正教、専制、国民性」という旧来の保守派のスローガンを継承する立場でもあった⁵⁸。ただ、広い読者層を想定した新聞である以上、イデオロギー的な宣伝よりもさまざまな情報の伝達に力点が置かれたことはいうまでもない。たとえば、この新聞には、ベルリンの『舵』などと同じく、定期的にソヴィエト・ロシアの国内事情を知らせる欄があった。だが、その情報はかならずしも客観的だったとはいえない。むしろ読者の期待に沿うような情報を、いくぶん誇張して載せるのが常だったという。レーニン廟に横たわるレーニンはにせものだとか、ソヴィエトの人口の30%は梅毒に感染している、といったように⁵⁹。さらに、こうした情報は簡単な時事評論をあつかうフェリエトン欄でも増幅された。食料品店に見られる行列は、亡命系の新聞・雑誌が好んで取り上げる話題だったが、『新時代』紙のフェリエトンでもこう語られる。「行列(「尾」の意味もある引用者注)はソヴィエト権力に不可避の属性であり、その真の顔である。悪魔と同様に、行列のない ソヴィエト権力 を想像することは難しい」⁶⁰と。読者に与えられる情報は、さまざまな意味で新聞の性格を映し出している。

また、これも『新時代』だけにかぎった現象ではなかったが、新年号(たいていは旧暦の新年に当たる)やクリスマス記念号などでは、きまって祖国への早期帰国への期待を述べる記事が掲載された⁶¹。今年こそ祖国への帰還が実現するだろうか 繰り返されるこうした問いかけは結局実現されなかったが、そもそも期待自体がソヴィエト・ロシアの国内状況、国際状況の正確な認識に基づくものではなかったから、当然だったかもしれない。現在に背を向けて過去のノスタルジーに耽る亡命者、帝政復古を願う保守的な亡命者というイメージはこの国の亡命者によく似合う。

最後に文芸欄を一瞥しよう。ここにはよく知られた作家、詩人は寄稿していないが、アザーロフによれば、載せられた詩の多くは「失われた祖国へのノスタルジー」⁶²をモチーフにしていたという。さらに文芸批評欄にしばしば稿を寄せていたA・JI・ポゴージンの見

解もこの新聞の傾向をよく示している。彼はゴーゴリの作品中では『交友書簡抄』を高く評価して、ロシア文学における「正教文化の基礎」⁶³と呼んだほか、ドストエフスキイについてもその宗教性を強調する。たとえば、「フーリエから聖セラフィム・サロフスキイへ」では、最初は貧しい人びとに同情を寄せるフーリエの思想からスタートしたドストエフスキイが、ついには人生と人間の苦悩のキリスト教的解釈にたどり着いたとして、「ドストエフスキイの勝利は、現代において、まさしく正教会の勝利を意味している」⁶⁴と結んでいる。「正教、専制、国民性」という昔ながらのスローガンは、新聞『新時代』を支える重要なイデオロギーだった。

4. ラトヴィアのロシア語新聞『今日』

1.バルト諸国、ユダヤ人

エストニア、ラトヴィア、リトアニアのバルト諸国は、序論でも触れたように⁶⁵、1918年の独立以前から国内に少数民族としてのロシア人をかかえていたから、1889年エストニアのナルヴァで創刊された『古いナルヴァ新聞』(Старый Нарвский листок)のように、革命以前から刊行されていたロシア語新聞もあった⁶⁶。とはいえ、ロシア語の定期刊行物が本格的な活動をはじめるのはやはり革命以後だろう。ただ、そうした定期刊行物も、ロシアから独立したそれぞれの国がかかえる(多くの場合、ナショナリスティックな)事情によって、亡命系であることを公言できない場合もあった。これから触れる新聞『今日』も、そんな事情から「ラトヴィアのロシア語新聞」⁶⁷と称し、亡命者だけでなく、ラトヴィアに住むロシア人全体を読者に想定して刊行されていた。

さて、新聞『今日』についてはもうひとつ無視できない問題がある。その編集者の多くがユダヤ人だったことだ⁶⁸。それゆえ、『今日』はライバル紙からしばしば非ロシア的だとして攻撃を受けたが(たとえば、1933 年には『今日』の向こうを張って、『明日』(Завтра: 1933-34)という新聞が創刊され、ユダヤ人の破壊活動と戦うため、キリスト教徒の団結を呼びかけたという⁶⁹)、ユダヤ人が編集者の多くを占めているからといって、その新聞・雑誌が非ロシア的とはいえないことは、亡命系のさまざまな新聞・雑誌を考えればすぐわかる。実際、パリの『現代雑記』、『挿絵入りロシア』(Иллюстрированная Россия)、ベルリンの『舵』、さらにはニューヨークの『新雑誌』(Новый журнал)など『今日』以外にも、ユダヤ人が編集の中心にいた新聞・雑誌は数多いが⁷⁰、いずれも亡命ロシアを代表する定期刊行物であって、けっしてユダヤ人に関心のあるテーマを中心にしたものではない。編集に携わったユダヤ人たちは、自分たちこそ「ロシア文化」の担い手、継承者だと自負しており⁷¹、ことさらおのれの民族性を誇示しようとはしなかった。さまざまな中傷を受けながらも、ロシア人たるアイデンティティをなによりも大切にしたこうしたユダヤ人ジャーナリストたちに、亡命ロシア文化は多くのものを負っている。

2.新聞『今日』

新聞『今日』は、1919年8月26日に創刊されたロシア語新聞『国民』(Народ)を前身とする⁷²。しかし、上からの圧力でこの題名が禁止されると、同年9月14日より『今日』と名前を変えた⁷³。当初の編集者はЯ・И・ブラームスで、はじめは自転車で配送する地方のニュース冊子だったが⁷⁴、やがてラトヴィアのみならずバルト諸国から、さらにはチェコスロヴァキア、ドイツ、フランス、ルーマニア、イタリアなどヨーロッパ各地で読まれるまでに成長する⁷⁵。そして、1930年代半ばまでに夕刊版『今晩』(Сегодня вечером)を合わせた部数は4万部に達したが、この部数はパリの新聞『最新ニュース』と『ルネサンス』を合わせた部数に匹敵したという⁷⁶。こうして亡命ロシアの中心とはいえないリガで刊行された『今日』は、党派性を強調しない新聞として人気を博すが、残念ながら、自身は政治の波と無縁ではおれなかった。1934年ウルマニスの新政権ができると、事前検閲も強化されて⁷⁷、ラトヴィアの国内記事にもっと紙面を割くように強制され⁷⁸、しだいにかつての溌剌とした魅力を失い、ついには1940年親ソ政権が誕生すると廃刊をやむなくされる。最終号が出たのは、1940年6月27日のことだった。

さて、党派性を強調しない新聞と述べたが、編集者にはカデットとつながりがあるものも少なくなかった。たとえば、1922 年 1 月から編集長の地位につき、この新聞に著名な作家・批評家ら(アイヘンヴァリド、アルダーノフ、テフィなど)を招いたМ・И・ガンフマン(1934 年没)は、かつてカデット系の日刊紙『談話』(Речь: 1906-17)の文芸欄を担当していたし⁷⁹、1925 年から 40 年まで夕刊版『今晩』の編集を担当していたБ・〇・ハリトンも、『談話』の編集にかかわっていた⁸⁰。したがって、新聞『今日』は、カデットの有力政治家だったミリュコーフの『最新ニュース』や、ゲッセンの『舵』と友好関係にあったが⁸¹、だからといってこの新聞がカデットの機関紙だったわけではない。逆にこの新聞はプルラリズムを標榜していたので、大きな政治的事件などの論評では、複数の論者を招いて、異なった意見を並べ、そこには親ファシズムの論者さえ拒まなかったという⁸²。さらに、『ルネサンス』のような亡命者の新聞なら、フランス政府とかかわりのない発言が可能だが、『今日』はあくまでもラトヴィアの新聞なのだから、ラトヴィア政府の外交方針と無縁ではおれないとする厳格な自己規制の立場も崩さなかった⁸³。この新聞の非党派性とは、消極的な態度ではなく、むしろ積極的な自己規定によるものだといえるだろう。

つぎに話を文芸欄に移せば、非党派的な姿勢、編集者の献身的な努力のおかげで、ここにはパリでいがみ合う『最新ニュース』、『ルネサンス』の両陣営から、著名な作家・詩人の寄稿があった⁸⁴。アルダーノフ、バリモント、ブーニン、ギッピウス、ザイツェフ、Γ・イワーノフ、クプリーン、メレシコフスキイ、ナボコフ⁸⁵、テフィ、ホダセーヴィチ、シメリョフなど、この新聞の文芸欄には亡命ロシアを代表する作家・詩人がほとんど名を連ねているといっても過言ではない。そして、リガという亡命ロシアの辺境で刊行されてい

た新聞『今日』は、パリに住む作家たちの作品を掲載するために、独自の対策を考え出したが、それは『最新ニュース』などに発表された作品を転載するさい、初出の半分の原稿料を支払うという方策だった。この方策は、作者も読者も新聞もみな利益を得るという名案だったので、新聞の部数を増加させる上で、大きな貢献があったとされる⁸⁶。もちろん、転載だけに頼っていたわけではない。編集者たちは直接交渉によって、ギッピウス、クプリーン、テフィ、ブーニンらの作品のオリジナルも手に入れている⁸⁷。そして、ページ数も当初の6ページから、8ページ、10ページと増やし⁸⁸、ときには20ページにも達して⁸⁹、写真も載せた⁹⁰日刊紙『今日』は、リガという地理的不利にもかかわらず、パリやベルリンで刊行されている新聞に負けない存在感を保ちつづけた。この新聞の成功は、定期刊行物が本来もつはずのさまざまな可能性を教えてくれる。

5. ブルガリアと雑誌『ロシア思想』

1.敗戦国ブルガリア

序論でも触れたように⁹¹、白軍の敗北後コンスタンチノープルとその周辺に集結した多くの難民たちをどの国に引き受けてもらうかは、連合国に突きつけられたやっかいな問題だった。だが、以前から同じスラヴ国家としてロシアと友好関係にあったブルガリアは、ユーゴスラヴィア同様に難民の積極的な受け入れに合意し、1921 年末までに 35,000 人ともいわれる難民がこの国を訪れる⁹²。いうまでもなく、この難民の大半は軍人とその家族だったが、ユーゴスラヴィアとは対照的に、かれらはこの国に長居することはできなかった。第一次世界大戦の敗戦国だったブルガリアには、パリ講和会議でたくさんの厳しい条件が課せられ、それが亡命者・難民の受け入れにも影響をおよぼしたからだ⁹³。

たとえば、軍人には武装解除が命ぜられ、将校は国外退去を余儀なくされた。こうして 1922 年には多くの亡命者・難民がこの国を去る⁹⁴。したがって、ブルガリアで亡命文化が 開花した時期はきわめて短いが、この短い時期に、一方ではユーラシア主義の宣言の書として名高い『東方への脱出』(Исход к Востоку: 1921)が刊行されており、また一方では雑誌 『ロシア思想』が創刊されている。だが、『東方への脱出』はかならずしも雑誌とは呼べない⁹⁵ので、ここでは雑誌『ロシア思想』に話を絞って検討していこう。

2.雑誌『ロシア思想』

雑誌『ロシア思想』も新聞『新時代』同様に、革命前からの長い伝統をもっている。創刊は 1880 年モスクワ。以来 1918 年まで学術・文学・政治雑誌として権威を保ちつづけた有力誌で、1907 年からはカデットの政治家でもあり、文集『道標』(Вехи: 1909) にも執筆したピョートル・ストルーヴェが実質的な編集責任者となった⁹⁶。

1920 年末、ウランゲリ軍とともにコンスタンチノープルに逃れたストルーヴェは、1921 年ブルガリアに着くと、できたばかりのロシア・ブルガリア出版社の助けを受けて雑誌『ロシア思想』を復刊した⁹⁷。だが、財政基盤がしっかりしていなかったこの雑誌は、1921 年ブルガリアのソフィアで 12 号を刊行した後、1922 年より出版地をプラハに移す。さらに、1923 年から 24 年にはベルリンで刊行され、最後は 1927 年にパリで 1 号だけ出して廃刊となっている。こうした雑誌の運命は、黒海沿岸からロシアを脱出した亡命者たちの運命をなぞるようだが、ここでは 1921 年ソフィアで刊行されていた『ロシア思想』誌に焦点を絞って論じてみたい。

さて、政治的に見ると、『ロシア思想』は、君主派の『新時代』よりは中道寄りで、カデット右派の『舵』に近いとされている⁹⁸が、まず創刊号に掲載されたストルーヴェの「新旧読者への呼びかけ」(Обращение к старым и новым читателям: 1921. №1/2)からよく引かれる箇所を引こう。ストルーヴェはいう。「ロシアのこの復活、永遠であると同時に生きたイメージのこの復活を、この上なく深い堕落のなかで自覚し、意義づけること、これがロシア思想の課題であり、われわれの雑誌の課題である」⁹⁹と。抽象的な発言だが、この雑誌の立場とは、ボリシェヴィキ革命を嘆くだけでなく、それをロシア思想の敗北として捉え、思想的に新たなロシアの復活の道を模索しようというものだろう。もちろん、ロシアの復活のためには、ボリシェヴィキ政権をどうして倒すかという問題も避けては通れないが、ここではそうした戦術の問題よりは精神的な面が強調されているように感じられる。

つぎに、『ロシア思想』の文化的側面を眺めると、1 年という短い刊行期間だったにもかかわらず、いくつもの注目すべき記事が掲載されていたことに驚かされる。文化欄が充実した理由の一つは、ストルーヴェ自身の豊富な人脈を通じてプラハ、ベルリン、パリなどからも多くの寄稿を得ることができたことだった¹⁰⁰。たとえば、この雑誌に初出の散文作品にはブーニンの「脱出」(Исход: 1921.№1/2)、アレクセイ・トルストイ「辱められたカリオストロ」(Посрамленный Калиостро: 1921.№5/7)があり、回想にはギッピウスの「1919 年の日記」(Дневник 1919 года: 1921.№1/2-3/4)、B・B・シュリギンの「1920 年」(1920 год: 1921.№5/7-10/12)などがある¹⁰¹。だが、それより注目されるのはブルガリア在住の若い執筆者が健筆を振るったことだろう。

文集『東方への脱出』には、当時ブルガリアに在住していて、後に宗教学者、言語学者として世界的名声を得るゲオルギイ・フロロフスキイ、ニコライ・トルベツコイが稿を寄せているが、『ロシア思想』では、コンスタンチン・モチュリスキイ、グレープ・ストルーヴェといった、後に亡命批評界に重きをなす批評家たちが独自の詩論を展開している。まず、ソフィア大学教授だったモチュリスキイが、「アンナ・アフマートワの詩的創造」(Поэтическое творчество Анны Ахматовой: 1921.№3/4)で、詩集『白い群れ』を中心に、アフマートワの詩的イメージの彫塑性について論じているのに対し¹⁰²、ピョートル・ストルーヴェの息子でオックスフォードに学ぶグレープ・ストルーヴェは、彼女の詩集『オオバコ』を取り上げ、そこに「われわれの時代の悲劇的感覚」(1921.№10/12)を看て取った¹⁰³。

今日ドストエフスキイ論で有名なモチュリスキイ、浩瀚な亡命文学史で知られるグレープ・ストルーヴェが、アフマートワの詩論を競い合ったという事実は興味深い。

このほか、ドストエフスキイの生誕 100 年記念号にピョートル・ストルーヴェが寄せた論考「ロシアの精神的再生の予言者」(Пророк русского духовного возрождения: 1921.№10/12)も注目されるが、ドストエフスキイを偉大な宗教思想家と捉える¹⁰⁴立場は、『新時代』のポゴージンを想起させる。雑誌『ロシア思想』のめざす精神性は、保守派とも多分に共通性を備えていたといえるだろう。

ブルガリア時代の雑誌『ロシア思想』を概観した後、カナジルスカは「ブルガリアにおける『ロシア思想』刊行は、たった1年だけだったにもかかわらず、この国における真の文化的事件となった」¹⁰⁵と述べている。これはブルガリアから見ての発言だが、亡命ロシアから見れば、やはり1年という期間はあまりにも短かったといわざるをえない。もちろん、その短さはブルガリアにおける亡命ロシア文化の特性でもあったのだが。

6.ポーランドと新聞『自由のために!』

1.サヴィンコフ、メレシコフスキイ夫妻、ピウスツキ

ロシア革命後ロシアから独立したという点では、ポーランドはバルト諸国と同じだが、 独立後かつての領地をさらに奪い返そうという目的で積極的に戦いを挑んだ点では、両者 は大きく異なっている。そして、国家首席だったピウスツキは、反ボリシェヴィキを掲げ るサヴィンコフらに、積極的な援助を与えた。

ロープシンのペンネームで『蒼ざめた馬』を著したエスエルのサヴィンコフは、内戦時コルチャック政府にいたが、1920 年 1 月ワルシャワに赴き、ピウスツキの信頼を得て、ロシア軍人からなる秘密軍事組織の長に任命された 106 。そして、サヴィンコフは、同じころやはりボリシェヴィキ打倒を掲げ、亡命政権樹立をめざしてポーランドにやってきたメレシコフスキイ夫妻と接触し、メレシコフスキイを副官に、ギッピウスを情宣部門の長に据える 107 。こうして情宣のために創刊された新聞が『自由』(1920 年 7 月 17 日から 21 年 11 月 3 日までこの名前で刊行された)だった。したがって、この新聞には当初ピウスツキ政府からの資金援助があった 108 。

だが、1920年4月、かつての領地を奪い返そうとポーランド・ソヴィエト戦争を起こしたピウスツキは、亡命者たちの期待も空しく敗勢に追い込まれ、翌21年3月リガ協定を結んで戦争を終結させた。ピウスツキに打倒ソヴィエト・ロシアの期待を託したメレシコフスキイ夫妻は、ピウスツキに幻滅するとともに、サヴィンコフとも仲たがいして、1920年10月パリへと旅立つ。かれらのワルシャワ滞在はわずか10か月で終わりを告げた109。

その後、1921 年 10 月にポーランドとソヴィエトとの間に合意書が交わされると、ポーランド国内のロシア、ウクライナ軍は国外追放となり、多くの亡命者はチェコスロヴァキ

アなどに移った¹¹⁰。サヴィンコフはその後も地下活動をつづけるが、1924 年 8 月非合法に 国境を越えようとしてミンスク付近で逮捕される。そして、同年 9 月獄中から反ソ活動の 停止を訴える手紙を寄せたことから、新聞『自由のために』の編集部から絶縁状を突きつ けられる¹¹¹。彼は翌 25 年監獄で自殺したとされるが、亡命者にとってはすでに過去の人で しかなかった。

2.新聞『自由のために!』

新聞『自由』は 1920 年 7 月、メレシコフスキイの弟分B・A・ズロービンを編集・出版者として創刊されたが、もちろん、この雑誌が注目されたのは、明確な反ボリシェヴィキの姿勢を打ち出し、サヴィンコフ¹¹²、メレシコフスキイ、ギッピウス、フィロソフォフらの寄稿を得たためだった。すでに述べたように、メレシコフスキイ夫妻は同年 10 月にワルシャワを離れるが、1921 年 9 月には、メレシコフスキイがソヴィエト国内の飢餓をテーマにした記事「恐ろしい手紙」を、1925 年にはギッピウスがボリシェヴィキとの和解不能を論じた「胎内」を寄せているように、パリからも寄稿をつづけていた¹¹³。その意味で、この新聞は当初からメレシコフスキイ夫妻の影響力の強かった新聞といえるだろう¹¹⁴。

ただ、サヴィンコフやメレシコフスキイ夫妻の影響力は、けっして長きにわたるものではなかった。1921 年 11 月 4 日『自由のために!』と改題された後、1932 年 4 月 5 日まで長命を保つことができたのは、1921 年の終わりころから実質的な編集者となったフィロソフォフのおかげといってよい。雑誌『芸術の世界』(Мир искусства)の文芸欄を担当していたときにメレシコフスキイ夫妻の親交を得た彼は、1919 年末、夫妻やズロービンとともにロシアを脱出して、ワルシャワに居を定めるが¹¹⁵、夫妻がワルシャワを去った後も、この地で編集・評論活動を継続する¹¹⁶。1923 年以降ポーランド政府からの資金援助が激減し、財政的な危機に瀕したさいも、彼は資金の調達に奔走しつづけた¹¹⁷。フィロソフォフの努力がなければ、この新聞は短命に終わり、ボリシェヴィキ体制打破の政治的側面のみが記憶されたにちがいない。

とはいえ、新聞『自由のために!』の政治的側面も無視することはできない。この新聞のいちばんの特徴は、バルト諸国など旧ロシア領土内で刊行された他の定期刊行物(よい例が「ラトヴィアのロシア語新聞」『今日』だろう)とはちがって、政治的立場を鮮明にしつづけたことにあるのだから¹¹⁸。そして、その意味で忘れることのできないのが、アルツィバーシェフの参加だった。

周知のように、革命前のアルツィバーシェフは、『サーニン』(Санин: 1907)など退廃的な官能小説の作家として知られていた。しかし、1923年8月(母方がポーランド系だったためもあって)ワルシャワに亡命した彼は、ソヴィエト時代に知った赤色テロルなどの辛い体験をもとに、社会評論家として『自由のために!』に稿を寄せ、「ロシアの良心」とまで謳われる¹¹⁹。彼はいう。「遅かれ早かれ、ボリシェヴィキに対するわれらの闘争 ロシア

のためだけでなく、世界文明全体のための闘争 が評価される日がくるだろう」¹²⁰と。不幸にしてアルツィバーシェフは、1927年この世を去るが、反ボリシェヴィキ闘争に賭けた彼の情熱は雑誌のなかで受け継がれていく。

つぎに文芸欄を眺めれば、注目されるのはA・JI・ベームが執筆していることだろう。今日ドストエフスキイ論で知られるベームは、亡命文学史ではプラハで「詩人の庵」(後に「庵」(Скит)と改名)という文学サークルを率いていたことで著名だが、プラハに移住する前、1920年11月から1922年1月までは、ワルシャワに住んで「詩人の居酒屋」(Таверна поэтов)という文学サークルを主宰していた121。この新聞では、ドストエフスキイ生誕100年記念号(1921年11月11日)やネクラーソフ生誕100年記念号(1921年12月6日)に稿を寄せたほか、レフ・トルストイの伝記についても論じている(1921年11月20日)ように122、短い期間ではあるが、19世紀ロシア文学の巨匠たちについて盛んに健筆を振るっていた。このほか、この新聞にかかわった作家・詩人には A・B・アンフィテアトロフ、バリモント、セヴェリャーニンらもいるが、全体として文芸欄は、その過激な反ボリシェヴィキ思想を凌ぐほどのインパクトは与えられなかった。『自由のために!』は、まさしく反ソ活動の前線ポーランドという場に生まれ育った新聞といえるだろう。

7. 結び

以上チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィア、ラトヴィア、ブルガリア、ポーランドという5つの中東欧諸国で刊行された、亡命ロシアを代表する5つの代表的新聞・雑誌を概観してきたが、もちろんこれ以外にも論じなければならない定期刊行物はいくつもある。

たとえば、バルト諸国ではリガで刊行されていた新聞『今日』しか取り上げなかったが、エストニア、リトアニアでもロシア語の定期刊行物が刊行されていたことは、いうまでもない。エストニアでもっとも有名な『処女地』(Новь: 1928-35)は、年刊の文集で雑誌とはいえないからあえて触れなかったが、ほかにもタリンでは日刊紙『最新時報』(Последние известия: 1920-27)、『一日のニュース』(Вести дня: 1926-40)などが刊行されていたし、リトアニアでは、コヴノ(カウナス)で出ていた日刊紙『こだま』(Эхо: 1920-40、一時期『リトアニアのこだま』と題した)など4つのロシア語新聞が刊行されていた「123。しかし、文芸欄の充実、役に立つ情報の提供などの理由から、これらの国の人びともラトヴィアの『今日』を愛読したという「124。さらに、ラトヴィア国内でも『今日』は、『リガ急便』(Рижский курьер: 1920-24)や『明日』のようなライバル紙の攻撃をかわし、場合によっては『月曜日』(Понедельник: 1925 年創刊)のように相手を取り込みながら販路を拡大していった「125。いくつもの定期刊行物が、それぞれの個性を発揮しながら競い合っていたパリとはちがい、中東欧諸国の定期刊行物は、しばしば地域ごとに寡占状態にあったといえるだろう。

さて、これまで取り上げてきた新聞・雑誌は文芸欄の充実した総合誌(紙)が中心だったが、亡命系の定期刊行物には、このほか政治的、軍事的、民族的な新聞・雑誌も見逃せ

ない。政治的なものとしては、「道標転換派」 ¹²⁶には、リガで出ていた新聞『新しい道』 (Новый путь: 1921-22)、ソフィアで刊行されていた雑誌『祖国へ』(На родину: 1922)などがあり ¹²⁷、「ユーラシア主義」には、1925年プラハで発刊され、1927年からパリに移った『ユーラシア主義雑報』(Евразийская хроника)がある ¹²⁸ほか、エスエルの中央機関誌『革命ロシア』(Революционная Россия: 1920-31)も、エストニアのユーリエフ(タルトゥー)で発刊された ¹²⁹後、ベルリンからプラハに刊行地を移している。

軍事的な定期刊行物は、退役軍人たちの情報誌的なもの、軍事史、軍事理論をあつかうものなどさまざまだったが¹³⁰、兵士たちの多くがコンスタンチノープルから移ってきた事情もあって、ユーゴスラヴィアなどバルカン諸国が刊行の中心だった。いくつか列挙すれば、ベオグラードで出ていたものには、1921 年から 30 年まで全部で 11 号刊行された、もっともポピュラーな「厚い雑誌」¹³¹『軍事論集』(Военный сборник)や『ガリポリ戦士¹³²協会理事会通報』¹³³(Вестник правления Общества галлиполийцев: 1923-26)があり、プラハでは『海軍雑誌』(Морской журнал: 1928-39)、ブルガリアのヴァルナでは『アレクサンドロフスキイ軍事学校生』(Александровец: 1928-32)が刊行されている。亡命系の定期刊行物を考えるとき、地域以外のいろいろなつながりも無視できない。

最後に、民族的な雑誌についても一言しておこう。序論でも触れたが、亡命ロシアと総称されても、そこにはユダヤ人、ウクライナ人、アルメニア人、グルジア人などロシア人以外の民族も多く含まれており¹³⁴、亡命系の定期刊行物には、こうした民族的なものもある。たとえば、チェコスロヴァキアでは『カフカスの山岳民』(Кавказский горец: 1924-25)と題した論集が出ていたし、バルカン諸国では、ベオグラードの『自由なクバン』(Вольная Кубань: 1923-39)、ソフィアの『コサック民謡』(Казачьи думы: 1923-24)などコサックの雑誌もめずらしくなかった。亡命ロシアの民族的多様性も忘れてはならないだろう。

中東欧諸国で刊行されていた亡命ロシアの定期刊行物はこのように多彩だが、最初に述べたように、その多くは短命で、狭いサークルの外への影響力は小さかった。その意味で、本論で取り上げた5つの新聞・雑誌こそ、中東欧諸国における亡命ロシア文化の諸相をもっとも鮮明に映し出した定期刊行物だったことはまちがいないだろう。エスエルが強い影響力をもったチェコスロヴァキア、保守派・君主派の牙城だったユーゴスラヴィア、亡命者であることを積極的に自己主張できずに、少数民族としてのロシア人のなかで活動せざるをえなかったバルト諸国、亡命文化の開花がごく短い期間だけに限られていたブルガリア、戦闘的な反ボリシェヴィキのジャーナリズム活動が容認されたポーランド、5つの新聞・雑誌はこうした各国ごとの亡命文化のありようを、なによりも雄弁に語ってくれる。

- 1) 拙稿「RUSSIAN BERLIN」、『言語文化』第8巻第2号、2005年12月、313-353ページ。
- 2) 拙稿「同化と共生 中東欧諸国における亡命ロシア文化序説」、『言語文化』第9巻第1号、2006年8月、97-115ページ。
- 3) Raeff, M. *Russia Abroad: a Cultural History of the Russian Emigration 1919-1939*. Oxford: Oxford UP, 1990, p. 75.
- 4) Ibid., p. 81.
- 5) Жирков, Г.В. Культура и журналистика Русского зарубежья 20-40-х гг. Зарубежная Россия 1917-1939 гг.: Сборник статей. СПб.: Европейский Дом, 2000, С. 246-248.
- 6) Tam жe, C. 246. なお、ジルコフは 3182 という数を挙げている。
- 7) 拙稿「同化と共生」、100ページ参照。
- 8) Земгор が何の略称なのかは意外と複雑だ。基本的には Земский и Городской союзы の略称と考えられるが、その統括委員会である Главный комитет «Всероссийских Земского и Городского союзов»の略称とされることもある。さらに、亡命組織ゼムゴールについて論じたステパノフの論中では、Земско-Городской Комитет, Российское Объединение Земских и Городских деятелей, Российский Земско-Городской Комитет помощи российским гражданам за границей などの略称としてもゼムゴールが用いられているから、本論で用いられるゼムゴールはかなり広い意味を含んだ概念と考えてよいだろう。См. Степанов, Н.П. «Земгор» и «Согор» в деле организаций русских школ, помощи детям и молодежи в эмиграции в начале 1920-х годов. Русская эмиграция в Европе в 1920-1930-е гг. Вып. 2. СПб.: Алетейя, 2005, С. 85-90.
- 9) См. Ипполитов, С.С. Российская эмиграция и Европа: несостоявшийся альянс. М.: Издательство Ипполитова, 2004, С. 167.
- 10) 一般的には、エスエルがプラハのゼムゴールの多数派を形成していたと言われるが(См. Серапинова, Е.П. Т.Г. Масарик и российские эмигранты в ЧСР. Т.Г. Масарик и «Русская акция» Чехословацкого правительства: К 150-летию со дня рождения Т.Г. Масарика. По материалам международной научной конференции. М.: Русский путь, 2005, С. 65) サベンニ コワによれば、1923 年末の時点でプラハのゼムゴールのメンバーは 63 名だったが、うち エスエルは 29 名で、過半数を占めてはいなかったという。 Сабенникова, И.В. Земско-городской комитет помощи русским беженцам за границей (Земгор): состав, структура и географические центры. Зарубежная Россия, С. 9.
- 11) См. Серапинова, С. 63.
- 12) См. Там же, С. 65. ただ、左翼リベラルに共感を抱いていた大統領マサリク、外相ベネシュとは対照的に、首相クラマーシュの政治信念は、カデット右派など立憲君主派に近かったという。См. Там же.
- 13) Cm. Tam жe. なお、ここでセラピノワは、ベネシュ率いる外務省が亡命者に「フィルターをかけ」ようとした、と述べている。
- 14) См. Суомела, Ю. Зарубежная Россия: Идейно-политические взгляды русской эмиграции на страницах русской европейской прессы в 1918-1940 гг. (Перевод с финского Л.В. Суни) СПб.: Коло, 2004, С. 57.
- 15) Серапинова, С. 65.
- 16) См. Суомела, С. 62.
- 17) См. Николаев, Д.Д. Русская эмигрантская периодика в Чехословакии. Литература русского зарубежья 1920-1940. Вып. 3. М.: ИМЛИ РАН, 2004, С. 352.
- 18) См. Там же, С. 340.
- 19) См. Там же, С. 343-344. См. Суомела, С. 105-109.
- 20) См. Там же, С. 92-93.
- 21) マルク・スローニムについては拙稿「ガイト・ガズダーノフと「ロシアの意志」 『黒

- い白鳥』を中心に 」、『人文科学論集』(信州大学人文学部)第23号、1989年、159-168ページ、拙稿「ナボコフとプラハ」、『言語文化』第4巻第4号、2002年3月、683-702ページ、でも触れている。
- 22) См. Николаев, С. 347-350.
- 23) Chamberlain によれば、このことはプラハのロシア人コミュニティが、他の都市に比べて 共同意識が薄かったことの例証ともされていたという。Cf. Chamberlain, L. *The Philosophy* Steamer: Lenin and the Exile of the Intelligentsia. London: Atlantic Books, 2006, p. 196.
- 24) См. Струве, Г. Русская литература в изгнании. 2-ое издание исправленное и дополненное. Paris: YMCA-Press, 1984, С. 22. なお、Chamberlain によれば、『舵』もプラハに特派員を置き、プラハの亡命ロシア人にかんする記事を載せていたという。Cf. Chamberlain, p. 196.
- 25) 『ロシアの意志』については、古典的なものとして、スローニム自身による紹介がある (Слоним, М. *«Воля России»*. Полторацкий, Н. (ред.) *Русская литература в эмиграции. Сборник статей*. Pittsburgh, 1972, С. 291-300) し、前述のストルーヴェによる論述もある (Струве, С. 63-71)。また、前述の拙稿「ナボコフとプラ八」でも触れられている。
- 26) スローニムが前掲論文で引いているこの記述 (Слоним, С. 292) は、『ロシアの意志』からの引用だと思われるが、どの号から引かれているかは不詳である。ちなみに、同じ箇所を引用しているジルコフ (Жирков, Г.В. Основные журналы русского зарубежья. Жирков, Г.В. (ред.) Журналистика русского зарубежья XIX-XX веков. Учебное пособие. СПб.: Издательство С.-Петербергского университета, 2003, С. 220) も、ソコロフ (Соколов, А.Г. Судьбы русской литературной эмиграции 1920-х годов. М.: Издательство Московского университета, 1991, С. 28) も出典として、スローニムの前掲書を挙げるだけで、『ロシアの意志』の典拠は示していない。
- 27) もちろん、ここで 1927 年第 2 号に掲載されたザミャーチンの小説『われら』の抜粋を忘れることはできない。この小説はチェコ語版、英語版からの重訳の形をとっていたが、実際には、編集部は原文を手に入れていたという。Зверев, А.М. «Воля России». Литературная энциклопедия Русского Зарубежья 1918-1940: Периодика и литературные центры. М.: Россиэн. 2000. С. 79.
- 28) Воля России, 1924, №4, С. 58.
- 29) Воля России, 1928, №7, С. 64.
- 30) См. Жирков, Основные журналы русского зарубежья, С. 222.
- 31) Зверев, С. 85.
- 32) 亡命文学にかんしては、古い世代とは亡命後にすでに作家・詩人として名を成していた世代を指し、若い世代とは亡命後に文学活動を開始した世代を指す。
- 33) См. Струве, С. 66. Соколов, С. 29. Жирков, Основные журналы русского зарубежья, С. 222.
- 34) Glad, J. *Russia Abroad: Writers, History, Politics*. Washington, D.C.& Tenafly: Hermitage & Birchbark Press, 1999, p. 174.
- 35) См. Струве, С. 66. Соколов, С. 29.
- 36) ОРЭСО(Объединение русских эмигрантских студенческих организаций)の指揮下にあり、文芸欄にはクプリーン、レーミゾフら古い作家の作品とともに、プラハの文学サークル「詩人の庵」(Скит поэтов)に所属する若い世代の詩人の作品なども掲載された。См. Николаев, С. 374-375.
- 37) こちらも「詩人の庵」などとつながりがあったが、大きな特徴としては新正字法を採用したことが挙げられる。そのため、「プラハのコムソモール団員」などと蔑視され、プーニンなどは新正字法を理由に投稿を拒んでいる。См. Там же, С. 391-412.
- 38) См. Струве, С. 66.
- 39) このころまでにはチェコスロヴァキア政府も、エスエルが新しいロシアの中心になるという期待は失っていた。См. Суомела, С. 62.
- 40) Cf. Glad, p. 237.
- 41) 1918 年末の建国当時はセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国と称し、1929 年 にユーゴスラヴィアと改名されたが、序論同様、この国を慣例に従ってユーゴスラヴィア と呼ぶ。

- 42) サイモン・カーリンスキー『知られざるマリーナ・ツヴェターエワ』(亀山郁夫訳)、晶文社、1992 年、166 ページ。なお、一部表記を改めた。
- 43) См. Азаров, Ю.А. Диалог поверх барьеров. Русское литературное зарубежье: центры, периодика, взаимосвязи (1918-1940). М.: Совпадение, 2005, С. 165. なおアザーロフによれば、ベオグラードの街では、軍服姿の亡命者をよく見かけたという。См. Там же.
- 44) См. Там же, С. 169.
- 45) セルビアは白軍政権を承認した唯一の国だったという。См. Миронов, Е.М. (ред.) Русский исход. СПб.: Алетейя, 2004, С. 206.
- 46) 拙稿「同化と共生」、103ページ参照。
- 47) См. Азаров, Диалог, С. 165-166.
- 48) См. Там же, С. 169.
- 49) Азаров, Ю.А. Русские газеты и журналы в Югославии в 1920-1930-е годы. Белградское «Новое время». Литература русского зарубежья 1920-1940. Вып. 3, С. 436.
- 50) См. Азаров, Диалог, С. 199.
- 51) См. Прохоров, А.М. (глав. ред.) Большой энциклопедический словарь. Издание 2-е, переработанное и дополненное. М.: Большая Российская энциклопедия, 1997, С. 814.
- 52) См. Азаров, Диалог, С. 180.
- 53) 『ナボコフ伝』の著者 Boyd は、作家ナボコフの父と『新時代』紙との確執について触れているが、このエピソードはナボコフの短篇「アカザ」(Лебеда)のもとにもなっている。 Cf. Boyd, B. *Vladimir Nabokov: the Russian Years*. Princeton: Princeton UP, 1990, pp. 98-99.
- 54) См. Азаров, Диалог, С. 179.
- 55) Cf. Raeff, p. 82.
- 56) См. Джурич, О. Шестьдесят лет Русскому дому имени императора Николая II в Белграде (1933-1993). Культурное наследие российской эмиграции 1917-1940. Кн. 1. М.: Наследие, 1994, С. 62.
- 57) См. Азаров, Диалог, С. 178.
- 58) Cm. Tam жe, C. 180. なお、亡命の君主派内部でも、キリル・ウラジミロヴィチ大公を支持する勢力と、ニコライ・ニコラエヴィチ大公を支持する勢力に分かれていたが、『新時代』はニコライ・ニコラエヴィチ大公を支持する立場だったという。 Cm. Tam жe, C. 185.
- 59) См. Там же, С. 183.
- 60) Городовский, В. *Под знаменем хвоста*. *Новое время*, 1928, 18 нояб. 引用は Азаров, *Диалог*, С. 183-184 による。
- 61) См. Там же, С. 193.
- 62) Там же, С. 188.
- 63) Погодин. А. *Поразительная книга «Выбранные места из переписки с друзьями»*. Новое время, 1925, 15 февр. 引用は Азаров, *Диалог*, С. 195 による。
- 64) Погодин, А. От Фурье к св. Серафиму Саровскому. Новое время, 1926, 11 февр. 引用は Азаров, Диалог, С. 197 による。
- 65) 拙稿「同化と共生」、105ページ参照。
- 66) Pachmuss, T. Russian Literature in the Baltic between the World Wars. Columbus: Slavica, 1987, p. 27
- 67) Трубилова, Е.М. Русские периодические издания в Латвии. Газета «Сегодня». Литература русского зарубежья 1920-1940. Вып. 3, С. 293.
- 68) 財政援助もリガ在住のユダヤ人企業家から受けていたという。См. Жирков, Г.В. Ведущие газеты русского зарубежья. Жирков (ред.), Журналистика русского зарубежья XIX-XX веков, С. 308.
- 69) См. Трубилова, С. 322.
- 70) См. Демидова, О.Р. Евреи в культуре русской эмиграции: проблема идентичности. История и культура российского и восточноевропейского еврейства: новые источники, новые подходы. М.: Дом еврейской книги, 2004, С. 199.
- 71) См. Там же, С. 199-200.
- 72) 新聞『今日』は、その後8月26日を創立記念日として祝ったという。Cm. Трубилова, C. 294.
- 73) См. Там же, С. 293-294.

- 74) Cf. Pachmuss, p. 32.
- 75) См. Абызов, Ю.И. «Сегодня», Литературная энциклопедия Русского Зарубежья 1918-1940, С. 428
- 76) См. Трубилова, С. 319.
- 77) См. Там же, С. 323.
- 78) Cf. Raeff, p. 82.
- 79) См. Трубилова, С. 308.
- 80) Cm. Tam жe, C. 311. なお、編集にかかわった人としては、このほか 1924 年にブラームスに招かれた M・C・ミリルド、1926 年から加わった B・C・オレチキンらがいた。
- 81) См. Там же, С. 309.
- 82) См. Там же, С. 310.
- 83) См. Абызов, С. 426.
- 84) См. Трубилова, С. 318.
- 85) 短篇「偶然」(Случайность)は、『舵』に掲載を断られ、『今日』の 1924 年 7 月 22 日号に 掲載された。Nabokov, D. *Notes. The Stories of Vladimir Nabokov.* NY: Vintage International, 1997, p. 645.
- 86) См. Трубилова, С. 319.
- 87) См. Там же, С. 303.
- 88) См. Там же.
- 89) См. Там же, С. 314.
- 90) См. Там же, С. 311.
- 91) 拙稿「同化と共生」、102ページ参照。
- 92) См. Миронов, С. 189.
- 93) См. Каназирска, М. «Русская мысль» в Болгарии (1921 г.). Культурное наследие российской эмиграции 1917-1940. Кн. 2, С. 58.
- 94) См. Там же. なお、1922 年にクテーポフらが追放された裏には、ソヴィエトもからんでいたという。См. Русская военная эмиграция 20-х-40-х годов: документы и материалы. М.: Гея, 1998, С. 8.
- 95) ジルコフによれば、この文集は 1921 年から 27 年までソフィア、ベルリン、パリで 15 号 刊行された『ユーラシア通報』(Евразийский временник)の第 1 号とみなされていたという。 См. Жирков, Типологические особенности журналистики русского зарубежья. Жирков (ред.) Журналистика русского зарубежья XIX-XX веков, С. 184.
- 96) См. Большой энциклопедический словарь, С. 1157.
- 97) См. Каназирска, С. 61.
- 98) См. Кузнецов, И.В., Зеленина, Е.В. Во имя России. Публицистика русского зарубежья (1920-1945): сборник статей. М.: Союзполиграфпром, 1999, С. 7.
- 99) Русская мысль. 1921, №1/2, С. 5. 引用は Каназирска, С. 63 による。
- 100) См. Каназирска, С. 61.
- 101) См. Там же, С. 65. このほか若きナボコフも「放浪」(Странствие)、「ロシア」(Россия)と いった詩を寄せている。См. Там же, С. 67.
- 102) См. Там же, С. 70-71.
- 103) Трущенко, Е.Ф. «Русская мысль». Литературная энциклопедия Русского Зарубежья 1918-1940, С. 379
- 104) См. Там же.
- 105) Каназирска, С. 72.
- 106) Cf. Glad, p. 186.
- 107) Cf. Ibid.
- 108) См. Жирков. Ведущие газеты русского зарубежья, С. 301.
- 109) Cf. Glad, pp. 187-188.
- 110) Cf. Ibid., p. 186.
- 111) Петрова, Т.Г. «За свободу!». Литературная энциклопедия Русского Зарубежья 1918-1940, С. 156
- 112) 1923 年にはサヴィンコフの『黒馬を見たり』の一部もここに掲載されたという。Cm. Tam жe, C. 156.

- 113) Там же, С. 153.
- 114) しかし、ギッピウスとフィロソフォフは、Γ・イワーノフをめぐっての 1927 年の論争で 決別してしまう。См. Богомолов, Н.А. *Об одной литературно-политической полемике 1927 г.. Культурное наследие российской эмиграции 1917-1940*. Кн. 2, С. 25-33.
- 115) このころサヴィンコフの後を受けて、反ボリシェヴィキ地下活動にもかかわっていたという。См. Петрова, С. 152.
- 116) メレシコフスキイ夫妻が去ったあと、フィロソフォフは「事実上、ワルシャワにおけるロシア人亡命者のリーダーの一人」になったという。Розинская, О.В. Литературные критики эмигрантской Варшавы (руско-польские связи). Классика и современность в литературной критике русского зарубежья 1920-1930-х годов. Часть 2. М.: ИНИОН РАН, 2006, С. 40.
- 117) Петрова, Т.Г. Философов. Литературное энциклопедия Русского Зарубежья 1918-1940: Писатели Русского Зарубежья. М.: Росспэн, 1997, С. 408-409.
- 118) Богомолов, С. 26.
- 119) Pachmuss, p. 29.
- 120) За свободу! 1924. 15 нояб. 引用は Петрова. «За свободу!», С. 155 より。
- 121) См. Исмагулова, Т.Д. Русская эмиграция в Польше (Владимир Бранд поэт и воин «русской Варшавы»). Зарубежная Россия 1917-1940 гг., С. 347. Розинская, С. 37.
- 122) См. Петрова. «За свободу!», С. 153-154.
- 123) Cf. Glad, p. 207.
- 124) Cf. Pachmuss, p. 32.
- 125) См. Трубилова, С. 313.
- 126) 「道標転換」については、拙稿「文集『道標転換』と雑誌『道標転換』 帰国運動とのかかわりから」、『言語文化』第7巻第2号、2004年、267-283ページ参照。
- 127) См. Жирков, Типологические особенности журналистики русского зарубежья, С. 182-183.
- 128) См. Казнина, О.А. Периодические издания евразийского движения. Литература русского зарубежья 1920-1940. Вып. 3, С. 555.
- 129) 正確にいうと、1900年から 1905年まで刊行されていた同名の雑誌の復刊。
- 130) См. Волковский, Н.Л. *Военная журналистика*. Жирков (ред.) *Журналистика русского зарубежья XIX-XX веков*, С. 235.
- 131) См. Там же, С. 237.
- 132) ガリポリはダーダネルス海峡に面したトルコの半島。敗走した白軍の兵士たちの多くはこの地で厳しい生活を強いられた。
- 133) なぜか、若きナボコフの詩「焚き火」(Костер)がこの雑誌に掲載されたという。 См. Азаров, *Русские газеты*, С. 437.
- 134) См. Будницкий, О.В. Материалы по истории российского еврейства в эмигрантских архивах. История и культура российского и восточноевропейского еврейства, С. 206.

東方問題とドストエフスキイの汎スラヴ主義の淵源

松 本 腎 一

1.はじめに

ロシア革命の後、厳しい弾圧の下で生き延びたロシア正教会は、私見では新しいロシアの中でその勢力を盛り返し、失われたロシア民衆のおよそ 70 年にわたる信仰生活を取り戻そうとしているようではある。しかし、敢えて誤解を恐れずに言うならば、現在のロシア正教関係者がドストエフスキイに言及する際の自信に満ちた物言いは、この作家がその 60 年の生涯にわたって懊悩しなければならなかった宗教上の苦悩を無視し、結果として彼が辿り着いた(と彼らが信じている)安定した信仰を自らの信仰生活の担保としているように思われる。

ドストエフスキイという作家は極めて危険な作家である。なぜならば、彼がロシア正教 というひとつの宗教のイデオローグである時には、同時に狭隘な民族主義者、あるいはシ ョヴィニストとしてわれわれの前に姿を現すからである。ドストエフスキイの民族主義的 な発言、あるいは汎スラヴ的ともロシア中心主義的ともいえる発言は、多くのドストエフ スキイ愛読者や研究者にとって困惑の種になって来たと言えよう。ドストエフスキイの持 っているこのような受け容れ難い(非ロシア人にとっては特に受け容れ難い)側面を避け るための最も安易な道は、小説家としてのドストエフスキイと社会評論家としてのドスト エフスキイは別のものであるとする方法であろう。しかしながら、この方法は、原理的に も、また、実際的な面でも、破綻を来さざるを得ない。原理的に、というのは、ひとつの 人格の創造活動について、受け容れ難い側面を初めから無視してかかるような態度は、少 なくとも文学研究者の採るべき道ではないからである。実際的な面で、というのは、『悪霊』 におけるシャートフや『未成年』におけるヴェルシーロフはともかく、ドストエフスキイ の作品の中でも最も温和な人物の範疇に属するアリョーシャ・カラマーゾフやムィシュキ ン公爵にさえ、ドストエフスキイの民族主義的な発言の反映を見ることが可能であり、従 って、小説作品の解釈に限った場合にも、ドストエフスキイの社会評論における言説を小 説とは何ら関リの無いものと見なすことは不可能だからである。

1860 年代の初めに開始されたドストエフスキイの評論活動は、彼の死の直前の著名な「プーシキン演説」に至るまで、後年のドイツ・ナチスにさえ似通う危険な側面を持っている1。それは彼の全創造活動の病める部分であると言っても良いだろう。しかしながら、この病を無視することは許されない。病もまた個性を形成する要素のひとつであり、病の性質を考究することを怠るならば、それは忽ちにして死に通ずるしかない。

かつてレールモントフは『現代の英雄』の序文に「病が指摘されたというだけで充分である。その病をどう治療するか、それはもはや神のみの知り給うところである」と記した。本論がドストエフスキイの病を指摘する一助となれば幸いである²。

2.セルビア蜂起と『作家の日記』

H.A.ネクラーソフが主宰する進歩派の雑誌『祖国雑記』での『未成年』の連載を終えて、ドストエフスキイが再び『作家の日記』を、しかしもはや他人の雑誌の軒を借りる形ではなく、個人雑誌として発行し始めたのは1876年のことである。そしてこの年は、バルカン問題が再びロシアの重要な関心事となった年である。ニコラス・リャザノフスキイは、この1876年という年について、次のように説明している。「1876年はトルコの他の地域における戦闘、大虐殺と並んで、ブルガリア蜂起に対する残忍な鎮圧の起きた年であり、また、セルビアとモンテネグロの対トルコ戦争が宣戦布告された年でもある。ロシアの公衆はこの一連の事態の進展に強く反応した。これまでは、一部の知識人のサークルを除けば曖昧な感情以上のものではなかった汎スラヴ主義が、初めて積極的な力となったのである。汎スラヴ委員会は、著名人士から素朴な農民にまでわたり、また約800名の退役ロシア軍将校を含む、5,000人もの義勇兵を戦闘要員としてセルビアに送った。セルビア軍はそれ以前に別のロシア人義勇兵ミハイル・チェルニャーエフの指揮に委ねられていた。しかしながらトルコはセルビア軍を破り、これ以来バルカン諸民族の最後の希望は挙げてロシアの介入にかかっていたのである3」

このリャザノフスキイの説明をもう少し補足しつつ、1876年の出来事を概観しておこう。すでに前年、1875年にボスニア ヘルツェゴヴィナにおいて対トルコ蜂起が勃発し、今なお続いていた。これはトルコの徴税吏の横暴に端を発していた。ボスニア ヘルツェゴヴィナの蜂起は、1876年4月になってブルガリアに飛び火したが直ちに鎮圧され、逆にトルコ人とトルコ国内のチェルケス人による大規模なブルガリア人虐殺という悲しい結果を招いてしまう4。この時トルコ政府にブルガリア蜂起の鎮圧を助言したのはコンスタンチノープルに駐在していたイギリス大使ヘンリー・エリオットであったという5。

軍制改革に着手したばかりのロシアにとって、イギリスやオーストリアと事を構える事態を招くトルコとの新たな戦争は好もしい選択肢ではなかった。しかし外交手段によって問題を解決しようと図るロシア政府の努力は、ロシアの影響力を弱めることに腐心するイギリスに支持されたトルコの非協力的な態度によって水泡に帰することになる。1876年5月には、ロシア、オーストリア ハンガリー、ドイツの外務大臣がベルリンで会議を開き、キリスト教徒の処遇に改善がなされればオスマン・トルコの安泰が図られるであろうとの覚書を作成し、3国の皇帝がこれにサインまでしたが、同月末トルコでクーデターが起こり、事態の平和的な解決に積極的であったトルコ王アブドゥル アジズの代わりにロシアに対して敵対的な皇帝が擁立された。このクーデターを計画したのがまたしてもエリオッ

トであり、これを機に外交手段によるロシア トルコ間の話し合いは不可能なものとなったのである⁶。同年 6 月にはセルビアとモンテネグロがロシアの援助を当てにしてトルコに対する戦争を開始した。

ロシア国内では 1875 年の秋頃からスラヴの同胞を援助しようという広範な運動が広まり、義捐金が集められた(皇帝自身も 10,000 ループリを寄付したという)。およそ 5,000 人のロシア人義勇兵がセルビアに赴いた。中でも M.F.チェルニャーエフはセルビア軍の司令官としてこの戦争に参加した。これに加えて、ロシア政府は表立った戦闘行為には入らなかったものの、セルビアとモンテネグロに軍事物資を供給していた。しかしながらセルビア軍は敗れ、1876 年 8 月半ば、セルビアのミラン公は列強諸国にトルコとの調停を求めざるを得なくなった。列強諸国はトルコに対して、セルビアとの和議を結び、ブルガリア、ボスニア ヘルツェゴヴィナ、セルビアの自治権を認めるよう要求した。トルコはセルビアと和議を結んだものの自治権の承認はしなかった。そればかりか、再びイギリスの計画したクーデターにより新王が誕生し、9 月には戦闘が再開され、セルビア軍はほぼ完全に壊滅させられてしまう。12 月にはロシア、イギリスを含む列強 6 カ国の会議がコンスタンチノープルで開催されたが、ここでもイギリスが暗躍し、何の成果も得ることが出来なかった。この後、トルコ政府は、イギリスの教唆により、内政への列強の干渉を拒否する態度を取りつつもセルビア、モンテネグロとの交渉に入り、翌 1877 年 2 月末、セルビアとのみ和議を結んだ。

1877 年 1 月、ロシアはオーストリア ハンガリー帝国に合意を取り付ける。同国は中立を守る代わりにボスニア ヘルツェゴヴィナの後見役となる、というものであった。ロシアの外交官 H.II.イグナーチエフによる戦争回避の努力は最後まで続けられたものの、4 月、ロシアの主唱したバルカン半島改革案をトルコが拒絶したことによって、同月 12 日ロシア皇帝アレクサンドル 2 世はトルコへの宣戦を布告するのである。

1876年の1月から『作家の日記』を再開したドストエフスキイが最初に東方問題に言及するのは4月のことであるが、この問題についての彼の汎スラヴ主義的な、そして特異な思想が明らかになるのは同年6月の『作家の日記』第2章においてである。言うまでもなく、セルビアがモンテネグロと共にトルコに宣戦した直後のもので、この第2章の第3節は、題名も『東方問題』となっている。ここで、ドストエフスキイは思いの外正確な事実の認識から始めて自らの思弁を展開している。

セルビアのミラン公とニコライ・チェルノゴールスキイ公(モンテネグロの公 松本)は神と自らの権利に期待して皇帝に対立する立場を取った(セルビア、モンテネ グロのトルコに対する宣戦布告を指す 松本)。この文章が読まれる頃には、もしか するとそこそこの戦闘なり、あるいは決戦なりの知らせが届いているかも知れない。こ れで事態は急速に動き出すだろう。列強諸国の優柔不断さと緩慢さ、ベルリン会議での 取り決めに参加しようとしなかったイギリスの外交上の不自然な動き、そしてその後不 意に続いたコンスタンチノープルの革命とイスラム教徒の狂信的な憤激、そして最後に、トルコ騎兵とチェルケス人による、老人、女性、子供も含めた 60,000 人のブルガリアの 非戦闘員の大虐殺 こういったことのすべてが一気に戦争に火を付け、戦争を推し 進めたのである。 < 23 - 44 > 7

ブルガリア人虐殺の被害者数などに疑問は残るものの、また、飽くまでもロシア側に立った見方であるという限定をした上でのことではあるものの、ドストエフスキイが極めて正確にセルビア蜂起に至る東方問題の進展を把握していることが分かる。言うまでもなく、この引用部分に続く箇所でセルビアの勝利を間違いのないものとした彼の「予言」は外れてしまうが、三帝同盟がいまだ有効であるらしいから列強の介入はないであろう、とか、孤立したイギリスは同盟国を探しているが、果たして見付かるだろうか、といった指摘は正鵠を得ていたと言える。しかしながら、そのような正しい現状認識から出発しながら、すでにこの節の後半部分では、ドストエフスキイの思考は、ロシアを中心とした汎スラヴ的な展開を見せ始める。

セルビアは自らの力を恃んで戦争を始めた。しかしもちろんセルビアは知っているのだ。自分たちの最終的な運命が完全にロシアにかかっているのだということを。セルビアは知っている。ひとりロシアのみが大いなる不幸の際には自分たちを破滅から護ってくれると。そして、勝利の暁には、ロシアがその強力な影響力によって、セルビアが最大限の可能な利益をわが物として守ることを助けてくれると。<23-45>

本論考の最初でも見たように、セルビアに限らず、他のスラヴ諸民族にとっても、ロシアが自分たちの独立を勝ち取るための頼みの綱であったということは否めない。それゆえ、ここでもまだドストエフスキイの発言はそれほど現実離れのしたものではないと言えよう。しかし、トルコに対する勝利の後に、ロシアが何らかの権益を狙おうとするのではないか、と全ヨーロッパが疑いの目で見ているという点になると、ドストエフスキイの論調は明らかにロシアという国が歴史上負わされている特殊な役割を意識したものとなる。

ロシアは誠実に振舞うであろう これが問いに対する答えのすべてである。 (・・・)人によってはこう言うかも知れない。いずれにしてもロシアが明らかに自らの不利益になる方向に進む筈が無かろう、と。しかし、ロシアにとっての利益とは何であろう?ロシアにとっての利益とは、必要な時には、ただただ公正さを破らないというだけの目的で、明らかに自らにとって不利益な方へと、明らかに自らを犠牲にする方へと赴くということなのだ。ロシアは、数世紀にわたって伝えられて来た、そしてこれまで絶えずそれに従って来た偉大な思想を裏切ることは出来ない。ついでに言えば、この思想とはスラヴ人の全体的な統一である。しかしこの全体的な統一とは、占拠によるも

のでも強制によるものでもない。人類への完全な奉仕のためのものである。<23 - 45>

「占拠によるものでも強制によるものでもない」、「人類への完全な奉仕のための」「スラヴ人の全体的な統一」が可能であり、それはロシアにとって「不利益」で「犠牲」に等しいなどという主張が国際問題を論じる上で信用される筈も無い。しかし、ドストエフスキイはむしろ開き直ったかのように、続く第4節を『歴史のユートピア的理解』と名付けてピョートル以後のロシア史に対する彼独自の観点を披瀝する。鋭敏な国際感覚に支えられた細緻な現状認識が、このように一挙に空想的なユートピアの渇望へと変貌するところに、『作家の日記』における東方問題への言及の特徴があると言えよう。

3.『歴史のユートピア的理解』

この 1876 年 6 月の『歴史のユートピア的解釈』と題された一文は、実は東方問題に関わる 1876 年から 1877 年のドストエフスキイの発言の基調低音となっている。露土戦争が本格化した際にも、彼の議論の出発点は常にここにあったと言える。その意味でもこの文章は『作家の日記』全体における彼の政治的発言の鍵となるものだと言えよう。『歴史のユートピア的理解』の論点を纏めれば、それはほぼ次のようになる8。

ピョートル大帝以前のロシアは、他の民族においては廃れてしまった真のキリスト教、即ち正教を大切に守ってきた。しかし一方でこの伝統はヨーロッパ、あるいは全人類に対する正しくない態度を産んだ。真の信仰を有したまま、他の民族から離れてしまったからである。

ピョートル大帝の改革から 150 年の間、われわれロシアの知識層は他民族の文明、歴史、理想に触れ、これを理解しようと努めてきた。そうすることによってわれわれは視野を拡大させたのである。この視野の拡大こそがピョートルの改革の最大の功績であり、われわれが民衆の真理のもとに帰る際に携えて行くことの出来るものである。視野の拡大とは、この 150 年の間にわれわれが経験した「殆んど兄弟のような(братский)」愛情のことであり、時には自らの利益を犠牲にしてでも人類に奉仕したいという欲求であり、正しくありたい、真理を求めたいという欲求である。そしてこの愛情や奉仕の欲求こそは正教の本質であり、この教えを行動に移すための第一歩である。

ピョートルの改革を通じて、われわれは人類における自らの役割を知った。時が来たった今、われわれは全体の和解のために万民の下僕にならなければならない。これこそが人類の最終的な和解に通じる道である。

ピョートルの改革から 150 年を経た今日、政治が取るべき「第一歩」は、従って、まず「ロシアの翼の下での」スラヴ民族の統一になければならない。占領でも強制でも

なく、また個々のスラヴ民族の個性を無くしてしまうことのない統一になければならない。この目的のために、コンスタンチノープルはわれわれのものでなければならないのだ。

この論点の から が、既に 1860 年 9 月にドストエフスキイが雑誌『時代』の予約購読者を募るための広告文で展開した「土壌派」(почвенничество)の基本的主張のヴァリエーションであることは明らかであろう。この広告文でドストエフスキイはこう主張している9。ピョートル1世の西欧化政策に追随して民衆から分離してしまった教養階級はヨーロッパ人になるうと努力したが、結局はヨーロッパ人になれないことを痛感した。しかし彼らは一方で、ロシア人もまた「最高度に独自な民族」であることを自覚した。それゆえにピョートルの改革はロシアにとって無駄な経験ではなかったのである。ピョートルの改革が最終段階に入った今、ロシア人はヨーロッパとは異なる生活形式、「わが国の土壌(почва)から、民衆の精神と民衆の原理からとった形式」を作り上げて新しい生活に入らなければならない。

ピョートル大帝の改革が「西欧化」であったがために、それに追随した知識層がヨーロ ッパ人になろうとしたが、遂に成功しなかった、という些かネガティヴな解釈を、「殆んど 兄弟のような愛情」をもって人類に奉仕したいという欲求の現れであったと言い換えてい ることを除けば、およそ15年を経ても、ピョートル大帝の改革に対するドストエフスキイ の評価は殆んど変化していないと言える10。問題は、論点の にあるように、東方問題が 危機的な状況を迎え、ロシアのトルコとの新たな戦争がかなりの蓋然性をもって予測され ているこの時期を、ロシア人が自らの歴史的使命を果たすべき時であるとドストエフスキ イが捉え、その「第一歩」として、論点のにある如く、「ロシアの翼の下での」全スラヴ 民族の統一とコンスタンチノープルの獲得を規定しているという点にある。イギリスを始 めとするヨーロッパ列強の複雑な動きが、「瀕死の病人」オスマン・トルコ帝国から出来る だけ多くの権益をもぎ取ろうという点にあったことは否めないが、その意図がバルカン半 島におけるロシアの影響力拡大への危惧と表裏一体になっていたことも事実である。その ような国際情勢の中で、セルビアを始めとするトルコ領内のスラヴ系諸民族(正教徒)へ の支援に留まらず、ロシアを中心とする全スラヴ民族の統一とコンスタンチノープル獲得 を言い募るドストエフスキイの姿勢には、やはり矯激なものがあると言わねばならない。 無論、ドストエフスキイはこの主張の根拠を、あるいは正当性を説明しようとするが、そ れは今日の、とりわけ非ロシア人、非正教徒のドストエフスキイ読者をますます困惑させ るものである。

これはロシアによるスラヴ諸民族の占領に見えはしないだろうか?だがそんなことはわれわれには少しも必要ではないのだ。ならば一体何のために、いかなる道徳的な根拠があってロシアはコンスタンチノープルを求めるのか?いかなる至高の目的によっ

て、コンスタンチノープルをヨーロッパに求めることが出来るのか?他でもない、正 教の統率者としてである。正教の庇護者、擁護者としてである。これは、古のロシア の紋章の代わりにツァリグラードの(コンスタンチノープルの、即ちビザンチン帝国 松本)双頭の鷲をロシアの印として高く掲げたイヴァン 3 世の の、ということ 時からすでに定められた役割である。しかしこの役割がはっきりと疑いを容れないも のとなったのは、漸くピョートル大帝の治世後のことである。この時代にロシアは、 自らの使命を遂行する力を自覚し、すでに事実の上でも、現実的で唯一の庇護者、正 教とそれを奉じる諸民族の庇護者となったのである。まさにこの理由こそ、そして古 のツァリグラードに対するこの権利こそ、自らの独立に対して最も疑り深いスラヴ人 や、あるいは当のギリシア人にとっても納得の行く、腹の立たないものなのである。 これで、ロシアの下で他のすべての正教を信じる民族 スラヴ人であろうがギリ シア人であろうが同じことだ に生じるに違いない政治的諸関係の本質は明瞭だ ろう。ロシアは彼らの庇護者である。統率者といっても良いが支配者ではない。母で はあるが主人ではないのだ。たとえいつの日か彼らの君主になるとしても、それは彼 ら自身の主唱によってでしかなく、彼ら自身が自らの主権、個性と見なすものをすべ て保持した上でのことである。それゆえこのような同盟にならば遂にいつかは正教徒 でないヨーロッパのスラヴ人も加わるかもしれない。なぜなら彼らは、ロシアの庇護 の下での完全な統一のみが自らの独立した個性を強めることになるのであり、たとえ いつの日か自分たちが現在従属しているイスラム教徒やヨーロッパ人から政治的に独 立することが出来たとしても、この巨大な統一の力が無ければ、相互の不和や意見の 不一致で再び力を使い果たしてしまうかも知れないということを知るからである。 < 23 - 49~50. 圏点部分は原文でイタリック >

ロシアを中心とした全スラヴ民族の統一とコンスタンチノープル獲得が必要であることを説明したこの文章の後半で出てくる「統一された全体の中での個性の保持」という問題については、すでに 1863 年にドストエフスキイは『冬に記す夏の印象』の中でそれなりの根拠を与えていた。高度に発達し最高の自由に達した個性(личность)は自らのすべてを犠牲として捧げるが、真の「同胞愛」(братство)が実現した社会の中ではこの個性が保たれるという、個人と社会の関係に関する極めて抽象的な論理**1が、ここでは個々の民族とロシアを中心とする「同盟」の関係に拡大されているのだと言って良いが、本論考で重要なのはむしろ前半の部分である。ロシアの特殊な歴史的役割の根拠として、ドストエフスキイが、イヴァン3世(在位 1462 - 1506)によるビザンチン帝国の継承を挙げていることだけを取り上げて、第三ローマ理念の亜流だと笑い去ることは容易である。しかしながら、「正教の庇護者、擁護者」という役割が「ピョートル大帝の治世後」に明瞭になり、「自らの使命を遂行する力を自覚し、すでに事実の上でも、現実的で唯一の庇護者、正教とそれを奉じる諸民族の庇護者となった」という記述には、たとえそれが「ユートピア的」

であってもドストエフスキイの歴史に対する一定の観点が現れているのである。

4.露土戦争概史12

「露土戦争」という言葉は、広義では、クリミア戦争や 1877 年から 78 年の戦争をも含んだ、17 世紀に端を発する一連のロシア トルコ間の戦争を指している。言うまでもなく、ロシアにとって、これら一連の戦争は、西ヨーロッパとの交易を可能にする不凍港と地中海への出口の獲得を至上の目的としていた。その限りにおいて、ロシアの南方進出の試みは、バルカン半島一帯がオスマン・トルコ帝国の支配下に置かれる以前から既に始まっていたとも言える。

トルコとの最初の戦争は、フョードル3世の治下1676年から1681年に行なわれたもの で、終戦と共にドニエプル河に沿って北はキエフに至るまでのロシアとトルコの国境が定 められた。続く対トルコ戦争はピョートル大帝の治世、1686 年から 1700 年にわたって行 なわれたが、もっとも開戦時のピョートルはまだ権力を握っておらず、対トルコの戦争に 踏み切ったのは、実質上、摂政を務めていたソーフィヤ皇女である。1570年代からオスマ ン・トルコの属国となっていたクリミア汗国に対して、ロシアはこの時代になってもなお **貢物を納めていたが、それにも拘らずクリミア汗国は度々ロシアとの国境を越えて侵略を** 繰り返し、宗主国たるオスマン・トルコのスルタンがこれを制止しようとしなかった13こ とが、かねてからロシアのトルコに対する敵意を煽っていた。オスマン・トルコの侵略に 対してオーストリアやヴェネツィアが攻勢に転じたことを好機として、ロシアもまた長年 の守勢から攻勢に転じたのである。他のヨーロッパ列強がオスマン・トルコ帝国の侵略に 対して合同して反撃した戦争の一部として位置付けられるという点に、この戦争の特徴が あると言えよう。1689年のソーフィヤ皇女の失脚とピョートルの実質的な政権掌握という 政変の後もクリミア半島、アゾフ海への遠征は続けられ、1700年7月3日にロシアとトル コはコンスタンチノープル講和条約を結ぶこととなる。この条約の眼目は、何よりもアゾ フ海への出口としてのアゾフ要塞の獲得という点にあったが、スウェーデンとの北方戦争 に起因する 1711 年から 13 年の戦争では、ピョートル大帝はプルート河の遠征に失敗し、 このアゾフと自慢のアゾフ艦隊を失うことになる。ピョートルの歴史的功績に対して常に 懐疑的なシロコラドはこう書いている。「ピョートル大帝はスウェーデンに対しては一連の 勝利を収め、また北方では「ヨーロッパへの窓」を穿ちはしたが、南方では彼の企図は悉く 失敗に終わった。ロシアは黒海への出口を得られなかったばかりか、ザポロージェ軍の土 地まで失ったのである14」ここで強調しておかなければならないのは、トルコとの力関係で 言えば、ピョートル大帝の治世は劣勢のままに終わっているということであり、このこと はドストエフスキイの、ロシアの特殊な役割が明瞭になったのは「ピョートル大帝の治世 後」であるという言葉と奇妙な一致を見せているということである。それならば、これも 「ピョートル大帝の治世後」のことである、ロシアが「自らの使命を遂行する力を自覚し、

すでに事実の上でも、現実的で唯一の庇護者、正教とそれを奉じる諸民族の庇護者となった」というドストエフスキイの言葉は、具体的には何を指しているのであろうか。

ピョートルの失敗によってこの時トルコに奪回されたアゾフ要塞は、アンナ女帝の治世に起きた露土戦争(1735 - 1739)で再びロシアのものとなった。これに先立つポーランドの王位継承問題によるトルコとの軋轢¹⁵やクリミアのタタール人の度重なるウクライナ侵略をこの戦争の原因として数えることが出来るが、ロシアの最大の目的は黒海への出口の獲得、より具体的には、ピョートル時代に失ったアゾフの奪還にあった¹⁶。ロシア軍は 1736年 5 月末にペレコプ要塞を、6 月半ばにはアゾフ要塞を占領してついにクリミア半島へと兵を進め、クリミア汗国の首都バフチサライを占領したが、その後も戦争は終息に至らず、ロシアはトルコの要塞を次々と獲得していったものの、1739年にはもはやこの戦いを継続する力を失っていた。1739年9月29日、ロシア政府はトルコとベオグラード講和条約を結んだ。この条約で定められた条件はロシアにとって決して有利なものではなかった。ピョートル大帝が失ったアゾフ要塞を取り戻したことだけが唯一の戦果であったと言える。

オスマン・トルコ帝国に対する関係で、ロシアが遥かに優勢に立つことになるのは、エカテリーナ2世の治世(1762 - 1796)からである。この女帝の時代には2度にわたってトルコとの戦争が行なわれている。1度目は1768年から1774年にかけての対トルコ戦争で、黒海沿岸、カフカス、アストラハンに対するトルコの侵略行為の他に、ポーランドでの影響力をめぐるロシアとフランスの敵対に端を発している。この頃からすでに国力の衰えを見せていたオスマン帝国はフランスだけでなくオーストリアの支持も当てにしていたが、ロシア軍は水陸の二つの戦場で目覚しい戦果を挙げ、特に1774年にスヴォーロフ将軍が24,000人の兵力で40,000人のトルコ軍を撃破してからは講和を急がざるを得ない状態にトルコを追い込んだ。1774年7月10日、ブルガリアのキュチュク カイナルジャで締結された条約で、ロシアはドニエプル河口と南ブーグ河口間の黒海沿岸地域、キンブルン、ケルチを始めとする6つの要塞を得た。クリミアはオスマン・トルコからの独立を認められ、モルドヴァとヴァラキアはロシアの庇護下に入ることとなった。このことは、アゾフ海のみならず、黒海の北岸地域全般におけるロシアの影響力増強を意味している。ロシア帝国の悲願ともいえた黒海への進出が可能になり、地中海に出るためには、依然としてトルコ領であるボスポラス海峡、マルマラ海、ダーダネルス海峡を通過しさえすれば良かった。

しかしながら本論考にとって重要な意味を持つのは、単にロシアの領土拡張のみではない。問題は、この時以来ロシアがオスマン・トルコの内政に容喙する大義名分を得たという点にある。R.J.クランプトンはこう述べている。「キュチュク・カイナルジャ条約で、商業上の条項にも増して重要なのは、コンスタンチノープルにロシア正教会を建築する許可が与えられたことだった。これにより、ロシアの統治者は、オスマン帝国内のロシア正教徒を保護する権利を、事実上、手にすることになったのである。こうした流れから、19世紀のヨーロッパ諸国を悩ませた「東方問題」が発生し、その中で、新たに国際社会に現れたブルガリア民族とブルガリアの国家が、重要な鍵を握ることになる17」

まさにドストエフスキイが記したように、ロシアは「ピョートル大帝の治世後」に「事実の上でも、現実的で唯一の庇護者、正教とそれを奉じる諸民族の庇護者」となったのであり、一見熱に浮かされたようなドストエフスキイの言葉が、実は正確に歴史の流れを押さえた上でのものであることが分かる。そうだとすれば、1876年におけるドストエフスキイの、第三ローマの鼓吹者のような発言もまた、それなりの歴史的事実に根ざしたものではないだろうか。

同じくエカテリーナ 2 世の時代に起きた続く 1787 年から 1791 年の対トルコ戦争は、オスマン・トルコの雪辱戦のような意味合いを持つが、実際にはロシアの影響力が高まることを危惧したイギリス、フランス、プロシアの教唆にトルコが踊らされたとも言える。この戦争においても、エカテリーナのロシアはスヴォーロフ将軍の機敏な軍事行動によって勝利を収め、1791 年 12 月のヤシ講和条約でロシアとトルコの国境がドニエストル河に定められ、クリミアはロシアに併合された。また、グルジアがロシアの庇護下に入ることも認められたが、西欧列強の危惧を慮って、ベッサラビア、モルドヴァ、ヴァラキアはトルコに返還せざるを得なかった。

こうして、数次にわたるロシアとオスマン・トルコの衝突は、ロシア側の圧倒的な優位 の内に19世紀へと舞台を移していくが、既にエカテリーナ時代に垣間見られたように、「露 土戦争」は、トルコ及びクリミア汗国の侵略とロシアの黒海進出という意図の鬩ぎ合いとい った単純な構図から、オスマン帝国の弱体化に付け込んでバルカン半島での権益を手に入 れようとするヨーロッパ列強の国際的軋轢とロシアの南進政策の衝突、更にオスマン帝国 内のキリスト教諸民族の解放運動といった多面的で複雑な性格を帯びたものに変容してい く。アレクサンドル1世の治世に、ロシアの対仏戦争、対イラン戦争に乗じて雪辱を果た そうとしたトルコの宣戦布告によって勃発し、ベッサラビアのロシアへの併合(ブカレス ト講和条約)が決定された1806年から1812年の戦争では、「露土戦争」のそのような性格 の変化は露わになっていないが、この時の講和条件としてセルビアの自治が挙げられてい ることに注意しなければならない。実際にはトルコは、ナポレオンのロシア侵攻による混 乱を利用して、ウィーン会議(1814‐1815)の終了後もセルビア自治を実現しようとしな かったばかりかロシアによって獲得されたカフカスの要塞の返還を求めさえした。トルコ のこの態度は、ロシアの勢力伸張を望まないオーストリアとフランスの支持を当てにした ものであり、続く 1828 年から 1829 年の戦争の遠因となった。そしてこの戦争では、オス マン帝国の衰退、ロシアをも含めたヨーロッパ列強の利権争い、オスマン帝国内のキリス ト教徒救済という3つの要素を明瞭に見て取ることが出来る。

この時の戦争の直接の原因は 1821 年に始まったギリシア解放戦争にあった。オスマン帝国は自領内のギリシアの独立を阻止しようとした。ギリシアの正教徒に対する虐殺行為にアレクサンドル1世のロシアは強く反発したが、他のヨーロッパ列強はバルカン半島におけるロシアの勢力が強まることを心配して、最初の内は静観の姿勢をとった。1826 年、ロシアの新帝ニコライ1世が、単独でのトルコに対する軍事行動を宣言するや事態は一転し、

イギリスとフランスもギリシアの独立を支援する側に回り、1827 年 10 月のナバリノの海 戦でトルコとエジプトの連合艦隊を壊滅させた。しかしながら、オスマン・トルコはなお ギリシアの独立を認めようとはしなかった。長年の宿敵であるロシアと他の同盟国との間 に亀裂の生じることを期待したからである。この結果、ロシアは、列強諸国に戦争への不 介入を約束させた上で、単独でトルコと戦うことになった。戦争の開始は1828年4月のこ とであったが、既に9月にはロシアは黒海西岸のヴァルナ要塞、翌年の夏にはシリストラ 要塞、アドリアノープルを占領し、コンスタンチノープル近郊に迫る勢いを見せた。カフ カス戦線においても、1828 年夏にはカルス、アルダガン、バヤゼトの3 要塞を陥落させ、 翌年6月にはエルズルウムを手中に収めるという華々しい戦果を挙げた。1829年9月、ト ルコ側の提案を受け容れる形でアドリアノープル条約が結ばれ、ロシアはドナウ河河口地 帯、東アルメニア、カフカスの黒海沿岸地域を領有することとなった。大雑把な言い方を すれば黒海周辺地域の北半分は、これでロシアのものとなったわけだが、それだけでなく、 この時の条約では、ロシア商船のボスポラス、ダーダネルス海峡の自由通行が認められて いる。また、本来のこの戦争の原因であった民族問題に関して言えば、ギリシアは完全な 自治権を勝ち取り、2年後には独立国家となった。セルビア、ヴァラキア、モルドヴァも 自治権を得た18。

この戦争によってバルカン半島におけるロシアの優位はほぼ決定したかに見えた。この優位は、単に地勢上の問題ではなく、バルカン半島のキリスト教民族にとって、恰もロシアが救済者であるかのような位置についたことによっても保たれていた。ナポレオン後のヨーロッパで、徹底した反革命的姿勢を貫き、「ヨーロッパの憲兵」を自負したニコライ1世は、国内でも国外でも「キリスト教(正教会)の擁護者」として振舞うことになる。そのニコライ1世を絶望させ、ついには死に至るほどの心労を与えたのが1853年に始まるクリミア戦争でのロシアの敗北であった。注意しなければならないのは、ペトラシェフスキイ事件で逮捕され、オムスクの要塞監獄で世間と全く隔絶された4年間を過ごしたドストエフスキイが、刑期を満了し、シベリア独立軍部隊に編入された時(1854年3月2日)このクリミア戦争はすでに始まっていたということである。

5. クリミア戦争とドストエフスキイ

19世紀の半ばに至るとオスマン・トルコ帝国はもはやその巨大な版図をコントロールする力を失い、計算高いヨーロッパ列強はこの「瀕死の病人」から少しでも多くの権益を得ようと虎視眈々としていた。特にギリシア解放戦争での勝利に勢い付いていたロシア政府は、自然な成り行きとしてコンスタンチノープルとボスポラス、ダーダネルス海峡の領有を望んでいた19。前者はビザンチン帝国からギリシア正教と双頭の鷲の紋章を継承し、第三のローマを自負するロシア帝国にとって、すべての正教徒を糾合するための象徴的役割を持っていた。後者は言うまでもなく地中海への出口確保と黒海の支配を完全なものにするた

めの地勢的な判断によるものである。イギリスとフランスもまたそれぞれの思惑を持って いた。そこに生じたのが、パレスチナの聖地管理権をめぐるギリシア正教徒とカトリック 教徒の紛争である。当時エルサレムはオスマン・トルコ領内にあったものの正教徒による 管理が為されていたが、1852 年にフランスに帝政を復活させたナポレオン 3 世は、カピキ ュレーションを盾にカトリック教徒による聖地管理を認めるようトルコに強要した。正教 会の擁護者ロシアもまたトルコに正教徒保護を要求し、両国の緊張が一挙に高まった20。 ニコライ1世の誤算は、イギリス、オーストリア、プロシアの支持を当てにしたことにあ った。イギリスは先に述べたような思惑からかつてのライバル国フランスに接近した。オ ーストリアとプロシアは、1848年のヨーロッパ革命時に「ヨーロッパの憲兵」ニコライ1世 の助力を得たにも拘らず、中立的立場を取った。イギリス、フランスの支持を得たトルコ はロシアに対する態度を硬化させ、1853 年 10 月に宣戦を布告した。緒戦におけるロシア 軍の優勢を見たイギリスとフランスは、翌1854年4月に正式にロシアに対して宣戦を布告 した(1855年には、サルデーニヤも参戦)。これでロシアは孤立無援の状態に置かれたの である。イギリスとフランスが参戦してからのロシア軍の戦闘状況は無残と言えた。ロシ ア兵が施条の切っていない銃を使用しているのに対し、イギリス・フランス連合軍の兵は 射程距離が2倍も長い施条を切ったカービン銃を使用していた。ロシア艦隊が帆船を使用 しているのに対して、イギリスとフランスは汽船を用いていた。兵器の技術革新という点 においても、ロシアの後進性は明らかであった。加えて鉄道の整備も遅れていたロシアは、 兵站輸送の面でも困難に直面しなければならなかった。戦局は連合軍側の圧倒的優位の内 に進み、クリミアにおけるロシアの最大の軍事拠点セヴァストーポリの攻防戦へと収斂し て行った。敵の艦船が要塞に近付くのを防ぐために自軍の帆船を海に沈める等の絶望的な 努力の甲斐も無く、11ヶ月にわたるセヴァストーポリの攻防は 1855 年 8 月末の連合軍に よる要塞総攻撃を最後に終息する。ニコライ1世はその半年前に病死していた。同年末に はオーストリアも参戦の意思を示すという状況の中で、ロシアはもはや財政的にもこの戦 争を継続する力を失っていた。

父帝ニコライの没後帝位に即いたアレクサンドル2世の治世はクリミア戦争の後始末から始まったと言える。1856年パリ条約が締結されたが、その内容はこれまでオスマン・トルコ帝国を相手にロシアが勝ち取ってきたものを一挙に失うようなものだった。カルス、アルダガンと引き換えにセヴァストーポリを改めて自国の要塞として所有することが許され、またトルコへの領土割譲はベッサラビア南部、ドナウ河河口地帯のみに留まったものの、何よりもロシアにとって痛手であったのは黒海が中立地域とされたことであった。ロシアはもはや黒海に軍艦を保有することも、黒海沿岸に基地を建設することも出来なくなった。これは、ロシアの南下政策が暗礁に乗り上げたことだけではなく、ロシアが、いわば南の護りを失ったということを意味していた。また、この時ロシアは、先の戦争の結果として自治権を得たセルビア、ヴァラキア、モルドヴァに対する、ヨーロッパ列強の保護を承認しなければならなかった。これはロシアが「正教の擁護者」としての務めを十全に果

たせなくなったことを意味している。再びドストエフスキイの言葉を用いれば、ロシアは その歴史的使命にも拘らず「正教とそれを奉じる諸民族」の「現実的で唯一の庇護者」で なくなってしまったということになる。

クリミア戦争における敗北は、ロシアに自国の後進性を痛感させ、農奴制の廃止を始めとする「大改革」に踏み切らせた、というのがロシア史の通説になっているが、これは、いわば後から付けたポジティヴな説明であると言えるだろう。ロシアの南下政策とトルコ領における利権獲得という戦争の本質的な意義とは別に、聖地エルサレムやビザンチン帝国の首都コンスタンチノープルを不当に占領し、国内のスラヴ系キリスト教徒(正教徒)を弾圧している「異教徒」の帝国に対して、一進一退を繰り返した時期はあったとしても、常に勇敢に戦い、その勢力を伸張させて来た祖国ロシアが、一挙にトルコに対する優位を失ったという事実は、素朴な愛国者にとっては衝撃的なことであった。特にクリミア戦争を「聖戦」と捉え、「スラヴ諸民族におけるロシアの指導的役割」を旗印にしていたスラヴ派21の落胆は激しかったと想像される。

クリミア戦争後、オスマン帝国内のスラヴ民族に対する弾圧はむしろ過酷さを増したが、それに対する諸民族の反発と独立を求める動きも強まっていった。改革に忙しく、またパリ条約によってトルコの内政に干渉出来ないロシアの国内でも、トルコ領内のスラヴ同胞を援助しようという気分が醸成されていった。事はスラヴ派だけに留まらず、A.M.ゲルツェンやH.II.オガリョフまでが「スラヴ民族の解放は歴史の必然」であり、それは「ロシアの援助によってのみ成し遂げることが出来る」と考えたという²²。このように、屈辱的とも言えるクリミア戦争の敗北以後、トルコへの敵対心とトルコ内のスラヴ諸民族への同情は、当時のロシア知識層の右派も左派も含めたメンタリティーとして、1870年代まで持ち越されていくのである。そしてそのメンタリティーを多分に、しかしやや変わった形で持っていたのがドストエフスキイである。

空想的社会主義サークルの一員として逮捕されながらも、クリミア戦争時のドストエフスキイにはすでに後年の汎スラヴ主義的発言を予測させるような言動があった。1854年4月、イギリスとフランスがロシアに宣戦布告した際に彼が作った詩『1854年のヨーロッパ事件に寄せて』は後に作られた『1855年7月1日に寄せて』と『戴冠式と講和条約締結に寄せて』と共に、ドストエフスキイが士官昇任、ヨーロッパ・ロシアへの帰還、作品の印刷許可などを早めるためだけに書いた、いわば「奴隷の詩」だと見なされている。しかしながら、後者二篇はともかく、ロシアの勝利が信じられていた時期に書かれた『1854年のヨーロッパ事件に寄せて』だけは、一概に阿諛追従のためだけの詩だと言えないところがある。トルコに肩入れしてロシアに宣戦したイギリスとフランスを信仰を失った民族と決め付け、「われらは信じる、神はわれらの上にいますと」<2-403>と言い切るところなどはこのような戦争詩の常套であると言えようが、「ロシアの運命は君らの知るところではない!/君らにロシアの使命は分からない!/東方はロシアのものだ!ロシアに手を伸ばすことは/過ぎ去った無数の世代が許さない。/アジアの奥深くを支配すれば/ロシアはす

べてに若い命を与え、/ 古き東方の再生は/ ロシアによって訪れる(神がそう命じたもうたのだ!)」<2-405>といった言葉を含むこの詩を、それが書かれた時の状況だけを理由に無視することは出来ない²³。興味深いことに、ドストエフスキイがこの詩を書いたのと同じ 1854 年 4 月に、ペトラシェフスキイ事件に関る頃からのドストエフスキイの親友であった詩人のアポロン・マイコフが『クレルモンの公会議』と題する詩を雑誌『祖国雑記』(当時は保守派の雑誌であった)に発表している(執筆は 1853 年)、イスラム教徒討伐のための十字軍派遣が決定された 1095 年の公会議を扱ったこの詩は、言うまでもなく、キリスト教国である筈のイギリスとフランスを味方に付けたオスマン・トルコとのクリミア戦争を肯定的に受け止め、むしろ賞賛するものであった。この詩を編集部に送る際の書簡で、マイコフはこう書いている。「どのような形で終わるにせよ、現在の戦争は、ロシアの全国民を結束させたその熱意によって長く記憶に留まることでしょう。今こそはわれわれの生活における真に民主的な瞬間なのです。奇妙なことに、わが国の民主主義者だけがそれを感じることが出来ないのですが²⁴」

当時まだセミパラチンスクにいたドストエフスキイが、首都にある友人のこの詩をいつ 読んだのかは定かではない。しかし『クレルモンの公会議』が雑誌に発表されてからおよそ2年を経た1856年1月18日に、彼はマイコフに手紙を書いている。シベリアに送られてから初めてこの友人に宛てた実に8年ぶりの手紙であった。この手紙の中で、ドストエフスキイは『クレルモンの公会議』に言及している。

あなたの詩(これは『クレルモンの公会議』以外の詩も含めている 松本)を読んで素晴らしいものだと思いました。スラヴ諸民族の精神的解放というあなたの愛国的な感情は完全に私のものでもあります。これはロシアの役割なのです、高潔で偉大なロシアの、聖なるわれらが母の役割なのです。あなたの『クレルモンの公会議』の最後の部分、最後の数行は何と優れていることでしょう!このような大きい思想をこのように壮麗に表し得る言葉を、あなたはどこから取ってきたのです?そうです!ヨーロッパとその役割を終わらせるのはロシアだというあなたの思想に私は同意します。これは私には前からはっきりとしていたことです。<28,кн.1-208>

私信の中とはいえ、「スラヴ諸民族の精神的解放」、「高潔で偉大なロシアの役割」というドストエフスキイの言葉に、後の彼の汎スラヴ的発言の淵源を求めることは決して不可能なことではないであるう。「ヨーロッパとその役割を終わらせるのはロシアだ」という思想はマイコフの詩の終わりの方で、現在の西欧がロシアに敵対する理由のひとつとして明確に記されているが、それが「前からはっきりしていた」とすれば、ドストエフスキイのロシア中心の世界観には根深いものがあると考えられる。いずれにせよ、クリミア戦争の敗色が濃くなっていた 1856 年初頭に書かれた手紙であることを考えあわせてみても、この時のドストエフスキイの言葉が戦争に煽り立てられた一過性のものである可能性は低い。マ

イコフ宛ての手紙とほぼ並行して書かれた、1856 年 1 月 $13 \sim 18$ 日付の兄ミハイル宛ての手紙で「ロシアについての愛国的な論文 25 」を書く予定だと彼が伝えている < 28, κ H.1 - 205 > ことも、マイコフに向けた言葉の信憑性を傍証するものだと言える。

ドストエフスキイが褒め称えた『クレルモンの公会議』の「最後の数行」は次のような ものであった。

> あるいは敵どもは予見しているのかも知れぬ、 氷に鎖されたロシアから、 まだ見たこともない巨人の世代が現れて 彼らを脅かすであろうと。 不死と栄誉と善を あくことなく求める巨人、 ピョートルの恐ろしい姿の内に かつて彼らの世界がみとめた巨人の世代が²⁶。

1877 年の露土戦争の勃発は、ドストエフスキイからすれば、このような「巨人」が敵を 脅かす時代の到来を告げるものと思われたのかも知れない。

(2006.12.6.)

注

- 1) ドストエフスキイの評論活動における発言が、メレシュコフスキイとメラー ファン デン ブルックという媒介者を経てナチズムに影響を与えた可能性については次の拙論を参照されたい。松本賢一「ワイマール期ドイツにおけるドストエフスキイ流行の一側面メラー ファン デン ブルックとドストエフスキイ」『両大戦間のドイツにおけるゲルマンとスラブの文化接触とその歴史的意義』(平成15年度~平成17年度科学研究費補助金研究成果報告書)所収。
- 2) ここで「病」という言葉を用いたのは筆者の恣意によるものではない。ロシアにおける象徴主義の勃興後、ドストエフスキイを「預言者」のごとく讚仰する風潮の中で、ドストエフスキイの才能と仕事に満腔の尊敬を抱きながらも冷静で批判的な視点を失わなかったベルヂャーエフは、『ドストエフスキイの世界観』の第7章「ロシア」の中で「彼の内にはわが国の民族的な自意識のあらゆる二律背反とあらゆる病が反映した」と記している。Н.Бердяев. Миросозерцание Достоевского, М., 2006, С.132.
- 3) Nicholas V. Riasanovsky. A History of Russia (4-th edition), Oxford University Press, 1984, pp.386-387.
- 4) この虐殺は民間人に対しても行なわれた。「30,000 人以上の民間人が殺害され」、「数百名 の若い女性、娘たちがハーレムに連行されたり東方の奴隷市場で売られたり」し、「1,200 を超えるブルガリア人が投獄され、膨大な数の男たちが」徒刑労働に追いやられたという。

- В.М.Хевролина. Россия и Болгария: «Вопрос славянский русский вопрос», в кн. «Россия и Болгария», М., 2003, С.9.
- 5) Н.В.Скрицкий. Балканский гамбит. Неизвестная война 1877 1878 гг., М., 2006., С.10.
- 6) Там же, С.16-17.
- 7) ドストエフスキイからの引用はすべて Ф.М.Достоевский. Полное собрание сочинений в 30-ти тт., Ленинград,1972-1990.によっている。煩雑を避けるために本文では < >内に 巻数と頁数のみ示した。
- 8) Ф.М.Достоевский. Полное собрание сочинений в 30-ти тт., Т.23,С.46-48.の記述によった。
- 9) Там же, Т.18, С.35-39.
- 10) 実を言えば、民衆的原理から乖離した筈の知識層の中に、なお正教の本質が存在していたという点に、この 15 年間のドストエフスキイの思想展開の大きな弱点があるのだが、ここでは問わない。
- 11) この問題については、次の拙論を参照されたい。松本賢一「『冬に記す夏の印象』における個と全体の関係について」『むうざ』第 22 号 (ロシア・ソヴェート文学研究会、2003 年 12 月) 4 17 頁。
- 12) この節の執筆に当たっては、本文中、および他の注釈で触れた文献の他に Большая советская энциклопедия. や現在ロシア連邦で使用されている歴史教科書を適宜参照したが、煩雑を避けるためその都度典拠を示すことはしていない。
- 13) Широкорад, А.Б. Тысячелетняя битва за Царьград. М., 2005, С.95.
- 14) Там же, С.95.
- 15) ロシアはアウグスト2世の息子アウグスト3世を次のポーランド王として支持していたが、フランスによる擁護を期待したポーランドのセイム(階層代表者からなる議会)はこれを斥けて先王の義父スタニスワフ・レシチンスキを選出した。ロシアはポーランド領に B.K. ミーニッヒを司令官とする軍隊を送り込み、アウグストの即位を強行した。トルコはフランスと共にレシチンスキを次のポーランド王として推していた。
- 16) このことを最もよく示しているのは、ポーランド王位継承戦争の戦火もまだ収まらない 1735 年 7 月の段階で、ポーランド駐留ロシア軍の司令官 B.K.ミーニッヒにアゾフ要塞包囲 の密命が下っていたという事実であろう。Cm. IIIирокорад, C.118.
- 17) R.J.クランプトン『ブルガリアの歴史』(高田有現、久原寛子訳)、創土社、2004年、72頁。
- 18) この戦争で明らかになったのは、もはや単独ではロシアに抗し切れないほど疲弊したオスマン・トルコ帝国の国力と、それを裏で操作しようとするイギリスの意図である。イギリスはアドリアノープル条約の締結時にも、条件がロシアにとって不利になるよう画策したが、これはオスマン・トルコ帝国を言わばロシアに対する盾として利用しようというイギリスの思惑の現われでもあった。デニス・ヒュップチックはこう書いている。「ヨーロッパの二大列強である英国とロシアの利益衝突が東方問題の根底にある。(・・・)英国はそもそもフランスを近隣の主たる敵と見ていたが、ナポレオン戦争における敗北後、インドルートに対するフランスの脅威は弱まっていた。(・・・)1830 年代までに英国は、東地中海における戦略的緩衝国としてオスマン帝国を支持することこそが、増大するロシアの潜在的脅威からインドへの海上ルートを守る唯一現実的な防衛手段であると確信するようになっていた」Denis P. Hupchick. The Balkans from Constantinople to Communism. Palgrave. 2002. pp.248-249.
- 19) ニコライ 1 世自身はこれ以上のバルカン半島への進出も両海峡の領有も「ロシアの国際的な状況を悪化させ、国内の結束を緩めるだけだ」と考えていた、という説もある。См. Леонид Выскочив. Николай (Жизнь замечательных людей), М., 2006, С.404.

- 20) 聖地問題を抜きにしても、ニコライ1世には成り上がり者のナポレオン3世に対する抜き難い嫌悪感があったという。ナポレオン3世がフランス皇帝に即位したことを「ニコライは、ナポレオンと戦った列強諸国への、何よりもロシアへの挑戦と受け止め」、ナポレオン3世の方は、ニコライ1世の態度を自らへの侮辱と捉え、この恥を雪ぐためには「1812年のフランスの敗北に対する復讐戦しかない」と考えていたという。Выскочив, С.402.
- 21) В.М.Хевролина, С.7.
- 22) Там же, С.9.
- 23) アカデミー版ドストエフスキイ全集の注釈者は、「ドストエフスキイが、クリミア戦争時のロシア社会が等しく経験していた愛国的興奮に囚われていた事は疑いを容れない」とした上で、極めて賢明に「また、スラヴ諸民族のトルコによる支配からの解放闘争における、ロシアの特別な役割についての信念、後に 1876 年から 1877 年に『作家の日記』において表現を得る信念が、まさにこの時期に確立したのだという推測も十分に根拠のあるものだと思われる」と付け足している。
- 24) А.Н.Майков. Сочинения в 2-х тт., М.,1984, Т.1, С.543. マイコフは戦争に否定的な「民主主義者」を皮肉っている訳だが、この詩が発表された当初には Н.Г.チェルヌィシェフスキイも高く評価したという。
- 25) この「ロシアについての愛国的な論文」は現存していない。1856 年 4 月 13 日付のヴランゲリ宛て書簡によれば、ドストエフスキイはこの論文を書き上げはしたものの、それは全くの「政治的パンフレット」になってしまったという。ただしドストエフスキイ自身はその出来栄えに「満足だった」という。 < 28.KH.1 205 >
- 26) А.Н.Майков. Сочинения в 2-х тт., Т.1, С.302.

石 川 達 夫

はじめに

2006年6月にセルビアとモンテネグロが分離したが、これによって旧ユーゴスラヴィアの解体は コソボ問題などがまだ残ってはいるものの ほぼ完全なものになった。この分離は、1989年の一連のいわゆる「東欧革命」後に(東ドイツと西ドイツが統一したのに対して)複数のスラヴ民族の合同国家、即ちユーゴスラヴィア、チェコスロヴァキア、ソ連が民族を単位に解体していくという過程の終局段階を示すものと考えられるが、同時に、第一次大戦後に複数のスラヴ民族が合同して国家を形成した時にはまだ生きていたスラヴ主義的なイデオロギーが衰滅したことを それは実質的には既に衰滅していたのだ 国家形態の上でもはっきりした形で示すものだと考えられる。

そしてこのことは、スラヴ学やスラヴ研究をも疑問にさらすものではないかと思われる。なぜなら、人文科学的なスラヴ学はスラヴ主義や汎スラヴ主義との密接な関係のもとに発生し発展してきたものだからであり、また社会科学的なスラヴ研究はいわゆる「西側」の資本主義国家とは異なる「東側」のスラヴ系社会主義国家の存在と密接に関係していたからである。つまり、社会主義の崩壊とスラヴ民族の合同国家の解体によって、スラヴ学やスラヴ研究はいわばバックボーンを失ってしまったのではないかと思われるのである。

本稿では、複数のスラヴ民族の合同的国家の最終的解体という事態を踏まえつつ、スラヴ系合同国家成立のイデオロギー的背景となったスラヴ主義や汎スラヴ主義を振り返って整理し、同時にスラヴ学やスラヴ研究とスラヴ主義や汎スラヴ主義との関係についても見て、今日のスラヴ学やスラヴ研究が置かれている状況についても考察してみたい。

1.スラヴ主義の分類

初めからスラヴ主義と汎スラヴ主義という言葉を無規定のまま用いたが、実はこの二つの言葉、特に汎スラヴ主義という言葉は様々な意味で用いられてきた言葉であり、地域によっても、時代によっても、主唱者によっても意味が異なる。その全貌を詳細に明らかにしようと思ったら、地域と時代と主唱者毎にどのような意味で用いられてきたかを可能な限り多くの事例に当たって具体的に見ていかねばならないであろうが、その余裕はないし

そうする意味もそれほどないと思われるので、まず大まかな類型に分類して筆者なりの定義を示しておきたい。このような類型化には単純化の危険が伴うが、その危険を意識しておけば、類型を基にして個別的な事例を位置づけたり、類型からの偏差を判定してその事例の特殊性を割り出しするために、類型は役立つものである。なお、筆者の定義は通常用いられている言葉の用法と異なる部分があることを、あらかじめ断っておく。

まず、「スラヴ主義」という言葉は、スラヴ人がチェコ人なりロシア人なりの個々の民族を越えて自らをスラヴ人として捉え、他のスラヴ民族を自分の同類と捉えて、スラヴ人どうしの連帯や協力や合同を目指す考え方と規定する。そして、この「スラヴ主義」には、図1(図と参考資料は注の後ろに掲載)の左右の楕円で示したように、大きく分けて2つのものがある。

一つは、panslavism の pan- がギリシア語で「すべて」という意味を示す言葉から来ているように、文字通りすべてのスラヴ人の連帯や協力や合同を目指すものである。もう一つは、これは筆者の造語なのだが、「複スラヴ主義」ないし「限定的スラヴ主義」と呼びうるもので、すべてではなくて限定された複数のスラヴ民族の連帯や協力や合同を目指すものである。

汎スラヴ主義には、図1の括弧の内に小さな字で書いてあるように、文化的汎スラヴ主義と政治的汎スラヴ主義がある。文化的汎スラヴ主義は主として西スラヴ人が「スラヴ相互交流」という言葉で示したように文化交流を求めるものであり、政治的汎スラヴ主義は主としてロシア人と南スラヴ人が唱えた、政治的な統合を求めるものである。

そして汎スラヴ主義には、六角形で示したように非ロシア人のものとロシア人のものがあり、前者は非ロシア人がロシアに親近感をもってロシアを含めたすべてのスラヴ人の連帯を求めるものであり、親ロシア主義的な汎スラヴ主義である。また後者はロシア人がすべてのスラヴ人の合同を求めるものであり、これは大抵の場合ロシアを他のスラヴ世界にまで拡張してロシアをより強大にしようという大ロシア主義的な汎スラヴ主義である。

さて、スラヴ主義のもう一方は、図の右側にある「複スラヴ主義」ないし「限定的スラヴ主義」であり、これは先ほど述べたように、すべてではなくて限定された複数のスラヴ民族の連帯や協力や合同を目指す考え方である。限定ということは、裏を返せば除外ということであり、これは特にロシア人かポーランド人を除外するものである。

非ロシア人の複スラヴ主義は、図の六角形で示したように反ロシア主義的であり、当時 非民主主義的で非自由主義的な専制国家であったロシアを除外しようとするものである。 場合によっては、ロシアという国家に反対するだけでなく、ロシア人そのものを、タター ル人などのアジア人などと混血した、純粋なスラヴ人ではないとさえ主張する。

他方ロシア人の複スラヴ主義は、下の六角形で示したように、正教の信仰を基盤とするので正教スラヴ主義とも言える反カトリック主義的なものであり、とりわけ反ポーランド主義的である。ロシアの汎スラヴ主義のバイブルとして有名なダニレーフスキーの『ロシアとヨーロッパ』(1869年)の中では、ポーランドは、スラヴでありながらも西欧化しよ

うとして自己を台無しにした醜悪な雑種文化だと断罪されている¹⁾。

複スラヴ主義の中には、小さな楕円で示したように、ハプスブルク帝国内のスラヴ人に限定した団結を求める、主に西スラヴ人が唱えた「オーストリア・スラヴ主義」があり、これは基本的に反ロシア主義的なものである。チェコスロヴァキア主義は、このオーストリア・スラヴ主義と親類関係にあると考えられる。また、南スラヴ人が自分たちを古代イリリア人の末裔と捉えて南スラヴ人の連帯を求めたイリリア主義があり、ユーゴスラヴィア主義はこのイリリア主義と親類関係にあると考えられる。

以上おおまかな分類をしたが、これ以外にスラヴ主義に関係するものとして、まず左下の四角で示したように、ロシアのいわゆる「スラヴ派」の思想がある。これは「スラヴ派」と呼ばれ、古代スラヴにまでロシア人のルーツを求めようとするが、基本的にはロシア主義であり、同時代の他のスラヴ人のことはほとんど問題にしなかったと考えられる。

それから、右上の四角に示したように、ポーランド人こそがそのカトリシズムと共に世界を救い、スラヴ世界のリーダーになるのだという、ポーランド人のメシアニズムがある。また、複スラヴ主義から更に民族主義の方向に進んだチェコ主義がある。これは、チェコ人が自らをスラヴ人と言わずにあえてチェコ人と言うというように民族的アイデンティティを宣言したものであり、各スラヴ民族はその後それぞれこのような民族主義の方向に進んだものと考えられる。

2. 汎スラヴ主義の起原と展開

以上おおまかな分類を見た上で、次に汎スラヴ主義の起原と展開を、特に西スラヴ人を中心にざっと追ってみたい。

その前にまず、panslavismという言葉自体について確認しておくと、この言葉は、スロヴァキアの著作家ヤーン・ヘルケリ (Ján Herkel') が 1826 年にラテン語で書いたスロヴァキア語文法の中で初めて用いた言葉であり、それはスラヴの文学的一体性を表す概念だった。そして、この言葉をポーランドのスラヴ学者サムエル・リンデ (Samuel Linde) ($1771 \sim 1849$) が受け入れて、自分が編纂したポーランド語辞典 ($1807 \sim 14, 1854 \sim 1860^2$) の中に取り入れたのだが、そこではこの言葉は全スラヴ人の統一的言語を示す概念として用いられた 2)。

さて、周知のようにスラヴ世界は大きく西スラヴ、南スラヴ、東スラヴの三つに分かれるが、汎スラヴ主義も大体この三つの地域によって分かれる。

西スラヴの汎スラヴ主義から見ていくと、西スラヴで汎スラヴ主義の思想をはっきりと 定式化したのは、スロヴァキア出身でチェコ民族再生運動に参加したヤーン・コラール (1793~1852)である。

コラールは、「スラヴ相互交流」という文化的な汎スラヴ主義を提唱した。「スラヴ相互 交流」の理念は、図2の一番下に掲げたコラールの代表的著作『(一つの)スラヴ民族の種々 の種族と方言の間の文学上の相互交流について』(ドイツ語版 1837 年、チェコ語版 1853年)(「民族」という語は単数形)という著作において全面的に定式化されているが、この中でコラールは、スラヴ人は「単一の民族」を形成するとし、それが4つの主要なグループロシア、イリリア(即ち南スラヴ)、ポーランド、チェコスロヴァキアの「種族」に分かれるとして、このそれぞれの「種族」の言葉をスラヴ語の「方言」と見なしている。そして、「スラヴの諸民族は、花と実に成長した植物がその芽と種に向かうように、再び元来の一体性に向かっている」³⁾とし、分散して文化的にも政治的にも不利な状態に置かれているスラヴの、大部分は小民族である諸民族が、自分たちを「一つの大民族」と見なし、自分たちの言語を「一つの言語」の諸方言と見なして、「互いにより緊密に結びつく」ようにという希望を述べている。

このようなコラールの思想の基礎は、既に 15 年前に出された『(一つの) スラヴ民族の美質』(1822 年)(やはり「民族」という語は単数)という著作において築かれているのだが、ここでコラールは、「ヨーロッパの現在のあらゆる諸民族の中でスラヴ民族は最も大きく最も広がっており、その数には他のいかなる民族もかなわない」とし、「我々スラヴ民族は互いにいかに離れていても、それでも皆一つの民族の兄弟姉妹である」⁴⁾としている。

このように、ロシア民族は別として、個々のスラヴ民族の「小ささ」という弱点をスラヴ全体の「大きさ」によって補い克服しようとするモチーフは、実は既にコラール以前にも、チェコで 18 世紀後半から 19 世紀前半に盛んに書かれた「チェコ語の擁護」というジャンルの著作の中に繰り返し現れているものである。そしてこのジャンルの著作の嚆矢となり模範となったのが、バロック時代のチェコの歴史家ボフスラフ・バルビーンの『チェコ語の擁護』という著作であり、この著作の中に、チェコ人である自らを一般にスラヴ人と捉えて、広く他のスラヴ民族との関係において自己を捉えようという、いわばスラヴ主義的思考というべきものが、既にはっきりと現れている。

なぜバロック時代にそのような汎スラヴ主義の先駆的思考が現れたのかを理解するため には、その前後のチェコの歴史を知らなければならないので、まずそれを概略しておく。

チェコ王国では、15世紀に宗教改革の先駆者ヤン・フスを指導者として進められた改革運動が、様々な紆余曲折を経ながら発展して、17世紀には住民の大多数がプロテスタント系になっていた。そして、1609年にルドルフ二世が発布した「信仰の自由の勅令」によって、チェコではカトリックもプロテスタント諸派も含めた完全な信仰の自由が、しかも個人のレベルで認められた。

ところが、カトリック側も、プロテスタントの宗教改革に対抗して、イエズス会が先頭に立って改革を進め、いわゆる対抗宗教改革ないし反宗教改革を推し進めて、巻き返しを図ろうとした。そしてチェコでは、カトリックがルドルフの「信仰の自由の勅令」に違反するような暴挙に出るようになった。これに抗議したプロテスタントが 1618 年にプラハで反乱を起こし、それがヨーロッパの大宗教戦争である 30 年戦争の引き金になったことは、よく知られているところである。しかしながら、チェコのプロテスタントは、30 年戦争初

期の 1620 年に、プラハ郊外のビーラー・ホラという丘で行われた戦闘で決定的な敗北を喫する。ちなみにビーラー・ホラは「白い山」という意味なので、この戦いは「白山の戦い」と訳されるが、この戦いの後、チェコでは暴力的な反宗教改革が吹き荒れ、ルドルフの「信仰の自由の勅令」が廃止されてプロテスタントの信仰が禁止され、チェコ人のプロテスタント系住民が大量に国外に追放されて激減し、彼らに代わって、チェコにやって来たカトリック系の外国人、特にドイツ人が領地や地位や特権を手にして、ドイツ化が進むことになる。

チェコ語は劣った言葉として軽蔑され、チェコ古来の伝統や習慣がないがしろにされ、外国、特にドイツの言葉と習慣が巾を利かせるようになる。このような状況に対する抗議が、チェコ国内に残ったカトリックのチェコ人からも提出された。その最も有名な著作が、チェコ人のイエズス会士の歴史家バルビーン(1621~88)がラテン語で書いた「チェコ語の擁護」という著作だったのである。この著作は「チェコ語の擁護」という通称で呼ばれるが、正式の題名は非常に長くて、次のようになっている。 「チェコ王国の、かつては幸福であったが、しかし今は不幸極まりない状態についての、それから特に、チェコにおけるチェコないしスラヴの言葉の重要さについての、またその言葉を絶滅させようとする許し難い意図について、そして、それと関連する他の事柄についての、短いが真実の論弁。高貴なお方、チェホロドのトマーシュ・ペシナ殿へ」(「論弁」はラテン語で Dissertatio、チェコ語で Rozmluva)。

ここで注意すべきなのは、「チェコないしスラヴの言葉の重要さについて」として、チェコとスラヴを並べていることである。

この著作の中では、「白山の戦い」以後のチェコ王国とチェコ語の没落の悲惨な実状と、チェコ語、一般にスラヴ語に対するドイツ人の蔑視や弾圧の実体が縷々報告され、ドイツ語が支配的になった現状に対する批判とチェコ語の擁護のための議論が堂々と展開されている。その際、バルビーンはチェコ人に限らず、スラヴ人一般を視野に入れてドイツ人と対比し、そしてチェコ語をスラヴ語という、より広いカテゴリーにおいて捉えているのである。バルビーンは、ドイツ人がスラヴ諸族を滅ぼしてきた歴史的事実、特にエルベ川からバルト海にかけて住んでいたヴェンド人に対して残酷で非人間的に振る舞った事実を具体的に挙げて、一般にスラヴ人に対するドイツ人の圧迫を非難している。

バルビーンは更に、この著作のテーマである「チェコ語の擁護」に関連して、劣等な言葉として軽蔑されて使われなくなってきてしまったチェコ語を擁護するための論拠をいるいると挙げているのだが、その論拠の一つとして、「スラヴ語の古さと広がり」と題した章において、スラヴ語は古くから存在する由緒ある言語であり、またスラヴ人の住む様々な地方の、非常に広い範囲に広がっていることを指摘している。その際バルビーンはロシアをも挙げており、このスラヴ語の広がりを、チェコ語は決して役に立たない言語ではなくて用いるに値する言語であるという論拠の一つにしているのである。ちなみに、イエズス会士であったバルビーンが、正教ロシアの宗教的相違に全く言及していないことには、留

意しておくべきであろう。

このように、バロック時代のバルビーンの「チェコ語の擁護」という著作の中に既に、 ドイツ語に対してチェコ語を擁護するためにチェコ語を一般的にスラヴ語として捉えて広 くスラヴ世界に目を向ける眼差し、いわばスラヴ主義的思考というべきものが現れている のであり、これがチェコにおける後の汎スラヴ主義の起原になったと考えられる。

ところで、バルビーンの「チェコ語の擁護」の訴えも空しく、チェコ語・チェコ文化はドイツ語・ドイツ文化に押されて没落を続け、チェコ語は上層階級にはほとんど用いられなくなり、文章語としてはほとんど死んでしまい、主として農民と下層町民の話し言葉としてのみ細々と生き長らえることになった。しかし、18世紀後半から「チェコ民族再生運動」ないし「復興運動」と呼ばれるチェコ語とチェコ文化の再生・再創造の運動が起こり、この運動の成功によって、チェコ語は高度な文化を担う文章語としても再生され、近代的なチェコ文化が形成されることになる。そして、この「チェコ民族再生運動」開始のいわば狼煙となったのが、まさにバルビーンの「チェコ語の擁護」の出版だったのである。

実は、このバルビーンの「チェコ語の擁護」という著作は、バルビーンが秘密裏に、公刊するつもりのない文章として綴ったものであり、長い間手稿のまま眠っていた。それを、バルビーンの死後約百年を経た1775年にようやく、チェコ民族再生運動最初期の啓蒙主義的歴史家フランチシェク・マルチン・ペルツル(1734~1801)が出版したのであった。そしてこれに続いて、「チェコ民族再生運動」を推進した人々は、「チェコ語の擁護」のジャンルの著作を次々と執筆し公刊していくことになる。これら多くの「チェコ語の擁護」のジャンルの著作においても、バルビーンと同じように、チェコ語の存在の正当性を示す論拠の一つとして、チェコ語が属するスラヴ語の広がりが挙げられているのである。

例えばフランチシェク・ツィリル・カムペリーク(1805~72)というチェコ人の医師で出版者は、1847年に公刊した「中傷者と敵対者からのチェコ語の擁護」(1847年)という著作の中で非常に誇張されたことを述べており、スラヴ人には60以上もの種族がいて、ヨーロッパ、アジア、アメリカに広がって地球の九分の一を成しており、スラヴの一つの主な方言を完璧に身につければ他の種族とも容易に話が通じるとし、その他の意味でも、チェコスロヴァキア語の正書法と文法の知識は重要であるとしている。ちなみに、ここでカムペリークが既に「チェコ語」ではなくて、「チェコスロヴァキア語」としていることにも留意しておきたい。

それからもう一つ、バルビーンの「チェコ語の擁護」とそれを刊行したペルツルに関連して指摘しておくべきことは、ペルツルら、チェコ民族再生運動最初期のチェコの知識人たちの著作が、ドイツの思想家ヘルダーに影響を与えていると考えられること、そしてペルツルらがバルビーンから大きな影響を受けていることを考えれば、ヘルダーはそのスラヴ人理解においてバルビーンから間接的な影響を受けているのではないかと推定されることである。

周知のように、ヘルダーはその主著『人類の歴史哲学考』(1784~91)の中でスラヴ人を

賞揚し、スラヴ人に対するドイツ人の迫害を非難し、スラヴ人の未来に期待を寄せた。そのことによってヘルダーは、スラヴ人の民族的覚醒に大きな影響を与えたと言われている。しかし実際にこの本を読んでみると、スラヴ人について叙述している部分でヘルダー自身が、スラヴ人に関する情報を得た資料の著者として「チェコ民族再生運動」最初期の知識人であるペルツル、ドブロフスキー、フォイクトの名を注の中で挙げているのである。つまり、バルビーンの「チェコ語の擁護」がペルツルら「チェコ民族再生運動」最初期の知識人たちに直接の影響を与え、彼らがヘルダーに影響を与えてそのスラヴ人像の形成を助け、その後この著名なドイツの思想家の著作の中のスラヴ人像がスラヴ世界にいわば「逆輸入」されてスラヴ人の民族的覚醒に影響を与えることになったのではないかと推定されるのである。そうだとすれば、バルビーンの「チェコ語の擁護」という著作は、バルビーンが「白山の戦い」の後のチェコ語とチェコ文化の没落への憤りと悲しみと屈辱感の中で、公刊される当てなく秘密裏に書き綴った著作であるにもかかわらず、後世のチェコのみならず、広くスラヴ世界に大きな影響を与えたことになる。

このように、18 世紀後半以降の「チェコ民族再生運動」においては、バルビーンの著作に繋がる形で、スラヴ主義的思考、更には既に汎スラヴ主義と呼べるものが現れて発展していったのだが、その代表者の1人がコラールだったわけである。

コラールの汎スラヴ主義は、彼が「文学上の相互交流」という言葉を使っていることからも分かるように文化的なものであって、明確に政治的なものではないが、既にバルビーンの事例からも分かるように、スラヴ主義的ないし汎スラヴ主義的思考においては、文化的なものと政治的なものは完全に分離できるものではなく、文化的汎スラヴ主義はチェコでやがて、ロシアの政治的な汎スラヴ主義の影響も受けながら政治的色彩を強めていく。

周知のように、ハプスブルク帝国は非常な多民族国家であった。そして、政治的・社会的にはドイツ系住民が優位にあったが、人口から言うと、個々の民族別ではドイツ系住民が一番多いものの、スラヴ系をまとめて数えればスラヴ系住民の方が遥かに多かった(後の参考資料「ハプスブルク帝国の民族構成(1910年)」参照)。そうすると、いわば自然の成り行きとして、劣位に置かれた弱小なスラヴ系住民が団結して、支配的なドイツ系住民に対抗しようという考えが生まれてくる。これが、ハプスブルク帝国で汎スラヴ主義的思想が生まれてくる大きな要因の一つになったのである。更には、ハプスブルク帝国のドイツ人が、大ドイツ主義的、あるいは汎ゲルマン主義的なイデオロギーに基づいてオーストリアとドイツとの関係を強め、場合によっては両者を結合させようと主張するようになると、それに対抗して、ハプスブルク帝国のスラヴ人が団結し、更にはスラヴの独立した大国であるロシアとの関係を強め、場合によってはロシアと結合しようと主張する、親ロシア的な汎スラヴ主義者も現れてくる。このように、ハプスブルク帝国内の汎スラヴ主義的思想は、ドイツ人に圧迫されていたスラヴ系住民、とりわけチェコ人が、一種の自己防衛の手段として生み出したという側面が強くある50。

しかし、そのような汎スラヴ主義に対しては、特にポーランド人に対するロシア政府の

抑圧とポーランド人の対ロシア反乱をきっかけにして、不信の目が向けられていくようになる。そもそも西スラヴ人とロシア人との間にはカトリシズムと正教という宗教的相違があり、それが汎スラヴ主義の成立を難しくしていたが、それ以上に大きな躓きの石であり、汎スラヴ主義のアキレス腱であったとも言えるのが、当時のロシアが政治的に非自由主義的で非民主主義的なツァーリの専制国家だったということである。ましてやポーランドとロシアは歴史的にしばしば対立し、当時は三国分割によってポーランド人はロシアにも支配されていたのだから、尚更である。ポーランド・ロマン派の詩人スウォヴァツキとクラシンスキなどは、殉教者ポーランドと、モンゴル的圧制者モスクワ・ロシアという図式を中心に据えた作品も書いており、このようなロシア像が西欧において定着して、ロシア人は人種的にもスラヴ人とモンゴル・タタール、フィン・ウゴル族との混血であって、純粋なスラヴ人ではないとする主張まで現れることになったと言われる⁶)。

また、ハプスブルク帝国には、ハプスブルク帝国よりも政治的に自由なドイツとの結合を求める、自由主義的であると同時に大ドイツ主義的なドイツ人たちがいて、特に彼らは、帝政ロシアの東洋的野蛮さを強調し、ハプスブルク帝国のスラヴ人たちがロシアとの結合に向かう動きを強く牽制した。ここで留意しなければならないのは、チェコ人など、ハプスブルク帝国内のスラヴ人は、ハプスブルク帝国の中で主張を唱え論戦を行っていたということ、つまりドイツ人を日常的な論戦相手として、少なからぬ場合ドイツ語で論戦を行っていたということである。チェコ人が汎スラヴ主義を唱えるならば、このような自由主義的なドイツ人のロシア批判に応えなければならなかった。

そこで出てきたのが、非自由主義的で非民主主義的なロシアを除外した汎スラヴ主義の思想であり、例えばフェルディナント・シルンディンゲルというチェコの評論家は、1843年にドイツ語で書いた「汎スラヴ主義」という論文において、先に触れたポーランド人のロシア人像と同様に、ロシア人は多くの種族 ドイツ人、ポーランド人、特にタタール人やカルムイク人などのアジア系の種族 との混血が進んでいるとして、ロシア人をスラヴ人から除外し、ロシア人抜きの、反ロシア的な、つまりロシアに反対する汎スラヴ主義を唱えたで。

更に明確で強い影響力を持つ思想となり、チェコの主流派の理念となったのが、有名なチェコの歴史家・政治家フランチシェク・パラツキー(1798~1876)が唱えたオーストリア・スラヴ主義である。これは、汎スラヴ主義のヴァリアントでありながら、汎スラヴ主義に対立する反ロシア主義的な思想である。1848年にドイツのフランクフルト国民議会に宛てた有名な手紙の中で、パラツキーは、オーストリア国家の枠組みを擁護する立場から、オーストリア国家の政治的理念を提示した。

パラツキーによれば、オーストリア国家の目的は、平等な権利を持つ小民族の防御同盟 たることであり、また、拡張主義的な大ロシアと大ドイツに対する効果的な均衡勢力たる ことである。だからこそ、パラツキーは、現存のハプスブルク帝国を、諸民族の同権が認 められる連邦制国家に変えて、その中で西と南のスラヴ人がチェコ人の政治的主導のもと に自然な優位を獲得し、中央ヨーロッパに大ロシアと大ドイツの間の第三勢力を形成する ことが必要不可欠だと唱えた。ここでパラツキーが「自然な優位」と言っているのは、人 口のことである。

パラツキーは、次のように述べている。ロシアの近隣には様々な小民族がいるが、 拡張主義的なロシア帝国は、近隣の諸民族にとって脅威となっている。そのうちのどの民 族も、「自分自身では、将来にわたって、東方の強大な隣人にうまく対抗することができる ほど強くはない。これらの諸民族は、緊密で堅固な絆で一つに結合された時にしか、これ に対抗しえないのである。 したがって、「オーストリア帝国の維持と保全と強化は、チェ コ民族にとってのみならず、ヨーロッパ全体にとっても、更には人類と文明そのものにと っても、大きくて重要な問題であるし、そうあらねばならない」。「もしもオーストリア国 家が既に昔から存在しているのでなかったならば、我々は、ヨーロッパの利益のために、 更には人類自体の利益のために、それが作られるように、できるだけ早く努力しなければ ならなかったであろう。もしもオーストリア帝国が多くの小国に分解してしまったならば、 「世界的なロシア帝国にとっていかに都合の良い基礎となるであろう」。 一方、「オースト リア(そしてそれ故にまたチェコ)が、民族的にドイツ帝国に結合することを要求する者 は、自殺を要求しているのであり、それにはいかなる道徳的・政治的意味もない」⁸⁾、と。 このパラツキーに非常に近い立場にありながら、汎スラヴ主義に厳しい批判を浴びせ、 チェコ人のより一層の自律性を求めたのが、カレル・ハヴリーチェク(1821~56)という チェコの詩人・政治家・ジャーナリストであった。

実はハヴリーチェク自身も、20 代の若い頃に汎スラヴ主義の熱烈な信奉者となり、ウィーンでロシアの汎スラヴ主義の代表者ポゴーヂンと知り合いになって、1843 年にポゴーヂンと共に実際にロシアに赴いたのであった。そして、ポゴーヂンと親しかったシェヴィリョーフの家の家庭教師になって約一年半をロシアで過ごし、ロシアの実状を観察し、ロシアの知識人たちを実地で知った。その結果、ハヴリーチェクはロシアの民衆は気に入ったものの、帝政ロシアの特権的な支配層と反動的な政治体制は極めて否定的に見ざるをえず、また、ロシアに行く前に接したポーランド人の貴族たちも同様だった。非常に自由主義的な思想の持主だったハヴリーチェクは、ロシアを盟主とする汎スラヴ主義の理念が非現実的で危険な幻想にすぎないと悟ったのだった。

ロシアに赴いてから一年あまりを経た 1844 年に、ハヴリーチェクはロシアからチェコの 友人に宛てて手紙を書いているのだが、この手紙の中で彼は、ロシア人とポーランド人は ハンガリー人とドイツ人よりももっとひどい敵であり、チェコの民族性にとってはより危険であること、コラールの「スラヴ相互交流」の理念全体と汎スラヴ主義に対して猛攻撃 を開始するつもりであることを書いている。

ハヴリーチェクは特に、汎スラヴ主義的理念を批判した「スラヴ人とチェコ人」という 1846 年の論文の中で、コラールが想定したような単一的な「スラヴ民族」の概念を否定し、スラヴ諸民族はヨーロッパの諸民族がそれぞれ異なるのと同じように異なるのであり、近

いのは言葉だけだとした。そして、チェコ民族の独自性と独立性を強調し、チェコ人自らの力によるチェコ民族の自律的生活の形成を求めた。更に彼は、すべてのスラヴ人を自らの支配下に置こうとするロシアの汎スラヴ主義者は同盟者にはなりえないと断じ、当時の汎スラヴ主義の非現実性と危険性を示した。そして、チェコ人は自らの小ささを克服するために他民族を当てにしてはならないこと、自分で自分を救わねばならないことを訴えた。彼はこう書いている。「我々は、子供っぽく、女々しく、人を当てにすべきだろうか?チェコ人は仕事と障害に驚かない、チェコ人は小心にならない、チェコ人は人を当てにしたりはしない」。「私は、民族的な誇りをもって、『我チェコ人なり』と言うが、『我スラヴ人なり』とは決して言わない」 9 。

ただし、ハヴリーチェクは、チェコとロシアとの結合やスラヴ連邦を原理的に拒否したわけではなかった。実は、ハヴリーチェクはまた別の所で、次のようにも言っているのである。「もしもロシアが自由な立憲制の国であったならば、オーストリアのスラヴ人は、[……]一つの大民族として、スラヴの合衆国として、[……]自らの同種人との結合を望むことができたであろう」。「しかしながらロシアは専制国家であり、我々他の自由なスラヴ人は、残念ながら、この自分の兄弟を最悪の敵として警戒せねばならない」¹⁰⁾。つまり、ハヴリーチェクにとって最大の問題であったのは、やはり当時の帝政ロシアの非自由主義的な非民主主義的な政治体制だったわけである。

しかし、1867年に「アウスグライヒ」によって、スラヴ人を無視したオーストリア=ハンガリー二重帝国が成立し、オーストリア・スラヴ主義が挫折すると、再びロシアへの期待が高まる。1867年のモスクワにおけるスラヴ会議にチェコ人を始めとしてハプスブルク帝国内の多くのスラヴ人が参加した背景には、そのような事情があった。更にはカレル・クラマーシュ(1860~1937)を代表とするネオ・スラヴ主義が出てくるが、マサリクはこれに対立し、最終的にはチェコ人とスロヴァキア人が合同でチェコスロヴァキアという国を作るチェコスロヴァキア主義に帰結した¹¹⁾。

さて、次に南スラヴの汎スラヴ主義に移ろう。実は、汎スラヴ主義的イデオロギーを最初に明確に唱えたのが、前述のバルビーンと同時代のクロアチア人で、やはリイエズス会の学校で学んだユライ・クリジャニッチ(1618~83)であった。彼はカトリックの神学者で宣教師であったが、正教のロシア人を異教徒とは見なさずに、誤って導かれたキリスト教徒と見なし、彼らを正しい方向に教え導こうと考えた。そして、東西教会の再統一を目指し、ロシアこそスラヴ人をトルコ人やドイツ人から守ることができるとして、オスマン帝国支配下の南スラヴ人の解放と全スラヴ族の統一がロシア皇帝のもとになされるべきだと考えた。実際にロシアに赴いたクリジャニッチは胡散臭い危険人物としてシベリアに追放されてしまうが、そこで主著となった『統治についての論弁(Besedy o pravlenii)』、通称『政治』を執筆し、その中で自分の信念を述べた。この著作は、クリジャニッチが人工的に作ったスラヴ共通語としての「全スラヴ語」で書かれている点でも特徴的なものである。この汎スラヴ語は、ローマ字で表記され、教会スラヴ語とロシア語とクロアチア語の混成

語で、更にはウクライナ語なども混じっていると言われる¹²⁾。クリジャニッチが試みたようなスラヴ共通語 = 汎スラヴ語の制定は、後の汎スラヴ主義者たちがしばしば掲げる課題になる。

クリジャニッチに見られるように、西スラヴの汎スラヴ主義とは異なり、南スラヴの汎スラヴ主義においては、やはリトルコのくびきからのスラヴ人の解放というモチーフが重要な役割を果たしている。ロシアでピョートル大帝(1672~1725、82即位)が即位すると、南スラヴ人はトルコのくびきからの解放における助力をピョートル大帝に期待するようになり、クロアチアの詩人ヴィテゾヴィチ(1652~1713)とグラヂッチ(1613~1713)もピョートル頌歌を書いて、その中でピョートル大帝に助力を望んでいる¹³⁾。もっとも、南スラヴ人は、トルコからの解放における助力をロシアに望んでもロシアによる統治や併合を必ずしも望んだわけでなく、このことがロシア人と南スラヴ人との間の誤解になる。

後に南スラヴではコラールの影響も受けて、クロアチア人のガイなどが唱えたイリリア 主義が起こったが、これも力を失い、最終的にはユーゴスラヴィア主義に基づいて南スラ ヴ人の合同国家を作るに至った。

次に東スラヴの汎スラヴ主義に移ろう。

周知のように、ロシアではチャアダーエフがフランス語で書いた『哲学書簡』(1829~31)をきっかけとして西欧派とスラヴ派が起こったが、スラヴ派と平行して、またスラヴ派の思想とは異なる部分のあるイデオロギーとして汎スラヴ主義も起こった。

また、西欧派とスラヴ派の分裂の前提としてピョートルの改革があり、ピョートルは西欧文明の受容の基地にしてヨーロッパへの窓としてペテルブルグを建設したことも周知の通りだが、しかしピョートルは、ペテルブルグ建設以前にはアルハンゲリスクという不便な港しかなかったロシアが何とかして良い港と制海権を確保するようにしようとして、北と同時に南にも進出しようとした。こうしてピョートルは、南のクリミア半島と黒海の制覇を目指すが、北では成功してバルト海に出るためのペテルブルグを建設したピョートルも、南では成功しなかった。クリミア半島と黒海の制覇という課題は、後のロシア皇帝たちに受け継がれることになる。

南方への勢力拡大を目指すロシア政府にとっての都合の良い口実となったのが、同じスラヴ人であり同じ正教徒である南スラヴ人の、異教徒トルコ人の支配からの解放ということであった。この口実が、ロシアとトルコとの戦争の際に持ち出されることになる。しかし、正教対イスラム教という図式は、あくまでも口実であり、見せかけであった。なぜなら、南スラヴ人はすべて正教徒であるわけではなくて、先に挙げたクリジャニッチやヴィテゾヴィチやグラデッチはカトリックのクロアチア人であるし、南スラヴ人は、ピョートルに期待する前は当時大国だったカトリックのポーランドに期待して、例えば詩人グンドゥリチなどはポーランド王にスラヴの同胞を解放しに来てくれるように呼びかけたりしているからである¹⁴⁾。先に触れたクリジャニッチ自身も、その生涯を終えたのは、ウィーンをオスマン帝国による占領から解放するためにウィーンに進軍したポーランド王ヤン・ソ

ビィエスキの軍隊に随行していた時であった。そもそもピョートル大帝自身がロシア正教会にむしろ敵対して教会の力をそぐための大胆な措置を講じたことも周知の通りである。また、先にも述べたように、南スラヴ人は必ずしもロシアによる統治や併合を求めたわけではなく、オーストリア・スラヴ主義を掲げたハプスブルク帝国内のスラヴ人がハプスブルク帝国内での自治を求めたのと同様に、南スラヴ人はオスマン帝国内での自治だけを求めたりもしている。

これに対して、ロシアの汎スラヴ主義たちは、自分たちの思想の基礎に正教の信仰を置いたので、同じ正教徒である南スラヴ人の異教徒トルコ人からの解放がロシアの使命であるという一種のメシアニズムを本気で唱えることになる。ここに、先にも述べたように、ロシアの汎スラヴ主義者と南スラヴ人との間の誤解が生じることになる。

さて、ロシアの汎スラヴ主義の草分け的存在が批評家でジャーナリストのニコライ・イワーノヴィチ・ナデーデジン (1804~56)である。周知の通り、チャアダーエフはフランス語で書いた『哲学書簡』の中で、ヨーロッパのカトリシズムこそが人類の歴史を動かす原動力であり、正教のロシアは人類の歴史から孤立して袋小路に陥っていると批判し、これをきっかけに西欧派とスラヴ派が生じたわけだが、実はこの『哲学書簡』のロシア語訳を1836年に自分の雑誌『テレスコープ』に掲載したのが、ナデーデジンであった。ナデーデジン自身はチャアダーエフに対する反論を次号に発表する用意をしていたにもかかわらず、雑誌は発行を禁止されて、彼は流刑に処せられた。ナデーデジンはチャアダーエフとは逆に正教の信奉者であり、汎スラヴ主義的思想の持主だったのである。

ナデーデジンは既に学生時代に南スラヴ人の文学を読んで、そこにロシア文学との言語的および内容的な親縁性を見出しうると確信し、合致する特徴を確定することで正教の文化あるいは全スラヴの文化の一体性を証明できると確信した。彼はカラムジーンとプーシキンから影響を受け、特にプーシキンが言語の中にスラヴの親縁性を見て取り、スラヴ文化を非スラヴ文化の影響から守るための有効な手段としてスラヴの言語文化的関係を強調したことに注目した。ナデーデジンはスラヴのすべての言語の間の類似に注目し、スラヴ諸言語の接近のための基礎としてロシア語を強調した。更には全スラヴの政治的統合を夢見て、そこではロシア人が決定的な役割を果たすと考え、その際正教という宗教的共通性を重視した¹⁵⁾。

このように言語の類似性、更には文化の類似性に基づいて、スラヴ民族を一体のものとして捉え、更には正教の信仰に基づいて、政治的に独立していて力の強いロシアが異民族に支配されている他のスラヴ人の上に立って全スラヴ人を政治的に統合し、スラヴの統一国家を作るという構想が、ロシアの初期の汎スラヴ主義の代表者であるポゴーヂンなどによって定式化された。その際注意すべきことは、西欧的な制度である国家とその権力を警戒した初期のスラヴ派と異なり、汎スラヴ主義者たちがそれを重視し、その力によってスラヴの統一国家を作ろうと考えたことである。それ故に、当然ピョートル大帝に対する評価もスラヴ派とは異なり、汎スラヴ主義者は国家権力に依拠したピョートルの拡張主義的

野心を肯定的に評価し、ここに汎スラヴ主義がロシアの公式筋とかなり接近する可能性が 開けた。

もっとも、スラヴ派も後の世代になると、特に露土戦争をきっかけに汎スラヴ主義に非常に近い立場を取るようになり、また汎スラヴ主義は、ロシアとヨーロッパとの大戦争を 予言したダニレーフスキーに見られるように、非常に戦闘的になった。

3.汎スラヴ主義における「同床異夢」

以上、西スラヴ、南スラヴ、東スラヴの汎スラヴ主義を概観してきたが、汎スラヴ主義の理念、特に政治的な汎スラヴ主義の理念は、実現しなかった。それはそれが、実際のスラヴ民族の間にある様々な相違や利害の違いを無視した、非現実的なものだったからである。一言で言えば、これは汎スラヴ主義における「同床異夢」と表現できるであろう(図3参照)。そしてこのことは特に、政治・社会的抑圧と言語・文化的衰滅の危険にさらされた被害者である小民族と、彼らへの援助と救済に名を借りて自分たちの勢力を広げ自国を拡張しようとする独立した大民族との間の相違から生じていると思われる。

つまり簡単に言えば、汎スラヴ主義者はみな「スラヴ語スラヴ文化を衰滅から救え!」と唱えたのであるが、西と南の汎スラヴ主義者は衰滅の当事者・被害者の立場から唱え、東の汎スラヴ主義は拡張主義的な立場から唱えたのである。西スラヴの汎スラヴ主義は自分たちの小ささと弱さの意識 それは仮想的なものであったかもしれないにせよ から生まれたものだと言えるであろう。ただし、ロシアの汎スラヴ主義のルーツに、衰滅の当事者であり被害者の立場から「スラヴ語スラヴ文化を衰滅から救え!」と唱えるという、自己防衛的な側面がなかったわけではないであろう。ピョートルの改革による急激な西欧化や、エカテリーナ時代における貴族階級でのフランス語の優位などに対する反発が、かつてあったからである。しかし、汎スラヴ主義が唱えられた時代には、既にロシア語・ロシア文化の衰滅の危機は現実的なものではなかったと思われる。

このように、汎スラヴ主義という同じ床で違う夢を見ていたそれぞれのスラヴ人は、先に触れたハヴリーチェクに典型的に見られるように、やがて汎スラヴ主義の夢から覚めて現実を見るようになり、より現実的な方向に進むようになる。基本的には、「『我チェコ人なり』と言うが、『我スラヴ人なり』とは決して言わない」というハヴリーチェクの言葉に端的に現れているように、自らをスラヴ人としてアイデンティファイするのではなくて、チェコ人なリクロアチア人なり個々の民族としてアイデンティファイする方向であり、全スラヴ的な連帯からチェコスロヴァキア主義なりユーゴスラヴィア主義なり、より限定的で現実的なスラヴの連帯へ、更には個々の民族の独立へという方向であり、この方向が、最初に述べたように、1989年の「東欧革命」以降のスラヴの合同国家の解体によって終局に至ったのだと考えられる(図4参照)。

全スラヴの合同国家の建設を目指す政治的な汎スラヴ主義は非現実的なものであり、それには歴史的な意義は認められないであろうが、文化的な汎スラヴ主義にはある程度の意味が認められ、広くスラヴ主義 最初に規定したように、スラヴ人が自分をスラヴ人として捉え他のスラヴ民族を自分の同類と捉えて、スラヴ人どうしの連帯や協力や合同を目指す考え方 には歴史的な意義があった。チェコスロヴァキア主義やユーゴスラヴィア主義が、実際にどの程度ドイツやロシアという大国と大民族からの自己防衛の役割を果たし得たかは、後のナチス・ドイツとソ連による支配を考えるとそれほど自明ではないにしても、一定の役割を果たしたと思われるし、そのことは特に、後述のソルブ人と対比するときに浮かび上がるように思われる。

4. スラヴ学およびスラヴ研究との関係

最初に述べたように、以上のような流れに鑑みて、スラヴ学やスラヴ研究が置かれている状況についても考察してみたい。

まず社会科学的なスラヴ研究について言うと(図4の右下参照)、冷戦の時代に「西側」の資本主義国家とは異なる「東側」の社会主義国家の研究として盛んになった、政治学を基礎にしたスラヴ研究あるいはソ連・東欧研究は、社会主義の崩壊、冷戦の終結、更にはEU統合の時代にあって、「スラヴ」とか「ロシア・東欧」という単位で括ることの意味が希薄化してきたために、各国政治・経済研究に移行し、他方で例えば中欧諸国の民主化や市場経済化の進展を比較するというような、比較政治学・比較経済学に変わってきたと思われる。

次に言語学を基礎にした人文主義的なスラヴ学について言うと、そもそもスラヴ学は、 民族的覚醒の時代に、特に教会スラヴ語の研究で知られるチェコの文献学者ドブロフスキーによって基礎を築かれ、スロヴァキア出身でチェコ民族再生運動に参加した汎スラヴ主義的なスラヴ学者シャファジークなどによって発展させられた。つまり、スラヴ学はスラヴ主義や汎スラヴ主義との密接な関係のもとで発生し発展してきたものである。

ところが、図4の左側に示したように、チェコ語なりスロヴァキア語なりのそれぞれのスラヴ語の標準語が確立し、同時に各スラヴ民族の民族的アイデンティティが確立してくると、スラヴ学は次第にスラヴ諸語や、スラヴ文学・文化の個別的研究に分解してくるようになる。

このような傾向に対しては、既に 19 世紀後半に、ウィーン・スラヴ学派を代表する優れたスラヴ学者であるクロアチア人のヴァトロスラフ・ヤギッチ (1838~1923) が警鐘を鳴らしていた。彼は、一つの全体としてのスラヴ人についての特別で統一的な学問分野としてのスラヴ文献学が、個々のスラヴ諸民族の言語や文学への関心によってますます損なわれ、またますますより新しい現代の発展に関心が向けられるようになっていることを見て取り、このような特殊化の仕方がスラヴ学の統一的な概念を脅かすものだと見なし、スラ

ヴ学は道に迷わないためには改革される必要があるという確信に至った。彼は特に、古チェコ語辞典の編纂者であり著名なチェコ語学者であるゲバウエルとその弟子たちのチェコ学的特殊化にこのような離脱的傾向を見て取った¹⁶⁾。

他方、ロシアの汎スラヴ主義的なスラヴ学者ヴラヂーミル・イワーノヴィチ・ラマーンスキー(1833~1914)やアントン・セミョーノヴィチ・ブヂローヴィチ(1846~1908)は、ヤギッチの文献学的な概念よりも広いスラヴ学の概念を作った。それによれば、スラヴ学は、スラヴ人の「種族」的な一体性と、ラテン・ゲルマン世界とギリシア・スラヴ世界の相違に関する証拠を発見することを可能にするものであった「7つ。しかし逆説的なことに、ブヂローヴィチは研究を進めるにつれて、スラヴ諸民族の間に存在する大きな相違を認識して、全スラヴ的統一の可能性を疑うようになった。しかし彼は、スラヴ人が考え方を変えて相互に交流することによって、互いに接近する必要があると唱えた「80。

以上見てきたような、既に 19 世紀に指摘されていたスラヴ学の分解傾向は、「東欧革命」 以後のスラヴ合同国家の崩壊によって更に促進されるのではないだろうか? そして、先 に述べたように、政治学を基礎としたスラヴ研究がバックボーンを失って各国政治・経済 研究と比較政治学・比較経済学に移行するように、スラヴ学も、スラヴ諸語やスラヴ文学・ 文化の個別的研究と、もはやスラヴに限定しない比較言語学や比較文学・比較文化に移行 していくのではないだろうか? 社会科学的なスラヴ研究ほどではないにせよ、人文科学 的なスラヴ学も難しい状況に置かれているように思われる。

5.ソルブ問題

最後にソルブ問題に触れておきたい。なぜなら、スラヴ人のうちで最も小さい民族であり、結局スラヴ人主体の国家の中に入れずにドイツの中に取り残されてしまい、現在衰滅の危機にさらされているソルブ人の問題は、スラヴ世界を考える上で、特にスラヴ主義や汎スラヴ主義の意味を考える上で重要であると思われるからである。

ソルブ人の民族的覚醒の萌芽は、実はチェコ人のそれよりも前に発生したようである。 前述の「チェコ語の擁護」と同様の「ソルブ語の擁護」と言うべき幾つかの著作が、1775 年にバルビーンの「チェコ語の擁護」が出版されるよりも前に出されているのである¹⁹⁾。 更には、クリスティアン・クナウテ(あるいはクナウト)が1767年にドイツ語で出した『上ラウジッツのソルブ・ヴェンドの詳細な教会史(Derer Oberlausitzer Sorberwenden umständliche Kirchengeschichte)』という著作の中では、自説を擁護するために、なんと「高名なイエズス会士にしてボヘミアの歴史家」バルビーンの最晩年(1685年)の書簡が引用されている²⁰⁾。なお興味深いのは、クナウテは、「白山の戦い」の後に亡命したチェコ人の孫だったということである。

ともかく、「ソルブ語の擁護」というべき著作はかなり早くから出されているようだが、 民族的覚醒が西欧から入ってきた啓蒙主義 特にソルブ人が多く住んでいたライプツィ ヒには早い時期に啓蒙主義が広まったという の影響で起こったこと、ハプスブルク帝国に啓蒙主義が浸透するのは遅かったことを考えれば、これは当然と言えるかもしれない²¹⁾。民族的覚醒の時代以降、ソルブ人とチェコ人は言語的・文化的な交流をし、特にドブロフスキーはその文献学的な著作によってソルブ人にかなりの影響を与えたと言われ、ドブロフスキー自身 1825 年にラウジッツを訪れている。その後も、チェコ民族再生運動の代表者であるシャファジーク、コラール、チェラコフスキー、パラツキー、ハンカなどとソルブ人との交流が続いた。そして、既に 18 世紀前半にできていたプラハのラウジッツ神学校や、1901 年からソルブ語とソルブ学を教える最初の大学になったプラハ大学や、1907年にその前身ができたソルブ友好協会などを通して、ソルブ人とチェコ人の関係は深まる。プラハのラウジッツ神学校で学んだソルブの民族的覚醒者ミハウ・ホールニク(1833~94)は、コラール的なスラヴ相互交流をドイツ化に対するソルブ人の防衛手段と見なして、文化的・学問的レベルでのスラヴ相互交流に従事した²²²。

ところで、第一次大戦中にチェコスロヴァキア独立運動の指導者となり、独立後に大統領となったT・G・マサリクも、既にライプツィヒの大学で学んでいた学生時代にソルブ人の作家ヤン・ピェフ (Jan Pjech) と知り合いになってソルブ人の世界を知り、1884年にはソルブ人の中心都市ブディシーンを訪れ、その後もソルブ人への関心を持ち続けて、チェコの問題と同じくソルブの問題を小民族の問題として捉えていた。そして、チェコスロヴァキア独立運動の綱領の中にソルブ人をも含めて、1917年に出した『新しいヨーロッパ』という著作の中で、ソルブ人が望むならソルブ人はチェコと結合する形で独立することができると書いた²³⁾。そして、恐らくドイツとオーストリア=ハンガリーの敗戦による第一次大戦の終結の時が、スラヴの他のすべての小民族と同様に、ソルブ民族にとっても千載一遇のチャンスであり、運命の岐路だったと言えるであろう。

ドイツとオーストリア=ハンガリーの敗戦によって、ソルブ人もマサリクが提案したようにチェコと結合する形でか、あるいはソルブ人だけでか、どちらかの形で独立することが期待された。そして、ザクセン議会のソルブ人議員アルノシュト・バルトと、プラハ大学の最初のソルブ語教員でありソルブ問題に詳しかったチェコ人のアドルフ・チェルヌィーが、チェコスロヴァキア代表団に加わって 1919 年のパリ講和会議に赴いた。特にチェルヌィーは、ソルブ人の独立のために熱心に働きかけをした。しかし、主に交渉を行ったベネシュ外相がこの問題に関して決然とした態度を取らなかったこともあって、結局ソルブ人の独立は実現せず、ソルブ人はドイツの中に取り残されてしまった。この失敗の後、ドイツ軍がソルブ人を威嚇するためにソルブ人地区に配置され、女性を追いかけたり家を掠奪したりし、独立を求める者たちを殺すと脅したと言われる。パリの講和会議から戻って来たバルトは逮捕され、投獄されてしまった。そして、マサリク大統領の介入によって、ようやく解放されたのであった240。

その後、ナチスの時代にソルブ人は苛酷な弾圧を受け、ソルブ語は禁止された。三谷惠 子氏によれば、このナチスによる弾圧が、ソルブ語が衰滅に向かう大きな原因となったと いう²⁵⁾。そればかりでなく、ナチスはチェコスロヴァキアに侵攻すると、さっそくソルブ人と友好関係を結んでいたチェコ人の家を家宅捜索して、ソルブ人とやりとりした手紙などを応酬してしまった。更には、当時チェコの優れたスラヴ学者で、特にソルブ語・ソルブ文学の専門家であったカレル大学教授ヨゼフ・パータを逮捕して、なんとテレジーンの強制収容所に送り、1942年に処刑してしまったのである。

ナチス・ドイツの敗戦と共に、再びソルブ人の独立の可能性が出てきた。敗戦時のソルブ人は、ひどい状況に置かれていたようである。ナチスによる弾圧を受けたばかりではなく、居住地域が戦場となって荒廃し、更にはチェコスロヴァキアとポーランドから追い出された大量のドイツ人がやって来ていた。ソルブ人の指導者たちは、必死にチェコスロヴァキアとソ連に助けを求めた。既に 1945 年 5 月に、まだ強制収容所の中にいたソルブ人の指導者ヤン・ツィシュその他は、チェコスロヴァキア大統領になっていたベネシュとチェコスロヴァキア政府に宛てて書簡や覚書を送り、講和会議でソルブ問題を取り上げてくれるように頼み、ラウジッツがかつて 1635 年まで数百年にわたってチェコ王国の一部であったという歴史的事実も挙げながら、次のような悲痛な訴えをした。ソルブ人には「二者択しかありません。 チェコスロヴァキア共和国の枠内で永遠に生きるか、それともドイツの海の中で永久に滅びるかです。[......]私たちもまた、自分たちの血と望みと歴史的使命によって属している所に加わりたいのです」²⁶⁾。「一番小さなスラヴ民族をヨーロッパの心臓部で滅びさせないでください」²⁷⁾。

この後の成り行きを詳述することはしないが²⁸⁾、ソルブ人の指導者たちは重ねてチェコスロヴァキアとソ連に助けを求め、チェコスロヴァキアでもソルブ人を助け、国境を変更してソルブ人地域をチェコスロヴァキアに含めるべきだという世論が高まった。プラハではソルブ人への助力を求める大規模なデモが行われ、それには政府閣僚の中からも何人かが参加した。しかし、政府の中でも意見が分かれており、副首相は熱心なソルブ人擁護派だったのに対して、首相はこの問題について冷淡であった。そして何よりも、ソ連、そしてスターリンがソルブ人に対して冷淡で、国境の変更を認めなかったことが決定的となり、結局ソルブ人の独立はまたしても実現しなかったのである。

この後、第一次大戦終了時と同様に、独立を望んだソルブ人は分離主義者として迫害されたばかりでなく、ソルブ人はスラヴ人であるというだけでドイツ人から憎悪されたという。というのも、先に触たように、チェコスロヴァキアとポーランドから追い出されたドイツ人が大量にソルブ人地域にやって来たからである。しかも、チェコスロヴァキアから追い出された、いわゆるズデーテン・ドイツ人は、ナチスを熱狂的に支持したために国家反逆罪のかどで市民権と財産を剥奪されて、ほとんど着の身着のままで故郷から追い出され、しかも時としてチェコ人から報復的なリンチも受けていた人々だったからである。ザクセンの官庁はそのドイツ人たちを、しばしば純粋なソルブ人の村に居住させたという²⁹⁾。両者の関係がどのようなものであったかは、想像に難くない。

スラヴ人が、チェコ人なりロシア人なりの個々の民族を越えて、自らをスラヴ人として

捉え他のスラヴ民族を自分の同胞と捉えて、スラヴ人どうしの連帯や協力や合同を目指すというスラヴ主義的な思想と感情は、この時代にまだ生き残ってはいたが、既に下火になっており、何よりも実際的な利害を最優先する大国の権力政治に打ち勝つことはできなかったわけである。

現代チェコの歴史家ヤン・クシェンが言うように、チェコ人がドイツの大海に没し去って消えてしまうという悪夢が長い間チェコの指導者たちから安眠を奪ってきたのだが³⁰⁾、チェコ人は自らの民族主義の力によってその悪夢から逃れることに成功した。しかし、ソルブ人はそれに成功せず、ソルブ人においてはそのような悪夢がほとんど正夢と化してしまったのである。

いずれにせよ、ソルブ問題は、スラヴ世界とスラヴ主義を考える上で多くの問題を投げかけているように思われる。

終わりに

先にも述べたように政治的な汎スラヴ主義に積極的な役割と意味があったとは考えにくいが、スラヴ主義には、歴史的に限定されたものではあっても積極的な役割と意味があったと考えられる。それはやはり、大民族や大国の餌食になりやすい小民族であるスラヴ人どうしが連帯することによって、大民族や大国から身を守るという役割であり、またそれ以前に、自分たちの言語と文化を再生して豊かにする際に他のスラヴ語とスラヴ文化から財産分けをしてもらうという役割であった。

しかし、その後の歴史の中で各スラヴ民族が自分たちの標準語を確立し、自分たちの文化を作り上げ、民族的なアイデンティティを確立し、更にはヨーロッパ統合の時代にもはや大国の餌食になる可能性の非常に低い民族国家を作った今となっては、スラヴ主義は既に命脈が尽きていると言えるであろう。

汎スラヴ主義は民族的覚醒の時代に、まだ十分に確立されていなかった民族的アイデンティティを補強するものとして、民族主義(ナショナリズム)と密接な関係を持ちながら発生し展開したのであるが、両者は次第に対立するようになり、最終的には民族主義が実現することによって汎スラヴ主義は力を失った。

このことは、アイデンティティの広さとレベルという問題をも投げかけていると思われる。つまり、「スラヴ人」というようなあまりにも広くてより抽象的なレベルでアイデンティティを確立することは非常に難しかったと思われるのである。結局、スラヴ人は「チェコ人」や「スロヴァキア人」や「クロアチア人」など、個々の民族として民族的アイデンティティを確立することになった。今日よく言われるような重層的なアイデンティティということも想定しうるが³¹⁾、自分が「チェコ人」で同時に「スラヴ人」だという場合、「チェコ人」としてのアイデンティティが強まれば強まるほど、「スラヴ人」としてのアイデンティティは逆に希薄化していったように思われる。とりわけ、スラヴ民族どうしの間の相

違や対立が大きいものであればあるほど、それは難しかったのだと考えられる。

この点で、ソルブ人問題は示唆的であるように思われる。上述のように、ソルブ人問題は多分に大国の権力政治によって決定されてしまったとはいえ、ソルブ人を同胞と捉える汎スラヴ主義はそれに打ち勝つほどの力を持ちえなかった。19世紀を通じて高まり力をつけた民族主義によって自分たちの民族的アイデンティティを確立し、自分たちの国家を持てることになった他のスラヴ人は、大勢としては結局のところ自分たちの民族主義の枠内にある程度そこから出ることはあったとしても収まってしまい、大きな危険と犠牲を払ってまでソルブ人を救うことはできなかったのである³²⁾。

スラヴ民族の中で唯一スラヴ人の国家に入れず、同じスラヴ人の助けを求めながらもドイツの中にとどまってしまい、ドイツの大海に没し去って消えてしまうという深刻な衰滅の危機にさらされることになったソルブ人とソルブ語の問題は、汎スラヴ主義の弱さと限界と同時に、民族主義の性格と限界をも示しているように思われる。

注

- 1) Н. Я. Данилевский, Россия и Европа: Взгляд на культурные и политические отношения Славянского мира к Германскому (Москва: Эксмо, 2003). 第1、8、9章参照。
- 2) Radomír Vlček, Ruský panslavismus: Realita a fikce (Praha: Historický ústav AV ČR, 2002), s. 78.
- 3) Jan Kollár, "Über die literarische Wechselseitigkeit," in *Rozpravy o slovanské vzájemnosti* (Praha: slovanský ústav, 1929), S. 33.
- 4) Id., "Dobré vlastnosti národu slovanského," in Rozpravy o slovanské vzájemnosti, s. 8.
- 5) 別の言い方をすれば、汎ゲルマン主義的に「ドイツ性」を際立たせてドイツ人の大同団結を目指すことは、必然的にスラヴ人の警戒を呼び起こして「ドイツ性」の対立項としての「スラヴ性」を浮かび上がらせ、逆に、汎スラヴ主義的に「スラヴ性」を際立たせてスラヴ人の大同団結を目指すことは、必然的にドイツ人の警戒を呼び起こして「スラヴ性」の対立項としての「ドイツ性」を浮かび上がらせることになる。
- 6) 森安達也編『スラヴ民族と東欧ロシア』(山川出版社、1986年)、257頁。
- 7) Vratislav Doubek, Česká politika a Rusko (1848-1914)(Praha: Academia, 2004), s. 32-35.
- 8) František Palacký, "Psaní do Frankfurtu," in *Úvahy a projevy* (Praha: Melantrich, 1944), s. 159-160.

なお、パラツキーが唱えたオーストリア・スラヴ主義に対しては、当然のことながら、 汎スラヴ主義的なロシア人の側から批判が為された。ポゴーヂンのように、ロシアの指導 のもとでのスラヴ諸民族の大同団結とスラヴの大国家の形成を目指した保守的な大ロシア 主義的汎スラヴ主義者たちから批判されたばかりでなく、バクーニンのように、ロシアと ハプスブルク帝国で革命を起こした上で自由なスラヴ連邦を形成しようと考えていた急進 的な革命家からも批判された。なぜなら、バクーニンが革命によるハプスブルク帝国の解 体を目指していたのに対して、パラツキーのオーストリア・スラヴ主義は、オーストリア 国家の枠組み自体は是非とも維持しなければならないと考えていたからである。

ロシア人の場合は、外国のスラヴ人であるから、彼らの批判はまだそれほど深刻な問題ではなかったかもしれないが、もっと深刻な問題は、ガリツィアのポーランド人の指導者カロル・マリシュなど、ハプスブルク帝国内のポーランド人からの反対であった。なぜなら、当時三国分割による亡国の悲運をかこっていたポーランド人は、ポーランド国家の復

興を望んでおり、この望みは、オーストリア国家の現状の枠組みの維持を必須とするオーストリア・スラヴ主義とは矛盾したからである。Cf. Doubek, *op. cit.*, s. 54-55.

- 9) Karel Havlíček, "Slovan a Čech," in *Karla Havlíčka Borovského politic ké spisy*, Vol. I (Praha, 1900), s. 66-70.
- 10) Id., "Článek, o kterém bych si přál, aby jej každý přečetl a rozvážil," in op. cit, II-1, s. 109.
- 11) クラマーシュは、マサリクの年下の同僚であると同時に敵手となった、優秀な法学者・大物政治家であった。彼の唱えた親ロシア的汎スラヴ主義は、チェコの独立運動にも影響を及ぼした。彼は、オーストリア時代には、マサリクと同じく国会議員を務め、それどころか国会副議長にさえなり、チェコスロヴァキア独立後は、マサリクが初代大統領を務めたのに対して、初代首相を務めた。彼は全スラヴ諸民族の大同団結を唱え、1908 年のプラハでのスラヴ準備会議の議長、1910 年のソフィアでのスラヴ会議の議長を務めて、第一次大戦前には、ロシアのツァーリを首長とするスラヴ帝国の憲法を自ら立案しさえした。彼はア人女性と運命的な恋愛の末に結婚して、ロシアに財産も所有していた。

第一次大戦が勃発すると、クラマーシュ自身は大逆罪で死刑を宣告されてウィーンの監獄に収監されたが、例えば彼の信奉者である有力政治家ディリフは、マサリクと同じく国外で独立運動に加わり、クラマーシュの意を体して、ロシアのツァーリを首長とするスラヴ帝国にチェコを組み込む形での、ハプスブルク帝国からのチェコの独立を目指し、それが実現した暁にはチェコ人は正教に改宗するとさえ主張して、マサリクらと対立した。マサリクは、第一次大戦と独立運動の回顧録である『世界革命』(1925 年)という本の中で、「あらゆる救いをロシアから期待する我々の親ロシア主義者たちの多く」は「ツァーリと更には正教にさえ向かっていた」と述べている。T. G. Masaryk, Světová revoluce (Praha: Čin, 1925), s. 66.

- 12) В. В. Зеленин, Рукопись «Политики», в кн. Юрий Крижанич, *Политика* (Москва: Новый свет, 1997), с. 479.
- 13) Vlček, op. cit., s. 45.
- 14) Vlček, op. cit., s. 44.
- 15) Vlček, op. cit., s. 88-89.
- 16) Milan Kudělka, et. al., *Česká slavistika: Od počátku 60. let 19. století do roku 1918* (Praha : Historický ústav, 1997), s. 127, 133.
- 17) Ibid., s. 129.
- 18) Vlček, op. cit., s. 214
- 19) Cf. Josef Páta, *Lužicko-srbské národní obrození a československá účast v něm* (Praha: Česká grafická Unie, 1923), 351-352.
- 20) Christian Knauthe, *Derer Oberlausitzer Sorberwenden umständliche Kirchengeschichte* (Görlitz, 1767)(Köln, Wien: Böhlau, 1980), S.77-78.
- 21) パータによれば、ソルブ系の人々が住んでいた「ライプツィヒは特に当時、イギリスとフランスの新しい理念が既に相当に浸透したドイツの科学的、文学的、思想的な流れの中心地であった。そして上ソルブのほとんどすべてのルター派の神学者たちは、その雰囲気の中で育ったのである。ライプツィヒのソルブ説教師協会のメンバーたちが当時のドイツの見解を自らのソルブの精神に非常に良く適用することができて、[......]それを実現しようと努めたというのは、確かに不思議ではない。このような雰囲気の中から、ソルブの過去の研究や、ソルブ語の研究や、ソルブ語の文法と辞書のための材料の収集[.....]などへの衝動が生じたのである。」Páta, op. cit., s. 350.
- 22) Petr Kaleta, "Češi a Lužičtí Srbové v 19. století", in Zdeněk Hojda et. al., *Slovanství a česká kultura 19. století* (Praha: KLP, 2006), s, 147.
- 23) Ibid., s. 152.
- 24) Zdeněk Valenta, "Adolf Černý, slovanská vzájemnost a Lužičtí Srbové", in *Slovanství a česká kultura 19. století*, s. 157-158.
- 25) 三谷惠子「下ソルブ語の状況 WITAJ 計画までのみちのり」『西スラヴ学論集』第4号 (2001年、西スラヴ学研究会)、77頁。同「滅びゆく言語、下ソルブ語」 (http://www.geocities.jp/eszterjp/ds.html)
- 26) Kirill Ševčenko, "Vztah Československa k lužickosrbskému národnímu hnutí v roce 1945", in Petr

Kaleta et. al., Praha a Lužičtí Srbové:Sborník z mezinárodní vědecké konference ke 140. výročí narození Adolfa Černého (Praha: Masarykův ústav AV ČR, 2005), s. 138-139.

- 27) Ibid., s. 143.
- 28) 詳しくは Ševčenko 論文を参照。
- 29) Ibid., s. 159.
- 30) Jan Křen, Historické proměny češství (Praha: Karolinum, 1992), s. 78.
- 31) ちなみに、脇坂紀行『大欧州の時代 ブリュッセルからの報告』(岩波新書、2006年)によれば、欧州委員会統計局がEU加盟15か国の16000人余りの国民の帰属意識を2004年に調べた世論調査の結果では、「自分は欧州人だ」との答えが4%、「自分はまず欧州人で次に自国民」との答えが6%、「自分はまず自国民で次に欧州人」との答えが46%であった。そして、フランス西部ブルターニュ地方、英国のスコットランドやウェールズでも地域の自立をめざす運動が見られ、国民-欧州人という二層構造ではなく、むしろ、地域-国家-欧州という重層的なアイデンティティ意識が人々の中に育っているという。しかし、国や年齢によってもかなりの差があり、欧州人意識はルクセンブルクが69%と最も高いが、逆に英国人は62%が「自分は英国人」と答え、欧州人意識が最も低かったという。同書、27~28頁。
- 32) ちなみに、ソルブ人の中心都市ブディシーンで 1933 年に出版された『ラウジッツに捧げるチェコの詩人たち』という、ソルブ人に捧げたチェコの詩人たちの詩を集めた興味深いアンソロジーには、ソルプ人に兄弟とか姉妹とか呼びかける詩が多く収められている。それらの詩には 1920~30 年代に書かれたものが多く、第二次大戦前まではまだコラール的なスラヴ相互交流の理念が生きていたことを示している。Cf. Čeští básníci Lužici (Budyšín: Kolo Lužických spisovatelů, 1933).

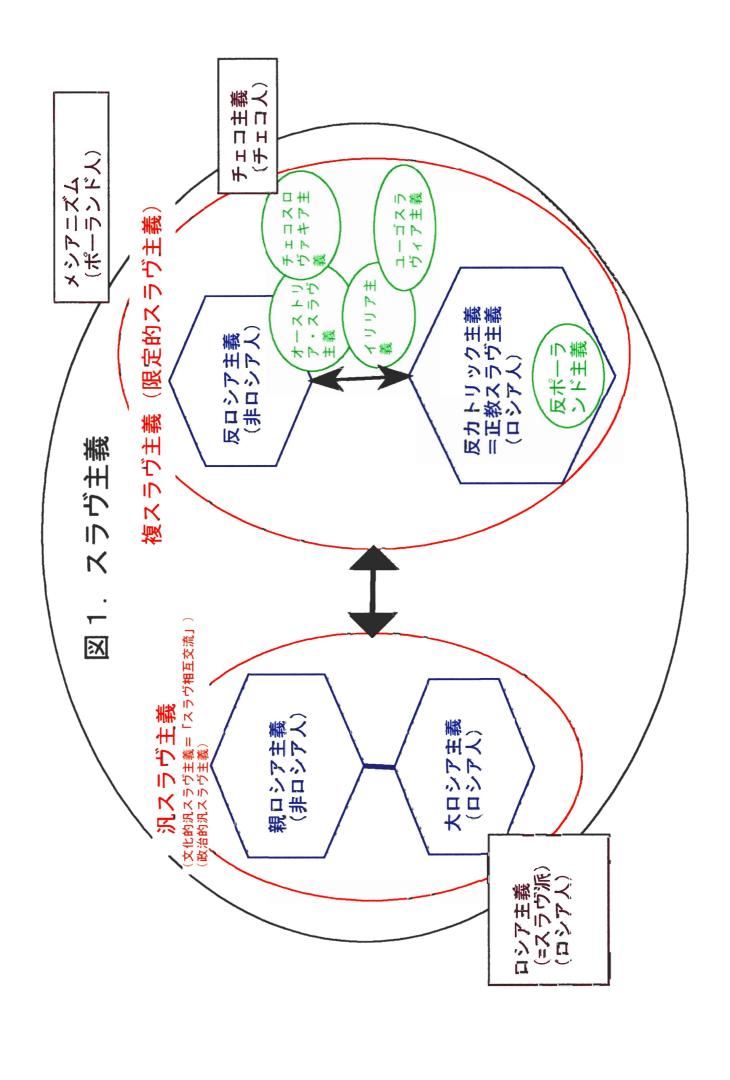
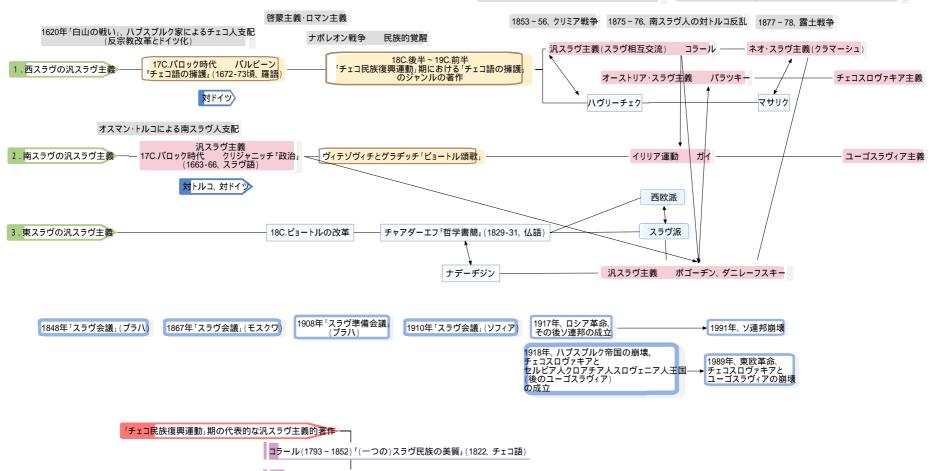


図2.汎スラヴ主義の起源と展開

1830~31、1863~64、ポーランド人の対ロシア反乱 1867、アウスグライヒ(オーストリア=ハンガリー二重帝国成立)



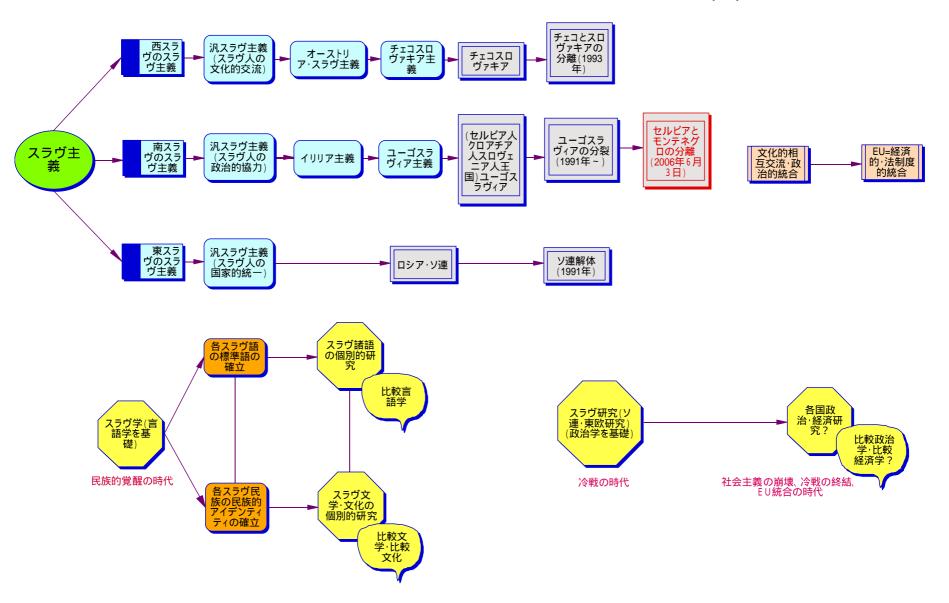
シャファジーク(1795~1861) 「すべての方言に従った(一つの)スラヴ語とスラヴ文学の歴史』(1826、独語)

コラール『(一つの)スラヴ民族の種々の種族と方言の間の文学上の相互交流について』(1837、独語)

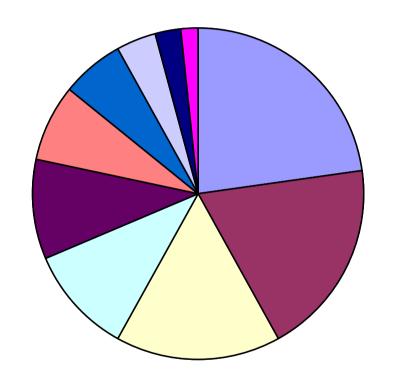
図3.汎スラヴ主義における「同床異夢」

	西スラヴ	東スラヴ	南スラヴ
言語・文化	チェコ語が属するスラヴ語の広がりに依拠 してチェコ語の存在の正当性を擁護する。 他言語への同化を拒否する。	ロシア語をスラヴ共通語にしようとする。 チェコ語などの小言語は生き残りの可能性 がないと見なし、スラヴの小民族は親戚言 語であるロシア語に同化し、ロシア語の中 で自分たちの文化的な富を保存せよと唱え る。	オスマン・トルコ内では、いわゆる「ミッレト制」によって、宗教・言語・文化的面での抑圧はあまりなかったのではないか? ハプスブルク帝国内の南スラヴ人(スロヴェニア人など)はチェコ人と同じで、自分たちの言語を守ろうとして他言語への同化を拒否する。
政治	必ずしも全スラヴ人の政治的統合は求めない。スラヴ連邦の建設を求めるとしても諸 民族の平等と自治を求める。	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	必ずしも全スラヴ人の政治的統合は求めない。何よりもトルコのくびきからの解放と 自治を求める。
宗教	チェコ人は宗教的に中立。(ドブロフスキーはイエズス会士で、パラツキーとコラールはプロテスタントだった。) ポーランド人はカトリシズムを重視。	宗教を基礎にし、正教こそ、スラヴ性の最も重要な特徴だとする。カトリックのポーランド人やチェコ人を正教に改宗させようとする。	カトリック系民族と正教系民族とで異なる。

図4.スラヴ主義の流れと衰滅、スラヴ学とスラヴ研究の流れと衰滅(?)



参考資料.ハプスブルク帝国の民族構成(1910年)



- ■ドイツ人
- ■ハンガリー人
- □チェコ人
- ロセルビア・クロアチア人
- ■ポーランド人
- ■ウクライナ人
- ■ルーマニア人
- ロスロヴァキア人
- ■スロヴェニア人
- ■イタリア人

ドイツ人	23.3%
ハンガリー人	19.6%
チェコ人	16.6%
セルピア・クロアチア人	10.7%
ポーランド人	9.8%
ウクライナ人	7.9%
ルーマニア人	6.2%
スロヴァキア人	3.8%
スロヴェニア人	2.8%
イタリア人	1.6%
スラヴ系全体	51.6%

下ソルブ語の現在

『地域言語または少数言語のための欧州憲章』のソルブ語への適用と WITAJ 計画の現状

三 谷 惠 子

はじめに

下ソルブ語は上ソルブ語とともにドイツ国内に残されたスラヴ系少数言語である。

現在の言語人口は上・下ソルブ合わせて 2 万人ほどとされ、1990 年代から着手された「再活性化計画」のもとにその維持、育成が進められている。本稿では、とくに危機的であるといわれてきた下ソルブの現状に注目しながら、最近のソルブ語をとりまく社会状況と教育現場について述べる。以下の 1.では全般的問題として、話者数と使用域について概観し、2.では欧州評議会¹⁾が定めた『地域言語または少数言語のための欧州憲章』がソルブ語にどのように適用され、またどのような問題が提起されているかを、憲章が義務づけている国家報告書ならびに専門家委員会評価書、またそれに対するソルブ人研究者のコメントから見ていく。3.では現在の下ソルブ語の学校教育の状況について、コトブス市WITAJ教育センターの顧問をつとめる下ソルブ研究者M. Norberg博士より提供された資料を中心に記述する。

1. 全般的問題

1. 話者の数

ソルブ語に関してしばしば問題になるのが話者の数である。少数言語の話者数については、調査する側がどの程度の言語能力のある者を「話者」とみなすか、あるいは本人が自分を当該言語の「話者」と認識するか、といったことに関して一律の基準を設けることが難しく、調査方法いかんで「話者」の数に大幅な違いが生じる危険性があるといえるだろう。

ソルブ語の話者数に関しては、1980年代までの旧東ドイツの公式発表では10万人とも7万人ともいわれた。今日でもしばしば、上ソルブ語と下ソルブ語をあわせて約6万人という数が挙げられる。たとえばSpieß & Steenwijk (2000:196)では、上ソルブ語話者については43,200人、下ソルブ語は16,200人、計59,400人という数が示されている。この数値は1987年のソルブ研究所の調査に依拠したものである。しかし、下ソルブ語については最大で7000人、上ソルブ語をあわせてソルブ語話者の全数は20,000人を越えないという、同じ研究者たちによる調査報告もある(Jodlbauer, Spieß, Steenwijk, 2001:29 39; Spieß & Steenwijk 前掲書196,注18)。

Mercator-Eduacion²⁾に提出された"Sorbian - The Sorbian Language in Education in Germany. 2001"³⁾ も、下ソルブ語の話者は最大に見積もって 7000 人という立場をとっている。この 7000 人という数は、ソルブ語の母語話者と考えられる層、すなわち伝統的なソルブ語使用域でソルブ人の家庭

に生まれ、第1言語としてソルブ語を習得したと考えられる人々(主として第二次大戦前に生まれた世代)に、第二次大戦後から1990年代初めまでのソルブ学校・ソルブ語学級に在籍した生徒の数を合計し、さらに若干の(希望的)上乗せをして算定した数であり、信頼性が高いと考えられる。また、ブランデンブルク州の伝統的にソルブ語が使用されている地域(詳細は次の1.2)の全人口とそこに占めるソルブ人の割合から推測しても、下ソルブ語話者に関しては、どれほど多く見積もっても1万人を超えるとは考えにくい。

言語人口構成の上でとくに深刻なのは、ナチス・ドイツの時代にソルブ語が禁止されたために言語の継承が多くの家庭で断たれたという歴史的背景から、現在の母語話者の大半が 1940 年より前に生まれた高齢者層であるという事実である。また、伝統的にソルブ人の居住地であった一帯にドイツ人が多く移住してきたために、職場などの公的生活の中で、ソルブ語でのコミュニケーションができなくなったこと、ドイツ人とソルブ人の結婚によって家庭内でもドイツ語の使用が優勢になったことなどが、若年層への下ソルブ語の継承を一層困難にしてきたという現実もある(下ソルブ語の近代の衰退については Norberg 1996、三谷 2001 を参照)。これらの問題を抱えながら出発したのがソルブ語再活性化計画、WITAJ であった。WITAJ については 3 節で述べる。

2. 法ならびに使用領域

ソルブ人のアイデンティティー、文化、言語に関する権利は、ドイツ連邦共和国基本法ならびにブランデンブルク州、ザクセン州それぞれの法において定められている(渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法』299-319 に岡田・木村による解説と該当する法の条項の訳がある)。ブランデンブルク州においては、シュプレー・ナイセ郡(右下地図の最南東部 SPN)、自治都市コトブス(SPN の中央の CB)、オーバーシュプレーヴァルト・ラウジッツ郡(SPN の西側 OSL)のリュベナウ、フェッチャウ、アルトデーベルン、グロスレシェン、アム・ゼンフテンベルガー・ゼーの各自治体、ダーメ・シュプレーヴァルト郡(Berlin と SPN、OSL の間の LDS)のメルキシェ・ハイデ、リーベローゼ、シュトラウピツの各自治体が、またザクセン州においては、ホイェルスヴェルダ市、カメンツ郡、バウツェン郡、ニーダーシレジエン・オーバーラウジッツ郡の中の市町村が、それぞれ州の法律によって「ソルブ人居住地区」(以下本稿では「ソルブ地区」とする)と定められており、

これらの地区においてはソルブ人の伝統を尊重するための配慮がなされなければならないことが明記されている。次の2節で述べる欧州評議会による『地域言語または少数言語のための欧州憲章』においてドイツがブランデンブルクのソルブ人に対して義務を負うのも、これらの法的に定められたソルブ人地区に対してである。しかし、これは裏を返せば、ソルブ人地区以外の場所に住むソルブ人に対しては法的権利が保証されないでもよい、という解釈を許容することであり、実際それに関連した問題が生じている(2.3.2を参照)。また、法律で保証された権利とはうらはらに、経済性をより重視した政策によってソルブ語の存続が脅かされる事



態が起きているのもまた、厳しい現実である(2.3.2.で言及する、ホルノ村の消滅、学校閉鎖、資

金援助の問題など)。

2. 『地域言語または少数言語のための憲章』とソルブ語

1. 『地域言語または少数言語のための憲章』について

欧州評議会が1992年に定めた『地域言語または少数言語のための欧州憲章』(The European Charter for Regional or Minority Languages)(以下では『憲章』とする)には、2007年1月現在、欧州連合主要国をはじめ、アルメニア、アゼルバイジャン、クロアチア、セルビア、モンテネグロ、ウクライナなどが締約国として加わっている。スラヴ・東欧圏で憲章に参加していないのは EU 加盟国ではポーランド、ブルガリア、ルーマニア、EU 外ではロシア、ベラルーシ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、旧ユーゴスラヴィアマケドニア共和国、アルバニアである。憲章が制定されるまでの経緯、憲章の構成、全文の日本語訳は渋谷編(前掲書 pp.23 39)にある。欧州評議会のHP(http://www.coe.int/T/E/Legal_Affairs/Local_and_regional_Democracy/Regional_or_Minority_languages/)にも、沿革、憲章の全文、各国の報告書などが掲載されている。憲章の正式な文章は英語とフランス語の二言語で書かれており、便宜的にそれ以外の言語による訳文が、締約国の必要に応じて作成されている。2.3 に示す報告書、評価書も上記アドレスに掲載のものである。

憲章は、その前文で「消滅の危機にさらされているものすらある欧州の歴史的な地域言語または少数言語を保護することが、欧州の文化的富と伝統の維持発展に貢献することを考慮し」「欧州諸国および諸地域における地域言語または少数言語の保護促進が国家主権と領域保全の枠内における、民主主義と文化的多様性の原則にもとづいた欧州建設への大きな貢献をなすことを認識し」この憲章を定めるとしている(訳文は渋谷編前掲書、p.27 による)。この崇高ともいえる理念を現実のものとするために、以下で述べるように、憲章では締約国が実施すべき規定が設けられており、一方締約国には、それを実践し、定期的にその成果を欧州評議会に報告し、また専門家委員会の評価を受け、問題を指摘された点に関しては改善の試みをする、という一連の義務が課せられる。

このような、国家の外部から与えられるガイドラインと監視体制の重要性は、少数言語の保護育成という観点からして疑う余地のないものといえるだろう。ただし、憲章の対象となる「地域言語」「少数言語」とは、締約国の中で伝統的に、かつ一定の領域において使用されている言語であり、しかもその国の公用語でなく、また公用語の方言でもない言語と規定されている。したがって移民の言語は憲章の考慮の圏外におかれている。あるいは、国の公用語ではないがその中の州や政治的に自治権のある地域において公用語であるような言語—たとえばスペインのカタルニア州におけるカタルニア語は、国家公用語でないために憲章の保護の対象言語となりうるのに対して、アイルランド語は、イギリスにおいては少数言語となるために憲章の対象となるが、アイルランド国内では実質的には少数言語であるにもかかわらずアイルランドの第一公用語と定められているために保護の対象とならず、アイルランドがこの憲章に参加できずにいるという、「国家」を枠組みの基準としているがゆえに生じる矛盾がある。また、ドイツにおける低地ドイツ語はドイツ語と異なる「言語」とみなされて保護対象となっているが、ある言語の「方言」と「別の言語」の区別がきわめて恣意的であるという現実を考えると、保護対象となりうる「言語」の定義が問題となるケースが生じることが十分に予想される。たとえばポーランドは現在この憲

章に参加していないが、参加した場合、カシューブ語の地位が問題となるかもしれない。このように、憲章の崇高な理念の背後に、さまざまな現実的な問題が潜んでいることも忘れてはならないのである。

憲章は、前文とそれに続く 5 部から構成され、第 1 部(第 $1 \sim 6$ 条)は一般規定、第 2 部(第 7 条)は憲章の目的と原則について定め、第 3 部(8 条 ~ 14 条)は「地域言語または少数言語の使用を促進する措置」を定めている。締約国が実践すべきことがらはこの 3 部に詳述されており、第 4 部 (15 条)は憲章の実施を監査する制度に関する規定、第 5 部は最終規定である。

憲章の実施にもっとも重要な意味を持つ第3部では、言語使用の保護と育成のための具体的な方策として、教育、法的権利、行政サービス、メディア、文化、経済、国際関係に関する計98の措置が定められている。地域言語や少数言語のおかれている状況が国や地方によって異なることを配慮して、憲章ではこれらの措置を一律に課すのではなく、「ア・ラ・カルト方式」とよばれる方針にもとづき、それそれの締約国が98のうち必要と考える最低35の措置を採用し、それを実践することが義務づけられている。(表1)

憲章第3部の条項	措置の数	ミニマム
8条 教育	26	3
9条 司法機関	15	2
10条 行政および公共サービス	21	2
11 条 メディア	15	2
12条 文化活動と施設	10	3
13 条 経済・社会生活	9	2
14 条 国家間関係	2	0
全体	98	35

【表1 憲章第3部の内容と措置の数】

また憲章では、その遂行に関して、3年を一循環とする監視制度を定めている。これは(1)締約国による定期報告書の提出、(2)欧州評議会が定める専門家委員会による前記(1)の吟味と委員会の対象地域への視察、ならびにそれらにもとづく評価書の提出、(3)欧州評議会閣僚委員会による(2)の公表ならびに締約国に対する提言、である。

2. ドイツにおける憲章の実施とソルブ語への適用

ドイツ連邦は 1992 年、憲章の公開と同時に調印し、1998 年ドイツ連邦議会と連邦参議院の承認を経て、1999 年 1 月 1 日よりこれを実施することとなった。ドイツにおいて、憲章の対象となる言語はデンマーク語(シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州)、北フリジア語(シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州)、東(ザーテル)フリジア語(ニーダーザクセン州)、低地ドイツ語(ブレーメン、ハンブルク、メクレンブルク 西ポメラニア、ニーダーザクセン、シュレスヴィヒ・ホルシュタインの各州)、それに上ソルブ語(ザクセン自由州)、下ソルブ語(ブランデンブルク州)、シンティ・

ロマ語(ヘッセ州)である。

これらの各言語には、すでに述べたように、一律に同じ措置が適用されるのではなく、それぞれの言語に必要と判断された措置が適用される。以下では、ソルブ語について適用されている措置について述べる。

2.1. 第8条「教育」

憲章第 8 条の教育に関する措置は全部で 26 項目あり、締約国はそのうち最低 3 項目を選択して実施する義務がある。上ソルブ語に関しては 10 項目、下ソルブに関しては 8 項目が選択されている。両者で異なるのは 1 節 a(就学前教育に対する措置)の細目 iii b iv、同じく 1 節 a(技術的・職業的教育に対する措置)の適用の有無、a(大学ならびにその他の高等教育に関する措置)の細目 a(は)の過用の有無である。一覧表にすると下記の表 3 のとおり。これらについて以下に記述する。(US は上ソルブ語、LS は下ソルブ語、またa(は措置が適用されていることを、*は適応外であることを示す。以下の表 4~6 も同じ)

1 節							2 節	計			
US	a.iii	a.iii b.iv c.iv d.iv e.ii f.iii g h i							\checkmark	10	
LS	a.iv	b.iv	c.iv	*	e.iii	f.iii	g	h	i	*	8

【表3 憲章3部8条「教育」に関する措置の実施項目】

1 節には a から i までの項目があり、そのうち $a \sim f$ はさらにローマ数字で示される細目に分かれる。

項目 a は就学前教育に関する措置を定めたもので、上ソルブ語(ザクセン)に対して適用される 細目 a.iii は、a.i に定められた措置(就学前教育を当該言語で行うこと)もしくは a.ii の措置(就学前教育の実質的部分を当該言語で行うこと)のどちらか 1 つを、少なくとも家族がそう希望し、かつその数が十分と思われる子供に対して行うこと、とし、下ソルブ語(ブランデンブルク)に適用される 1.a.iv は、公的機関が就学前教育に直接権限を持たない場合、i~iii の措置の適用を促進および/または奨励すること、としている。

項目 b は初等教育に関する措置を定めたもので、ソルブ語に適用される細目 iv は、b.i~iii に定められた措置(初等教育を当該言語で実施するか、もしくはそのカリキュラムの不可分の一部として行うこと)の1つを、少なくとも家族が希望し、かつその数が充分と思われる生徒に対して行うこと、としている。

項目 c は中等教育に関する、また項目 d は技術的および職業的教育に関する措置を定めたもので、ソルブ語に適応されるその iv(d.iv は上ソルブ語のみ)は、上記 b の措置の内容を中等教育、技術・職業的教育に置き換えた規定である。

項目 e は大学およびその他の高等教育に対する措置を定めたもので、その ii は、大学・高等教育の科目として、当該言語の研究のために便宜を図ること、iii は、ii が提供できない場合、大学もしくはその他の高等教育機関でのこれらの言語研究のための便宜提供を奨励および/または認可すること、としている。 e.ii は、e.i で定めるところの措置すなわち「大学およびその他の高等教育を当該言語で行うこと」が適用できない場合にこれに準じる措置として考慮されていると考えられ、上ソルブ語にはこれが適用され、一方下ソルブ語にはそれよりさらに基準の低い iii が適

用されている。

項目 f は成人教育に関する措置であり、その iii は、成人に対する当該言語の教育の促進および/または奨励を規定したものである。

項目 g は当該言語の歴史および文化に関する教育を確保するための措置をとること、項目 h は締約国が受け入れた a から g の措置の実施に必要な教員の基礎的および継続的訓練の確保を定めたもの、そして項目 i は上記の $a \sim h$ の措置およびその発展を記録し、これに関する公開の定期報告を作成する監視機関を設置することを定めたものである。これらは上ソルブ、下ソルブどちらにも適用される。

8条2節の内容は「教育について、ならびに当該言語が伝統的に使用されている領域以外の領域に関して、締約国は当該言語の使用者の数が許す場合、適切なすべての教育段階において、当該言語での教育、またはその言語の教育を認可し、奨励または設置することを約束する」となっている。これは上ソルブ語のみに適用される。

2.2. 第9条「司法機関」

9条は司法に関する措置を定めたもので、憲章では 1~3 節に分けられた 15 項目が提示されており、締約国のミニマムは 2 項目とされている。上ソルブに関しては 8、下ソルブに関しては 5 の措置が定められている。一覧表にすると以下のとおり。

1節 2節 計							計		
US	a.ii	a.iii	b.ii	b.iii	c.ii	c.iii	d	a	8
LS	a.ii	a.iii	*	b.iii	*	c.iii	*	a	5

【表4 憲章第3部9条「司法機関」に関する措置の実施項目】

9条1節は裁判に関する措置を定めたもので、a~dの項目に分かれ、a~c は i~iii/iv の細目を含む。

1節 a は刑事手続きについての措置で、ソルブ語に適用される細目 ii は、裁判の被告となった場合、被告人に当該言語を使用する権利を保障するもの、iii は取り調べおよび証拠が当該言語によって作成されていることを理由に受理不可と判断されることのないように定めたものである。

項目 b は民事手続きについての措置で、その ii は、当事者本人が裁判所に出廷しなければならない場合に、自己の言語を、追加費用をともなうことなく使用することを認めるもので、上ソルブ語のみに適用されている。また b.iii は、文書および証拠が当該言語で作成されることを認める措置である。

項目 c は行政問題に関する裁判の手続きに関しての措置で、その ii、 iii は b のそれぞれと同じ 内容である。b.ii 同様 c.ii も上ソルブ語にのみ適用される。

項目 d.は上記 b、 c の iii の適用において必要とされる通訳、翻訳に関して、当事者が追加の費用を負担しなくてよいことを認めるものである。

2 節は法的文書の効力についての措置であり、その a は、国内で作成された法的文書の効力を、 当該言語で作成されたことのみを理由にして否定しないとしたものである。

2.3. 第10条「行政機関および公共サービス」

10 条は行政、公共サービスに関する措置を定めたもので、 $1\sim5$ 節 21 項目が提示されており、締約国のミニマムは 2、ソルブ語に関しては 7 つの措置が採用されている。上ソルブと下ソルブで措置の数は同じだが、2 節と 4 節の適用措置が異なっている。それらは以下の表のとおりであ

	1節		2 節		3 節	4 [節	5 節	計
US	a.iv/v	a	b	g	b/c	*	c	\checkmark	7
LS	a.iv/v	*	b	g	b/c	a	С	$\sqrt{}$	7

【表 5 憲章第3部10条「行政機関および公共サービス」に関する措置の実施項目】

1節 a.は国の行政区域で当該言語の使用住民の数が正当なだけのものである場合の行政に関する措置であり、その iv/v は当該言語での書面・口頭での申請、文書の提出を確保することとされている。

2 節は地方・地域の機関において当該言語の使用住民の数が正当なだけのものである場合について定めた措置で、その a は地域・地方機関において当該言語の使用を認めること、b は書面、口頭での当該言語での申請を確保すること、また g は当該言語での伝統的および正確な地名を、公用語での名称と並んで使用または採用することを定めたものである。このうち、a は下ソルブ語には適応されていない。

3 節は公共サービスに関する措置で、b/c は公共サービスに対する申請が当該言語でなされることが定められている。

4 節は上記 1~3 の実施にあたっての配慮に関する措置で、その a は、要望があった場合翻訳または通訳を提供すること、c は当該言語の知識を持った公共サービス従業員からの、当該言語使用領域への配置要求を可能な限り満たすこと、である。このうち 4.a は下ソルプ語にのみ適用される措置である。

5 節は締約国が、要望に応じて当該言語での姓の使用または採用を認めることを定めたもので、 上・下ソルブ語に適用されている。

2.4. 第11条「メディア」

第 11 条のメディアに関する措置は 3 節 15 項目からなり、ミニマムは 2、上ソルブについては 6、下ソルブについては 5 項目が設定されている。

			2 節	計			
US	b.ii	c.ii	d.	e.i	f.ii	$\sqrt{}$	6
LS	b.ii	c.ii	d	e.i	*	$\sqrt{}$	5

【表6 憲章第3部11条「メディア」に関する措置の実施項目】

1 節の項目 a は当該言語での独立したテレビ・ラジオ放送局あるいはチャンネルの設立、もしくは独自の番組の制作についての措置で、これはソルブ語には適用されていない。

項目 b の ii は当該言語でのラジオ番組の定期的放送を、項目 c.ii はテレビ番組の定期的放送を 奨励および/または助長すること、項目 d は当該言語での視聴覚作品の制作および配給を奨励/助 長すること、項目 e の i は当該言語で少なくとも 1 つの新聞の設立および/または維持を奨励・助 長すること、とされている。また項目 f.ii は、法律によってメディアへの財政援助が定められて いる場合、これを視聴覚作品制作にも適応するというものであり、これは上ソルブ語にのみ採用 されている。

2節は、当該言語と同一もしくは類似した隣接国からのラジオ/テレビ放送の中継や直接受信の

自由と、同時にそれによって発生する義務および責任を定めたものである。この措置は上・下ソルブ語双方に適応されているが、現実には隣接国(チェコ、ポーランドなど)でソルブ語のテレビ、ラジオ放送が行われていないことを鑑みると、現時点での実質的な意義はあまりないと考えられる。

2.5. 第12条「文化活動ならびに施設」

12条の文化活動ならびに施設に関する措置には3節10項目があり、ミニマムは3項目、ソルブ語に関してはすべての措置が採用されている。

1 節は締約国の、当該言語使用域内でのさまざまな文化施設(図書館、文化センター、博物館、劇場など)に対する、また芸術作品の発表や制作の分野における役割について定めたもので、項目 $a\sim h$ を含む。項目 a は当該言語によるさまざまな作品発表の奨励、項目 b はそれらの作品の他の言語への翻訳、吹き替えなどによる紹介の奨励、項目 c は他の言語の作品の当該言語への翻訳、吹き替えなどによる紹介の奨励である。また項目 f では文化活動の施設整備および計画について当該言語の使用者代表の参加が奨励されており、g では当該言語による作品の収集、保管、展示、出版を行う団体の設立を奨励/助長することが定められている。

2 節では当該言語が伝統的に使用されている領域以外の領域において、当該言語の使用者の数が許す限りにおいて、1 条に準じた措置をとることとされており、また 3 節では、外国へむけた自国の文化政策において、当該言語の文化に適切な位置を与えることが定められている。

2.6. 第13条「経済的および社会的生活」

第 13 条の経済的および社会的生活に関する措置には 2 節 9 項目が設けられており、ミニマムとして課される措置の数は 2 項目、ソルブ語に関しては上ソルブが 4、下ソルブが 3 項の適用を受けている。それらは双方に共通する措置が 1.a,c,d であり、上ソルブのみに 2 節 c が適用される。

項目 1.a は、国内法規から、雇用契約、製品/設備の使用説明書のような技術文書などの文書における当該言語の使用を理由なく禁じたり制限する規定を撤廃すること、1.c は経済的および社会的活動における当該言語の使用に支障を与えることを意図する行為に反対すること、を措置としている。1.d は左記以外の措置に追って当該言語の使用を助長/または奨励することとしている。また上ソルブ語に適用される 2 節 c の措置は、病院、養老院、宿泊所などの福利厚生施設が、当該言語使用者に対して、その言語で受入および処遇する可能性を提供するよう確保すること、となっている。

以上が憲章第3部に提示されている具体的な措置のソルブ語に対する適用である。

3.ドイツ連邦による第2回報告書と専門家委員会による第2回評価書

すでに 2.1.で紹介したように、憲章締約国は、(1) 締約国による報告書の提出、(2) 専門家委員会の視察と評価、(3) 欧州評議会からの提言、という、3 年を一循環とする監視体制のもとにおかれる。

ドイツでは第 1 期として(1) が 2000 年 11 月、(2) が 2002 年 7 月、(3) が同 12 月に、また第 2 期として(1)が 2004 年 4 月、(2)が 2005 年 6 月、(3)が 2006 年 3 月に、欧州評議会に提出されている。(1)についてはドイツ内務省の HP で、またすべての文書が欧州評議会の HP で閲覧可能である。本稿では、第 2 期のドイツ連邦による報告書とそこに添えられたソルブ民族組織ドモヴィナのコメント、そして報告書に対する専門家委員会の第 2 回評価書の内容を、言語の保護・育成と

いう観点からもっとも重要と考えられる第3部8条の教育に関する措置に焦点をあてて見ていく ことにする。

3.1. ドイツ連邦による第2回報告書

2000 年 11 月に提出されたドイツ連邦報告書『地域または少数言語のための欧州憲章第 15 条 1 節にもとづくドイツ連邦共和国による第 1 回報告書 2000 年』"First Report submitted by the Federal Republic of Germany under Article 15. paragraph 1. of the European Charter for Regioanl or Minority Languages, 2000" (以下「第 1 報告書」とする)は、全 251 ページからなり、その 67~91 ページ(報告書のページは英語版による)がソルブ語についての報告に充てられている。一方、同じタイトルの第 2 回めの報告書 "Second Report submitted by the Federal Republic of Germany under Article 15. paragraph 1. of the European Charter for Regioanl or Minority Languages, 2003" (以下「第 2 報告書」) は全 481 ページからなり、ソルブ語については 111~164 ページに詳細が述べられている。

以下では、その第2報告書の中から、教育に関して注目すべき箇所について、報告書の通し番号(【360】のように示す)にしたがってその内容を抜粋する。また同報告書の末尾に添付されているソルプ民族組織ドモヴィナのコメントは【D—360】のようにして、関連箇所ごとにあわせて示す。

【360】ザクセン州では2001 年 11 月より施行の児童保育施設法(Act on Children's Day-Care Institutions)、ブランデンブルク州では1992 年 6 月に施行された児童保育センター法(the Children's Day-Care Centres Act)が、ソルブ語におけるソルブ語・ソルブ文化育成のための幼児教育の法の基本である。また1991 年に施行されたザクセン学校法ならびに1996 年 4 月に施行されたブランデンブルク学校法によって、学校でのソルブ語の教育について特別な配慮がなされるべきであることが記されている。

【D-360】ブランデンブルク学校法は 2001 年 6 月に修正された。また現行の児童保育センター 法は 2001 年 12 月に定められたものである。

【362】2003 年 6 月現在で、ザクセン自由州では WITAJ 計画にもとづく 12 の幼稚園(以下本稿では「WITAJ 幼稚園」とする; WITAJ については本稿 3.で述べる)、また 1 つ以上の WITAJ グループを運営する 12 の幼稚園と、ソルブの伝統文化・行事について何らかの配慮をしている 54 の幼稚園がある。ジロウ(ブランデンブルク)では 1998 年から、デュルゲンハウゼンとローネ(ザクセン)では 1999 年から、ソルブ学校連盟が WITAJ 幼稚園の運営にあたり、約 100 名の子供たちが通っている。それら 3 つの幼稚園で働くソルブ語教師は計 14 名である。

【363】ザクセン州キリスト教社会主義教育連合(Christisches Soziales Bildungswerk Sachsen e.V.)は ソルブ語ならびにソルブ―ドイツ二言語による保育を実施する 10 の幼稚園の運営にあたってお り、そこに含まれるソルブ語のグループは 23 あり、全園児数 654 のうち 266 人がこれに該当す る。

【364】(この項目は上ソルブ語への措置についての報告である)先の専門家委員会評価書の 428 で要求された法的枠組みはすでに実現された⁴⁾。すなわち 2002 年に施行されたザクセン児童保育施設法によって、ソルブ地区にある幼稚園、保育所にはソルブ語・ソルブ文化の育成に力を入れることが求められ、児童保育センターに関する法令が定められた。とくに人員の確保のために、2002年には 447,853 ユーロの予算が配分された。2003 年にこの法令は修正され、目下これ以上の予算の分配は必要ないと考える。また教材の不足も確認されなかった。充分な資格のある教師の不足はソルブ人基金からも、その他の関係機関からも以前から指摘されていることであり、これにつ

いては各機関が協力して問題の解決にあたるよう努力している。

2002 年 10 月 ~ 2003 年 7 月にはホイェルスヴェルダで保育士育成の集中コースが設けられた。これはソルブ人基金により資金提供され、WITAJ 言語センターが実施した。ここでは 4 人の現職保育士が教育を受けたが、この間その 4 人に代わり非常勤の保育士が雇われ、その雇用給与の 95 パーセントをザクセン州が負担した。

さらにソルブ側組織は、州雇用局と、同様の教育措置に対する資金提供を協議中である。

【D—364】ドモヴィナと WITAJ 言語センターが運営するソルブ語教員のためのソルブ語集中コースは、州労働局から正式な資格認定を与えられていない。そのためこのコースを終了した未就職の人材が将来 WITAJ の正式な教員として職を得る機会が与えられないという問題が解決されていない。

【365】(以下【369】までは下ソルブ語への措置について述べられている)ブランデンブルク州では就学前教育は各市町村自治体の責任において行われ、自治体独立運営法によって各自治体は、就学前教育の施設やさまざまな手段に対する予算を配分されている。

【366】 1998 年より、ジロウで、それまで自治体が運営していた幼稚園において、ソルブ学校連盟の運営のもと WITAJ 計画が実施されている。ソルブ学校連盟はこの幼稚園の維持と運営のために定常的に補助金を得ている。

【367】ソルブ語教育を主たる目的とした 12 の幼稚園があり、またシュプレーヴァルトにある複数の幼稚園では、ソルブの伝統的な年間行事、歌やダンス、絵本などを通してソルブ語やソルブ文化に親しむ教育を実施している。

【D—367】実際に WITAJ によるソルブ語教育を実施しているのは 7 つの幼稚園であり、すべて の園児に対して行っているのはそのうち 2 つのみ、残り 5 つは最低 1 グループで WITAJ 方式に よるソルブ語教育を行っているだけである。

【368】オーバーシュプレーヴァルト・ラウジッツ郡では、青少年福祉サービス事務局が「児童 保育センターにおける異文化教育」にソルブ語の学習を取り入れることを検討している。

【D-368】我々はこれに関していかなる情報も得てない。

【369】ブランデンブルク州は、2002年の専門家委員会による第1報告書で指摘された、WITAJ計画発展のための予算枠組みの確保は、充分なされているという見解である。親がWITAJ計画にもとづく保育を子供に望む場合には、当該自治体にその旨申請をしなければならない。申請を受けた自治体は、児童保育センター法10条に定められた教育措置に関するパラメータに照合して、必要であれば施設を提供しなければならない。しかしながら法令で定められた以上の人員については、地元自治体がその配置について何らかの措置をとる義務を負うものではない。

また、ソルブ人基金に配分される予算には、保育施設におけるソルブ語教育も含まれている。 また、州の青少年計画のもとに配分されているさまざまな補助的資金が、過去数年にわたって すでに、WITAJ 計画にソルブ語母語話者が参与するための費用に充てられている。

【D—369】児童保育センター法が定めている財政的構造はブランデンブルク州における児童保育活動に対する予算法の枠組みを提供しているのみで、ここには WITAJ 計画の推進は含まれていない。各地域自治体レベルでの限られた予算スケジュールでは、バイリンガル教育を根付かせるために必要となる補助的支出はまかなえないし、実際にしばしばそのような予算はまったく考慮されない。ザクセン州においては児童保育センター法によって、ソルブ語あるいはドイツ—ソルブ語二言語保育に対して必要とされる追加的人件費の 12.5%までを公的負担することを定めた補

足的な措置がとられているが、ブランデンブルク州ではそのような適切な措置が何も実践されていない。当局にはこのような追加的要請に答えることが要求される。

【370】8 条 1 節 b の小学校教育については、ブランデンブルク州では 23 校で約 1000 人がソルブ語を学んでいる。

【D-370】26 校である。

【371】ソルブ語学級の参加児童数は実質的にも、また割合の上でも増加している。後者はとくに顕著であり、これはソルブ語学級に通う子供の数が増加している一方、この地域の全体の子供の数が減少しているためでもある。

【372】コトブス市ならびにダーメ・シュプレーヴァルト、オーバーシュプレーワルト・ラウジッツ、シュプレー・ナイセ各州の教育局は、ソルブ語学習の選択の権利があることを小学校入学前の児童、もしくは転校前の児童を持つ親に周知しなければならない。これはブランデンブルク州教育・青少年・スポーツ省の広報誌によって行われており、上記の各州教育局は、親への周知はよくなされていると評価している。最近の、ソルブ語学級に通う子供の数の増加もこのことを裏付けている。

【D—372】ソルブ語教育の地位の強化が火急の課題である。小学校3年から必修科目として英語が導入されることに加え、ほとんどのソルブ語の授業が課外に行われているという状況から、多くの親が上級になるにしたがって子供をソルブ語授業から撤退させるか、あるいは最初からこれを受けさせないようになることが懸念される。今後、「宗教教育」「英語」などの必修科目が増えることがさらに、この状況を悪化させるものと考えられる。

【374】第1回専門家委員会評価書では、ソルブ地区に指定されている地域以外の地域に含まれる小学校でもソルブ語の授業が実践されるべきであると提言しているが、これは憲章で定めらたものではない。憲章8条1節では「その言語が使用されている地域において」とある。したがって州政府は、小学校に関する規定は完全に遂行されていると考える。

【378】ブランデンブルク州では約500人の生徒が中等教育でソルブ語の授業を受けている。そのほとんどは第二外国語としてであるが、正規の外国語授業以外に補足的に行われている場合もある。

【381】2002/3 年度において、ザクセン州カメンツ郡およびバウツェン郡には6つのソルブ語実務中学がある。2002/3 年度の終わりでザクセンの教育文化省はクロストヴィッツにあるソルブ語中学校の財政分担を打ち切った。これは2003/4 年度への入学者が3クラス分しかなかったためであり、これら3クラスの生徒は隣接するラルビッツのソルブ語実務中学に編入された。したがって2003/4 年度には、5つのソルブ語中学が運営され、そのうち4つにはソルブ語を母語として授業を行うクラスならびにソルブ語が第二言語として教授されるクラスがあり、さらにそのほかにバウツェン地区教育局管轄内の2校でソルブ語が第二言語として教育される。カリキュラムはザクセン州の実務中学のそれに従ったものであり、ソルブ語を母語とするクラスでは、数学、物理、科学、生物、それにドイツ語以外の科目はソルブ語で実施されている。

【384】2002/2003 年度、ザクセン州では全部で 33 の学校でソルブ語教育が実施されており、その数は 2534 人、うち約 850 人がソルブ語を母語とする授業を受けている。

【D—384】ソルブ語を母語とする授業を受けているのは 2534 人中 1254 人であり、ソルブ・ドイツ語学校に対する'すべてのタイプの学校についての包括的構想(Schulartübergreifendes Konzept)'にもとづいて教育を受けている。

【386】(上記 381 に関連して) 2002 年の第1回専門家委員会評価書の 431—2 に言及されたクロストヴィッツ(ザクセン州)の実業中等学校に関する合理化措置については、過去数年間にこの学校の5年生の数が大幅に減少していたことを指摘する必要がある(2001/2002 年では17人、2002/2003年で8人)。そのために、中等実務学校(Realschule)や基幹学校(Hauptschule)で与えられる教育措置が十分に与えられないという恐れがあった。しかし市は、以前より要請があったにもも関わらず、構造的な改革に着手せずにいた。クロストヴィッツ実業中等学校と同様のソルブ語教育は隣接する市のソルブ語中学でも行われており、そのために、ザクセン州文化省は、クロストヴィッツ中等学校の2001/2002、2002/2003年の5年次について、実質的な必要がないものと判断した。そして州の、このクラス維持に関する関与を放棄した。ドレスデンの行政裁判所は、2001年にクロストヴィッツ市が申請したこの件の一時的差し止めを、2001年7月30日付けの決定にもとづいて却下し、ザクセン州高等行政裁判所も2001年8月22日の決定にもとづき、この件に関しての異議申し立ての許可請求を退けた。2003/4年度にクロストヴィッツ実業中学の5年生に進学する生徒は7人しかおらず、上記381に述べたように、ザクセン州はこのクラスに関して財政負担を行わないことを決定したのである。

【D—386】クロストヴィッツ中等学校に関する 2002 年の専門家委員会の報告はまったく正当なものである。ザクセン州の関係省が示した生徒数は、実際の状況をまったく反映していない。もしこのクラスの存続措置がとられていたなら、そこに進学を希望する生徒数はもっと多かったはずである。また地元の教育局が示した生徒の統計数は、代表的な地区の生徒数のみを数えたもので、近隣の、ソルブ語での母語授業が提供されていない地域から通って来る生徒の数は含まれていない。これまで、クロストヴィッツのソルブ語小学校 4 年を修了した生徒は同じ町のソルブ語中学校に通っていたのである。この問題に関しては、よりポジティヴな姿勢を当局がとることが要求される。

【396】下ソルブ言語文化学校が、コトブス成人教育センターの一部として活動しており、成人ならびにソルブ語教師のためのソルブ語コースが設けられている。

【397】成人教育の中でのソルブ語に対する関心は高まっており、コトブス成人教育センターの中にある下ソルブ言語文化学校では、2001年の時点で2420人がソルブ語あるいはソルブ文化に関するクラスで学んでいる。そのうち8%は外国人、また4%はドイツの、ソルブ語が伝統的に使用される地域外からの参加者である。

【408】教員養成に関して 1992 年にコトブス教育開発事務局(Arbeitsstelle Bildungsentwicklung Cottbus, ABC) がコトブスの下ソルブギムナジウムに設置された。

ギムナジウムの教育をさらに支援し、下ソルブ語科目およびその他のソルブ関連科目の教員養成のための課題として

- ・ソルブ語の再活性化、さらに進んだ言語教育の訓練
- ・科目に特定化した教授法に関する教育

が挙げられる。教師の研修については ABC に対して予算が配分されている。また教員研修のための指導員が特別に雇用され、ABC と教員指導員はブランデンブルク州教育研究所と協力して、独自の研修制度を開発した。これは通常、月 $1\sim2$ 度行われ、集中形式として夏休み始め、または春休み中に行われている。

3.2. 専門家委員会による 2005 年第 2 回目の評価書

憲章の規定により、締約国は欧州評議会が定める専門家委員会による報告書の吟味、また対象

地域への視察による評価を受けなければならない。そこでは、それぞれの定められた措置がどの 程度実施されているか、すなわち完全に遂行されている、部分的にしか遂行されていない、ある いは全く遂行されていない、のいずれであるかが評価され、点数化される。ソルブに対する憲章 実施についての専門家委員会の"採点"結果については、2.4.3.で紹介する。

ドイツにおける保護言語については、上記第 2 報告書を受けて、専門家委員会による第 2 回目の評価書(Report of the Committee of Experts on the Application of the Charter in Germany)が 2005 年に提出された。評価書は本体 129 ページ、それに続いて適応される措置の一覧、ドイツ連邦による評価書に対する反論とコメント、そして欧州評議会閣僚委員会からドイツに向けられた憲章実施に関する提言が示された構成となっており、ソルブ語に関しては上ソルブ語について $22 \sim 33$ ページで、下ソルブ語について $34 \sim 45$ ページで、言及がなされている。以下では、その中でとくに下ソルブ語の教育に関連して重要と思われる箇所を取り上げて紹介する。上記報告書の場合と同じように、評価書の項目番号を【22】のように示す。

『第2報告書に対する専門家委員会の評価』

【22】第1回目の専門家委員会評価書の【54】では、下ソルブのホルノ村の解体について指摘があった⁵⁾。ここは伝統的に下ソルブ語が使用される地域であり、第1評価書では、このような(住民を移転させ村を廃村として褐炭採掘を推進する)決定がなされる場合、経済性に対して地域的あるいは少数言語の保護を充分考慮すべきであるとしている。またホルノの件に関しては、ソルブ語に対してとられた被害的影響を救済するためのあらゆる適切な措置を当局がとることを奨励している。

【23】ホルノ村の移転は成功裏に完了したと理解するが、しかしながらこれによってソルブ語が被った被害を救済する実質的な措置については委員会は何ら情報を得ていない。また、同様の、褐炭採掘のためのソルブ人の村の移転計画が他にもあるという情報があり、委員会はこの件に関して深く懸念をいただくものであり、次回以後の報告に注目する。

【164-166;179】委員会は、ブランデンブルク州における憲章の対象となるソルブ語の範囲が、州のソルブ人に関する法によって法的に定められ行政上の措置が慣行されてきた地区に限定されていると観察する。しかし委員会の知るところでは、これ以外にもソルブ語が伝統的に使用されてきた地域がある。これらの地域を含む市町村は、ソルブ語の保護の適用措置から除外されることを望む可能性がある、というのも、適用の範囲とみなされると、市町村にしかるべき措置をとるための負担が負わされるからである。一方、たとえばリュッベン市は、ソルブ地区として認定を希望しているが、そのためにはソルブ人法3章2節を修正しなければならないという情報も得た。

伝統的なソルブ人居住地域の定義は、本憲章の実施にきわめて重要な意味を持つことから、委員会はドイツ当局に対して、法的また行政上の障害によって、下ソルブ語が伝統的に使用されてきた地域に本憲章が導入されることが妨げられないよう、確認する。

【167】WITAJ 計画は順調に推進されていると評価できるが、同時に、公的な予算の拡張、具体的な予算枠の必要性が見られる。

【169,170】下ソルブ語教育に関しては、十分な予算が確保されておらず、また下ソルブ全体について予算全体が統括されていない。WITAJに対する関心は高まっており参加する子供も増加傾向にある一方で、資格のある教師、保育者の不足に対応する予算措置がとられていない。

以上から、8条aに関連して委員会はドイツ当局に対し、より構造化された政策を採用し、下

ソルブ語の就学前教育に対して必要な資金を配分することを奨励する。

【172—174】小学校については、ソルブ地区に定められた地域以外にも伝統的にソルブ語が使用されてきた地域があり、それらの地域でも一定数の要求があればソルブ語教育の実施にむけて自治体が積極的に措置をとるべきであるというソルブ人の要求に注目する。とりわけ WITAJ によって就学前教育を受けた子供が小学校で引き続きソルブ語の教育が行われるよう配慮すべきである。ドイツ側報告書では、ソルブ地区と法的に定められた地域外でのソルブ語教育に関しては義務を負わないとしているが、委員会は、伝統的にソルブ語が使用されている地域の小学校においてソルブ語による、あるいはソルブ語の授業を提供することは、憲章の規定に含まれるものであり、基準を満たす自治体を行政的手段によって除外するものではないという点をドイツ当局に喚起する。

そこで委員会は、ドイツ当局に対して、下ソルブ語に対する充分な要求がある地域においては、 とくに就学前教育からの継続性に鑑みて、下ソルブ語による、あるいは下ソルブ語の教育を提供 することを奨励する。

【177】中等教育においても、法的に定められたソルブ地区であれ、そうでない地区であれ、充分な要求がある場合にはソルブ語授業が実施されるよう州当局に奨励する。またソルブ語の授業が正規のカリキュラムに組み込まれるよう当局に奨励する。

【180】下ソルブ語を学習した生徒の多くがコトブスの下ソルブギムナジウムに進学する。この ギムナジウムはブランデンブルク州立からコトブス市立に移行することが決定しているが、下ソ ルブ語使用者の多くが、これによってこのギムナジウムの財政基盤が悪化し、教育に悪影響が出 ることを懸念している。委員会はしたがって、州当局に対して、この移行がソルブ語教育にとっ てネガティヴな影響を及ぼさないような配慮をすることを奨励する。

このほか評価書は、教員不足の問題について言及し、ドイツ当局に対して、教育のすべてのレベルにおいてみられる恒常的な下ソルブ語教師の不足を解消するための措置をとり、とくに下ソルブ語教師の基礎的、また継続的な訓練を後押しすることを奨励すると述べている。

4. ソルブ研究者による憲章実施ならびに報告書・評価書に対するコメント

ソルブ文化雑誌 Rozhlad の 2005 年 12 月号ならびに 2006 年 1 月号に、ソルブ社会言語学者 Ludwig Elle 氏による「地域言語または少数言語のための欧州憲章とソルブ人における言語政策」と題した記事が掲載されている。そこでこの記事の中から、すでに 2.1.、 2.2.で記述した内容と重複する部分を除き、本稿のこれまでの記述との関連でとくに重要と考えられる部分を翻訳に近い形で紹介する。これはまた、上記 2.3.で紹介した報告書ならびに評価書への、ソルブ人研究者の立場からのコメントとしても有益な内容のものである。以下の 2.4.1 は Elle (2005:437)の 6.に、また 2.4.2.は Elle(2006:2)の 7 に、 2.4.3 は同 8 の節に対応する。

4.1. 憲章とドイツにおける地域および少数言語

ドイツ連邦共和国が 1992 年に憲章に調印したさい、デンマーク語、ソルブ語、北フリジア語が該当することは当初より明らかであった。さらに検討を要するのは下記のグループであった: a)ロマ語(シンティ人とロマ人の言語)

90年代半ばに連邦内務省においてシンティ人とロマ人をドイツにおける民族的少数派として認める方針が成立した。それとともに原則として、彼らを保護の対象とすることが定められた。しかしながら憲章3部に依拠しての彼らの言語の保護は、彼らがドイツ全土に拡散しているとい

う問題のために実現されそうになかった。(憲章では、一定の領域において使用される言語が保護の対象となることが定められている。したがって特定の地理的範囲に結びつけることのできない言語は「非領域的言語」とされる。) そこでロマ語は、ドイツ連邦全体を対象とした第2部の内容にしたがって保護されることになり、第3部から選択されたいくつかの措置が8つの州において適応されている。

b) 地域言語としての低地ドイツ語

憲章への参加に関連して問題となったのは、低地ドイツ語がドイツ語の方言なのか、あるいは独立した言語なのかということであった。低地ドイツ語に関心を持つ人々のグループが、この言語を地域言語として認めるように熱心に活動し、そこから、6つの州に共通して適用可能な保護措置を定めるという課題が生じた。そしてシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン州、ハンブルク州、ブレーメン州、メクレンブルク・フォアポンメルン州、ニーダーザクセン州が第3部の措置を制定することで同意した。

c)東(ザーテル)フリジア語

ニーダーザクセン州に含まれる、およそ話者 2000 人ほどとされるこの言語は、少数言語として認められた。しかしその保護に関して状況は劣悪であり、35 の措置を実施するのは容易ではない。

ドイツにおいては 16 の連邦構成州のうち 13 州が憲章の実施に向けて何らかの具体的な形で関与しており、バイエルン州、チューリンゲン州、ザールラント州のみが直接的な関与を持っていない。

憲章への参加準備にあたって、残念ながら、少数民族の、あるいは少数言語に関する機関が一律にそこに加わるよう招かれるということはなかった。北部の言語グループは措置の選択について希望を国家委員会に提出する可能性を得た。ブランデンブルクとザクセンではソルブの組織―ドモヴィナもソルブ研究所も一措置の選択に関与することができなかった。憲章への批准の後、1999年7月にようやく、連邦内務省は、少数民族団体と学術研究組織の代表者たちを交えて最初の「導入のための会議」を開催したのである。

4.2. 憲章とウジツァにおけるソルブ語の保護

上、下ソルブ語にとって、選択された措置は、すでに 40 年にわたって法律上制度化されたものであり、ウジツァにおける民族政策の実質的な部分であった。つまり憲章の 35 項目の措置の導入で格別新しい、あるいは追加的な制度が必要となるわけではなかった。せいぜい、法的にすでに定められている措置を、現実に適用させることができる程度であった。Tomas Pastorはすでに1998 年に、すなわち憲章の実施開始より前に、ウジツァにおける少数民族政策の今後の発展に対する、この文書の限られた意味に注意を向けている—「ドイツ連邦共和国においては、ソルブ語に関して、憲章の第 3 部で扱われている領域の規則はすでに存在するので、憲章がドイツ連邦によって批准され、連邦法のもとで憲章の修正が行われ、ソルブ語に適用可能な形で第 3 部が明記されるとしても、ソルブ語の保護育成についての実質的な権利がもたらされるわけではない。」 6

とはいえ、このような欧州レベルでの文書の持つ政治的意義、そして議論の力は過小評価してはならないものであり、我々の努力でこれをさらに有効に行使しなければならない。(一部略) 2003 年のドイツの報告書は約50 頁にわたりソルブ語に対する保護政策について述べられている。それによれば、すべての規定は遂行され、あるいは過度に実施されていることになっており、専門家委員会の批判は退けられている。この報告書についてのドモヴィナのコメントはかなり貧弱なもので、学校と教育の義務に関することに限定されている。専門家委員会の評価は国の公式な情報ならびにソルブ側組織の情報、そして現場への視察にもとづいている。専門家たちは、上ソルブ語については45 の措置のうち19 は完全に遂行されていると判断し、25 の措置については

部分的に遂行されている、あるいは与えられた情報だけでは完全に遂行されていると確認することはできない、と述べている。下ソルブ語についても評価はほぼ同様で、38 の措置のうち完全に遂行されていると評価されたのは16項目であり、21 の措置については部分的に遂行されていると判断された。上ソルブ語と同じく、遂行されていないとされたのは8条1iの項目であった。

専門家委員会による第2回評価の結果は表7に示されるとおりである(各措置について、専門家委員会が、完全に遂行されていれば3点、不十分であれば1点、実現されていないとみなしたものは0点として採点した結果。各項目で上段が上ソルブへの措置に対する、下段が下ソルブへの措置に対する評価である)。

項目	措置の数	最高達成値	達成度	%
教育	10	30	17	56.7
教 月	8	24	11	45.8
法	8	24	10	41.7
14	5	15	7	46.7
行政	7	21	11	52.4
1117	7	21	9	42.9
メディア	6	18	12	66.7
<i>7</i> ,717	5	15	11	73.3
文化	10	30	26	86.7
X IT	10	30	26	86.7
経済	4	12	6	50.0
經 済	3	9	5	55.8
全体	45	135	82	60.7
上 件	38	114	69	60.5

【表7 専門家委員会による第2回評価の結果】

4.3. 個別の項目について

a) 教育

憲章は、私たちの抱える根本的な問題に対する解決について何ら具体的かつ効果的な提言をしているわけではないということをここで確認しておく必要がある。すなわち、地域的に分断された言語という条件、児童数の減少、そして学校間のネットワークが充分確立されていないこと、などである。憲章は、少数言語による幼稚園での保育ならびに学校での教育の権利の基本的保証を目的としているが、その保証は同時に「生徒の数が充分に多いと判断され、家庭がそれを望む」限りにおいて、生徒に与えられるものなのである。

ソルブ人の現状に関連して、専門家委員会は、多くの少数言語地域で生徒の数が少ないということは常態的であるとしている。また欧州評議会の公式な解釈においても第8条に関しては、一つの教育機関の設置に対して必要な(言語使用者の)割合というものを柔軟に適用させる必要があり、少ない生徒数でも「充分なだけの数」と認めるべきであるとしている。すなわち、そのほかの憲章の規定の効果的実現についての問題と同じく、効力のある手段によって言語を保護しようと望む責任者の意志が非常に重要であり、法的に定められたルールの形式的な適用が常に優先するわけではないのである。規定の形式的適用は、一方では少ない生徒数を容認しながら、他方で全体的な一子供が減少傾向にあるという一学校体制の変化を考慮に入れないので、ソルブ語の学習の実施ためには、常により多いパーセンテージの生徒を獲得しなければならないのである。ソルブ語教育に関して生徒数に焦点をあてるのは非生産的であり、少数言語を保護し育成するという憲章の意図に反するものである。

教育の部門では、欧州評議会の専門家委員会は遂行されていない規定を発見した。8条1節の細目i「地域言語または少数言語教育の実施または開発においてとられた措置および進展を記録し、これに関する公開の定期報告を作成する監視機関を設置すること」であり、実際にそのような監視機関としての該当する地域的な教育施設は一国家の報告書ではそれと反対のことが記されているが一認められない。

b) 法的措置

ドイツにおけるその他の少数言語に比べ、上ソルブ語では 8、下ソルブ語では 5 の措置が採用されている。それらは刑事、民事、行政に関する裁判におけるソルブ語の使用、およびソルブ語で書かれた文書の有効性に関するものである。こうした措置の高い実現率は、主として NDR 時代の該当行政措置が統一後にも引き継がれたことによる。そのほか、措置の実施が比較的簡単に、通訳を使用することで実現するというようなケースもある。より意欲的で言語政策上より効果的な、裁判のプロセスをすべてソルブ語で行うという措置は取り入れられなかった。また選択された措置を少数言語で公表する可能性もない。これに関してはレトロマンス語の状況を比較してみよう—「連邦の政令はかなりの範囲においてレトロマンス語でも発行される。連邦官房はこれらの政令を、グラウビュンデン州の管轄局と相談の上定めるものとする。」となっている。

d) メディアと文化

ここではもっとも多くの措置が採用されている。これは過去 10 年間の少数民族政策の成果としてかなり広範に実現されてきたためであり、66.7%ならびに 73.3%(メディア)、および 86.7%(文化)という実現評価はかなり高いものである。しかしメディアに関しては、選択された措置が、憲章の提案に鑑みて、はたして適切かつ効果的なものであるかという疑問が提示される必要がある。今日もっとも中心的なメディアであるテレビ放送に関しては、他の先進地域における少数言語と比較すると、我々の状況は発展途上国なみである。スイスのレトロマンス語やイタリアのラディン語は、ソルブ語と話者数で同じほどだが、彼らは毎日放映されるテレビ放送を持っている。

以上、本2節では、憲章のソルブ語への適用、その連邦報告書、評価書、そしてソルブ研究者によるコメントを紹介した。法制度があることは何より、大切なことである。しかしながら法があることで逆に権利が拒否されることもある。下ソルブ語の保護措置がソルブ地区にしか適応されていないのはその典型的なケースといえるだろう。また法と現実の乖離という問題もある。財政難を抱えているドイツ東部においては、経済効率を優先した政策がとられがちであり、少数言語の権利がその前に何の意味も持たないことがあるのも事実である。「環境先進国」といわれるドイツにありながら、環境への悪影響が指摘される褐炭採掘はまだ続けられる予定であり、その犠牲となるソルブの村がまだこれからも出る懸念もある。これらの文書を一読するだけでも、少数言語としてのソルブ語が抱えるさまざなな問題が浮かび上がってくるのである。

3. WITAJ 計画の現状

本節では、ソルブ語再活性化計画のもとに実施されている WITAJ 計画の現状について、ブランデンブルク州コトブス市にある下ソルブ WITAJ 言語センターの顧問をつとめる Norberg 氏より提供を受けた資料(Norberg 2005)に依拠しながら、報告する。

1. 下ソルブ語の学校教育

まず、ソルブの学校教育を数の面から確認しておこう。先の報告書より古い年のデータになるが、学校数、生徒数は 1999/2000 年で以下のとおりである(ザクセンとブランデンブルク両方)

【表8 ソルブ語学校の数と児童数 (1999/2000)⁷⁾】

	学校・クラス			生徒数	中等学校数	生徒数
ザクセン	ソルブ学校		5	575*	母語コース 5	1500
9962	ソルブ語学約	<u></u>	24	408**	外国語コース 7	
ブランデンブルク ソルブ語学級		1990/ 1991	14	373	3	40
		1999/ 2000	23	1036	3	40

*うち 229 人が母語としてのソルブ語授業に参加。 **全児童数は 2607 人

小学校について見ると、下ソルブでは、小学校の学級数、またソルブ語学級に通う児童の数ともに、1990/91 から 9 年後の 1999/2000 で大幅に増えており、ザクセンに比べブランデンブルクにおいてソルブ語教育が劣っているようには見えない。2.3.2.の【D—370】にあるように、ブランデンブルクのソルブ語学級は 2003 年現在で 26 となっており、上記の表の値よりさらに増えている。しかもこの間に当該地域全体での生徒数が大きく減少していることを考慮すると、これは注目すべき傾向ということができるだろう。しかしながらその教育内容を見ると、ザクセンとブランデンブルクの事情は大幅に異なっている。

東西統一前の東ドイツでは、ソルブ学校に A 学校と B 学校があり、前者はソルブ語で授業が行われる学校、後者はソルブ語が科目としてカリキュラムに含まれる学校だった。

ザクセン州では、この区別を半ば受け継ぐ形で、ソルブ語の授業を実施する学校【ソルブ学校およびソルブ語学級】に A コース(母語コース)、B コース(外国語コース)、C コースの3つの形態を設けている。A コースは特定の科目(数学、理科、ドイツ語)以外のすべての授業にソルブ語が使われるクラスで、かつての A 学校の授業パターンである。B コースは外国語科目としてソルブ語の授業が実施されるクラスで、必修第二外国語として行われる学校と、選択外国語として行われる学校がある。またCコースは、簡単な会話などでソルブ語に親しむ授業を含むクラスである。

【表9 ソルブ語授業の形態】

		ギムナジウム				
ザクセン	A コース	В⊐	ース	Cコース	日田村 日田村	
,,,,,	母語授業	必修外国語	選択外国語	会話		
ブランデンブ ルク	*	*	選択外国語	「出会いの言 語」	必修外国語	

これに対してブランデンブルク州には、ザクセンの母語クラスに該当する授業を実施している 学校は存在しない。もともと第二次大戦までの状況下でほぼ壊滅した下ソルブのコミュニィーで、 戦後ソルブ語学級が新たに編成されたときも教員がまったく足らず、上ソルブの教員が下ソルブ 語の研修を受けて教壇に立ったというほど、下ソルブ語教育は危機的状況にあった。戦後の体制 下でブランデンブルクにもソルブ学級、コトブスには下ソルブギムナジウムが作られたが、その 教育の成果として、今日ザクセンにおいて実践されているような教育が提供できる状況を形成す るにはいたらなかったのである。2000年現在の時点でも、全部で36名いるソルブ語教員の中で、 ソルブ語母語話者は実に2名しかいないことが報告されており、ソルブ語を母語とする教員養成 が下ソルブ語の保護育成にとって今後の重要な課題となっている。

ブランデンブルクのソルブ語授業は現在(3.で述べる WITAJ 学校を除き)すべて選択科目という 位置づけであり、小学校では1年次に週1時間、2~6年次(ブランデンブルクでは小学校が6年 次まである)に週3時間、課外授業として行われる。中学校でも週3時間課外の選択科目として行われるのみである。2.3.1.の【D—372】にあるように、正規科目として位置づけることが、ソルブ語の安定した継続的な教育のための課題である。

2. 下ソルブ語教育の実態

現在の下ソルブ語教育の実施形態を一覧表にまとめたのが表 10 である。現在、次の 3.3.で述べる WITAJ 計画にもとづくバイリンガル教育を実施している WITAJ 学校と、ソルブ語授業を含む 授業を実施している従来型の学校の双方がある。

お	教育の段階	生徒数(2	生徒数(2004/2005)		
教育の形態		従来型	WITAJ 学校		
AG	小学校	45			
「出会いの言語」	小学校	35			
	小学校 (1~6年次)	805			
	中等教育 I, II				
外国語科目(選択)	実科学校(1 校)	32			
	総合制学校(2 校)	12			
	上級教育センター(1 校)	25			
外国語科目(必修)	下ソルブギムナジウム	586			
バイリンガル	小学校 (1~4年次)		87		
	中等教育 I				
(WITAJ)教育	下ソルブギムナジウム		60		
合計		1540	147		

【表 10 下ソルブ語授業の実施形態と生徒数】

ソルブ語教育の形態としては、教室での授業の形をとるものと授業の形をとらないものがある。 上の表の最初の二つが授業の形をとらないもので、AG(Arbeitgemeinschaft)は、午後の自由な課外 活動の時間に、何かの形でソルブ語を用いて活動するもの、また「出会いの言語 Begegunugsprache」 language-encounter programs)」はザクセンで実施されている C コースと同じように、あいさつや 簡単な会話の習得を通してソルブ語にふれようというものである。教室での授業は、先に述べた ように、課外に選択外国語として勉強するものである。

3. WITAJ 計画

ソルブ語とくに下ソルブ語の保護育成のために、1998年から開始された WITAJ(「ようこそ」) と名付けられたソルブ = ドイツ語バイリンガル教育の発展はきわめて重要な意味を持つ。これは、ソルブ人だけではなくドイツ人の家庭にも、多文化、多言語の共存の意味やバイリンガル教育の

教育的効果を説きながらソルブ語教育を普及させ、ソルブ語使用環境を支える底辺を広げることでソルブ語の再活性化を進めようという計画である。以下ではこの WITAJ の実施状況について見ていくことにする。

3.1. 沿革

1991年 ソルブ学校連盟、ソルブ人基金(Založba za serbski lud)が設立。後者はソルブ人のさまざまな活動の資金源とすべく設立されたもので、当初ザクセン州では基金の3分の1、ブランデンブルク州では6分の1を州政府が負担、それ以外は自前で拠出することが定められた。学校運営などに必要な経費も、ここから支出される。

1992 年 コトブス教育開発研究所(Arbeitsstelle Bildungsentiwicklung Cottbus,略称 ABC)が設立。これは当初ソルブ語教育のための新しい教材開発を目的として作られたが、現在は WITAJ 計画をサポートする教員養成コースにも関与している。

1998 年 WITAJ 計画発足。ソルブ学校連盟がブルトン語のバイリンガル教育プロジェクト "DIWAN"などを参考に、ザクセン、ブランデンブルクで発足。ブランデンブルクではジロウの Mato Rizo 幼稚園で 54 人の園児が参加して始まった。

2000年 さらに2つの幼稚園が開設され、園児の数が105になる。

2001 年 WITAJ 言語センター開設。

2002 年 最初の WITAJ 計画による小学校が開かれ、初年度 6 人が入学する。

3.2. WITAJ のカリキュラム

WITAJ 幼稚園ではイマージョン方式が採用されている。2005 年現在では7つの WITAJ 幼稚園で 155 人の園児が参加、これらに関する問題とくに人件費についての問題は先に2.2、2.3 で見たとおりである。

小・中学校では、原則として全教科でバイリンガル教育が実施され、バイリンガルコースでは全体の授業のうちの一部がソルブ語で行われる。つまりドイツ語モノリンガルコースと同じ内容の授業をソルブ語で受けることになる。したがって、従来型のソルブ学校では、A コースでも数学や理科の科目はドイツ語のみで行われたが、WITAJ学校ではこれらの科目についても、バイリンガルコースをとればその一部をソルブ語で受けることになる。両者の違いを簡単に示すとすると下の表 11 のようになる

従来のソルブ語学校	数学	ドイツ語のみ				
(A コースの場合)	社会	ソルブ	ソルブ語のみ			
WITAJ 学級	数学	ドイツ語		ソルブ語		
WIIAJ J WX	社会	ドイツ語		ソルブ語		

【表 11 従来型教育と WITAJ の違い】

次に、具体的にどのようなカリキュラムが組まれているかを、ジロウの小学校の例から見てみよう。表 12 に示されたそれぞれの科目で、斜線(/)の左が全体の時間数、右がバイリンガル授業の時間数、最上段の「ドイツ語/ソルブ語」は科目としての「ドイツ語/ソルブ語」で、この場合全員が「ドイツ語」を 5 時間学習し、バイリンガルコースでは残り 4 時間に「ソルブ語」を学ぶことになる。

このほかに WITAJ 学校の生徒と、下ソルブギムナジウムの生徒は、午後(放課後)の時間を、「保育士(Hortpersonal)」とよばれる、正規の教員資格はないがソルブ語の母語話者でソルブ語を子供に教える能力があると認められた(多くの場合高齢者の女性)指導員とともに過ごし、ソルブ語の

実地訓練を行う。したがって WITAJ の教育は、正規のカリキュラム + 課外のソルブ語活動として特徴づけられる。

	全時間数/バイリンガル授業					
学年	1	2	3	4	5	6
ドイツ語/ソルブ語	9/4	9/4	9/2	10/3	5/1	5/1
事実科目	-	ı	2/2	3/3	ı	ı
算数	4/2	4/2	5/2	5/2	4/2	4/2
音楽・美術	2/1	2/1	4/2	4/2	4/4	4/4
体育	3/-	3/-	3/-	3/-	3/1	3/1
補足科目	2/-	2/-	2/1	1/-	2/1	2/1
理科(生物、物理)					4/-	4/-
社会(地理、歴史、政治)					3/-	3/-
宗教					1/-	1/-
外国語(英語)			3	3	4	4
合計数	20/7	20/7	25/9	26/10	30/9	30/9
(100%/WITAJ)	100/35	100/35	100/36	100/42	100/30	100/30

【表 12 WITAJ 学校のカリキュラム: Žylow/Sielow の WITAJ 小学校の例】

3.3. WITAJ 計画の課題

(1) 下ソルブ語の教員不足。

2 節の評価書にも示されたとおり、下ソルブ語については全体に教員が不足している。また、 先にも言及したように、現在小・中学校の教員に下ソルブ語母語話者がほとんどいないという問 題もある。WITAJ の実施のためには、バイリンガル教育の訓練を受けた教員養成が火急の課題と なっている。

現在、ABC とポツダム大学の高等教育センターが共同して、ポツダム大学にソルブ語バイリンガル教育教員養成コースが設置されている。これは 4 セメスタの授業と実習からなり、これを修了するとブランデンブルク州の教育法と「ソルブ/ヴェンド人の権利整備のための法」(1994)にもとづき、小学校または中等教育(I、II 段階)のソルブ語教員免許が与えられる。

しかし、WITAJ 学校が運営を開始してまだ年月が浅いこともあり、教員不足は解消できておらず、現実にはバイリンガル教育のための研修を受けていない、旧来のソルブ学級の教師が WITAJ 学級のポストを占めるということも生じている。

(2) 教科書・ワークブックの作成。

バイリンガル授業では、ドイツ語授業と同じ内容の授業を行うので、ドイツ語教材と並行的な教科書を作成する必要がある。同時に、理科や数学などの科目において使用する用語の設定が必要であり、これはまた下ソルブ語の新たな規範化にかかわる問題ともなる。また教科書のほか、教育用ゲームや、今日の教育環境に適合したマルチメディア教材も必要とされる。

(3)教育の周辺の整備。

WITAJ 計画を実施する学校は、授業のみならず、学校全体としてソルブ語環境の整備に取り組む必要がある。たとえば、バイリンガルで印刷されたレターヘッド、インターネットのバイリンガルサイト、ソルブの文化を紹介するための催しの開催や展示の場の確保など、生徒全体のソルブ語への関心と学習意欲を促進するような環境作りが課題となる。

(4)下ソルブギムナジウム

コトブス市の下ソルブギムナジウムは、唯一の下ソルブ高等教育機関である。ここでは現在、

必修のソルブ語授業以外に、音楽・体育がソルブ語で行われている。歴史、宗教、美術のソルブ語授業は準備中であり、数学や理科などのソルブ語授業はまだ用意されていない。つまり、WITAJ計画による小学校からのソルブ語教育が継続されない恐れがあり、こうした科目でのソルブ語授業の準備が急がれる。

欧州評議会専門家委員会も懸念を示していたように、このギムナジウムは 2005 年までブランデンブルク州立であったが、2006 年 1 月よりホシェブス市立に移行することになった。また、これまでドイツの学校は原則午前のみの授業で、午後は自由活動に充てられていたが、学力向上の取り組みの一環として、学校の全日制への移行などが検討されている。このギムナジウムもその例外ではなく、こういった変化がソルブ語教育にどのような影響を及ぼすか、今後に注目していく必要がある。

4. おわりに

本稿では下ソルブ語の現在を、『地域言語または少数言語のための欧州憲章』の適用とその報告書、評価書から、また WITAJ の最新の状況から概観した。ソルブ語の保護育成のために、多文化・多言語の遺産を守るという意図で制定された憲章に従った努力がなされている一方で、財政難、経済的負担の増大、子供の数の減少など、少数言語教育を脅かすさまざまな現実的な問題が立ちはだかっているのも事実である。また、地球化の流れの中で、ドイツの小学校でも低学年からの英語の必修化が実施されるようになっており、少数言語教育への影響が懸念されている。

憲章の監視制度はすでに第3期にはいっている。今後のソルブ社会の動きとともにどのような 報告書が提出されるのか、注目していきたい。

注

- 1) Council of Europe は日本では「欧州審議会」とも訳される。本稿では外務省の呼び方に準じて「評議会」とする。
- 2) Mercator は欧州連合内の言語とくに少数言語に関するデータ収集や学術的研究、実践的な問題提起などを扱うネットワーク組織の総称、少数言語の教育を扱う Mercator-Education、言語権などの法制度の問題を扱う Mercator-Legislation、 少数言語とメディアの関係を扱う Mercator-Madia の 3 つの下部組織が活動している。HP は http://www.mercator-central.org/である(2007 年 1 月 1 日現在)。
- 3) http://www1.fa.knaw.nl/mercator/regionale dossiers/regional dossier sorbian in germany.htm
- 4) 2002年の専門家委員会による第 1 評価書は 2.3.5.の第 428 項目として「就学前の上ソルブ語教育に関して、教材ならびに教師が不足しており、就学前ソルブ語教育の実施を危機的にする懸念がある」と指摘し、「委員会はこのための法的枠組みの設置と充分な資金の割当を奨励する」と評価している(第 1 評価書、p.97)。
- 5) ホルノ村はソルブの悲劇的宿命を物語る典型的なケースとして注目された。すでによく知られているように、ソルブ人が伝統的に居住するラウジッツ一帯は、ドイツ最大の化石資源である褐炭の主たる埋蔵地であり、その採掘のためにすでに多くのソルブの村が失われてきた。ホルノ村の解消も褐炭採掘目的であり、住民たちは立ち退きと廃村の決定を覆すよう欧州人権裁判所にまで訴えたが、結局認められず、2004年までにホルノからノイホルノなどの別の村に提供された新しい住居に移転を余儀なくされた。2004年10月には500年間この地に存続した教会が解体され、ソルブの伝統文化の灯火がまた一つ、消されたのである。
- 6) Pastor, Thomas, 1997. *Die rechtliche Stellung der Sorben in Deutschland*. Spisy. Serbskeho instituta 15. Budyšin, 209.
- 7) 'Sorbian. The Sorbian language in Education in Germany.'Mercator-Education Document, 2001 に依拠。 注 3)を参照。

資料と参照文献

- 'Second Report submitted by the Federal Republic of Germany under Article 15, paragraph 1, of the European Charter for Regional or Minority Languages.' Bundesministerium des Innern, 2003.
- 'European Charter for Regional or Minority Languages. Application of the Charter in Germany. 2nd monitoring cycle.' Strasbourg, March 2006.
- Elle, L. 2005. 'Europska charta mjeńšinowych abo regionalnych rěčow a rěčna politika w Serbach, I dźel' *Rozhlad*, 55(12), 434 438.
 - . 2006. 'Europska charta mjeńšinowych abo regionalnych rěčow a rěčna politika w Serbach "II džěl' *Rozhlad*, 56 (1), 2 6.
- Jodlbauer, R., Spieß, G., Steenwijk, H. 2001. Die aktuelle Situation der niedersorbischen Sprache. Ergebnisse einer soziolinguistischen Untersuchung der Jahre 1993 1995. Bautzen:Domowina.
- Norberg, M. 1996. Sprachwechselprozeß in der Niederlausitz. Soziolinguistische Fallstudie der deutsch-sorbischen Gemeinde Drachhausen/Hochoza. Stockholm: Almquist & Wiksell International. (Acta Universitatis Upsaliensis. Studia Slavica Upsaliensia 37)
 - 2005. 'Der Sorbischunterricht und seine Formen in Brandenburg.' Manuscript.
- Spieß, G., Steenwijk, J. 2000. 'Sorbisch' in Wirrer, J. (ed.) *Minderheiten-und Regionalsprachen in Europa*. Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, 186 212.
- 渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法』三元社、2005年
- 三谷惠子「下ソルブ語の現状 19世紀から WITAJ 計画まで」西スラブ学論集 IV, 2001年, 68 85.

Славянские народы в зеркале советского кино

Ирина Мельникова

В 2006 году Россия впервые отмечала 4 ноября новый государственный праздник «День народного единства», призванный заменить давно уже вызывающий в обществе споры праздничный день 7 ноября, традиционную годовщину октябрьской революции 1917 года. День 4 ноября приурочен к дате изгнания в 1612 году из Кремля польских претендентов на московский престол. Это сделали войска нижегородских ополченцев под предводительством князя Д. М. Пожарского и купца К.Минина¹.

В связи с этим, вновь оказался как нельзя актуальным фильм «Минин и Пожарский», снятый еще в 1939 году². Фильм в дни праздника не только показывали по телевидению целиком, но использовали кадры из него в ряде телепередач.

Таким образом, советское кино, с его трактовкой истории отношений со славянскими народами-соседями, продолжает и сегодня влиять на создание этнических и геополитических стереотипов. Особенно это касается русско-польских отношений, которые гораздо в большей степени оказались отражены в кино, чем отношения с народами Болгарии, бывшей Югославии, или Чехословакии. Это давно уже замечено исследователями кино и культурологами³.

Фестиваль архивного кино «Белые Столбы», регулярно проходящий в Госфильмофонде, в 2006 году одной из тем избрал русско-польские отношения на киноэкране обеих стран. По традиции, программа «Эхо фестиваля *Белые Столбы*» прошла в московском кинотеатре

¹ Новый праздник еще не осмыслен, и ритуала его проведения не выработано. Наиболее заметной акцией стало открытие в Нижнем Новгороде памятника Минину и Пожарскому работы 3.Церетели. К памятнику Минину и Пожарскому на Красной площади в Москве президент возложил цветы. К следующему празднованию Дня народного единства в 2007 году режиссер В.Хотиненко в настоящее время снимает крупнобюджетный фильм под условным названием «Смута» или «1612».

² См.: Приложение. Краткая аннотированная фильмография.

³ См.: Черненко М.М. Портрет соседа в зеркале геополитики.//Киноведческие записки, №.2, 1988, с.109-119; Lipatow A.W. Obras Polski i Polakow w radzieckiej sztuce filmowej. Tworczosc sterowana i stereotypy ideologiczne//Dzieje najnowsze. R.29. №1. Wroclaw,1997; Raack R. Poor light on the dark side of the Moon. Soviet actuality film sources for the early days of world war II. // Ideologie, poglady, mity w dziejach Polski i Europy XIX i XX wieku. Poznan,1991; Невежин В.А. Польша в советской пропаганде 1939-1941 гг.//Россия и внешний мир: Диалог культур. Сборник статей. М.,1997; Токарев В.А. «Кара панам!»: польская тема в предвоенном кино (1939-1941) //История страны. История кино. Сборник статей. М.,2004.

«Иллюзион» для широкого зрителя. 4

Таким образом, обращение к советским киномифам все еще может многое рассказать не только о прошлом, но и о настоящем.

Одним из важнейших для России вопросов и сегодня продолжает оставаться вопрос об ее «историческом пути», о чем кинематограф пытался высказаться с первых шагов своего существования. Недаром само начало русского игрового кино связывают с лентой «Стенька Разин» (1908), основанной на зафиксированном в песне народном предании. Исследователь советской литературы и кино Е. Добренко пишет:

«...Первые фильмы были частью массовой культуры, которая не только являлась отражением базовых черт национального характера и национальной мифологии, но и находила живой отклик у массового зрителя. ...Исторической мелодрамой началась история русского кино, экранизацией народного предания, в центре которого – победа коллективного начала, идеалов казачьей вольницы и братства честного народа – парадигматические черты русского национального характера, своеобразно преломившиеся позже в советском кино.»⁵

К этому можно добавить, что фильмы 1909г., которые сохранились до наших дней, включают, например, следующие костюмные драмы: «Русская свадьба XVI столетия», «Боярин Орша», «Ванька-ключник: русская быль XVII столетия», «Мазепа», «Петр Великий», «Смерть Иоанна Грозного» и др. Многие из перечисленных выше сюжетов позже еще не раз экранизировались, как в российском, так и в советском кинематографе. Ключевые моменты и ключевые фигуры истории государства (Иван Грозный, Петр Первый, Смутное время и т. д.) всегда интересовали кинематограф.

В связи с широко отмечавшимся в 1913 г. юбилеем династии Романовых, появились масштабные картины «Воцарение дома Романовых, 1613» и «Трехсотлетие царствования дома Романовых», снятые к юбилею династии. Идее славянского единства отводилось в них свое место в связи с историей присоединения Украины и Польши. Кинематограф очерчивал географические и временные границы империи, делал ее образ зримым. Он помогал решить задачи самоидентификации, а в условиях вскоре разразившейся Первой Мировой войны наглядно отделял «своих» от «чужих», иллюстрировал расстановку политических и военных сил («Слава – нам, смерть – врагам», 1914; «Дочь истерзанной Польши», 1915).

После февральской революции 1917 года самодержавие, православие и народность в кино стали воплощаться со знаком «минус», как антимонархизм, атеизм, интернационализм, что с некоторыми оговорками оставалось характерно для советского кино на протяжении всей

⁴ Cm.: http://www.filmfestivals.ru/russian/bstolby/2006/

⁵ Е. Добренко. История народа принадлежит царю. //Киноведческие записки, №70, 2005, с. 27.

 $^{^6}$ См.: Великий Кинемо, каталог сохранившихся игровых фильмов России, 1909-1919. НЛО, М., 2002.

истории его существования.

В постсоветский период вновь было артикулировано обращение к кино, как к орудию выработки «позитивной» национальной идеи, важнейшей составляющей которой явилось бы православие и связанная с ним «славянская» самоидентификация. Однако, наиболее очевидное из этих течений — ежегодно проводимый с 1992 года православный кинофестиваль «Золотой Витязь», организованный Николаем Бурляевым⁷, не предложил в конечном итоге внятной идеологической платформы. На современном этапе идея фестиваля главным образом предъявляется как оппозиция западному, американскому кино, реализуясь через отрицание — эротики, насилия, всего, что противоречит православной морали. В последние годы гостями и победителями фестиваля все чаще становятся фильмы Индии, Ирана, среднеазиатских стран бывшего СССР, не имеющие прямого отношения к православию.

Вопрос о том, насколько правомерно говорить о славянской идентификации и самоидентификации в советском кино важен по ряду причин, перечислим лишь некоторые из них:

- 1. Славянские народы вновь образовавшихся после распада СССР государств (Украины, Белоруссии и др.) переживают кризис идентификации в той же мере, что и народы сегодняшней России.
- 2. Создание Европейского Союза и вхождение в него бывших социалистических стран связано для народов этих стран с «европейской» идентификацией, которая бесспорна далеко не для всех.
- 3. Миграционные процессы в России и вне ее, распространение в российском обществе националистических идей побуждает обратиться к «истории вопроса».

Как известно, на завершающем этапе Второй мировой войны и в первые послевоенные годы славянская идея была одним из средств укрепления политических позиций СССР в Центральной и Юго-Восточной Европе для формирования под эгидой СССР военно-политического блока. Свою роль в этом сыграла и православная церковь. Вехой новой религиозной политики стало 4 сентября 1943 г. В этот день на даче у Сталина в присутствии патриаршего местоблюстителя Сергия было решено открыть приходы, учебные заведения, избрать патриарха. Освободили из лагерей многих священнослужителей. Церкви отводилась большая роль в сплочении единоверцев по всему миру вокруг Русской

-

⁷Николай Бурляев (1946 -) в 14 лет снялся в главной роли в фильме А.Кончаловского «Мальчик и голубь», затем в фильме А. Тарковского «Иваново детство». В 1975 г. окончил режиссерский факультет ВГИКа. В 1996 году основал Международное объединение кинематографистов славянских и православных народов, был избран его председателем.

православной церкви8.

Всесоюзное общество культурных связей с зарубежными странами (ВОКС) также имело славянский отдел. План работы отдела подчеркивал, что в пропаганде на соответствующие страны главный упор должен делаться на единство славянских народов в многовековой борьбе «за свое существование и за свою независимость против немецкого порабощения». При этом была заявлена ведущая роль русского народа «в деле пробуждения национально-культурного самосознания народов и их освобождения от иноземного ига»⁹.

Проводником этой политики должен был стать созданный во время войны Всеславянский комитет по борьбе с фашизмом, позже преобразованный в Славянский комитет СССР¹⁰.

Таким образом, в историческом плане можно говорить об актуальности славянской темы в период с 1942-43 года до конца сталинской эпохи (условно обозначим его 1953), когда старая идея обслуживала задачи создания «социалистического блока». Как видно из недавно опубликованных документов о советском кино в годы войны¹¹, а также из специальных работ, посвященных национальной политике сталинского периода 12, национальный вопрос и его отражение в кинематографе стал во время войны предметом ряда партийных документов. В них обсуждались:

1) кадровые проблемы советского кино (речь шла об очередной кадровой «чистке» с целью «выравнивания» этнического представительства русского и других «титульных» советских народов в области, где традиционно работало много евреев)¹³;

⁸ Скорее всего, именно новая политика по отношению к церкви позволила С. Эйзенштейну в беспрецедентном дотоле масштабе включить в фильм «Иван Грозный» сцены церковных обрядов. ⁹ ГАРФ: 5283, 17, 2, с. 11-12. Цит. по: Автопортрет славянина. Ред. Л.А.Софронова, Т.И. Чепелевская. М., Индрик, 1999, с. 248.

 $^{^{10}}$ М.Джилас, генерал югославской народно-освободительной армии, а после войны публицист, отмечал: «Любому, а не только коммунисту, бросилась бы в глаза его (Славянского комитета -И.М.) искусственность и незначительность. Он был вывеской и служил лишь пропаганде, но даже в этом качестве его роль была ограниченной. Цели его тоже не были вполне ясны: в комитет входили главным образом коммунисты из славянских стран - эмигранты в Москве; идеи всеславянской солидарности были им совершенно чужды. Все без слов понимали, что должны оживить нечто давно отошедшее в прошлое и хотя бы парализовать антисоветские панславянские течения, если уж не удается сгруппировать славян вокруг России как коммунистической страны»

См.: Джилас М. Лицо тоталитаризма. М., 1992, с.25.

¹¹ См.: Кино на войне. Документы и свидетельства. //Авт.-сост. В.И. Фомин, М., Материк, 2005, c.342-408; 486-661.

¹² См.: Г.В.Костырченко. Тайная политика Сталина: Власть и антисемитизм. М., Международные отношения, 2003, с.263-264.

¹³ Начало кампании положила докладная записка начальника Агитпропа Г.Ф.Александрова «О подборе и выдвижении кадров в искусстве», направленная 17 августа 1942 года в секретариат ЦК ВКП(б). Об антиеврейской кампании и реакции киноработников см.: М.Ромм. Устные рассказы.

- 2) проблемы подъема с помощью кино национального самосознания народов СССР, прежде всего, русского народа, что усилило бы патриотизм на фронте и в тылу;
- 3) критика национализма (киноповесть А.Довженко «Украина в огне» сурово критиковалась Сталиным за то, что автор стремился к подъему национального самосознания украинцев и противопоставлял при этом национальное классовому)¹⁴;
- 4)подготовка национальных кадров на киностудиях в Алма-Ате, Ашхабаде, Ташкенте, куда эвакуированы были киноработники из Москвы и Ленинграда¹⁵;
- 5) экспорт советского кино и культурная экспансия в освобожденных странах Европы: озвучание и субтитрирование советских фильмах на соответствующих языках ¹⁶;
- 6) создание фильмов на польскую и югославскую тему, а также на историческую тему совместного отпора славян иноземным захватчикам (проект фильма «Грюнвальдская битва») 17 ;

Поставив целью проанализировать, в какой мере были выполнены эти задачи, мы рассмотрели в этой статье образы «славян» в советском кино на этапе формирования образа нового «братства по оружию» и «социалистического лагеря» (1942-1954 гг.), сравнивая их с кинематографическими «славянами» предыдущего периода (1937-1941 гг.)

Славяне «свои» и «чужие».

Условно говоря, «свои» славяне – это русские, украинцы и белорусы, а «чужие» – это чехи, болгары, поляки, сербы, черногорцы и другие славянские народы вне пределов Российской Империи и СССР. Однако деление весьма условно, поскольку кинематограф Российской империи с самого момента своего рождения был весьма интернациональным. В Риге и Варшаве снимали русские режиссеры, в Москве работали грузины, евреи, поляки, невообразимо пестрым был актерский состав. Если Украина очень рано обрела свой национальный кинематограф 18, то киностудия «Советская Белорусь», основанная в конце

М., Киноцентр, 1989, с.75-81; Е.С.Левин. Краткий курс истории Русьфильма. //Искусство кино, 1994, №9, с.129-133; В.И.Фомин. Я-Иван, ты-Абрам. // Кино на войне. Документы и свидетельства., М., Материк, 2005, с.531-536.

¹⁴См.: Кино на войне. Документы и свидетельства. //Авт.-сост. В.И. Фомин, М., Материк, 2005, с.384-394.

¹⁵Указ.соч., с.528-531.

¹⁶ Указ.соч., с.621-623; 654-659.

¹⁷Указ.соч., с.624.

¹⁸Шимон А. Страницы биографии украинского кино. Киев,1974; Корниенко И.С. Кино Советской Украины. Страницы истории. М.,1975; Жукова А.Е., Журов Г.В. Кинематографическая жизнь столицы Советской Украины. Киев,1983.

20-х годов, обосновалась в Ленинграде и находилась там до 1939 года, что, конечно, не способствовало развитию национального стиля белорусского кино ¹⁹. Однако и в украинской, и в белорусской кинематографии было очень много выходцев из еврейской среды, русских, поляков, немцев. Собственно «русской» киностудии не существовало никогда.

Из славян «зарубежных» наиболее часто появлялись на советском экране поляки. За период с 1920 по 1953 гг. на киностудиях страны было снято около семидесяти фильмов, посвященных польской теме²⁰. Еще в короткометражных агитационных фильмах времен польской войны 1919-1920 гг., предназначенных для красноармейцев, выработался двойственный образ поляка, как «пана и Яна», угнетателя и угнетенного. ²¹ После 1925 г. эта линия была продолжена. Вот как пишет об этом М. Черненко:

«Одним из самых популярных фильмов середины двадцатых годов был «Крест и Маузер» Владимира Гардина (1925 г.). Он содержал в концентрированном виде не только все пропагандистские стереотипы, разрабатывавшиеся кинематографом на протяжении следующих полутора десятилетий, но и жанровое их воплощение, то сочетание политики, мелодрамы и приключения, которое станет каноном не только по отношению к польской, но и всякой другой зарубежной тематике (в ней специализировалось в ту пору Одесская кинофабрика ВУФКУ, основной поставщик популярного, массового кинематографа во второй половине двадцатых годов).

Появление «Креста и маузера» именно в 1925 году связано с обострением международной обстановки, со сменой ориентиров советской внешней политики, после несостоявшегося в Локарно советско-польского сближения, а также объясняется обострением борьбы с религией, в первую очередь, католической (в это время идут процессы католических иерархов на Украине и в Белоруссии, и польская тематика как бы идентифицируется в

_

 $^{^{19}}$ История белорусского кино.(1924-1945). Минск,1968; История белорусского кино. Часть 1. (1924-1945) – 2. (1945-1967). Минск, 1969-1970; Кино Советской Белоруссии. М.,1975; Смаль В.И. Сквозь призму десятилетий (о политике компартии Белоруссии в области киноискусства в 20-30-е годы). Минск,1980.

²⁰Wasilij Tokariew, *Polskie wątki w kinie radzieckim w latach 1920-1953.*//Katalog wzajemnych uprzedzeń Polaków I Rosjan. Pod red. Andzeja de Lazari. Warszawa, 2006. S.444. Как указывает В. Токарев, в Польше за 1920-1953 годы было создано примерно 44 фильма на российскую тему. В 1920 году поставлено 3 картины против 11 советских лент, в 1921-1939 годах – 37 фильмов против 43 советских. За 1940-1945 годы из-за войны польские кинематографисты не могли позволить себе масштабные постановки, но в СССР и за эти годы было снято более десятка фильмов. В послевоенные годы (1946-1953) появилось 4 польских фильма против 6 советских.

²¹ Сохранилось 12 фильмов: «Война войне», «Да здравствует рабоче-крестьянская Польша», «Два поляка», «Пан или пропал», «Паны-налетчики», «Польская шляхта» и т.д.. В фильме Александра Разумного «Два поляка», самом крупном по метражу, солдат польской армии дезертирует и становится убежденным революционером-интернационалистом, борцом за красную Польшу, оплот будущей мировой Коммуны.

массовом сознании с контрреволюционностью католического духовенства, в абсолютном большинстве своем польского). В «Кресте и маузере» в центре сюжета ксендз-католик, принуждающий к сожительству сиротку-украинку, а значит, помимо всего прочего, нарушающий законы целибата; став отцом незаконнорожденного ребенка, он принуждает послушницу убить дитя, а затем подбросить трупик в еврейский квартал, чтобы спровоцировать черносотенцев на еврейский погром... Естественно, все это происходит еще до революции, но и после нее ксендз, оказавшийся агентом иностранной разведки, сотрудничает с резидентом из Ватикана, а также с русскими белогвардейцами, всеми способами вредя молодой советской власти. Разумеется, и его, и резидента настигает заслуженная кара: ксендз погибает в огне, а резидент от пули, символически сжимая в руке крупным планом и крест, и маузер...»²²

Как правило, до второй половины 1930-х годов в исторических и современных фильмах, где действие происходило в Польше, «интернационалу» эксплуататоров противостоял «интернационал» угнетенных. В качестве угнетенных выступали польские рабочие, украинские и белорусские крестьяне, еврейские ремесленники. Угнетателями изображали польских помещиков и офицеров.

Например, фильм «Тарас Трясило» режиссера Петра Чардынина, снятый в 1926 г. по одноименной поэме В,Сосюры, рассказывал историю дворового парня, вступившегося за поруганную честь девушки, бежавшего от панского гнева на Запорожскую Сечь, возглавившего там восстание против польских панов, казацкой старшины и татарских ханов, ставшего кошевым атаманом и погибшего в неравном бою. Эта картина, которую М. Черненко назвал «эталонной по драматургии, расстановке персонажей и пропагандистской задаче» ²³была даже озвучена в 1936 г. и вышла на экраны под новым названием – «Повесть о горячем сердце». ²⁴

Прогерманские настроения в Польше после смерти Ю. Пилсудского, неприятие польским правительством советских предложений по организации системы коллективной безопасности в Европе – все это усилило опасения советского руководства, что в будущей войне с СССР Польша будет на стороне Германии. В декабре 1937 г. было даже решено перенести столицу Белорусской ССР из Минска в Могилев, подальше от советско-польской границы. Судетский кризис и мюнхенское соглашение 1938 г. еще больше обострили советско-польское противостояние. Подобно тому, как обострение японско-советских

 22 Черненко М.М. Портрет соседа в зеркале геополитики.//Киноведческие записки, №2, 1988, с.111.

²³Указ. соч., с.113.

²⁴ Полный список советских кинофильмов о Польше, выпущенных до 1953 г., см.: Wasilij Tokariew, *Polskie wątki w kinie radzieckim w latach 1920-1953.*//Katalog wzajemnych uprzedzeń Polaków I Rosjan. Pod red. Andzeja de Lazari. Warszawa, 2006.

отношений вызвало в конце 1930-х годов появление целой серии фильмов, изображающих врагами японцев, советско-польские противоречия привели к тому, что с осени 1938 года до сентября 1939 гг. на экраны Советского Союза вышли картины «Одиннадцатое июля», «Кармелюк», «Щорс», «Шел солдат с фронта», в которых несправедливость и насилие олицетворяли поляки. Поляки выступали теперь уже только в качестве «панов», представителей господствующего класса, сама национальная принадлежность маркировала героя как отрицательного.

К этому времени в СССР уже были опровергнуты концепции историка М.Н.Покровского, абсолютизировавшего классовую борьбу и видевшего в российской истории лишь «предысторию к эпохе пролетарской революции»²⁵. Минин и Пожарский, Хмельницкий и Суворов, как и Александр Невский, Петр Первый, стали изображаться в научных исторических трудах, художественной литературе и кино как народные герои. В определенном смысле можно сказать, что они были уравнены в исторической памяти с вождями антифеодальных движений. Понимание неизбежности скорой войны с западными соседями привело к возрождению элементов русского патриотизма, особенно тех, которые были связаны с военной традицией. По поручению самого Сталина экранизировались биографии и поучительные эпизоды национально-освободительной борьбы против внешних врагов.

Именно в это время литературовед, основоположник «формального метода», писатель и сценарист В.Б.Шкловский (1893-1984) создает очерк «Русские в начале XVП века» ²⁶. Шкловский вспоминал, что в 1938 г. ему было предложено написать на основе повести сценарий ²⁷, так что идея постановки фильма «Минин и Пожарский» исходила сверху, возможно даже, что от самого Сталина. Режиссерами были назначены В.И.Пудовкин и М.И.Доллер, которые сотрудничали еще при постановке горьковской «Матери». Режиссеры также были привлечены к этой работе указанием сверху, поскольку они уже работали в это время над экранизацией «Анны Карениной», приуроченной к юбилею МХАТа (1938)²⁸.

В октябре 1939 года состоялась всесоюзная премьера «Минина и Пожарского» (фильм транслировался также для немногочисленных обладателей телевизоров). К этому времени международная обстановка успела измениться. Произошло советско-германское сближение, летом 1939 г. был подписан секретный протокол В.Молотова – Й.Риббентропа, 1 сентября Германия напала на Польшу, 17 сентября в восточные воеводства Польши вторглись

²⁷Шкловский В.Б. Об историческом сценарии //Советский исторический фильм. М., 1939, с.81.

 $^{^{25}}$ Подробнее см.: С.В.Константинов. Дореволюционная история России в идеологии ВКП(б) 30-х гг. //Историческая наука России в XX веке. М., 1997, с.236.

²⁶ Шкловский В.Б. Русские в начале XVП века// Знамя. 1938, № 1, с.149.

²⁸ Подробнее о работе над фильмом «Минин и Пожарский» см.: В.Токарев. «Минин и Пожарский» : спасение в смуте? //Историк и художник. 2004, №.1, с.123-134.

советские войска.

В соответствии с этим, содержание фильма претерпело изменения. По сценарию, полякаминтервентам помогали в борьбе с ополченцами Минина и Пожарского немецкие наемники под предводительством поручика Шмидта. В фильме наемники превратились в шведов, а Шмидт стал Смитом. Шведы в фильме оставляют поляков и предлагают свою помощь князю Пожарскому, однако он им отказывает. Пожарский свой отказ от услуг шведских полков мотивирует тем, что с русскими вместе сражаются «и татары, и черемисы», так что на шведов «каши не хватит». Зритель, вероятно, должен был понимать это так, что живущие в пределах СССР народности, пусть и не европейские, являются более близкими и надежными соратниками, чем пришельцы из Европы. Таким образом, гораздо важнее апелляции к крови или расе была территориальная принадлежность потомков того или иного этноса к СССР.

Советско-германское сближение и урегулирование вооруженного конфликта в районе Халхин-Гола повлекли за собой изъятие из проката или переделку фильмов, в той или иной мере касавшихся Германии. Одновременно был прекращен выпуск фильмов на «японскую» тему. По ходу политической конъюнктуры изменялось и отношение к «польской» теме. Например, сюжет сценария «Ветер с Востока» А. Дубровского и В. Кучеры, рассказывающий о предвоенной польской деревне, произволе польской помещицы и социальном прозрении молодой польки-учительницы и беднейших крестьян, был в 1938 г. перенесен на новую географическую почву, в Венгрию, поскольку дипломатические отношения СССР и Венгрии как раз тогда были разорваны. Однако в 1939 г. действие фильма опять вернули в Польшу, и А.Роом снимал сцены радостной встречи угнетенными крестьянами Красной Армии. ²⁹Как видим, в фильмах на современную тему по-прежнему положительными героями могли быть и поляки, но принадлежащие к угнетенным классам, либо сочувствующие им, демократически настроенные.

Не так было в исторических фильмах. И в «Минине и Пожарском», и в «Богдане Хмельницком», поставленном режиссером И.Савченко по пьесе Ф.Корнейчука, практически отсутствуют положительные герои-поляки. Во-первых, в исторических фильмах просто нет индивидуализированных образов поляков ниже короля и военачальников. При этом, польский король Сигизмунд в «Минине и Пожарском» изображен не самостоятельным политиком, а чуть ли не марионеткой в руках у представителя иезуитского ордена, который плетет сети заговора и организует покушение на Пожарского. Точно также в «Богдане Хмельницком» главная опасность исходит даже не от воинской мощи отрядов гетмана Потоцкого, а от коварства иезуитов, действующих подкупом и шантажом. Тем самым Польша характеризуется как нежизнеспособное государство, существующее не иначе, как в

 $^{^{29}}$ См.: Токарев В.А. «Кара панам!»: польская тема в предвоенном кино (1939-1941) //История страны. История кино. Сборник статей. М.,2004, с.160.

вассальной зависимости от западных католических держав. Не раз замечено было исследователями и то, как сняты в предвоенных исторических фильмах интерьеры польских дворцов и костелов: их сравнивали со склепами³⁰. «Польская цивилизация, по мысли советских кинематографистов, была настолько задрапирована и припудрена, насколько несостоятельна и нежизнеспособна. Готические соборы, торжественные богослужения, мазурка и полонез, изобилие шелка в фильме «Богдан Хмельницкий» являли собой фальшивую роскошь умирающей Речи Посполитой», – пишет В.Токарев³¹.

Польский военачальник гетман Ходкевич в «Минине и Пожарском» предстает низкорослым, грузноватым человеком совсем не героической внешности (исполняющий эту роль артист Горюнов часто снимался в комедийных ролях). В фильме «Богдан Хмельницкий» молодой польский гетман Стефан Потоцкий, высокий и изящный, в кружевах и с длинными кудрявыми волосами, составляет полную противоположность витальному Богдану Хмельницкому и его казакам. Разумеется, польские гетманы жестоки, кровожадны и тщеславны.

Противостоящие полякам силы русских ополченцев (упомянутые выше татары и черемисы только названы, но не показаны) в «Минине и Пожарском», а также казаки-запорожцы в «Богдане Хмельницком», подчеркнуто просты внешностью и манерами, в них нет ни капли внешнего героизма - они символизируют «народные массы». Вожди (Пожарский, Минин, Хмельницкий) символизируют консолидацию народа в отпоре внешнему врагу, они не должны восприниматься как «классово чуждые», как «эксплуататорский класс», поэтому в фильмах есть сцены, подчеркивающие их спартанскую нетребовательность к быту и уважение к простому люду. Хмельницкий обнимает и целует своих казаков, похлопывает их, что выражает товарищескую близость. Он готов выслушать от них критику или совет. Объятый гневом на поляков и предателей, он вскакивает на стол с угощением и идет прямо по тарелкам и яствам. Князь Пожарский выдвигает в военачальники беглого крестьянина Романа (вымышленный персонаж), руководствуясь личными качествами людей, а не знатностью. С другой стороны, стяжатели (ими могут быть и богачи, и бедняки, и носители знания, как войсковой писарь Лизогуб в «Богдане Хмельницком») склонны к предательству вне связи с их социальным положением и национальностью. Предательство может быть мотивировано не только алчностью, но и моральной нечистоплотностью, врожденной порочностью. Жена Богдана Елена, «гордая шляхтянка и верная католичка», предает сначала своего мужа, а потом и его дело, став исполнительницей воли польского королевского двора и католической церкви. Архетип неверной, алчной, честолюбивой и коварной польской «панны» восходит к образу Марины Мнишек и полячке из «Тараса Бульбы» Н.В.Гоголя.

_

³⁰ Юренев Р.Н. Книга фильмов. Статьи и рецензии разных лет. – М., 1981, с.77.

³¹ Указ. соч., с. 164.

Польское войско в «Минине и Пожарском» представлено знаменитой «крылатой кавалерией» – у каждого воина на скаку вьются за спиной стяги в виде ангельских крыльев. Ополченцы Минина и Пожарского, за исключением самих полководцев, как и пристало ополченцам, не имеют красивой формы и больше напоминают партизан или народных повстанцев, а не регулярное войско. Ополченцам помогают жители Москвы, которые бросают под копыта польских всадников бревна и поленья, и всадники падают наземь, ломая крылья. Победа выглядит как превосходство стихийного, природного, неоформленного над культурным и регулярным. Это идеал народной партизанской войны, восстания низов, не раз воспетый историко-революционными советскими фильмами, начиная с «Чапаева».

Еще ближе к этому идеалу стоит казацкая вольница в «Богдане Хмельницком». Широко представленный в кино (и в культуре вообще) образ казака, соединяющий в себе черты бунтаря и душителя бунтов, опоры властей, по сути дела амбивалентен. С ним связаны культурно-идентификационные мифы украинского этноса, но в то же время и российские ностальгические державные проекты. Заряженный многоплановой культурной памятью, этот образ всегда давал возможность нивелировать этно-культурные и классовые различия во имя идеи «православного воинского братства», обслуживающего в конечном счете имперскую идею. В фильме «Богдан Хмельницкий» православие, в духе фольклорной смеховой культуры, травестировано образом монаха Гаврилы, пьяницы, сквернослова и женолюба. Каждого, кто приходит в казачье войско на Запорожскую Сечь, Гаврила экзаменует следующим образом: «Отче наш знаешь? Горилку пьешь?» Вопрос о религии, однако, задается не для того, чтобы убедиться в православном исповедании будущего казака, а для того, чтобы в лагерь казаков не проникли шпионы-католики, помогающие полякам. Сам Гаврила в конце концов лишен сана и бит батогами, однако он не задумываясь жертвует жизнью, чтобы спасти Богдана Хмельницкого, и выпивает поднесенное Богдану отравленное вино. Объединяющей казаков идеей является, таким образом, не православие, противопоставленное польскому католичеству, а стихийный «атеизм» и верность казачьему войску.

В картине, озвученной по-русски, звучит и украинский язык, причем без перевода. Актеры, исполняющие роли певцов-бандуристов, а также украинские артисты, играющие казаков, поют по-украински, русские актеры, которых в фильме немало, говорят по-русски³². Таким образом, внимание зрителей не может не привлечь сходство двух родственных языков,

³² На самом деле, как вспоминал исполнитель роли попа Гаврилы актер Михаил Жаров, произошел конфликт между режиссёром И.Савченко и художественным руководством Киевской студии, которое считало, что роль Богдана Хмельницкого и других персонажей должны играть только украинские актёры . См.: Жаров М.И. Жизнь, театр, кино. М.,1967, с.355. Воспоминания других участников фильма см.: Игорь Савченко. Сборник статей и воспоминаний. Киев,1980; Мордвинов Н.Д. Дневники. М.,1976;

которое служит дополнительным аргументом для главной идеи фильма — необходимости объединения русских и украинцев.

Здесь уместно вспомнить, что историческая фигура Богдана Зиновия Хмельницкого в годы выхода картины воспринималась на Украине неоднозначно, ведь еще в 1931 г. Малая Советская Энциклопедия писала:

«Хмельницкий показал блестящие военные и дипломатические способности, которые применил в конце концов в деле предательства революции... Предал крестьянскую революцию, обратившись к крепостнической Москве.»

После 1936 года и пересмотра концепции Покровского, трактовавшей присоединение к Российской империи других народов как абсолютное зло, предлагалось рассматривать присоединение как «наименьшее зло», и в 1940 году энциклопедия сообщала:

«Включение Украины в русское государство было для нее меньшим злом, чем захват панской Польшей или султанской Турцией.» 33.

Еще через несколько лет присоединение к Российской империи стали рассматривать как абсолютное благо. Дружба славянских народов объявлялась вечной.

«В бой, славяне, заря впереди!»

Если в довоенном советском кинематографе тема русского, украинского или белорусского патриотизма поднималась на историческом материале, и главным врагом была Польша (до советско-германского сближения могла быть и Германия, хотя бы символически – как в «Александре Невском»), с началом Великой Отечественной войны все изменилось. Например, в таких фильмах о героях гражданской войны, как «Александр Пархоменко» Л.Лукова или «Котовский» А.Файнциммера, которые были запущены в производство перед войной, и включали эпизоды сражений с поляками в 1920 г., эти сцены были изъяты или заменены на сражения с немцами (в реальности красная армия боев с немцами не вела). Фильм Е. Дзигана «Первая конная», начатый в 1939 г. и целиком посвященный польской войне, не вышел на экраны. В июле 1941 г. часть декораций «Первой Конной» была передана под оборонные фильмы, посвященные Великой Отечественной войне, а отдельные кадры сражений в годы войны были использованы во многих документальных и художественных фильмах.

С первых же дней войны киностудии СССР приступили к съемкам так называемых «Боевых киносборников», которые составлялись из нескольких короткометражных агитационных сюжетов, снятых разными режиссерами. Несколько таких сюжетов посвящено

³³Пример заимствован из статьи М.Я.Геллера «Союз нерушимый», см.: Советское общество: Возникновение, развитие, исторический финал, М., Изд. РГГУ, 1997, с.202.

борьбе польских патриотов с фашистскими оккупантами («Квартал №14», «Бесценная голова»)³⁴, один сюжет рассказывает о подпольщиках Белграда («Ночь над Белградом»). Этот последний сюжет запомнился зрителям звучащей в нем песней композитора Н.Богословского на слова Б.Ласкина, в которой содержался призыв: «В бой славяне, заря впереди».

Актриса Т.Окуневская (1914-2002), исполнившая эту песню, в 1948 году была жестоко репрессирована и вышла из сталинских лагерей лишь в 1956 г. Поводом послужило не только ее аристократическое происхождение и офицерское прошлое отца, но и то, что небольшой сюжет и сама она понравились югославскому лидеру И.Б.Тито, он даже пригласил Окуневскую в Югославию. После «ссоры» СССР и Югославии, актриса, которая для обеих стран символизировала единение в общей борьбе, была объявлена в СССР врагом народа, таким образом, перечеркивался и созданный ею образ.

В полнометражных фильмах о чешском антифашисте «Неуловимый Ян» и о польском герое-мстителе «Зигмунд Колосовский» зрители впервые увидели героев, которых так не хватало советскому довоенному кино. Это романтические герои-одиночки, рыцари, сражающиеся со злом во имя добра. Важнейшая черта такого героя — его индивидуализм, опора на собственные силы, собственную храбрость. Пожалуй, только фильм о герое гражданской войны Григории Котовском, тоже поставленный в военное время, предложил зрителю «боевик» с похожим героем-индивидуалистом, не скованным партийными директивами³⁶. Для того, чтобы нагляднее показать, как изменились во время войны образы «зарубежных» славян в советском кино, сравним два кинофильма: «Мечта» и «Неуловимый Ян». Задуманы оба фильма примерно в одно время, в 1939 году.

Сценарий «Мечты» был написан сразу после того, как советские войска вошли в восточные воеводства Польши (сентябрь 1939), съемки завершились в день начала Великой Отечественной войны 22 июня 1941 года. В связи с началом войны, странно было бы показывать зрителям победоносное освобождение Советской армией угнетенных Польшей народов, поскольку в июне 1941 г. территория была захвачена немецкими войсками. Фильм не выпускали на экраны вплоть до 1943 г., когда произошел разрыв отношений СССР с польским правительством в Лондоне, а советские войска уже были под Смоленском и вот-вот должны были опять войти в восточные воеводства Польши.

Сценарий фильма о чешском антифашистском подполье начали готовить после захвата Гитлером Чехословакии, съемки должны были начаться в 1941 году, однако помешала война. При эвакуации «Мосфильма» многие начатые проекты были законсервированы, но работу

_

³⁴ Подробнее см.: Приложение 1.

³⁵Т. Окуневская. Татьянин день. М., Вагриус, 1998.

³⁶ Фильм «Котовский» был снят режиссером А.Файнциммером в 1942 г. в Алма-Ате, куда эвакуировали многие киностудии из Европейской части страны. Главного героя, Котовского,

над фильмом «Неуловимый Ян» решено было продолжать на Тбилисской киностудии, и он вышел на экраны в 1942 г.

Если в «Мечте» авторы, сценарист Е. Габрилович и кинорежиссер М. Ромм, изначально ставили себе цель показа «Польши тридцатых годов, ее политической безысходности, социального тупика и полной необходимости в коренных переменах и переустройства всей ее жизни» 37, поэтому среди положительных героев неизбежно оказались польские рабочие-коммунисты, в «Неуловимом Яне» нет ни слова о коммунистах или необходимости социального переустройства – весь пафос фильма в борьбе за национальную независимость чешского народа. Главный герой – не рабочий, а студент. Студент Ян Смудек, которому пришлось провести два года в фашистском исправительно-трудовом лагере, выходит на свободу и становится обладателем большого наследства, завещанного ему учителем, профессором Пражского университета. Разумеется, это сделано профессором в надежде на то, что Ян сумеет употребить «наследство» во имя спасения родной чешской культуры. Ян приобретает автомобиль, радиостанцию, и колесит по стране, из разных уголков передавая каждый вечер новости радиостанции под названием «Свобода». Одна из главных новостей, которую радио доносит до чехов - это создание в СССР Славянского комитета по борьбе с фашизмом. Авантюрный сюжет развивается в соответствии со своими законами, и в машине вместе с Яном оказывается красивая девушка, тоже патриотка, расклеивающая повсюду листовки с призывами к борьбе. Намеченная любовная линия, старательно снятые «европейские» интерьеры жилищ, гостиниц, университетских аудиторий, прекрасные внешние данные актера E.Самойлова³⁸, исполняющего главную роль, и его партнерши, актрисы Е. Горкуши-Ширшовой³⁹ – все это вместе никак не могло восприниматься в

играл тот же актер Н.Мордвинов, который сыграл Богдана Хмельницкого в одноименном фильме. ³⁷ Габрилович Е.И. Избранные сочинения. Т.1. М., 1982, с.127.

³⁸ Актер Е.Самойлов (1912-2006) начинал театральную карьеру в Ленинграде, был замечен В.Э.Мейерхольдом и приглашен в Москву, всю жизнь играл в московских театрах. После того, как перед войной снялся у А.Довженко в главной роли в фильме «Щорс» и получил Сталинскую премию, много снимался, был в конце 1930-х -1940-х годах редким в СССР актером амплуа «герой-любовник» («Светлый путь», «Сердца четырех», «В шесть часов вечера после войны»). Дочь актера Татьяна Самойлова (1934-...) снялась в роли Вероники в классическом фильме о войне «Летят журавли» (1957).

³⁹ Евгения Горкуша (1915-1948), в начале войны ставшая женой Героя Советского Союза полярника П. Ширшова, вскоре назначенного наркомом морского флота СССР, на одном из официальных приемов 1946 г. отвергла домогательства всесильного Лаврентия Берии и была вскоре арестована. В заключении покончила с собой. П. Ширшов был сломлен, снят с должности министра и умер за месяц до смерти Сталина, в возрасте 47 лет. Возможно, что это повлияло на прокатную судьбу фильма «Неуловимый Ян», который после войны исчез с экранов и даже не включен в каталог «Советские художественные фильмы» (Советские художественные фильмы. Аннотированный каталог.Т.2. Звуковые фильмы (1930-1957). М., 1961.)

качестве социальной критики буржуазного строя, скорее совсем наоборот. В «Мечте» же панорама города Львова, который и подразумевался в качестве места действия, сопровождается ироническим комментарием: «В этом городе было пять костелов, две тюрьмы, четыре фабрики, тридцать девять публичных домов, двести сорок торговых лавок...».

В «Мечте», хотя съемочная группа выезжала для работы на территорию только что занятых советскими войсками восточных воеводств Польши, большинство сцен снято в павильоне, действие происходит в замкнутом помещении: в пансионе «Мечта», в ресторане. Можно предположить, что режиссер опасался снимать на улицах Львова, чтобы случайно в кадр не попало что-либо, противоречащее разоблачительным закадровым репликам. Опасения были не напрасны, например, Л Трауберг писал своему коллеге режиссеру В. Файнбергу, критикуя его фильм «Голос Тараса»: «Действие в картине происходит не во Львове, а в Н-ом городе. А в таком виде, как ты показываешь Львов, непонятно — зачем же нашим войскам входить в город и освобождать его? Народ ходит там в великолепных платьях и костюмах. Ты это показал, упиваясь видом этих нарядов. Выбрось это немедленно». 40

В фильме «Неуловимый Ян», снятом в разгар войны, в Тбилиси, а вовсе не в Чехии, много натурных сцен, вставлены и хроникальные кадры. Авторов ничуть не смущало, что герои дорого и нарядно одеты, а интерьеры, предметы быта, автомобиль не вызывают сомнений в материальном благополучии чехов, даже и под гнетом нацизма. В фильме «Неуловимый Ян» мы видим только чехов, они с воодушевлением произносят: «Люблю думать и говорить по-чешски». Национальный пафос полностью затмил здесь пафос интернационализма, который очевиден в «Мечте».

В фильме «Мечта» принятый в советском кино классовый канон присутствует имплицитно, в виде упоминания о забастовках рабочих и борьбе коммунистов (которая в основном остается за кадром). Видимым эксплуататором в фильме «Мечта» оказалась еврейка Роза Скороход, содержательница пансиона «Мечта». Роза Скороход в исполнении Фаины Раневской вызвала похвалу даже у американского президента: «На мой взгляд, это один из самых великолепных фильмов мирового кино. Раневская – блестящая трагическая актриса», – сказал Ф.Д. Рузвельт. Часта хозяйка пансиона уверенно держит в руках всех обитателей своей «Мечты», от прислуги до последнего из разношерстных постояльцев, она изображена достигшей благополучия собственным трудом, страдающей матерью талантливого инженера, лишенного возможности проявить свой талант и знания в условиях буржуазной Польши.

⁴¹ Советские художественные фильмы. Аннотированный каталог. Т.2. Звуковые фильмы (1930-1957). М.,1961.

 $^{^{40}}$ РГАЛИ: 2450, 2, 432, с.18. Цит. по: Токарев В.А. «Кара панам!»: польская тема в предвоенном кино (1939-1941) //История страны. История кино. Сборник статей. М.,2004, с.157.

Абсолютно отрицательным героем в фильме выведен другой персонаж, это нищий обитатель мансарды Коморовский, который сам стирает себе единственные носки, но издевается над теми, кто стоит ниже его на социальной лестнице. Именно в Коморовском, по мысли сценариста Е. Габриловича, заключалась самая сущность шляхетской Польши, чванной и нищей, грозной и пустой 2. Создал этот образ «гонорового пана» актер М.Астангов, который в фильме «Минин и Пожарский» изображал польского короля Сигизмунда.

В фильме «Мечта» состав героев интернационален, подчеркивается этническая неоднородность населения Восточной Польши, однако нет и намека на идею славянского единения с «русскими братьями», которая открыто звучала в предвоенном фильме «Богдан Хмельницкий»: «Слава народу русскому, брату нашему. Скоро день настанет, соединится брат с братом, и не будет силы той, чтоб нас сломила». Документальные кадры входа Советской Армии во Львов, осуществленного на основании пакта Молотова-Риббентропа, показаны как торжество социальной справедливости, как выход из тупика для угнетенных, но не как попрание польской национальной гордости.

Итак, в фильмах военного времени место «врагов с запада» заняли немцы, а борющийся с фашизмом поляк или чех выступил в амплуа романтического героя-одиночки. Как правило, это яркий образ, противостоящий обезличенной массе врагов-фашистов. Западная культура, выступающая в довоенных исторических фильмах как враждебная, «чужая», предстает теперь как ценность, которую следует спасать от фашистских варваров. Чешская культура символически изображена в виде старинных рукописных свитков и их хранителя, университетского профессора. Теперь эта культура уже должна восприниматься зрителем как «своя», «славянская», «национальная». Само понятие национальной культуры и национальной истории реабилитировано, но – в приложении к зарубежной Чехословакии, а не к внутрисоюзной Украине (здесь уместно вспомнить сокрушительный разгром, устроенный повести А.Довженко «Украина в огне»).

В снятых за время войны и сразу после нее киносюжетах со «славянами» герои никогда не встречаются с русскими или иными советскими гражданами. Самое большее – они слушают об СССР по радио. Показ самостоятельной, не поддержанной советской стороной борьбы с фашизмом давал возможность обратиться к теме личного героизма, которая на советском материале всегда вступала в противоречие с постулатом о руководстве мудрой, прозревающей будущее коммунистической партии и ее вождей. Весьма показательна в этом смысле история написания А.Фадеевым классического романа «Молодая гвардия» о юных подпольщиках оккупированного фашистами Краснодона (Украина). Как известно, написанный по горячим следам событий и опубликованный в 1945 г. роман был в 1951 г. переписан Фадеевым, поскольку изображение юных героев, действовавших самостоятельно,

⁴² Мой режиссер Ромм. М., 1993, с.91-92.

без указаний партии, вызвало критику. 43

Братство по оружию на материале второй мировой войны стало темой гораздо более поздних советских фильмов, относящихся к 1960-70 гг. К этому времени стало уже ясно, что вовсе не обязательно, чтобы братьями по оружию представали славяне. Со славянскими братьями по оружию, а именно с правительством Югославии, у Сталина возникли самые большие разногласия, в том числе и в оценке военного прошлого. Зато французский режиссер Жан Древиль в 1960 г. снял в СССР на базе киностудии «Мосфильм» ленту о летчиках французской эскадрильи «Нормандия-Неман», которые сражались вместе с Советской Армией в годы второй мировой войны, и картина всех устроила. Однако можно с уверенностью сказать, что ни один советский фильм не был так широко популярен в СССР, как польский телесериал 1968 г. «Четыре танкиста и собака», поскольку благодарными зрителями сериала были в основном дети. В этом сериале идея славянского братства не проявилась вовсе - среди четырех главных героев фильма, составляющих экипаж танка, мы видим двух поляков, грузина и советского гражданина польского происхождения (по ходу истории он погибает, и его заменяет поляк). Можно сказать, что «Четыре танкиста» возродили традицию авантюрного жанра, заложенную в годы войны фильмом «Неуловимый Ян». Помимо польского сериала, были аналогичные болгарские и венгерские телевизионные многосерийные фильмы о героях-разведчиках, популярные в СССР.

Режиссер Юрий Озеров, известный своими грандиозными по размаху фильмами о Великой Отечественной войне из серии «Освобождение», сделал в 1977 г. несколько фильмов о том, как будущие лидеры стран социалистического лагеря встали во главе борьбы народов Восточной Европы — это фильмы под общим названием «Солдаты свободы». Поскольку в создании их участвовали не только славянские страны, но и Венгрия, ГДР, Румыния, тема славянского братства не поднималась. Таким образом, совместная борьба народов Европы против гитлеризма предстала в советском кино в свете интернационалистских идеалов «антифашистской солидарности демократических сил».

«Братушки»

Совместная борьба славян с западной угрозой в историческом контексте рассматривалась в качестве возможной темы кинофильма еще в 1939 г., именно тогда впервые возникла идея снять ленту о Грюнвальдской (Танненбергской) битве (1410 г.)⁴⁴. Вновь о фильме «Битва при

 43 Катерина Кларк. Советский роман: история как ритуал. Екатеринбург, 2002, с.140.

⁴⁴ Докладная записка С.С. Дукельского В.М.Молотову о работе Комитета по делам кинематографии при СНК СССР над историческими и историко-революционными темами. Цит. по: Кремлевский кинотеатр 1928-1953. Документы. М., РОССПЭН, 2005, с. 540.

Грюнвальде» заговорили в 1944 г., был даже назначен режиссер — В.Петров. Если в 1939 г. тема фильма формулировалась как «борьба русского народа против немецкой экспансии на восток», главным героем должен был стать белорусский крестьянин, а союзниками русского народа намечено было изобразить «белорусский и украинский народы» 45, то в 1944 г. речь шла о «борьбе польских и других славянских народов за свою независимость» 6, то есть, о союзе с «зарубежными славянами». Фильм так и не был поставлен.

Советско-югославский конфликт 1948 г. продемонстрировал разлад в славянском мире и нанес удар по «новому славянскому движению». Но еще до ссоры Сталина и Тито возникли проблемы с изображением в советском кино антифашистской борьбы народов Югославии. Документальный фильм «Сыны Югославии» о югославской военной части в СССР обнаружил полное незнание его авторами истории и культуры народов Югославии, грешил множеством ошибок, которые оскорбили первого зрителя фильма – главу Югославской военной миссии генерала Терзича. Фильм, по-видимому, так и не вышел на экраны 47. Художественный фильм «В горах Югославии», который снял Абрам Роом в 1946 г., с успехом прошел в СССР, но был холодно принят югославским руководством. Главной претензией к фильму было преувеличение роли советской армии в освобождении Югославии и незнание реальной истории Югославского сопротивления. В соответствии с замечаниями руководителей югославского правительства, в копии фильма, который уже демонстрировали в московских кинотеатрах, внесены были некоторые поправки 48. Впрочем, вскоре фильм сняли с экранов из-за политических событий.

Ухудшение советско-югославских отношений нельзя объяснить только непростыми личными отношениями Сталина и Тито. Гонениям на Югославию предшествовала активизация после окончания Второй мировой войны прямых связей между всеми компартиями, хотя раньше они осуществлялись в основном под опекой Кремля и в рамках Коминтерна. Такая самодеятельность не приветствовалась Сталиным. Например, за то, что Г. Димитров высказал мысль о возможности образования федерации государств Восточной Европы, он получил от Сталина «выговор». Можно предположить, что начиная компанию против югославского ревизионизма, Сталин препятствовал такому развитию ситуации в Восточной Европе, которая могла бы привести к созданию здесь какого-либо крупного государства (например, болгаро-югославской федерации или федерации славянских народов)

_

⁴⁵ Указ. соч., с.550-551.

⁴⁶ Ответ И.Г.Большакова на письмо Н.А.Булганина. 23 августа 1944 г. Цит. по: Кино на войне. Документы и свидетельства. //Авт.-сост. В.И. Фомин, М., Материк, 2005, с. 624.

⁴⁷Указ. соч., с.621-622.

⁴⁸ Записка Г.Ф.Александрова А.А.Жданову о реакции членов правительства Югославии на просмотр фильма «В горах Югославии». Цит. по: Кремлевский кинотеатр 1928-1953. Документы. М., РОССПЭН, 2005, с. 777.

или союза государств, претендующего на независимую политику от СССР. В новых условиях «славянская идея», подразумевающая противопоставление славянских народов неславянским, сужала базу советской внешней политики.

Намеченная еще в годы войны и существования Славянского комитета тема совместной битвы славян против общего врага получила воплощение, практически, только в одном фильме — это удостоенная приза Каннского кинофестиваля за режиссуру картина 1954 г. «Герои Шипки».

Режиссером фильма был Сергей Васильев, один из братьев Васильевых, снявших в 1934 г. знаменитого «Чапаева».

Актер Е.Самойлов (неуловимый Ян) играл в этом фильме генерала М.Д.Скобелева (1843 – 1882), одного из самых выдающихся российских полководцев. Скобелев прославился в кампании по присоединению Туркестана (1873-1875гг.) и в войне с Турцией 1877-1878 гг. Генерал Скобелев происходил из незнатной семьи – дед его был участником многих компаний, ординарцем М.И.Кутузова и в последние годы комендантом Петропавловской крепости, он получил права дворянина за ратные подвиги. Сам Скобелев был любимец солдат (о нем слагались даже песни), отважный человек и талантливый стратег, которого уважали даже враги и называли «Ак-паша» (белый генерал). В Болгарии Скобелеву поставлен был памятник, помнили там и его мать, которая много сделала для болгар на почве благотворительности. Скобелев был, казалось бы, идеальной фигурой для исторического фильма о славянском боевом братстве. Однако фильм не стал «биографией» Скобелева, хотя в то время именно биографический жанр был наиболее популярен в советском кино. Фильм снят как «многофигурное полотно», со множеством исторических персонажей (царь Александр II, главнокомандующий Дунайской армией великий князь Николай Николаевич, генералы, дипломаты, деятели русской культуры, зарубежные правители и политики), но и с образами вымышленными (донской казак Сашко Козырь, болгарская девушка Ионка и т. д.).

Фильм «Герои Шипки» в целом снят в соответствии с выработанным в советском историческом фильме каноном изображения «героических народных масс», «близких к народу представителей правящего класса» и реакционных коррумпированных правителей. Царь и его окружение не жалеют крови русских солдат, не ценят истинного героизма, не способны соблюдать интересы России в международной политике. С другой стороны, и русский народ, и лучшие представители интеллигенции (Пирогов, Гаршин) осознают необходимость освобождения болгар от турецкого порабощения и готовы самоотверженно бороться за это. Непосредственная встреча русских и болгар выявляет культурную близость (религия, язык, обычаи). Между отдельными представителями русской и болгарской стороны возникает дружба и даже любовь. Военная помощь России, оказанная Болгарии в прошлом,

служит прецедентом для союзничества в рамках Варшавского договора – в финале картины мы видим войска союзников, оснащенные современными танками, и возложение венков к памятнику героям Шипки.

Изображение в фильме турецких злодеяний в Болгарии и расправы над восставшими напоминает сцены польской расправы над восставшими украинцами в «Богдане Хмельницком». Хотя кинематографические поляки сажают свои жертвы на кол и заживо сжигают их, а турки зарывают несчастных по шею в землю на солнцепеке или сбрасывают в глубокое ущелье, мизансцена в обоих случаях строится вдоль змеящейся дороги, по которой проходят вереницы мучеников. Невольно возникает параллель между фильмом о присоединении Украины к России и фильмом об освобождении Болгарии от турецкого владычества.

Болгарский язык в некоторых случаях оставлен в фильме без перевода, и это является способом подчеркнуть культурную близость двух народов (так был использован русский и украинский язык в «Богдане Хмельницком»). Однако есть в фильме «Герои Шипки» и сцены, подчеркивающие культурные различия двух близких народов — таких сцен не было в «Богдане Хмельницком». Во время любовного свидания и объяснения между казаком Сашко и болгарской девушкой Ионкой, непонимание возникает из-за различий в значении жестов у русских и болгар. То, что болгары, говоря «да», крутят головой, а говоря «нет» — кивают, строго противоположно значениям телесного языка русских. Таким образом, болгарская культура не только изображается как близкая, но и объективируется, экзотизируется. Болгарские пляски «хоро» русские солдаты опознают как близкие русскому хороводу, но в то же время, зритель не может не заметить их отличие, как музыкальное, так и пластическое.

Обращение такого режиссера, как Сергей Васильев, к теме русско-турецкой войны кажется не случайным в свете его личной и творческой биографии. Сергей Васильев был сыном специалиста по военной истории России, связавшего свою жизнь с Государственным Военно-Историческим архивом, и сам прекрасно знал историю. В фильме достаточно легко угадываются отсылки к культурно-историческому контексту, показаны карты и схемы сражений. Как автор фильмов о гражданской войне, о становлении Красной армии («Чапаев») и о японской интервенции на Дальнем Востоке («Волочаевские дни»), Васильев использовал в своем фильме то, что было уже найдено им прежде (в соавторстве с Георгием Васильевым). В «Героях Шипки» есть сцена атаки, когда сомкнутые ряды русских наступают по всему фронту на турецкие позиции — это напоминает психологическую «каппелевскую» атаку белой гвардии в «Чапаеве». В обоих случаях упорядоченное ритмизованное движение вооруженных людей, которые сознательно идут под пули, теряя товарищей, вновь и вновь смыкают строй, но не поворачивают назад, производит впечатление. В «Чапаеве» эта сцена снята с точки зрения «красных», она символизирует

столкновение природы (чапаевцы) и культуры (белогвардейцы), стихии и порядка, и авторы – на стороне природы, стихии, революции. В «Героях Шипки» автор безусловно на стороне русских, здесь наступающие русские войска символизируют культуру и порядок, а турки – стихию и природу. Режиссер, цитируя самого себя, как бы снимает противоречие между белыми и красными в «Чапаеве», солидаризуясь в «Героях Шипки» с российской марширующей цепью. Именно эта манифестация неразрывности российской истории, преемственности между советскими и российскими воинскими традициями, является важнейшим высказыванием фильма, а отнюдь не идея славянского братства как такового.

На основании рассмотренного киноматериала, можно сделать вывод, что даже в период существования Славянского комитета и формирования «социалистического лагеря» славянский вопрос не нашел своего сколько- нибудь определенного отображения в советском кино. Взаимоотношения русского и других славянских народов чаще всего представлены в этот период как общие цели в борьбе с фашизмом, братство по оружию (вместе с другими антифашистами, неславянского происхождения), фактор противостояния блоку НАТО. Славянские народы не выделены из других народов социалистического лагеря, практически не артикулирована общность православного исповедания, редко упоминаются и очень упрощенно толкуются схождения или различия этнического характера. Как правило соблюдается иерархия старшинства: русский народ – старший брат.

В рассмотренных нами фильмах, которые создавались с четкой идеологической задачей и под наблюдением Агитационно-пропагандистского отдела ЦК КПСС, выработались определенные штампы, гарантировавшие успешное исполнение заказа. Не случайно эти фильмы снимал узкий круг пользовавшихся хорошей профессиональной репутацией режиссеров, а в главных ролях снимались одни и те же актеры: Мордвинов, Самойлов, Астангов... Повторялись мизансцены, реплики, сюжетные ходы, и не было большой разницы между белорусами, украинцами, болгарами или сербами с одной стороны, и венграми, румынами, эстонцами или литовцами с другой.

Приложение 1.

Краткая аннотированная фильмография

1. Минин и Пожарский, 1939. 109 м. Мосфильм.

Режиссеры В.Пудовкин, М.Доллер; автор сценария В.Шкловский; оператор А. Головня. В ролях: А.Ханов (Минин), Б.Ливанов (Пожарский), Б.Чирков (беглый мужик Роман), Л.Свердлин (Григорий Орлов), М.Астангов (король Сигизмунд), А. Горюнов (гетман Ходкевич).

Исторический фильм о создании народного ополчения, благодаря которому Русь была

освобождена от угрозы подчинения Речи Посполитой (1610-1612). В центре фильма такие исторические персонажи, как нижегородский мясник и купец Кузьма Минин, инициировавший сбор средств для ополчения, и князь Д.М. Пожарский, призванный ополченцами в качестве военного командующего. Среди главных героев есть вымышленные персонажи (представители народной массы): беглый крестьянин Роман, который проявляет храбрость и талант и становится близким сподвижником Пожарского, а также жадный и криводушный дворовый слуга князя Орлова, ставший изменником.

Польская интервенция изображена схематично, Лжедмитрий и Марина Мнишек, казацкие лидеры военного противостояния (Заруцкий) остались за кадром.

2. Богдан Хмельницкий, 1941. 114 м. Киевская киностудия.

Режиссер И.Савченко; автор сценария А.Корнейчук; оператор Б.Екельчик.

В ролях: Н.Мордвинов (Хмельницкий), Г. Жуковская (Гелена Чаплинская), М. Жаров (священник), Б.Андреев, Г. Грайф (Стефан Потоцкий)

Гетман Богдан-Зиновий Хмельницкий собирает в 1648 г. на Запорожской Сечи войско и начинает борьбу против польской шляхты, притесняющей украинцев, за независимость Украины от Речи Посполитой. В центре внимания фильма личная судьба Богдана Хмельницкого, потерявшего из-за поляков сына и любимую женщину (Елену Чаплинскую), а также казацкая вольница и обычаи Запорожской Сечи.

Враги подсылают Гелену к гетману, бывшему супругу, и она пытается его отравить. Предательство разоблачено, на приеме польских и русских послов Хмельницкий отдает предпочтение московским гостям и предрекает скорое единение украинского и русского народов.

3. Мечта, 1941. 100 м. Мосфильм. *Выход на экран в 1943 г.

Режиссер М. Ромм; авторы сценария Е.Габрилович и М. Ромм; оператор Б. Волчек. В ролях: Е.Кузьмина (Ганка), Ф.Раневская (Роза Скороход), А. Войцик (невеста), М. Астангов (Станислав Коморовский), Р. Плятт (Янек, извозчик).

Действие фильма происходит в 1933 году, в одном из городов Западной Украины, входившем до 1939 г. в состав Польши. Крестьянская девушка Ганка приходит в город на заработки и устраивается прислугой в пансион еврейки мадам Скороход под названием «Мечта». Ночами Ганка работает в ресторане, принимает шляпы и трости гостей. Знакомство с рабочим-коммунистом и личная симпатия к нему приводят девушку к социальному пробуждению. Обитатели пансиона (вечная невеста Ванда, прожившая свое приданое; извозчик без седоков; бывший художник, живущий ремеслом лудильщика; сама хозяйка и ее сын – инженер, чьи проекты остаются лишь на бумаге) живут без надежды осуществить свои

мечты. Только в составе СССР они смогут обрести счастье. Ганка уходит пешком на Советскую сторону еще в 1933 г. В финале она возвращается в город вместе с войсками Красной армии в 1939 г. Город стал советским, а Ганка назначена работать в городской администрации.

4. Неуловимый Ян, 1942. 56 м. Тбилисская киностудия.

Режиссер И. Анненский; авторы сценария О.Зив и А.Столпер

В ролях: Е.Самойлов (Ян), Е. Горкуша-Ширшова и др.

Чешский студент Ян в период гитлеровской оккупации ведет подпольные радиопередачи, сообщая правду о положении на фронтах и призывая народ к борьбе с фашизмом. Фильм снят в жанре авантюрной драмы. Чехи изображены рыцарски-благородными, по-европейски культурными и высокообразованными, а немцы – варварами, закрывающими университеты и сжигающими книги.

5. Ночь над Белградом, 1942. 900 метров. (Новелла из «Боевого киносборника №8»). Ташкентская киностудия.

Режиссер Л.Луков; автор сценария И.Склют; оператор А.Лаврик. В ролях: Т.Окуневская, П.Алейников, П.Масоха и др.

Новелла о подпольщиках Белграда, в роли подпольщицы и диктора белградского радио красавица Татьяна Окуневская исполнила песню Н.Богословского «Ночь над Белградом», одну из любимых в СССР песен военного времени. Слова написаны Б.Ласкиным. В песне есть такие строки:

Пламя гнева горит в груди!

Пламя гнева, в поход нас веди!

Час расплаты готовь!

Смерть за смерть! Кровь за кровь!

В бой, славяне! Заря впереди.

6. Квартал №14, 1942. 650 метров. (Новелла из «Боевого киносборника №9»). Киевская киностудия (Ашхабад).

Режиссер И.Савченко, автор сценария А.Лазурин, оператор Ю. Екельчик. В ролях: М.Бернес (рабочий), Я. Анджиевская (Ядя), В.Красовецкий (поляк), С.Дитлович (немец).

Польский рабочий застрелил немецкого офицера. Фашистское командование распорядилось оцепить квартал №14 и расстрелять каждого десятого жителя, если виновник не будет выдан. Внезапно с крыши дома летят листовки. Жители квартала бросаются на фашистских палачей. Звучит призыв патриотов: «Поляки, беритесь за оружие!»

7. Бесценная голова, 1942. (Новелла из «Боевого киносборника №10»). Центральная Объединенная киностудия (Алма-Ата).

Режиссер Б.Барнет; авторы сценария Б.Петкер и Г.Рублев; оператор К.Венц. В ролях: В.Орлова (мать), В.Шишкин (Юзек), Н.Черкасов (доктор), М.Гольдблат (еврей).

В оккупированном городе фашисты разыскивают польского патриота Юзека Гроховского, который совершает смелые диверсии. За его поимку назначено вознаграждение. Скрываясь, Юзек попадает в квартиру, где умирает от голода девочка. Юзек предлагает, матери выдать его врагам, чтобы получить награду и спасти ребенка. Женщина обещает фашистам выдать Юзека, но ведет их на чердак, и патриот успевает скрыться. Когда женщину с другими патриотами ведут на расстрел, Юзек с друзьями освобождает их. Женщина становится борцом подполья. Подпольщики используют радиопередатчик, чтобы нести народу правду о борьбе патриотов.

8. Зигмунд Колосовский, 1945. 88 м. Киевская киностудия.

Режиссеры С.Навроцкий и Б.Дмоховский; автор сценария И.Луковский; оператор В.Фирсов. В ролях: Б.Дмоховский (З.Колосовский, он же журналист Големба, инвалид Гросс, барон Федруччи, и т.д.); Д.Голубинский (ксендз); В.Шишкин (С.Орлик), Г.Клеринг (фон Бюлов) и др.

Польский антифашист Зигмунд Големба, приняв имя своего погибшего друга Колосовского, устраивает смелые диверсии: взрывает штабы, убивает высокопоставленных гестаповцев, освобождает пленных поляков. Когда Зигмунд попадает в тюрьму, друзья и простые люди освобождают его.

9. В горах Югославии, 1946. 86 м. Мосфильм.

Режиссер А.Роом; автор сценария Г.Мдивани; оператор Э.Тиссэ. В ролях: И.Берсенев, Н.Мордвинов, О.Жизнева, В.Санаев, Т.Ликар, Л.Иванович, М.Миркович.

Боснийский селянин Славко Бабич мирный человек, но зверства фашистов заставляют его взяться за оружие. Славко создает партизанский отряд и ведет его для соединения с главными силами повстанцев, которыми руководит Иосип Броз Тито. Встреча с отрядом Тито происходит в трудный момент, когда партизанам грозит окружение. Партизаны уходят вглубь страны и вместе с советскими танками освобождают Белград.

10. Герои Шипки, 1954. 117 м. Ленфильм и Болгарфильм. Приз Каннского фестиваля 1955 г.

Режиссер С. Васильев; автор сценария А. Первенцев; оператор М.Кириллов.

В ролях: И. Переверзев, В. Авдюшко, Г. Юматов, Е. Самойлов и др.

В 1876 г. болгары поднимают восстание против турков, с XIV в. владычествующих на Балканах. Восстание жестоко подавлено, но Россия в 1877 г. объявляет Турции войну, которую поддерживает русская общественность. В центре фильма фигура любимца солдат генерала Скобелева, которому противопоставлены царские генералы, думающие лишь о собственной карьере. Критике подвергнут и царь. Подчеркнута культурная и языковая близость русских и болгар. Взаимные симпатии символически представлены романом русского казака и болгарской девушки. В финале фильма советские войска и генералы 2-й Мировой войны присутствуют на памятной церемонии у монумента героям Шипки.

11. Четыре танкиста и собака, 1968. 19 серий по 53 м.

Польское телевидение, студия «Сирена»

Режиссер Конрад Налецкий; Авторы сценария Януш Пшимановский, Станислав Вольф.

В ролях: Януш Гайос, Франтишек Печка, Пола Ракса.

В сибирской тайге, среди русских охотников и лесорубов, живет семнадцатилетний поляк Янек. Русские любят его за веселый нрав и меткую стрельбу. Гитлер уже напал на СССР, идет зима 1941 года. Узнав о формировании польских войск на территории СССР, Янек убегает на фронт в надежде найти отца, пропавшего без вести на Вестер-Плятте, во время первых боев 2-й Мировой войны в 1939 г. Янек попадает в международный танковый экипаж, в составе которого польский силач Густлик, грузин Георгий, советский командир польского происхождения Владимир и пес Шарик. В каждой серии герои совершают новые подвиги и преодолевают трудности, благодаря верной дружбе, храбрости и неистощимой изобретательности. Советская сторона представлена главным образом любимой девушкой Янека, рыжей санитаркой Марусей. При освобождении Польши погибает советский командир Владимир, и вместо него командиром становится Янек, чья польская идентичность подкрепляется встречей в Гданьске с отцом, чудом выжившим героем польского сопротивления.

Экипаж танка продолжает свой путь до самого Берлина.

Приложение 2

Список советских фильмов 1925-1953 гг, действие которых происходит на территории Польши

- 1. Крест и маузер, 1925. Госкино (1-я фабрика). Режиссер В. Гардин; автор сценария Л.Никулин.
- 2. Карьера Спирьки Шпандыря, 1926. Ленинградкино. Режиссер Б.Светлов; автор

- сценария Г.Батаргин.
- 3. Пилсудский купил Петлюру, 1926. ВУФКУ (Одесса). Режиссеры А.Лундин и Г.Стабовой; авторы сценария Г.Стабовой и Я.Лифшиц.
- 4. Тарас Трясило, 1926. ВУФКУ (Одесса). Режиссер П.Чардынин; автор сценария В.Радыш.
- 5. Тени Бельведера, 1927. ВУФКУ (Ялта). Режиссер А.Анощенко; автор сценария А.Золин.
- 6. Василина, 1927. ВУФКУ (Одесса). Режиссер Ф.Лопатинский; автор сценария Н.Яловой.
- 7. Лесная Быль, 1927. Режиссер Ю.Тарич; авторы сценария Е.Иванов-Барков, Ю.Тарич.
- Кастусь Калиновский, 1928. Белгоскино и Совкино. Режиссер В.Гардин; автор сценария В.Гардин.
- 9. Джентльмен и петух, 1929. Белгоскино. Режиссер В.Баллюзек; авторы сценария Л.Иерихонов и И.Долгопольский.
- 10. Плотина прорвана, 1929. ВУФКУ (Одесса). Режиссер М.Капчинский; авторы сценария Д.Фальковский и Л.Френкель.
- 11. В огне рожденная, 1929. Белгоскино. Режиссер В.Корш; автор сценария А.Вольный.
- 12. До завтра, 1929. Белгоскино. Режиссеры Ю.Тарич, И.Бахар; авторы сценария Ю.Тарич, И.Бахар.
- Сосны шумят, 1929. Белгоскино. Режиссер Л.Молчанов; авторы сценария А.Вольный и К.Державин.
- Ненависть, 1930. Белгоскино. Режиссер Ю.Тарич; авторы сценария Л.Иерихонов и Ю.Тарич.
- 15. Кармелюк, 1931. Украинфильм (Киев и Одесса). Режиссер Ф.Лопатинский; авторы сценария Ф.Самутин и С.Уэйтинг-Радзинский.
- Рядом с нами, 1931. Союзкино (Москва). Режиссер Н.Бравко; авторы сценария В.Гусев и М.Ромм.
- 17. Вместе с отцами, 1932. Украинфильм (Киев). Режиссер Л.Френкель; авторы сценария А.Варавва и Л.Френкель.
- 18. Изменник Родины, 1933. Межрабпомфильм. Режиссер И.Мутанов; авторы сценария В.Соколов, Л.Зипман и И.Мутанов.
- 19. Колиивщина, 1933. Украинфильм (Одесса). Режиссер И.Кавалеридзе; автор сценария И.Кавалеридзе.
- 20. Граница, 1935. Ленфильм. Режиссер М.Дубсон; автор сценария М.Дубсон.
- 21. Назар Стодоля, 1937. Украинфильм (Одесса). Режиссер Г. Тасин; автор сценария И.Кулик.
- 22. Иностранка, 1938. Украинфильм (Одесса). Режиссер В.Гончуков; автор сценария

- В.Гончуков.
- Соловей, 1938. Белгоскино. Режиссер А.Аршанский; авторы сценария З.Бядуля и Н.Таубе.
- Одиннадцатое июля, 1938. Советская Беларусь. Режиссер Ю.Тарич; авторы сценария А.Зеновин и Ю.Тарич.
- Огненные годы, 1939. Советская Беларусь. Режиссер В.Корш-Саблин; авторы сценария И.Луковский и С.Навроцкий.
- 26. Минин и Пожарский, 1939. Мосфильм. Режиссеры В.Пудовкин и М.Доллер; автор сценария В.Шкловский.
- Ветер с Востока, 1940, Киевская киностудия. Режиссер А.Роом; авторы сценария А.Дубровский и В.Кучера.
- 28. Голос Тараса, 1940. Ленфильм. Режиссер В. Файнберг; автор сценария В. Беляев.
- 29. Богдан Хмельницкий, 1941. Киевская киностудия. Режиссер И.Савченко; автор сценария А.Корнейчук.
- 30. Мечта, 1941. Мосфильм. Режиссер М.Ромм; авторы сценария Е.Габрилович и М.Ромм.
- 31. Зигмунд Колосовский, 1946. Киевская киностудия. Режиссер С.Навроцкий; автор сценария И.Луковский.

ロシア演劇における近代化と異文化接触

メイエルホリドとコミッサルジェフスキーの場合

楯 岡 求 美

序:演劇の近代と越境

音楽やバレエと異なり、言語に依拠する芝居(セリフ劇)は国境をはじめとする文化的境界を越えにくい、と一般には思われがちである。しかし、演劇手法のグローバリゼーションを議論するよりも遥か昔から、そもそも身体表現としての演劇は、旅するさまざまな芸能者が文化圏を越境し、互いに影響しあいながら展開してきたということはコメディア・デラルテから派生していったなピエロ等の継承などの例を挙げるまでもなく明らかである。20世紀に入るあたりから、交通・通信・流通網の発達や科学等の技術の発展に伴い、より普遍的な規範を志向するようになっていく。

とりわけ世界認識の急速な拡大から異文化への関心が強まった。ディアギレフ率いるロシア・バレエ団がパリでの公演に成功を収め、ピカソやシャネルなどパリの前衛的な芸術家とのコラボレーションによって新しい舞台芸術の表現を獲得していくのも、エキゾチズムとしてのロシア文化(それはしばしば、ロシアにおけるアジアへのエキゾチズムをベースとする、二重のオリエンタリズムでもあった)への関心を発端としている。

この時期、東洋、とりわけ日本の伝統文化の独自性の衝撃と憧憬から、ジャポニズムが一世を風靡した。ヨーロッパの文化的首都であったパリの潮流を、その周縁においてロシアの芸術家たちもいち早く摂取している。ロシアにおいても、直接的な模倣や引用は少ないものの、東洋の表現方法を我流に摂取し、応用しようとする傾向が強く見られた。舞台芸術では、スタニスラフスキーが『ミカド』を上演した。特にアヴァン・ギャルド演劇をリードした演出家フセヴォロド・メイエルホリド(1874 - 1940 : Всеволод Эмильевич Мейерхольд)は、様式性の強調された日本の舞台表現の構造を研究し、みずからの演出に応用している。

1917年に起きたロシア革命は情報の流通、文化の交流という側面においても多大なる影響を及ぼした。社会主義国という新しい政治・文化の成立への不安と憧れがないまぜになったまま、次第にソ連からの情報は閉ざされていった。当時のソ連という「新世界」への期待と憧憬と不安はアンドレ・ジードや、ヴァルター・ベンヤミンなどといった文化人たちの旅行記・滞在記を通してヨーロッパ各地に賛否の論議を呼び起こした一方、内戦が一段楽した 1922 年にははやくもモスクワ芸術座がソヴィエト文化の使節としてヨーロッパ公演

を行い、近代的な演技法の確立を印象付け、各地でモスクワ芸術座の演出・演技法の導入が 急務の課題とされることになる。

その媒介者となったのが、ロシアからの亡命者であった。革命は文化人を多数含む亡命者を多く生み出した。近年の研究では、その多くが、最初から二度と祖国にもどらないという覚悟をしての亡命ではないことが指摘されるようになってきている。彼等はしばらくして状況が落ち着けば帰国できるぐらいの心積もりで出国し、そのままその生涯を異郷の地で過ごすことになった。結果、ロシアのリアリズムについても、モダニズムについても、多くの場合、西欧は「祖国」への愛情と憎悪のない混ざった郷愁を抱える亡命者たちを通してロシアの文化を受容していくことになる。

日本においても、日本のオーケストラをはじめとするクラシック音楽(オーケストラ)や、宝塚などでの音楽ダンス教育、レビューなどの演出も、極東や中国などを経由して来日した亡命ロシア人の協力によって導入が進められた¹。日本におけるヨーロッパの芸術文化の受容が、じつはヨーロッパの周縁に位置するロシア・スクールにおいて練り上げられ、体系化された表現技術(教育)であったということ、しかも、それは多くの場合、革命を逃れてハルビン定着した芸術家たちを通して受容されたという事実は、現在に至るまで、ほとんど考慮されていない。

演劇では、小山内薫²、土方与志³等がロシアに渡航し、ロシア演劇を需要することがすなわち演劇の近代化(新劇の創設)であった。それはまた、政治的な立場の表明と密接に結びついて行われてきたため、日本においては近代演劇がもっぱら政治と密接に結び付けられて扱われがちで、その是非はともかく、このような歴史的政治的経緯の中で演劇が日本の日常生活のなかに根付いていない原因のひとつともなっていることも否定できない⁴。

20 世紀初頭のロシア演劇は近代的俳優術を体系化したスタニスラフスキーと演劇表現の独自性を追求するアヴァンギャルドの演出家たちの実験的手法とがせめぎあうようにして新しい時代・新しい社会における演劇のあり方の模索が続いていた。それらは、前者はミハイル・チェーホフ等によって、後者はニコライ・エヴレイノフ等の亡命によっても欧米各地に伝えられることになった。

ロシア外に活動の場を求めたこのような演劇人のなかに<u>フョードル・コミッサルジェフスキー</u> (1882-1954: Фёдор Фёдорович Комиссаржевский/ Theodor Komisarjevsky) がいる。彼はロシア国内で活動していたときにはそれほど注目された演出家とはいえなかったが、イギリスに活動の場を移して以降、イギリスにおける演出様式の変化に大きな影響を与えたといわれる⁵ほど高い評価を受けている。

また、チフリス (現在のグルジアのトビリシ)出身のジョルジュ・ピトーエフ(-: George Pitoev/ Pitoeff/ Георгий Питоев)はロシアではまだ名前さえほとんど知られていないが、ほぼ独学で演劇を学び、フランスでロシア演劇の作品および技法を広め、30 年代フランス演劇でジャック・コポーを継ぐ「四天王」とまで評価されている⁶。

本論では、メイエルホリドとコミッサルジェフスキーがそれぞれ異なる文化様式、または先行する演劇手法に触発されつつ、自由な発想であたらしい表現様式を追求しようとした実践について考察し、20世紀初頭のモダニズム演劇を再考する手がかりとしたい。

1.メイエルホリドが歌舞伎に見たもの7

二十世紀初頭に斬新で実験的な演出方法を次々と生み出したロシアの演出家、フセヴォロド・メイエルホリド(一八七四 - 一九四〇)は、東洋の演劇手法から多くのアイディアを得た。しかし、芸術家たちの「引用」はイマジネーションを最大限に駆使した思いがけない連想ゲームのようなアイディアとなって実を結ぶことがある。

たとえば、ペテルブルグの帝室劇場でモリエールの『ドン・ジュアン』を上演したとき (1910)、メイエルホリドは、歌舞伎の黒子の役を文字通り黒人の男の子たちに演じさせた。 芝居の間中、お仕着せを着て召使の格好をした黒人の子どもたちが舞台をちょこまかと走り回り、香水を舞台に振りまき、ドン・ジュアンの手から落ちたレースのハンカチを拾い上げ、疲れた俳優たちに椅子を差し、スガナレルと言い合いをしているドン・ジュアンの靴 紐を結んでやり、薄暗くなると提灯を差し出し、舞台上のコートや剣を片付け、銀色の小さなべルを振り鳴らしながら観客に開場や幕間の時間を知らせ、そうかと思うと騎士の石像 が現れるとテーブルの下にもぐりこんで隠れる。

にぎやかなこと、目立つことこの上ない。舞台上に見えていても存在しないものと考える黒子の控えめな約束ごとと対照的に、劇の進行に一定のリズムを与える重要な役割を担ってさえいる。しかしこれは単なるエキゾチズムからくる誤解ではない。黒子の様子や機能を比較的正確に知った上で、単に引用するのではなく、独自の演劇様式に適合するように手法の読み替えを行っているのである。

また、ロシアの古典作品の『森林』の演出(1924)では、螺旋状の橋を架けただけのシンプルな舞台装置を考案した。橋は舞台の下手奥の上層部から前舞台中央の下の客席まで緩やかな弧を描くように伸びている。ここからすぐに「花道」を連想するのは難しい。客席を横断してしまう花道の空間的ダイナミズムとも異なる。しかし、この橋もまた、舞台の空間に上下のダイナミックな垂直の動きを与え、幕切れでは登場人物たちが橋を上って、舞台奥の「外」の世界へと出て行くことを暗示する。

モスクワ芸術座の旗揚げに加わったメイエルホリドは、同劇団の運命を決定付けた『かもめ』(1898)でトレープレフを演じている。しかし、原作者のチェーホフは、日常の細部にこだわってそっくりに再現しようとするスタニスラフスキーに対して批判的であった。演劇(芸術)は日常の世界とは異なるある種の約束事を要求し、「舞台は人生の真髄を映し出すものであって、余計なものを舞台に引きずり出してくる必要はない」というリハーサルの際のチェーホフの言葉に心動かされたメイエルホリドは、その後生涯にわたって、徹

底的に現実をコピーするだけのリアリズムを排撃し、演劇独自の約束ごと、演劇にしかできない様式化された表現を追求しつづける。以来、折に触れてヒントになったのが一切の日常を排した日本の古典芸能である。

メイエルホリドは、自身の演劇論(1912)で、「能には洗練されたしきたりが定められており、対話、歌が厳密に様式化され、ギリシャのコロス(合唱隊)のような合唱が役のセリフを語り、音楽が野生的な音によって観客を幻想の世界へといざなう。演出家は舞いや動き、身振り、顔の表情、型がすべて見えるように、舞台の客席に近いところに俳優を配す」⁸と紹介している。能と歌舞伎との混同が見られたり、演出家などの誤解もあるが、メイエルホリドが日本の伝統芸能の特徴を 儀礼的、 音楽的、 舞台と客席との近さ、にあると考えていることがわかる。

この少し前の時期、メイエルホリドはギリシャのディオニソスをめぐる祭礼にまでさかのぼって歴史的に演劇性の根源を見極めようとしていた。メーテルリンクの『修道女ベアトリス』(1906)では、舞台の奥行きが狭くなるように背景布をたらし、俳優たちはギリシャのつぼ絵やフレスコ画といった2次元の絵画のような画面を舞台上に作り出すよう、横一列に並んで演じた。修道女たちはひとつの集団となって全体でコロスをなし、歌うような調子で声を合わせてセリフを唱和する。また、物乞いたちが聖母の慈悲を請う場面では、ひしめき合うように身を寄せ合い、全員が聖母に向かって平面的に両手を差し出し、絵画的な構図を作った。身体の動きを最小限にとどめ、音楽によって制御し、抽象的な舞台装置のみを使用し、奥行きのない(従って横長な)舞台で絵画的な画面を作るこのような演出を「不動劇」と呼んだ。

イギリスの演出家ゴードン・クレイグは貞奴を高く評価していた⁹が、彼に強く影響されたメイエルホリドの「不動劇」の背景には、演劇というものを「彼岸」にある真実を「現実(現象の世界)」において観客が感じ取ることができる形に具現化するための、一種の宗教的儀礼にも似たものだと考える象徴主義の思想がある。古い演技スタイルのままの俳優たちは演出に合わず、メイエルホリド自身も演出家の役割を強調しすぎたため、「俳優を人形のように操る」抑圧的な演出法だと非難された。後に彼自身も行き過ぎを反省したようだが、極端に動きを制御した演技の可能性を身近に知る者から見れば、原因はやはり俳優の技量不足だったように思われる。

メイエルホリドも貞奴の制約された動きの様式美の中に無限の表現力を見出し、賞賛している。不動劇の演技についても「歌うようなセリフ、緩慢な動きは、常にその内部に強い表現力を秘めていなければならず、ほとんどささやきにも似た各フレーズは、悲劇的な感情から沸き起こってくるものでなければならなかった」と述べている。

俳優には演出家の指示通り自在に動ける身体性が必要だと感じた彼は、十年ほどかけて イタリア仮面劇コメディア・デラルテの演技法をベースに、科学的方法を加えて独自の身 体表現の訓練法ビオメハニカを提唱し、俳優養成に力を入れた。「投石」「弓を射る」「短剣 で刺す」など、いくつか訓練用エチュードの記録が残されているが、動きを 意図、 実 現、 余韻に分割し、分割された個々の動きを誇張しながら重心を低めにしてメリハリをつけて動くやり方は、どことなく歌舞伎の型に似ているといえなくもない。実際、市川左団次の一行がロシア公演(1928)を行ったとき、メイエルホリド劇場の看板役者エラスト・ガーリンの演技が歌舞伎に似ている、と話題になったという。ガーリンはこのとき河原崎長十郎に紹介され、芝居の稽古を休んでまでいくつか歌舞伎の型を見せてもらっている 10 。歌舞伎の公演後、エレンブルグの『D.E.』(1925 初演)の登場人物が死ぬ場面が、「歌舞伎のように、床に倒れてから起き上がり橋を通って手の中に倒れこむように変更されたとガーリンは書いている 11 。

メイエルホリドが歌舞伎に見出した演劇の可能性は、 日常の世界を舞台上に再現するような本物らしさという錯覚の拒否、 音楽に律せられた統一感のある身体表現や心理的表現ではなく型から演技を構成する手法、 奥行きの狭い舞台から直接語りかけ、俳優(舞台)と客席の間を近づけること、である。特に掛け声などに見られるように、舞台上の行為があくまで俳優が演じる虚構に過ぎないことを俳優も観客も自覚しつつ、その虚構の約束事を共有していることに興味を持っていた。

この当時、メイエルホリドが実際に遭遇した日本の芸能は、ヨーロッパ公演の途中でロシアに立ち寄った川上音二郎一座(1902)やハナコの一座(1909 ごろ)である。歌舞伎や能についての理論的な知識はおもに、当時ヨーロッパで一世を風靡していたジャポニズムに影響を受けた著作を通してのものだろう。特にドイツの気鋭の演劇理論家で、川上一座の舞踊に触発されたゲオルグ・フックスに強い影響を受けている。

舞台装置の豪華さでさすがの貴族たちを驚かせた『ドン・ジュアン』の舞台では、黒子のほかにもいろいろな手法が「引用」されている。オーケストラボックスにふたをして、客席に張り出すように前舞台が作られ、上演中でも客席を暗くせず、額縁舞台に特有の客席と舞台を分け隔てる溝を埋めて、舞台と客席とがひとつの劇空間を作り上げていた。上手と下手に衝立が置かれていて、開演と同時にプロンプターが分厚い台本を抱えて舞台に登場し、衝立の陰に隠れる。召使のスガナレル役を演じた名優ヴァルラーモフがどうしてもせりふを覚えないのを逆手に取った演出である。ヴァルラーモフは客席近くに座ってリラックスしながら観客をながめ、時に知り合いを見つけると親しげに声をかけて挨拶をしたりした。

このような演出は、モリエールが影響を受け、メイエルホリドもまた深く関心を持っていたイタリアの民衆芸能コメディア・デラルテの約束ごとにも共通の手法である。メイエルホリドが実際に基盤としていた演劇性は、ギリシャ演劇と、コメディア・デラルテであり、いずれもヨーロッパの伝統をたどったものである。歌舞伎を代表とする東洋の芸能(曲芸にも関心があった)などに出会ったことが触媒となり、もともとメイエルホリドの中に蓄積されていた新しい演劇のイメージが花火のように華麗な展開を見せたのだろう。既存の秩序から逸脱し、未知の新しい次元に表現を構築する祝祭的空間への可能性、そこにこそ、異なるジャンル、文化との出会いのダイナミズムがあるのではないだろうか。

2.コミッサルジェフスキーの越境

多くの演出家が自身の演劇キャリアを俳優として始めるのに対し、フョードル・コミッサルジェフスキーは、建築大学で教育を受けただけであった。姉の劇団の仕事に関わって、舞台美術を手がけるなどしながら、上演の実践的な活動に関わる中で自らの演劇観を磨き、演出技術を身につけた稀有なキャリアを有する。

亡命前のロシアでは、スタニスラフスキー的手法と、メイエルホリドをはじめとするアヴァンギャルド的手法の双方に批判的で、みずから「神秘主義的リアリズム」と名づけた 象徴主義的色彩の濃い演出を提唱した¹²。

しかしながら、アレクサンドル・クーゲリが彼の演出作品を評して「黄金の中庸」¹³と名づけたことに象徴されるように、コミッサルジェフスキーは心理主義やアヴァンギャルドなど、ジャンルを問わず、様々な手法を混在させている。また、彼を取り巻くイメージも少々神話的な側面を持ち、ロシア時代に出版した著書でスタニスラフスキーを批判したためにモスクワ芸術座の入団がかなわなかった¹⁴にもかかわらず、イギリスではモスクワ芸術座やスタニスラフスキーの継承者として受容されていく。彼の不思議な経歴と活動、演劇思想を解きほぐすことは、彼自身の再評価にとどまらず、当時の演劇諸流派を政治的な側面から分断してきた従来の演劇観を問い直すこと、さらにはロシア国外へのスタニスラフスキー・システムの伝播の実像を改めて問い直すことへつながることが期待される。本稿では、彼の伝記と演劇観の特色を概観し、今後の詳細な作品分析への端緒としたい。

1.演劇的背景

コミッサルジェフスキーは 1882 年、イタリアで生まれた。父はペテルブルグにあるマリインスキー劇場のオペラ歌手(フョードル・ペトローヴィチ・コミッサルジェフスキー¹⁵ 1838-1905)である。彼の歌唱は、明瞭な発声と知性に裏打ちされた心理描写が高く評価されていた。モスクワ音楽院の教授時代、当時歌手志望だったスタニスラフスキーに歌唱指導をしたこともある。オペラ歌手を志望する学生に、声楽だけではなく、ドラマの演技の教育も要求した。心理の内面描写を重視する演技法、いわゆるスタニスラフスキー・システムに影響を与えたと言われる。

異母姉のヴェーラ・コミッサルジェフスカヤは 20 世紀初頭のカリスマ的女優であり、チェーホフの『かもめ』の初演(アレクサンドリンスキー帝室劇場)でニーナを演じた。彼女はこの後帝室劇場を退団し、新しい演劇表現の追求を掲げてみずから劇団を旗揚げした。コミッサルジェフスカヤ劇場(1904 - 1910)は、メイエルホリドやエヴレイノフ、タイーロフなど、象徴主義にはじまる新しい思潮を取り入れた実験的な演劇を模索する若き演劇人たちの活動の場となった。

コミッサルジェフスキーは、自分の父こそ、オペラ歌手でありながら、身振り(演技)と発声(歌)などの総合的な俳優の身体表現を追求した心理表現に依拠した近代的演技法の創始者であること、姉こそ新しい演劇の基礎を築いた演劇人であること、を主張し、スタニスラフスキーおよびメイエルホリドのオリジナリティを否定する。しかし、詳細に論証するというよりも、イメージが先行する批評が多く、父や姉がどの程度それらを具体化していたかについての詳しい分析・論考を行っているわけではないようだ。

2.舞台美術から演出へ

コミッサルジェフスキーは姉のコミッサルジェフスカヤ劇団で舞台美術を手伝うことから演劇に携わることになる。当時同劇場は主席演出家のメイエルホリドがメーテルリンクの『修道女ベアトリス』(1906)を頂点とする象徴主義的演劇を展開していた。メイエルホリドの退団後、コミッサルジェフスキーは演出も手がけるようになる。メイエルホリドはスタニスラフスキーの心理表現を基盤とした写実主義を批判して退団しながら、設立した劇団の地方公演の間、スタニスラフスキーの演出をコピーすることで演出を学んでいる。興味深いのは、コミッサルジェフスキーもまた、もっとも身近に接していたメイエルホリドの演出の強い影響下で演出を独学したことである¹⁶。1908 年からはエヴレイノフを主たる演出家として迎え、共同で制作を行ったりしてもいる。1910 年、姉と死別すると、モスクワに拠点を移し、同年に演劇スタジオを設立した。

1912 年ごろから積極的に演劇論を書き始める。主な発表媒体は演劇同人誌の Маски (仮面) で、1913-14 年シーズンには記事をほぼ毎号載せている。しばしばヨーロッパに渡航し、舞台美術を重視した演出論やヨーロッパ演劇に関心を持っていた。ポーランド、ベルリン、パリの劇評を書いた¹⁷。スタニスラフスキー論(『俳優の創造とスタニスラフスキー・システム』¹⁸)も出版しているが、それについて、スタニスラフスキーは自らの主張をコミッサルジェフスキーが根本的に誤解していると反論、不快感を示した¹⁹。

イギリスでは、コミッサルジェフスキーはモスクワ芸術座に 1911 年から 1919 年まで在籍した²⁰という話が神話の様に流布している²¹。コミッサルジェフスキー自身がこのように発言していたのかどうかは定かではないが、実際には、モスクワ芸術座に参加を希望していたものの、このときに最終的に決裂した。

プロデュース公演を行うネズボーリン劇場(モスクワ)等で演出を続け、Hobbiň Tearp (モスクワの演劇スタジオ)を設立。1914年に姉の名を記念した、ヴェーラ・コミッサルジェフスカヤ記念劇場を設立した。演劇を総合芸術と考えるコミッサルジェフスキーの演劇間は、音楽が芝居を統制するもっとも基礎的なものとなっている。この関連で、オペラの演出も手がけた。マモントフ・オペラ劇場(サヴァ・マモントフ:鉄道王、パトロンの先駆け)、ボリショイ劇場、マールイ劇場でもオペラを演出している。とくにオッヘンバッハ作『ホフマン物語』の演出は高く評価された。

革命後は 1919 年に出国、パリを経てイギリスに渡る。イギリスでは、チェーホフおよび ジェイクスピアの演出に新しい手法をもたらしたとして評価されている。

また、コミッサルジェフスキーは俳優訓練に力を入れていた。「総合芸術としての演劇」を演じられるのは、「ユニバーサルな俳優」であるとして、演技だけではなく、音楽の素養も要求し、イーゴリ・イリンスキー、マリヤ・ババーエヴァなどを指導した。コミッサルジェフスキーの亡命と共に,俳優たちはメイエルホリドの劇団へと移ったのち、実力を発揮し、スター俳優への道を歩むことになる。

3.『黄金の中庸』: ロシア演劇の文脈での評価

演出家としてのコミッサルジェフスキーはレーミゾフ、ソログープの作品の演出で成功 し、象徴主義演劇の継承者として評価されている。メイエルホリドがコミッサルジェフス カヤ劇団を去るころに象徴主義的な手法からも脱皮し、より民衆芸能のジャンルへと関心 の対象を変えていることと比較すると時代的に遅いように思われる。しかし、世の流れが 去ってなお、象徴主義と響きあうものがなにかあったのではないだろうか。

コミッサルジェフスキー自身の演出手法は、ロシア・アヴァンギャルド演劇の文脈では それほど高い評価を受けていない。

イギリスでは前述のようにスタニスラフスキーの後継者として受け入れられたが、ロシアで活動中はスタニスラフスキーおよびメイエルホリドのいずれからも距離をとる立場を取っている。

コミッサルジェフスキーはスタニスラフスキーが心理主義的ナチュラリズムを唱導、その結果、俳優が自分自身の感じる感情表現しかできない、イマジネーションに欠ける、と批判する。スタニスラフスキーの考案したとされる演技法(スタニスラフスキー・システム)は、F.P.Komissarzhevsky(父)の多大な影響があると主張しているにもかかわらず、この批判は意識してか否か、メイエルホリド²²をはじめとするアヴァンギャルド系演劇側の反モスクワ芸術座批判と同調している。また、1933 年にLee Simonsonと共著で出版した Settings and Costumes of the Modern Stages (Studio Limited, London)ではモスクワ芸術座の作品を取り上げていない。

逆に、同時代のアヴァンギャルド演劇に対しても、ゲオルグ・フックスの著作などからドイツに影響を受けていた主流派(筆頭はメイエルホリド)たちがドイツ演劇の本質(長所)を受容せず、短所を模倣していると激しく批判²³している。コミッサルジェフスキーのメイエルホリド批判の中心は、俳優に対して演出家が抑圧的であり、俳優をマリオネットのように扱う、というものである。しかし、ブロークの『見世物小屋』(1906)上演以降、見世物の民衆演劇やコメディア・デラルテなどに関心が移ったメイエルホリドの演出は、音楽をベースとしたリズミカルで躍動的な動きへと変化していることと、実はズレがある。

『演劇のプレリュード』の冒頭では、コミッサルジェフスキーは、論理性よりも,感覚

的なものによって戯曲作者の世界認識(世界観)つまり永遠性や普遍性と結びつく哲学を表現することが重要だと書いている²⁴。また、戯曲それぞれには、それに合う固有の表現形式が必要であり,形式は多様でなければならないとし、ひとつの様式にまとめようとする演出(主眼はメイエルホリドが初期に様式演劇の必要性を主張して目指した不動劇)を批判している。作品の上演される形式を考えたとき、演出家独自の手法および世界観を中心にすえるメイエルホリドに対し、あくまでまず作品の個性があるのだとコミッサルジェフスキーは主張しているようである。しかし、作品の個性を強く主張するコミッサルジェフスキーもまた、イギリスでの演出では、メイエルホリド同様、戯曲の改変を(メイエルホリドほど大胆ではないにせよ)、作品のイメージが変わるほどに行うのである。

コミッサルジェフスキーが演劇人として現在でも再評価がさほど進んでいない理由は、 亡命したことによって評価が低くなったという単純なことではないだろう。現にミハイ ル・チェーホフ、エヴレイノフ等は亡命したものの、現在、ソ連時代からすでに高い評価 を受けている。

ただし、エヴレイノフ自体は(ロシアで活動していたときにはあまり触れていないようだが、)亡命後にロシア演劇を論じながら、20世紀のロシア演劇を代表する演出家として、スタニスラフスキー、メイエルホリド、エヴレイノフ、コミッサルジェフスキーをあげている²⁵。また、Slonim(スロニムスキー)も亡命後、スタニスラフスキーとメイエルホリドを対峙する二大流派としてあげた後、演出家の時代到来の代表として、エヴレイノフ、タイーロフとともにコミッサルジェフスキーをあげている²⁶。亡命した演劇人の間では、コミッサルジェフスキーは一定の評価を受けていたようである。

4. イギリス演劇とコミッサルジェフスキー

イギリスでは、コミッサルジェフスキーはロシアの演技、演出法を伝える伝道師、とりわけ、スタニスラフスキー・システムおよびチェーホフ演出の専門家として迎えられた。それまで退屈だとして正当に評価されていなかったチェーホフを定着させ、シェイクスピア作品の演出において抽象化された舞台装置を応用するなど、画期的な演出を行い、イギリスにおける演出手法の幅を広げたとして高く評価されている。

チェーホフの作品をロマンチックな作品として演出した。『三人姉妹』でトゥーゼンバッフを美青年という設定にし(ジョン・ギールグッドが演じた) メランコリックなノスタルジーを醸し出す悲恋・悲劇を演出した。これが、凋落の雰囲気に浸る当時のイギリス知識人のメンタリティーとシンクロした²⁷のである。19世紀半ばの「ラファエロ前派」的イメージを付与した。このような様式志向は、亡命したロシア知識人の少なからぬものにこのような傾向が強いのかもしれない。このことは詳細に検討することによって、亡命者の出国同機と象徴主義という芸術志向との間になんらかの関係性が見出せるのかもしれない。い

ずれにしても、舞台美術が比較的ナチュラリズム的志向(モスクワ芸術座の手法を借用している)ではあったが、経歴的にもスタニスラフスキーに近いわけではないが、それだけではなく、チェーホフ作品の細部にまで忠実なモスクワ芸術座の演出とはかなり異なる上演内容である。

オックスフォード大学の演劇学の教授がコミッサルジェフスキーについて「チェーホフは彼を自分の作品の最良の解釈者だと考えていた」と紹介していることをふまえて、バルトシェヴィチは「これはおかしな間違い、というだけでなく、コミッサルジェフスキーがスタニスラフスキーの教育を受け、信頼の厚い弟子であったということが広く信じられているということの、ある種の確信を表明しているのである」と書いている。

つまり、ヨーロッパで新しい演劇のスタンダードとなりつつあったスタニスラフスキーおよびモスクワ芸術座をイギリスに伝えてくれる正統な継承者という役が、コミッサルジェフスキーに期待された。コミッサルジェフスキー自身も期待に応えるようなかたちで、役割を演じていたのではないだろうか。バルタシェヴィチは「彼のチェーホフ作品の上演は、あるひとつの文化が他の文化から亡命芸術家を、その芸術志向にあまり気を配ることなく、それ自体が必要としているものを得るための手段として利用する好例である」と分析している。

しかし、利用された亡命芸術家は不幸であったということばかりではないだろう。コミッサルジェフスキーが、イギリスの観客に合わせると同時に、みずからのロマンチックな象徴主義的表現でチェーホフの世界を思い通りに表現したという側面も否めないのである。ソヴィエトに残っていたとして、はたしてそのような表現が可能であったか、といえば悲観的にならざるを得ないだろう。

1938 年に行われた本家、モスクワ芸術座海外公演について、ヨーロッパでの評価は低かった。イギリスではコミッサルジェフスキーの演出の方が魅力的であるとの評価もあった。ひとつには、実際、結成して 40 年たったモスクワ芸術座の劇団としてのエネルギーの低下もあっただろうし、ロシア国内でのスタニスラフスキー・システムの規範化と弱体化が進んだ時期だったということも考えられる。それでも、コミッサルジェフスキーの演劇は、ひとつの様式を作り上げることに成功していたといえるのではないか。

では、コミッサルジェフスキーはイギリスをはじめとする西欧の演劇に関してどのように感じていたのだろうか。ヨーロッパはすばらしいところだが、文化は腐っている²⁸と厳しい批判をソ連在住の旧友に書き送っている。または、イギリス演劇は商業主義ばかりである、とも批判している。ロシアのシェイクスピア研究者であるバルトシェヴィチこのようなコミッサルジェフスキーの反応について、まったくのでまかせというわけではないのだが、あきらかにソ連国内で各種演劇雑誌誌上に公刊されることが想定されていたのだと指摘する²⁹。ながくソ連への帰国を打診していたが、最終的にその望みが絶たれたあと、1936年の『かもめ』の再演することにしたときには、ギールグッド演じるトゥーゼンバッハに

「なんの技法も持たない役立たずの役者ばかりいるイギリス演劇がいかにひどいか、を 延々と語らせるセリフ」をしゃべらせる練習からリハを始めた³⁰という。

ストラドフォード・アポン・エイヴォンで外国人として始めて主要な演出家となり、シェイクスピアを上演したコミッサルジェフスキーだったが、つねに充分な評価を得られないでいるという不満が付きまとっていたようである。1938 年アメリカへ移住するのだが、そこにも満足できる演劇環境はみいだせないまま、1954 年に亡くなるまでその地にとどまることになった。

注

¹岩野 裕一『王道楽士の交響楽―満洲―知られざる音楽史』音楽之友社、1999 年。大野 芳『瀕 死の白鳥―亡命者エリアナ・パブロバの生涯』新潮社、1999 年。中村喜和他『異郷に生きる(2)』成文社、2003 年等、参照。

- 2 曽田秀彦『小山内薫と二十世紀演劇』勉誠出版、1999 年等、参照。
- 3 土方与志『なすの夜ばなし』影書房、1998 年参照。
- ⁴ これまでの研究では新劇内の演劇論争が日本で自発的に行われてきたように扱われているが、 テーマとなっている問題は、ほぼ同時代のソ連における社会主義リアリズムをめぐる論争と重 なる部分も多い。
- ⁵オックスフォード演劇事典には「ヴェーラ・コミッサルジェフスカヤの弟で、この時代にあって傑出した個性を示した」と紹介されている。See: *The Concise Oxford Companion to the Theatre*, Oxford: Oxford University Press, 1972.
- 6 岩瀬孝他『フランス演劇史概説』早稲田大学出版部、1999年、参照。
- ⁷ 本章は「イマジネーションの祝祭 メイエルホリドが歌舞伎に見たもの」(『国文学』1 月号、2007 年 1 月、84-87 頁)を基本として構成したものである。
- ⁸ *Мейерхольд*, *Вс.* Статьи, письма, речи, беседы, в 2-х т., 1968, в т.2, с.81.
- 9 『ゴードン・クレイグ— 2 0 世紀演劇の冒険者—』エドワード・アンソニー・クレーグ、佐藤正紀、平凡社、1996 年。
- ¹⁰ См.: Сост. Хржановский, А. Ученик чародея. Книга об Эрасте Гарине. М., 2004, с.151-153.
- ¹¹ Там же. С.175,
- ¹²Комиссаржевский, Ф.Ф. Я и театр, М., 1999, с.246,
- 13 引用は安宅りさ子「ロシア演劇におけるコミサルジェフスキーの位置づけ」桐朋学園大学短期大学部紀要、第22号、2004年、2頁より。
- ¹⁴ *Комиссаржевскій, Ф.Ф.* Творчество актера и Теория Станиславскаго, Петроградъ, 1917.を出版 したことに対し、スタニスラフスキーは不快感を表明、芸術座への入団の話が最終的に決裂した。

См.: Виноградская И. Жизнь и творчество К. С. Станиславского в 3-х т., т.3, с. 92-93.

¹⁵ См.: Театральная энциклопедия, в 4-х т., 3, М., 1964.

¹⁶Slonim, M. Russian theater, from the Empire to the Soviets, London, Methuen, 1963, p.208.

¹⁷ 「ドイツとパリの観劇記。ドイツについては国・人のすべてが官僚的だと嫌悪をあらわにしている。ベルリンの後ではパリは素晴らしい。どんなに汚い駅でさえも」と毒舌である。

Комиссаржевский, Φ . Φ . За границей. В Масках №. 5, СПб., 1914. ¹⁸ Творчество актера и теория Станиславского (Петроград, 1917)

- ¹⁹ Жизни и творчество К. С. Станиславского, т.3, М., 1973, с. 93.
- ²⁰ ギールグッドによれば姉のヴェーラもモスクワ芸術座の女優ということになっている。See: Gielgud, John *Early Stages*, Heinemann, London, 1974, 64p.
- ²¹ See: Gielgud, John Early Stages, Heinemann, London, 1974, p.64.
- 22 参照:『メイエルホリド・ベストセレクション』諫早勇一他訳、作品社、26-38 頁。
- ²³ Комиссаржевский, Ф.Ф. Немцы и русский театр. В «Маски» № 7-8, СПб., 1914.
- ²⁴Комиссаржевскій, Ф.Ф. Театральныя прелюдіи, М., 1916.
- ²⁵ 革命前後で評価がどのように変わったのか、を検証することは興味深い。このことについて は稿を改めて論じたい。
- ²⁶ Slonim, M. Russian theater, from the Empire to the Soviets, London, Methuen, 1963, p.208.
- ²⁷ Бартошевич, А. В. Федор Комиссаржевский Чехов и Шекспир. В кн.: под ред. Бартошевича и др. Диалог культур. Проблемы взаимодействия русского и мирового театра XX века, С-Петербург, 1997, с.93-102.
- ²⁸ Комиссаржевский, Ф.Ф. Я и театр, М., 1999, с.266.
- ²⁹ Бартошевич, А. В. Федор Комиссаржевский Чехов и Шекспир, с.94.
- ³⁰ Gielgud, John An Actor and His Time, London, 1979, p.100.

メイエルホリドに関する文献(主要なもののみ)

Мейерхольд, Вс. Статьи, письма, речи, беседы, в 2-х т., 1968.

Рудницкий, К. Режиссер Мейерхольд.М., 1969.

『メイエルホリド・ベストセレクション』諫早勇一他訳、作品社、2001年。

エドワード・ブローン『メイエルホリドの全体像』浦雅春訳、1982年、晶文社。

佐藤恭子『メイエルホリド』早川書房、1976年。

コミッサルジェフスキーに関する文献 1.コミッサルジェフスキー自著

ロシア

Комиссаржевскій, Ф.Ф. Гармонии искусств на сцене. Доклад, прочитанный на съезде художников 2 января 1912г. В журн.: Ежегодник императорских театров, 1912, вып. □,С.1-9. В кн.: В спорах о театре.Сборник статей. М., 1914.

Комиссаржевскій, Ф.Ф. Театральныя прелюдіи, М., 1916.

Комиссаржевскій, Ф.Ф. Творчество актера и Теория Станиславскаго, Петроградъ, 1917..

Комиссаржевский, Ф.Ф. Я и театр, М., 1999.

演劇雑誌月刊『仮面 (Маски)』

- ・1912 / 1913 年シーズン、1913 / 1914 年シーズン.に寄稿。
- ・同人はレオニード・レオーノフ、アレクサンドル・ベヌア、

AI. ヴォズネセンスキー、ニコライ・エヴレイノフ、エヴゲニイ・パン、ニコライ・リョーリヒ、ヴァシリー・サフノフスキー、アレクセイ・トルストイなど

1912 / 1913

No.2「ブラヴィッチ追悼」 pp.1-4.

No.2「衣装と裸体」 pp.47 - 58.

1913 / 1914

No.1「オストロフスキーは日常の心理の洞察者」

- ・ 1910 年モスクワのネズボーリン劇場における『空の財布に小判が飛び込んだ』(オストロフスキー作)上演に際して
- N.2「素晴らしきエレーナについて」
- N.3「現代演劇の舞台装置について 前編」
- N.3 コミッサルジェフスキー演出『いやいやながら医者にされ』(モリエール作)舞台装置
- N.4「ワルシャワの演劇について」(サインが F・K~ii/Φ. K~i iň)
- N.5「国境を越えて(印象記)」
- N.6「現代演劇の舞台装置について 後編」
- N. 7-8「ドイツ人とロシア演劇」

亡命後

『私と演劇』Я и театр. М., 1999. (оригинал: Лондон, 1929.)ロンドン

Komisarjevsky, Theodore, Simonson, Lee *Settings and Costumes of the Modern Stages*, Studio Limited, London,1933.

Komisarjevsky, Theodore *The Theatre and a Changing Civilization*, John Lane the Bodley Head Limied, London, 1935.

2.その他の文献

Жаров, М. И. Жизнь, театр, кино. М., 1967, с.114-128.

Бартошевич, А. В. Федор Комиссаржевский Чехов и Шекспир. В кн.: под ред. Бартошевича и др. Диалог культур. Проблемы взаимодействия русского и мирового театра XX века, С-Петербург, 1997.

Зноско-Боровский, Евг. Русский театр века, Прага, 1925.

Крыжицкий. Г. К. Режиссерские портреты, М-Л., 1928, с.87-104.

Allen, David Performing Chekhov, Routledge, London, 2000.

Borovsky Victor A Triptych from the Russian Theatre: An Artistic Biography of the Komissarzhevskys, Hurst & Company, London, 2001.

Gielgud, John Early Stages, Heinemann, London, 1974.

Gielgud, John An Actor and His Time, Sidgwick & Jackson, London, 1979.

Senelick, Laurence The Chekhov Theatre: a Century of the plays in performance, Cambridge, NY, 1997.

- 安宅りさ子「英国化されたチェーホフ —フョードル・コミサルジェフスキーの『三人姉妹』 を中心に—」桐朋学園大学短期大学部紀要、第 18 号、2000 年、51-77 頁。
- 安宅りさ子「フォードル・コミサルジェフスキーとシェイクスピア 『アントニートクレオ パトラ』の上演台本を中心に—」桐朋学園大学短期大学部紀要、第 19 号、2001 年、147-169 頁。
- 安宅りさ子「コミサルジェフスキー演出『かもめ』について」桐朋学園大学短期大学部紀要、 第 21 号、2003 年、45-66 頁。
- 安宅りさ子「ロシア演劇におけるコミサルジェフスキーの位置づけ」桐朋学園大学短期大学部 紀要、第22号、2004年、1-27頁。

参考:

<イギリスにおけるチェーホフ上演史 1920-1936>

- コミッサルジェフスキーがイギリスで上演したチェーホフ作品 (斜字はコミッサルジェフスキー以外の演出)
 - 1911 『かもめ』Incorporated Stage Society at the Royal Court Theatre, London. (イギリスにおけるチェーホフの初演、バーナード・ショウの推薦による)
 - 1921 『ワーニャ伯父さん』Incorporated Stage Society at the Royal Court Theatre, London.
 - 1925 『桜の園』 (directed by J.B.Fagan) The Oxford Playhouse. (ジョン・ギールグッドがペーチャ・トロフィーモフ役でチェーホフを初めて演じる)
 この際、ギールグッドが役作りの相談にコミッサルジェフスキーを訪ねる。

at the Barnes Theatre "Seson of Plays by Checkov" produced by Phillip Ridgeway

- 1925 『かもめ』 (directed by A.E. Filmer) Barnes Theatre, London.
- 1925 『イワノフ』 Incorporated Stage Society at the Duke of York's Theatre, London.
- 1926 『ワーニャ伯父さん』 <u>Barnes Theatre</u>, London.
- 1926 『三人姉妹』Barnes Theatre, London.
- 1926 『桜の園』Barnes Theatre, London.
- 1936 『かもめ』New Theatre, London.

イズム!イズム!イズム!

- カレル・タイゲのブックデザインにおける諸潮流の輻輳 -

大 平 陽 一

だが彼らは、この自由の経験をもうひとつの革命の経験、 すなわち革命における構成的・独裁的なものと溶接するの に成功するのだろうか。(ベンヤミンン)

1 両大戦間のチェコのブックデザインデザイン

両大戦間のチェコ・アヴァンギャルドのブックデザインは、それだけても評価に足る高い芸術性を有しているだけでなく、豪華な特装版ではなく並装版のデザインを若いアヴァンギャルディストたちが手がけたという点にも特色がある。多分、この時期のチェコのブックデザインに匹敵する運動として、すぐに念頭に浮かぶのはロシア・アヴァンギャルドであろうが、質はともかく量の面では到底チェコ・アヴァンギャルドに及ばないのではないか。例えば オデオン 出版一社だけで、1925年の会社創設から1931年までの6年間に、チェコにおける構成主義的ブックデザインを代表すると言っても過言でもない書籍を約130冊刊行した。

ニュー・タイポグラフィといえば東欧のアヴァンギャルドよりもドイツのバウハウスが 連想なさる向きも少なくないだろうが、ドイツにはバウハウスの機能主義的ニュー・タイ ポグラフィしかなくチェコほどの多様性に欠けるし、その応用はポスターが中心で、ブッ クデザインでの成果はあまり多くはない。単純な比較は慎むべきであるにしても、同じく 1925 年から 31 年の間に刊行されたかの有名な《バウハウス叢書》は 14 冊にすぎない。 そ んな知られざるブックデザイン大国チェコにおいて最大の存在の一人が、日本では美学者 として一部に知られているに過ぎないカレル・タイゲである。

まずタイゲの経歴のおおよそについて、『東欧を知る事典』の項目を抜き書きしてみよう。

チェコで 1920 年代に登場した文学上の流派ポエティスムとシュルレアリスムの理論面での代表者で、美学者。建築の理論家、美術評論家ならびに文芸評論家としても活躍。プラハのカレル大学で美術史を専攻。プロレタリア芸術やポエティスムなどアヴァンギャルド芸術を推進し、芸術集団デヴィエトスィルに集った若手芸術家の先頭に立った。数々の雑誌を編集し出版するなど活発な活動を展開、1934 年に発足した チェコスロヴァキア・シュルレアリスム集団 でも理論的指導者として活躍した。第2次大戦後、共産党の弾圧を受け、著作の出版や閲覧が禁止され、その状態は60年代末のいわゆる プラハ

の春 の一時期を除いて89年まで続いた。(伊東 2001:260)

この短い記述からも、彼がもっぱら理論家と見做されていることがうかがえる。しかも、 「建築の理論家、美術評論家ならびに文芸評論家」という記述からも分かるように、彼の

関心は複数の分野にまたがっていた。そうした脱領域的な多才さが災いしたといっては言い過ぎになるが、彼の理論的言説からはいつも複数のイズムに引き裂かれながら、それらのジンテーゼを目指して悪戦苦闘する理論家としての姿が浮かび上がってくる。だからこそ、タイゲのブックデザインは、それ自体として興味深いだけでなく、その作風の多様性と変化が彼自身の(ひいてはチェコ・アヴァンギャルドの)理論における種々のイズムの輻輳、そうした多元性を孕んだ理論体系が変容を遂げていく有様のイラストレーションとなってくれる。小論の目指すところも、ブックデザインという実例に即してタイゲの理論における種々のイズムの布置を歴史的に辿ることにある。



【図1】アドルフ・ホフマイステル《タイゲの似顔絵》 $^{1)}$

2 プリミティヴィズムから構成主義へ



【図2】『涙の街』初版(1922)



【図3】第2版(1923)



【図4】第3版(1929)

そこでまず、ブックデザインにおける作風の変化に実際に理論面の変化が反映されていることを、ヤロスラフ・サイフェルトの第一詩集『涙の街』の三つの版を比較することで確認しよう。きわめて図式的に言って、カレル・タイゲのブックデザインは、

最初期のプリミティヴズムに続き、1922年頃から「構成主義」へと急展開し、それが20年代末に類似してはいるが、構成主義よりは禁欲的で素っ気ない「機能主義」の時期へと徐々に移行していく。ただ30年代には機能主義的なデザインと並行して、作例は少ないながらも今では高く評価されているシュルレアリスム的なデザインが共存するというように、大まかに三つの時期、四つの様式を区分できる。

上の図を比べてみると、初版のリノカットにも構成主義的なモチーフである建築物が現れている一方(後述する通り、チェコにおける構成主義はまず建築の理論であった)第2版の表紙には、まだリノカット特有の手仕事的な性格を見て取ることができる。しかし、第2版には工場の窓とおぼしき方形のリズミカルな反復とすでにデヴィエトスィルのエンブレムとなっていた円を組み合わせた造形に、あるいはレタリングに幾何学性への志向がうかがえる。初版、2版と第3版との間の相違は明らかなのはないか。たしかに理論の変化と作風の変化には一定の相関あるらしい。そこで今度は種々のイズムの共存を視野に入れつつ、もう少していねいにチェコ・アヴァンギャルドの装本の歴史を辿り直してみよう。

第一次世界大戦後に所謂「第一共和国」が成立するまでのチェコでは、ドイツ化の強い 抑圧のもと、チェコ語文献の出版は国民の民族的自覚を促し、チェコ人としてのアイデンティティを支える一助となっていた。念願の独立後も、大戦による国土の疲弊が深刻な経済的危機がもたらしたにもかかわらず、出版文化は急速な発展を遂げた。18世紀末、チェコ語の本の普及に寄与したクラメリウスの チェコ出版局 に始まり、 ヤン・オットー 、J.R. ヴィリーメク などが築いた、廉価な良書を提供せんとする伝統を引き継ぐ アヴェンティヌム 、 Fr. ボロヴィー 、 ドゥルシュステヴニー・プラーツェ 、 オデオン

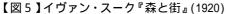
実際、これらの出版社はどれも新しい作品を誰もが変えるような値段で提供することに意欲を燃やしていた。それも廉価なソフトカバーで、ヴィジュアルな魅力に溢れた装幀でもって出版することに。出版物の多くが現代作家の作品であり、新鋭作家を紹介しようという理念そのものが、ブックデザイナーへの若手の起用を促したのだろう。装本は、若きアヴァンギャルディストたちにとって貴重な収入源となったのみならず、真剣に取り組むべき仕事と見做されるようになった。書店はアヴァンギャルド文学だけでなく、アヴァンギャルド美術のミクロコスモスであった。そして、その中心にデヴィエトスィルがいた。

といった新しい出版社が次々に生まれた。

1920 年 10 月、世紀の変わり目の前後に生を受けた若い詩人、画家、建築家、写真家、脚本家、作曲家、批評家たちを糾合し、芸術集団デヴィエトスィルが結成される。彼らは既成のアーティストから、とりわけヨゼフ・チャペックから多大の影響を受けていたが、精力的な活動によって既成勢力を押しのけ、アート・シーンの前面に躍り出る。コミュニズムに共感する彼らがまず標榜したのは、プロレタリアート芸術であり、モダン都市のごくありきたりの物に素朴な美を見出した。若い芸術の「民衆の芸術、子供の絵、自然のなかで暮らす未開の部族の造形表現との親近性」(Teige 1966: 31)を指摘していたこの段階では、お高く気取ったアカデミズムに不快感を表明し、「ごくつつましい芸術」を賛美したヨ

ゼフ・チャペックの反アカデミズムを、デヴィエトスィルは共有していたのであった。







【図6】ヨゼフ・チャペック『盗賊』(1920)

1920年代初頭におけるヨゼフの影響は、タイゲの初期の版画に明らかだ。タイゲがイヴァン・スーク著『森と街』(1920)に提供したリノカット【図5】と、ヨゼフが弟カレルの著書『盗賊』(1920)のために製作した表紙【図6】とを見比べてもらいたい。ただし、デヴィエトスィルのメンバーをインスパイアーしたのは、プロレタリアートの現実の生活というよりは、革命によって浄化された社会というユートピア的ヴィジョンだったことを、忘れてはならない。彼らは、そんな来るべき理想世界の「青写真」を創造した。マルクス主義に裏打ちされたユートピア志向は、建築への関心とつながり、タイゲの芸術理論を終生規定することになる。

話を 20 年代初頭に戻そう。結成後 2 年が経過した 1922 年、デヴィエトスィルは一大転機を迎える。この年の 6 月、タイゲが初めてパリを訪れ、ジャヌレ (ル・コルビュジェエ)とオザンファン、あるいはラリオーノフらの知己を得た。このパリ訪問が契機となって、デヴィエトスィルと国際アヴァンギャルド運動との接触が とりわけフランスおよびロシアのアヴァンギャルドとの交流が始まる。どのような潮流との交流が始まったのか。それを 20 年代前半にデヴィエトスィルが講演会や展覧会のために招いた人々の名に探ってみよう。ピュリスムのル・コルビュジェエとオザンファン、バウハウスのグロピウス、ハンネス・マイヤー、そしてモホリ・ナジ、オランダの機能主義建築家アウト。ソ連からもエレンブルグ、マヤコフスキィ、トゥィニャーノフが招かれている。若きデヴィエトスィルが国際的な芸術思潮に身を投じただけでなく、その理念もプリミティヴィズムを離れ、アヴァンギャルド運動へ、それもダダ、シュルレアリスムではなく、未来主義、構成主義の系統のアヴァンギャルドへと傾斜していったことが、これらゲストの面々から想像できる。

1922 年に起った唐突な路線変更は、同年 12 月に刊行されたグループ名を冠した最初のアンソロジー『革命的論集デヴィエトスィル』(1922)【図7】に明らかである。編集にあたったタイゲとサイフェルトの巻頭言「新しいプロレタリア芸術」が詩的プリミティヴィズムを称揚する一方で、巻末の「芸術の今日と明日」は国際的なモダニズムについて語るという一貫性のなさ。プロレタリア芸術という理念を支持するインドジフ・ホンズルの評論「プロレタリア演劇について」は、アルトゥシュ・チェルニークの二つの評論「電気の世紀のよろこび」と「ロシアの造形的な仕事」に前後から挟み撃ちにされている。前年に発表された「絵と原型」(1921)でタイゲは、第一次大戦の戦禍をくぐった体験から「もう二度と傲慢な機械技術文明であった生の破壊的な力を盲目的に信じることはないだろう。また、物質的発展と昨日の世界からの進歩を謳歌することしか知らぬ芸術など信じまい」(ibid.: 26)と言い切っていたのに、『デヴェトスィル』の後半ではもっぱら機械文明が賛美されていた。



【図7】『デヴェトスィル』



【図8】『ただ愛だけ』

サイフェルトの詩集『涙の街』に収められていたのは、革命の理想が庶民の自発的な感情として流れ出したかのような詩で、まさにそれはデヴィエトスィルの初期段階の理念の表現であったが、すでに見た通り、第2版のためタイゲがデザインした表紙には幾何学的抽象への傾斜がうかがえる。第2詩集『ただ愛だけ』(1923)【図8】でサイフェルトは、ナイーヴでプリティヴな世界感覚の直接性をさらに推し進めるが、オタカル・ムルクヴィチカの表紙には、詩集の内容と矛盾するようにモダニズムのモチーフ(大型客船、飛行機、摩天楼)がモンタージュされている。どうやら国際アヴァンギャルド運動にコミットするにあたって先陣を切ったのは、詩よりもその包装であったようだ。もっとはっきりとした構成主義への傾斜は、タイゲが友人の建築家ヤロミール・クレイツァルとデザインしたカ

レル・シュルツの短編集『東西南北』(1923)【図9】の表紙に明白だ。ある研究者は、この作品を、ヨゼフ・チャペックの幾何学的なデザインへの回帰であると評しているが(cf. ペチンコヴァー 2003:59)、同意しかねる。ここは協力者のクレイツァルがチェコにおける構成主義建築を代表する人物であることを勘案し、ソ連の構成主義者エル・リシツキィのパプロウン R VN 2》(1923)【図 10】との類似を指摘するべきであるう。しかも『東西

《プロウン R.V.N. 2》(1923)【図 10】との類似を指摘するべきであろう。しかも『東西南北』には、路線変更後のデヴェトスィルのエンブレムとも言える円が、やはり偏愛されたモチーフである矢印と組み合わされていることが目を惹く。円はグループ最初のアンソロジー『革命的論集デヴィエトスィル』(1922)の表紙に現れ、雑誌 DISK(1923)やタイゲの評論『アルキペンコ』(1923)、さらにはタイゲの主著のひとつ『建築と詩』【図 25】(ともに 1927 年刊)の表紙など数え切れないくらい使われた形態であった。自らの円に対する偏愛を、タイゲは 25 年の論文「構成主義と 芸術 の清算」で機械製品の美しさを例に次のように説明することになる。

円形と球体は、あらゆる形状のなかでももっとも基本的で、何よりも我々の視覚を楽しませる。(Teige 1966: 139)



【図9】『東西南北』



【図 10】 《プロウン R.V.N. 2》

『革命的論集デヴィエトスィル』の表紙にマレーヴィッチの作品《黒い円》(1917)を連想する人も、多いにちがいない。ロシア構成主義の使徒のような存在、イリヤ・エレンブルグとエル・リシツキィによって創刊された雑誌 VESHCH の第3号(1922年5月刊行) の目次の右下にも、マレーヴィッチの《黒い円》が《黒い四角形》とともに取り込まれている。このページで大きく扱われているラッセル車が、写真こそちがえ『革命的論集デヴィエトスィル』の192ページ、先に言及したタイゲの論文「芸術の今日と明日」にも挿入されている。1923年の刊行のブックデザイン史上の傑作中の傑作『声のために』(1923)となると、出版年からして直接の影響は考えられないが、赤い円だけを置いた版面に、リシツ

キィとタイゲに共通する様式なり精神を見たくなるのは自然だろう。





【図 11】 VESHCH (リプリント版)

【図 12】『声のために』(リプリント版)

タイゲがパリを訪問した 1922 年は、ロシア構成主義の国際的な認知が一気呵成に進行していた時期にあたる。リシツキィが前年にベルリンに移り住み、精力的な活動を繰り広げていた。構成主義の理念を伝えるための国際誌 VESHCH が創刊されたのもこの年であったし、ロシア構成主義のマニフェストとも言うべき 2 冊の本 アレクセイ・ガンの『構成主義』とエレンブルクの『それでも地球は回る』 が刊行されたのも 22 年だった。とりわけ後者はチェコの美術界に大きな影響を与えることになった。翌 23 年には抄訳がタイゲの書評とともに雑誌に掲載され、その秋にはエレンブルグはチェコに招かれ講演を行う。タイゲ自身も専門誌『建築』の編集者に選ばれ、1931 年までの在任期間中、同誌が国際構成主義にとっての重要なプラットフォームとすることに努めた。

「芸術は死んだ」と宣言したアレクセイ・ガンほどラディカルではないものの、タイゲもまた「芸術の今日と明日」においてエレンブルグの「明日の芸術は芸術たることをやめるだろう」(Teige 1922: 199)という言葉を四角く囲み大きな活字で強調するまでして旧来のアカデミズムを否定した。アカデミックな芸術に代わって賛美されたのが、写真であり、映画やネオンサインだ。機械的複製の手段である印刷術へも関心を寄せたことで、ブックデザインも彼らの創作の場となったのである。タイゲは自著『我らが拠り所、我らが道』(1924)で次のように述べている。

所詮は、その手段が限定されている絵画は、時代遅れになった手工業と同様、早晩滅びることになろう。絵画の危機の解決策はブックデザインであるように思われる。<...>今日では商業的な思惑に支配されているポスターも、飛びきり上等のプロパガンダ・アートに発達することだろう。インクと絵筆なしでも、タイポグラフィと写真やフォトモンタージュ、そして写真平版印刷、を用いることで<...>絵画的な詩を実現することが可能になるのであ

ナイーヴィズムからアヴァンギャルドへ。この路線変更はヨゼフ・チャペックとの関係を悪化させた。革命的ユートピアを信じるマルクス主義者タイゲと、ソ連に対し懐疑的な中道リベラルであるヨゼフという政治的な立場の相違も、軋轢の一因となったにちがいない。例えばタイゲは、自ら創作し、装本にも利用していたリノカットを「物資不足の時代の代用品であり、線の正確さに欠けるのが致命的だ」(Teige 1966: 220)と、20 年代後半のリノカットによる表紙デザインの流行を厳しく批判するようになるのだが、この批判を念頭に置いていたのであろうか。「私がこの媒体に執着し、その可能性を徹底的に利用しようと追及するのは、習慣と惰性、そして疑いもなく手仕事に対するある種の好みからである」(チャペック 2003: 107)というヨゼフの装幀論の一節は、機械美を称揚し始めたデヴェトスィルとの芸術観のちがいを鮮明に示している。彼には、厳密に機能主義的な原則に同調することは、到底できなかった。リノカットの美的価値をその素朴な味わいに認めていたヨゼフは、定規とコンパスでデザインされたニュー・タイポグラフィにも無関心で、幾何学的図案にしろ、表紙の文字にしろ、全て手描きした。他方、タイゲはリノカットの手工芸的性格は、機械印刷による版面との間に違和感を生むと考えたのである。

理論だけでなく、創作においてもデヴィエトスィルのメンバーが「新しい美」を 機械文明の美、マシーン・エイジの美、モダンの美を 称揚し出したことは、例えば、大型客船や飛行機、摩天楼、機械などが、メンバーの多くが試みた一種のフォトモンタージュ 絵画詩 に繰り返し現れるモチーフとなったことに端的に表れている。今やそれら最新科学技術の成果こそが「日常生活の美」を具現するものとなっていた。

デヴェトスィルが国際アヴァンギャルド運動に身を投じたばかりの 1923 年から 27 年にかけての時期、構成主義と並んでオザンファンとジャヌレの ピュリスム が、チェコのブックデザインの分野にその影響の跡を残している。既述の通り 22 年の訪仏に際してオザンファンとジャヌレと会っており、タイゲがパリで直接接したのはむしろピュリスムの方であった可能性が高い。早くも年末にはピュリスムを科学技術に基づくがゆえに賛美するようになるが、キュビスムが単なる装飾に堕したという認識にしてもデヴィエトスィルと共通している。また、機能と形態が直結している機械の崇拝、作家の個性によって汚されていない芸術への志向などにも、方針変更後のデヴィエトスィルの美学と似ている。どうやらタイゲがピュリスム経由で構成主義に接近していったことは、「ピュリスム美学の影響下にある現代建築は、構成主義的だ」(Teige 2005: 65)という 1923 年に発表されたエッセイ「絵画と詩」(65)の一節にもうかがえる。

しかし、建築論ではなくブックデザインの分野においてピュリスムを代表したのはタイゲではなく、画家のオタカル・ムルクヴィチカであった。アポリネール著『座せる女』(1925) 【図 13】の表紙は、ムルクヴィチカとタイゲの共同制作だが、本の表紙を本のポスターとすべく心がけた二人の意図は、原色と幾何学的分割のもたらすインパクトに見て取れる。 しかし、その派手な色使いや装飾的なレタリングからして、デザインの主導権を握っていたのは、どうやら構成主義者タイゲではなく、純粋主義者のムルクヴィチカであったらしい。このことは、ムルクヴィチカが単独でデザインしたノイマン著『ある事件の歌』(1927)【図 14】との比較から、とりわけ装飾的な書体に確認できる。それにしてもバウハウスのポスターなどに代表される厳密でクールな構成主義的デザインと比べると、ムルクヴィチカのデザインには叙情味が感じられるが、オザンファン、ジャヌレは、共著『新しい芸術』の中で、機械文明を賛美し造形的喜びは幾何学的なものに見出されると主張する一方で、「芸術は我々の詩的感情 リリスム の欲求に満足を与えることが唯一の目的である」(オザンファン、ジャヌレ 1946: 9)とも述べている。リリスムを満足させる非主観的幾何学性という立場は、タイゲの芸術理論における二極分裂へとわれわれの考えを導いていく。



【図13】『座せる女』



【図14】『ある事件の歌』

3 ポエティスムと構成主義

1923 年、詩人のヴィーチェスラフ・ネズヴァルは、タイゲと共に ポエティスム を提唱する。このイズムは、構成主義の集団主義的性格に対し、詩的創作の個人的性格を強調し、想像力の自由な領域に軸足を置いていた。つまり両大戦間のヨーロッパ・アヴァンギャルドの図式的二分法に従えば、ダダ、シュルレアリスムの系統に属するような芸術的潮流が、合理性、機能性に基づく構成主義と並行して唱えられたことになる。

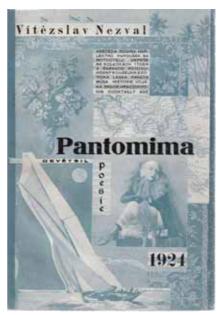
ネズヴァルの回想によれば、1923 年春の宵に彼とタイゲがポエティスムを「発見」したとされるが、1924 年 7 月にタイゲのマニフェスト「ポエティスム」が発表されるまでの間、マニフェストに代わってポエティスムの理念を人々に伝えていたのは、先にも言及した「絵画詩」と呼ばれる一種のフォトモンタージュであった。方形を中心とした幾何学的な平面分割を基盤に、そのグリッドにはめ込むようにして写真や地図、絵葉書、文字などが自由な連想に従ってモンタージュされた絵画詩は、ポエティスム固有のジャンルとして、1923

年から 27 年にかけデヴィエトスィルのほとんどのメンバーによって制作された。画家以外のメンバーも手がけたという事実にも、それがポエティスムにとって重要な表現形態であったことがうかがえる。モダンな絵画とモダンな詩の融合を融合し、ジャンルを超越したポエジーを目指し、画家と詩人を同一視する綱領からも、絵画詩こそはポエティスムにとって理想的な表現形態であるばかりではなく、アカデミックな芸術、とりわけイーゼル画に取って代わるべき新たな絵画だと、言語芸術の視覚芸術化は五感の中で視覚が圧倒的優勢に立つモダン文化の要請であると、タイゲは考えていた。同様にリシツキィも 1926年のエッセイ「我々の本」で、「本は耳を介してではなく、目を介して脳に至る経路を発見する。この経路だと、視覚による経路を通るよりもはるかに高い速度と圧力で波動が一気に伝わる」(Lisstzky 1967: 362)と語っている。こうした観点から詩集というメディアを考察するならば、次のようなタイゲの発言が生まれるのは当然とさえ言える。

現代詩はもはやヴェルレーヌのいう「何よりも音楽が」でなくなって久しく、朗読されるのではなく、聴覚ではなく視覚によって理解されるのであり、したがって視覚的な存在である。(Teige 1966: 230



【図 15】絵画詩《旅先からの挨拶》

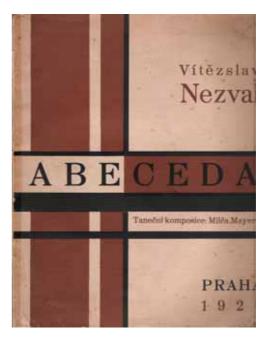


【図 16】『パントマイム』初版

その一方で、絵画詩は写真や絵葉書などレディーメーを素材にすることによって「複製」としての烙印を当初から押されているような表現形態であった。複製の断片を組み合わせるだけである。専門家でなくても十分楽しめる「民主的な」ジャンルであり、作者の署名がブランド名になっている 作品 = 商品 を集団的匿名性によって「個性」や「私有」から解放しようとする試みでもあった。複製を素材としている絵画詩自体も、印刷やあるいは映画化などを前提としており、機械的複製の元型という性格を帯びていた。絵画詩の実

物があまり残っていないのも、複製による流通をまず念頭においていたからだろう。旧来のアカデミックでご大層な大文字のAで始まる Art を否定するタイゲは、書籍による小文字の a ではじまる art の流通に着目しており、「機械的な複製は、大規模で確実な形で芸術の大衆化をもたらす。芸術作品と観者の仲介者となるのは印刷物であって、美術館や展覧会では決してない」と述べているが、「言葉によらない純粋な造形詩 その舞台になるのは書籍だ」(タイゲ 2005: 65)という一節にも絵画詩と本の結びつきが明言されている。

印刷による複製が可能な点でも、小文字の a で始まる「アート」という理念にとって絵画詩はきわめて重要な芸術形態であり、デヴィエトスィルのメンバーによって絵画詩はブックデザインに応用された。先に掲げた【図2】のサイフェルトの詩集『ただ愛だけ』の表紙もその一例であり、シュティルスキー&タイゲ装本、ネズヴァル著『パントマイム』(1924)【図16】は、その典型と言える。同じデヴェトスィルのメンバーのデザインでありながら、これらの表紙は、20年代半ばに制作された純粋に構成主義的なデザイン、たとえば『アルファベット』(1926)【図17】とも、その先駆けとなった『東西南北』ともかなりちがった印象を与える。



【図17】『アルファベット』

どうやら、デヴィエトスィルには、早い時期からイマジネーション、自発性、即興、戯れを称揚するポエティスムと、独創性という西欧近代のフェティシズムを糾弾し、非個性的な合理的客観性を目指す構成主義が共存し、二極分裂の様相を呈していたようだ。理論的指導者であるタイゲのうちにも二つの路線が共存していたのは明らかで、ネズヴァルやサイフェルトの詩を愛し、トワイヤンの絵を支持するタイゲとプロレタリアートのための集合住宅を提案するタイゲの二人のカレル・タイゲがいた。そして、二つの路線を綜合しようというタイゲ自身の努力にもかかわらず たとえば、1928 年出版の『哄笑する世界』の末尾で「構成主義者が建てた都市の中で魔法の街が新しい詩、哄笑の世界、芳香の世界を打ち立てるであろう」(Teige 1928: 89)という提案がなされたものの 実践において両者のジンテーゼが成し遂げられたとは思えない。構成主義者が建てた商業ビルや集合住宅が立ち並ぶモダン都市の中にポエティストの公園という特別な区画があるように、構成主義とポエティスムの二つのイズムは、それぞれがドミナントとなる分野があり、結果的に「棲み分け」が行われていたと、ひとまずは言えるだろう。

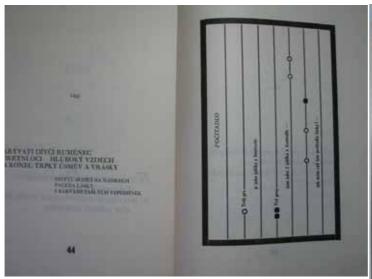
まず構成主義は、新時代の建築のための理論であった。そのほか構成主義が主導的な役割を演じたのは、舞台装置、写真、ブックデザインの分野であったのに対して、ポエティ

スムは詩、演劇、そして絵画をリードした。当初、デヴィエトスィルはアヴァンギャルらしい身振りでイーゼル絵画を否定したが、デヴィエトスィルを代表する画家であったインドジフ・シュティルスキー、トワイヤン、あるいはデヴィエトスィルにごく近い関係にあったヨゼフ・シーマといった画家たちは、結局イーゼル絵画を放棄することはなかったし、構成主義的な作品を試みたのは、1925年前後のごく短期間に過ぎない(cf. Šmejkal 1990: 20-21)。他方、ブックデザインの分野に目を転じると、この頃までにはバウハウスやデ・ステイルとの交流が深まりチェコでも一定の影響力を持つようになったが、正確な構成、明瞭性、可読性を要求するニュー・タイポグラフィのような機能的デザインを 20年代に手がけたのは、建築家カレル・タイゲ以外では、クレイツァルやヴィート・オブルテル、ズデニェク・ロスマンのような建築家だけであった。彼ら建築関係者にとって、本造りとは表紙やページの上に新しい世界、来るべき理想の社会を建設する(あるいは青写真を描く)試みだったのだろう。

内戦終結後の1925年10月中旬、タイゲはソ連を訪れ、約一ヶ月間モスクワ、レニング ラードに滞在し、構成主義者たちと交流を深め、建築関係の資料を多く持ち帰った。その 結果、彼の構成主義観には本場仕込みの教条主義が目立つようになる。たとえば訪ソ後の 論文「構成主義の理論に寄せて」(1928)では、「構成主義者の建築は、本質的に純粋な科学 であり」(Teige 1966: 370)、その美学は「何からの 芸術 がアプリオリに存在するという 迷信を拒否し」(ibid.: 363)、「構成主義者の 芸術 とは、実のところ矛盾律にほかならな い」(ibid.: 365)と、熱っぽく主張されるというように。シュルレアリスム絵画を高く評価し ているように見受けられる美術史家のカレル・スルプは、25以後の数年間、タイゲのリゴ リスティックな芸術否定論がデヴィエトスィルの画家たちの活動を妨げたと考え (cf. Srp 1990: 82)、初期デヴィエトスィルのナイーヴィズムと人口主義(シュティルスキー、トワ イヤンによるマニフェストの発表は「構成主義の理論に寄せて」の前年の1927年)にはさ まれた 1923 年から 26 年の時期を美術にとって不毛な空白期、タイゲの論文の表題を借用 して「芸術の清算に血道を上げた」時期と否定的に評価する(cf. ibid.: 82)。だが、まさにこ の時期にすぐれたブックデザインの作品、すなわち『東西南北』(1923)。『パントマイム』 (1924)、『電波にのって』(1925)、『アルファベット』(1926)が生み出されている。それは当 然の論理的(かつ理論的)帰結のようでもあり、逆説のようでもある。文学史家であるズ デニェク・ペシャトとなると評価はおのずと異なり、デヴィエトスィルの第2段階につい て(ペシャトの場合、それを 1924-26 年と区分するのだが)「画家たちはイラストや作品に おいて、デヴィエトスィルの作家たちと親密な共同活動を行い、その結果、詩における独 立した表現手段としてのタイプグラフィックな側面を強調することを通じて、詩自体が視 覚イメージの方へ向かった」と肯定的にとらえ、スルプの言う「芸術の清算」の時期にこ そ、詩人と画家の協働がもっとも豊かな果実をもたらしたとする(cf. Pešat 1990: 55)。

ここで 1925 年、ソ連訪問からの帰国後の 12 月に出たサイフェルトの詩集『電波にのって』【図 18】を見てもらいたい。この本の場合、本文のタイポモンタージュが見どころだ。

それぞれの詩に異なるタイプフェイスが使用され、同じ詩の中でさえレタリングが変化するという風に、タイポグラフィによる詩の視覚化が試みられている。同種の試みは『パントマイム』(1924)所収の詩「アデュー」【図 19】のタイゲによるタイプセッティングにも見られるが、もともとコンクリートポエムとして構想されていない詩をコンクリートポエムに改造する実験であると評してもよさそうではないか。たとえば「アデュー」という詩では「鳥たちが飛び立っていく」という詩行が飛び立つ鳥の(あるいは鳥の群れの)かたちに配置されており、詩と絵画を同一視するポエティスムの理念が絵画詩とは別の方法で実現されている。構成主義的な時期、構成主義的なブックデザインにもポエティスムの理念は生きていたと言えはしないか。論文「モダン・タイポグラフィ」(1927)での自評によれば、これら二つの詩における問題の核心は、「タイポグラフィがそれらの詩を最終的に仕上げ、視覚の領域に移すこと」(Teige 1966: 234)であったという。



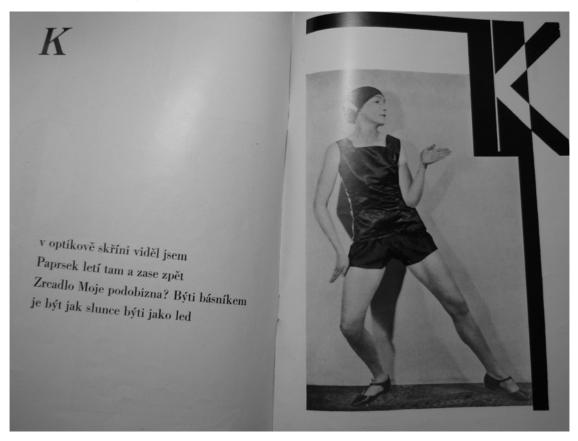
【図18】『電波に乗って』



【図 19】「アデュー」(『パントマイム』初版)

続いてタイゲ畢竟の傑作と目されるネズヴァルの詩集『アルファベット』(1926)【図 20】を見てみよう。詩自体はランボーの「母音」の影響のもと、アルファベットの文字に触発された言語遊戯的な短詩で、すでに『パントマイム』にもタイゲの活字組でもって掲載されていた。しかし、その後、作者自身の朗読をバックに、モダン・ダンサーのミルチャ・マイェロヴァーがその詩を視覚化するというパフォーマンスが催され、それに感銘を受けたタイゲが、あらためて一冊の詩集として出版したのである。左側のページに詩、右側のページにポーズをとるマイェロヴァーの写真、その写真は文字の形状から導き出された幾何学的なグラフィックスが囲むように配置されている。これは、モホイ・ナジが先鞭をつけたタイポフォトの試みにほかならないが、ご本家の説明的な言説性とはずいぶんと様子

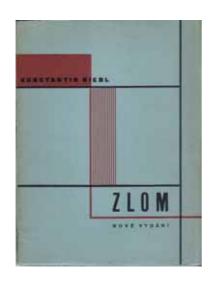
がちがう。文字に触発され、文字へと向かう想像力を喚起する魅力に溢れた「純粋に抽象的で詩的なタイポフォト」(ibid.)の創造に成功しているのだ。この詩集の場合は、ネズヴァルの詩を直接に視覚化するのではなく、共通の源から霊感をくみ取った詩とフォトモンタージュのモンタージュという興味深い実験となっている。それは決してネズヴァルの詩(ポエティスム)とタイゲのタイポグラフィ(構成主義)の分業的寄せ集めという、安易で怠惰な解釈を許さない。

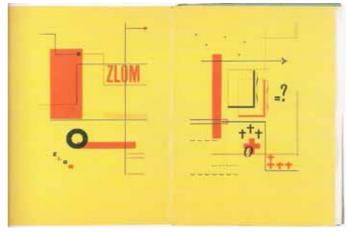


【図20】『アルファベット』

次にコンスタンチン・ビーブルの詩集『コーヒーとお茶を運ぶ船と一緒に』と『亀裂』【図 21】(ともに 1928 年刊)を見てほしい。いずれもタイゲがタイポグラフィの分野で行った野心的実験の掉尾を飾る本であり、リシツキィが『声のために』(1923)で行ったような、テクストを直接結びついたタイポグラフィック・コンポジションが試みられている。建築家のオブルテルは、「モダン・タイポグラフィ」のなかのタイゲ自身の言葉 「構成主義者の作品から形式を借りてきて作業するものの、合目的にではなく非合理的に、すなわち装飾的に使用する、そんな形式的な似非構成主義」(ibid.: 220-221)という一節 を反復するように、この二作の装本を装飾的な似非構成主義の悪しき実例として、さらにはリシツキィからの剽窃として批判したという(cf. Srp 1993: 56-57)。確かに、リシツキィの影響は明らかだが、模倣にしても抽象性と具象性、幾何学的造形とポエジーとのバランスを実現することは、決して容易ではないだろう。しかも、装飾的過ぎるとの批判をうけるタイポ

グラフィック・コンポジションとは裏腹に、『分裂』の表紙は素っ気無いほどシンプルになってきている。





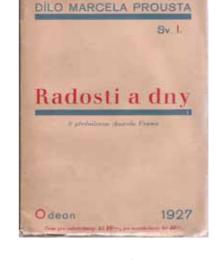
【図 21】『亀裂』の表紙とタイポグラフィック・コンポジション

4 構成主義から機能主義へ

1930年代に入ると、チェコ・アヴァンギャルドのブックデザインでは、機能主義が構成主義に取って代わる。29年の世界大恐慌の影響で出版界においても廉価な普及版がいよいよ求められたのも一因だった。機能主義は、ロシア構成主義よりはむしろバウハウス寄りの可読性に優れた明確なレイアウトを持つ、地味で実用的な判型 面白みには少し欠けるが、上品で、しかも手ごろな値段の判型を目指した。コストのかかる挿絵は含まず、表紙はタイポグラフィだけか、あるいはタイポグラフィと写真ないしフォトモンタージュを組み合わせる程度にとどめる。ただシンプルではあるが幾何学的構成や写真の取扱は洗練度をまし、平面的でスタティックな絵画詩とは対照的に、たとえば機能主義の第一人者ラヂスラフ・ストナルの手がけた表紙デザインは、非対称的な斜めの構図によって3次元性とダイナミズムを獲得している。それは『最小限の住居』(1931)【図 22】を見れば一目瞭然だろう。タイプフェイスも、ニュー・タイポグラフィを象徴する幾何学的なサンセリフが使用されており、大文字は使われていない。

このようにブックデザインの主流が構成主義から機能主義へと変遷した 1930 年代初頭、 装本は抽象絵画とのつながりを絶ち、純然たるデザインへと変化していく。より即物的で 厳密になり、バウハウスによって提唱されたエレメンタル・タイポグラフィへと接近して いった。もはやブックデザインの第一人者はタイゲではなく、ストナルであった。協同組 合 ドゥルシュステヴニー・プラーツェ を舞台に活躍したストナルは、バウハウスの理 念に近い立場から、よりシンプルなデザインを提供した。正確性と経済性を何よりも重視するストナルが目指したのは、タイゲの構成主義者理論そのままの徹底的に非個性的なデザインであった。実は、タイゲ自身が「モダン・タイポグラフィ」で提唱した六つの原則も、アカデミズムとの絶縁を強調している点を除けば、バウハウスの基本タイポグラフィの主張にごく近い(cf. Teige 1966: 232)。





【図22】『最小限の家』

【図 23】『悦びとと日々』

20 年代後半ともなると、タイゲ自身の装本にも機能主義的な作例が散見されるようにな る。1927年刊行のプルーストの作品集【図23】などはその先駆けとして位置づけられる。 タイゲの連作『ユーモア、道化、ダダイストについて』の第2分冊『匂い立つ世界』(1931) 【図 24】の自装など、ずいぶんと素っ気なく、第一分冊の『哄笑する世界』(1928)からの 変化が目を惹く。しかし、それ以前にも、やはり彼自身の重要な著作のひとつ『建築と詩』 (1927)【図 25】で、1925 年にバウハウスのヘルベルト・バイヤーがデザインしたシングル タイプの(つまり大文字と小文字の区別がない)サンセリフが使用されていた。これは、 ユニヴァーサル・タイプというバウハウスのプロジェクトの中でデザインされ、後に「ユ ニヴァーサル」や「ユニヴァーサル・グロテスク」と呼ばれたアルファベットで、コンパ スと定規だけで作成可能な幾何学的サンセリフ。こうしたデザインの背景には、唯一のア シングル・アルファベット による伝達が可能であるという合目的的 ルファベット な合理性、幾何学的であるがゆえに特定の文化的因習から解放された国際性、手作り書体 というロマンティシズムとの絶縁の三つが目指されていた。まさに機械の要求に応じた書 体の構造を求めてデザインされたタイポグラフィだったのである。『建築と詩』の表紙が与 える地味な印象にしても、幾何学的サンセリフの使用にしても、本のタイトルがおかれた 方眼紙にしても、建築学的正確さを期するとの基本コンセプトの表現となっている。

論文「ポエティスム」(1924)でタイゲは、構成主義がポエティスム同様に人間の創造力の両輪であり、「ポエティスムは単に構成主義に対立しないというにとどまらず、構成主義にとって必要不可欠な補完物である」(Teige 1966: 123)と唱えていた。その時期からあくま

でも相補的な関係にとどまり相互浸透はありえないと考えていたのであろうか、あるいは ソ連訪問後の教条主義化の故なのか、「構成主義の理論に寄せて」(1928)となると両者のジ ンテーゼはありえず、「構成主義的 芸術 とは矛盾律である。すなわち構成主義は 芸術 と呼ばれる人間のいとなみの形や 芸術 というレッテルを貼られる表現の形における本 質的な変容の顕現にほかなない」と主張する(ibid.: 365)。少なくともこの時期のタイゲにと って、「構成主義的な詩人」や「詩的な建築家」といった表現は形容矛盾にほかならなかっ た。これら二つのイズムの関係を、タイゲは、「ポエティスムは、構成主義が基盤を支えて いる生の頂きなのだ」 (ibid.: 123)と規定し、構成主義を労働日に、ポエティスムを休日に なぞらえる。うがった解釈をすれば、ここでも両者は、平日と休日というように時間的に 継起するか、あるいは市街と公園のように空間的に隣接するに過ぎないということになる。

両者は対等だと信じる彼自身は意識していなかったのだろうが、タイゲの比喩は構成主義の領域とポエティスムの領域に階層上下関係を設けていたと受取られかねなかった。人間の情緒面の要求に応える、自由なポエティスムが特権的地位を占めるのに対して、構成主義はポエジーを支えるために、より低く、実用的な目的に仕えるといったふうに。デヴィエトスィルの建築部門のメンバーからさえ、なぜポエジーが特別の区画だけにしか許されず、自分たちの設計する建物は機能一点張りでなくてはならないか、なぜ建物自体にポエジーを求めてはいけなのかと不満が続出した。彼らにとっては、構成主義建築は純粋な科学であるとの主張は受け容れがたく、むしろポエティスムの理念に、ポエティストの公園の構想に強く惹かれたらしい。彼らにとっては、詩集のデザインのように構成主義とポエティスムの原理を組み合わせることが、なぜ建築には許されないのか不可解であった。デヴェトスィル建築部門の二人のメンバー、カレル・ホンズィークとヴィート・オブルテルがタイゲの科学主義的ドグマを厳しく批判した。ホンズィークによれば、「もっとも厳格に科学的原理を遵守する場合でさえ、感情、直感、想像力をつまりきわめて科学的な傾向の強い建築家でさえ考慮しなければならないような芸術的要素を前提としている



のである」(Švácha 1999: 114)。

【図24】『匂い立つ世界』

stavba a báseň

Kare

reige

【図25】『建築と詩』

他方、オブルテルは、建築とは科学とポエジーの調和のとれた綜合でなくてはならない

と主張した。しかし、既に述べた通り、オブルテルが2冊のビーブルの本のデザインを「装 飾的である」として批判した事実を思い起こすと、ブックデザインが建築へのアナロジー から構成主義が試みられた分野でありながら、建築理論に矛盾するかのような自由の息吹 を感じさせる、詩的な(時に装飾過多ともいえる)コンポジションを数多く生み出してい ることに気づく。1920年代後半の傑作群は、詩と絵画、詩人と画家の同一化という目指す ポエティスムの理想を実現しようとした試みだと見做せるのではないか。少なくとも、タ イゲによる構成主義的な装本の傑作の場合、彼自身の構成主義理論からはみ出る剰余が

バウハウスのデザインには見られない「プラス」、ポエティスムに由来する「剰余」 魅力の源となっている。デヴィエトスィルのメンバーが、他の分野でなしえなかっ が た構成(建築)とポエジーの融合が、理論的な矛盾を孕みながら達成されたように見える。 そのことは、タイポグラフィックな実験に限らず、一見したところシンプルで素っ気無い 『ティレシアスの乳房』(1926)の表紙に感じられるファクトゥーラの面白みにも当てはま ることだ。逆に、同時期の似かよった主題の『最小限のアパート』(1932)【図 26】をスト ナルの『最小限の家』(1931)と【図 22】見比べると、タイゲのデザインのごたついた垢抜 けなさが際立ち、余剰の(この場合は否定的な)効果を逆方向から照射してくれる。実際、 タイゲを批判したオブルテルの作風 - 禁欲的な構成主義的デザインに叙情性を加味した 作風にいちばん近いのは、むしろタイゲの装本なのではないか。オブルテルがデザインし

たネズヴァルの詩集『空中独楽』(1926)【図 27】と『分裂』 のタイポグラフィック・コンポジション【図 21】を比較し てもらいたい。





【図 26】『最小限の住居』

diabolo Vítězslav Nezval

【図27】『空中独楽』

しかし、だからといって構成主義が美学的な足かせになっていたと主張するのは間違い だろう。2冊のホンズルの著作 ほとんど構成主義にコミットなかったシュティルスキ ーがデザインした『花開く舞台』(1925)【図 28】と、タイゲのデザインである『現代ロシ ア演劇』(1928)【図 29】を比較すると、ブックデザインにおいて構成主義的な要素がいか に大きな働きをしているか、了解できる気がする。『花開く舞台』の右側の階段状の図形は、 構成主義的な造形語彙でありながら、まったく効果を上げていない。一方、『現代ロシア演 劇』では、タイポグラフィックな要素 - すなわちタイゲが偏愛した円を巧みに利用し、 現代のウェブデザインにも通じる 情報デザイン 上の配慮までなされているのは、見事 である。

シュルレアリスム的なブックデザインの先駆として高く評価されているネズヴァル著『いかさまトランプ』(1925)のシュティルスキーのフォトモンタージュ【図 30】にしても、筆者にはあまり効果を上げているとは思えない。それに比べれば、シュティルスキーのデザインしたネズヴァルの詩集『パントマイム』(1924)初版【図 16】は、やはり絵画詩的な表紙の最高作であろうが、グリッド分割とタイゲの多様なタイプセッティングが無ければ、ここまでの効果はのぞめないだろう。「デヴィエトスィルの家族アルバムといった趣の、少しばかりとりとめがなく統一感に欠ける印象をもたらす」(Bregantová 1994: 40)と評する人さえいるこの絵画詩をどうにかまとめ上げているのは、構成主義的な造形手段ではないか。



【図28】『花開く舞台』



【図 29】『現代ロシア演劇』



【図30】『いかさまトランプ』

5 機能主義とシュルレアリスム

1930 年代に入ると、経済危機の深刻化とファシズムの台頭、近づく戦争がもたらす重苦 しい雰囲気がチェコを覆うようになる。文化の勢力地図にも変化が起こり、1929 年にはデヴィエトスィルよりも広い基盤の上にインテリ層の力を結集すべく 左翼前線 が組織され、社会意識を前面に出した芸術活動が盛んになる一方で、31 年の6月にデヴィエトスィルは解散した。デヴィエトスィルの代表的詩人ネズヴァルは次第にシュルレアリスムへと傾斜していき、1934 年にはネズヴァルを中心にホンズル、シュティルスキー、トワイヤンらによって チェコスロヴァキア・シュルレアリスム集団 が結成され、タイゲも遅れて翌年参加する。もともとポエティスムとシュルレアリスムには、精神分析に対する関心が共通しており、ともに下意識を霊感の源として重視していたが、シュルレアリスム絵画に

対してタイゲやシュティルスキーは、それが下意識的なものだけを受動的に再現すべき汲々としており、創造性と構成の意志的要素を否定することでテクニックや形式の問題を等閑視していると批判的であった(cf. Byžková 1999: 54)。そうはいっても、1929 年以降、トワイヤンやシュティルスキーの絵やネズヴァルの詩には図らずもシュルレアリスム的なものが認められるようになっていたという(cf. Srp 1999: 262)。つまるところ、精神分析と弁証法の共存が可能だと考えるに至っていた 20 年代末のタイゲらにとって試金石となっていたのは、具体的な芸術上のガイドラインとしての弁証法的唯物論であり、「超現実主義第二宣言」(1930)以降のアンドレ・ブルトンとの接点をそこに見出したのである。1930 年12 月に執筆されたと推測され、生前は公刊されずに終わったネズヴァルの「ポエティスム第三宣言」には、弁証法に依拠したシュルレアリスム批判とでも呼べそうな一節さえ見出すことができる。

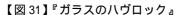
弁証法的思考が私にもたらす利点は、「シュルレアリスト」という用語を使うことなく(それでも使わざるをえないにしても)、「である」と同時に「ではない」という現実の純粋な同時性に対して直面させられる自分の姿を見るためのライセンスを与えてくれることである。<...>私は弁証法的に判断を下す。私は、シュルレアリストたちが相対立すると見たがる矛盾対立するものに永続的で不可分の統一を見る。(ibid.: 262)

とはいえ、チェコのアヴァンギャルシストたちはシュルレアリスムを受け容れ、それにともなってタイゲの理論体系の布置にも変化が起きた。理論内部の二つの極が構成主義とポエティスムから、機能主義とシュルレアリスムに変化したのである。この両極はそのまま30年代のタイゲのブックデザインに共存する二つの様式ではあるが、機能主義とシュルレアリスムの関係を、タイゲははっきり定義していないことに留意する必要がある。しかも同じ機能主義でも、建築理論における機能主義の場合は、構成主義の行き過ぎた合理主義への反省から建築の及ぼす心理的な作用を配慮するというふうに、シュルレアリスムから心理的契機が導入されているように考えられるのに対して、ブックデザインにおける機能主義は、すでに見た通り、目的合理性を究極までつきつめる立場であり、同じ機能主義でも理念は正反対と言ってもよいほどなのだから。タイゲの建築理論における機能主義というタームの用法から判断しても、タイゲ個人の関心は、どちらかと言えば、機能主義の極からシュルレアリスムの極へと、建築、合理性、知性の極からポエジー、不合理性、感情の極に移ったように見受けられる。30年代後半には、シュルレアリスムへの関心が、建築への関心全般を日陰に追いやってという印象さえ受ける。

ナチスドイツの脅威だけでなく、スターリンに忠実なチェコ共産党からの圧迫も感じていたタイゲにとって、無意識こそが唯一残された自由な空間であったというのはいささか感傷的な誇張であろうが、1931 年から 1938 年にかけて手がけた 8 冊の書籍 (すべてネズヴァルの著作)では、シュルレアリスム的なコラージュが試みられている。最初のシュル

レアリスム的な表紙『ガラスのハヴロック』(1931)【図 31】ではサンセリフを放棄していることが目を惹く。あたかも同時期の機能主義的タイポグラフィ(自分自身も使用していたタイポグラフィ)とはまったく別の原理に立つかのように、ネズヴァルの8冊の本は30年代にタイゲがデザインした書籍の中で突出した存在だ。しかし、そのような技術面のディテールよりも、コラージュの素材の木版画を、その人物像を斜線で切り刻んでいる点に、何やら不穏で重苦しい印象を受けることをまず指摘しなくてはならない。





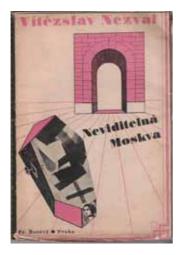


【図32】『パントマイム』第2版

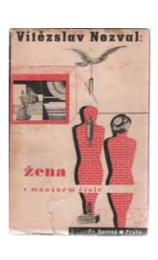
『パントマイム』第2版(1935)【図 32】以降の作品となると、構成主義的なブックデザインではついぞ見かけなかった女性のヌードが現れること、しかもそのほとんどがやはり断片化されたていることが注目される。三題噺ではないが、シュルレアリスム、ヌードとくれば、当然エロティックなものが予想されるにもかかわらず、タイゲのシュルレアリスム的な表紙は、エロティックな夢の世界と共に、いや、それよりはまず重苦しい不安を切実に反映しているように思われてならない。とりわけ『見えないモスクワ』(1935)【図 33】、『複数形の女』(1936)【図 34】『雨の指のプラ八』(1936)【図 35】の3冊の表紙では、やはり以前のタイゲの図像には現れたことのない閉塞した空間が観者の不安をかき立てる。

1938年のミュンヘン会談以降は、ナチスによる退廃芸術の禁止により、タイゲをはじめとするアヴァンギャルディストたちは沈黙を余儀なくされる。検閲も強化され、タイゲは創作活動の中心であると同時に、今や唯一の収入源となったブックデザインさえ自由にできなくなった。ナチスによる占領の直前に上梓された『夜の詩』(1938)【図 36】の表紙で試みられたようなシュルレアリスム的なコラージュは、公開はもちろんタイゲ自身の文章で言及されることもない、純粋に個人的ないとなみとして 1951年の死まで続けられることになる。しかし、『夜の詩』の表紙を見直すと、タイゲのフェティッシュであるバストが、石造りの手すりと組み合わされ、ストナルを思わせるダイアゴナルな平面分割のなかに配置されていることに気づく。ルーティン・ワークに堕していた気味のある同時期の機能主義的デザインとは一線を画し、30年代の装本としては高い芸術性を有するというように、

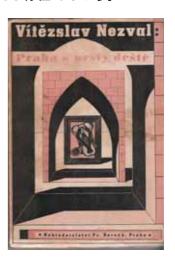
二重に例外的なシュルレアリスム的なブックデザインにも、構成主義を連想させる建築のモチーフや機能主義的な斜めの構図が浸透しているのである。第2次世界大戦後手がけたエゴン・ホストフスキーの『流刑地からの手紙』(1946)【図 37】は、唯一戦前のレベルに達したデザインであり、タイゲにとって唯一すぐれた機能主義の作例であり、彼のブックデザイナーとしてのキャリアを思い合わせるなら、逆説とも言える存在であろう。



【図33】『見えないモスクワ』



【図34】『複数形の女』



【図35】『雨の指のプラハ』



【図36】『夜の詩』



【図37】『流刑地からの手紙』

6 シュルレアリスムと社会主義リアリズム

両大戦間のチェコの芸術批評において正統コミュニズムの立場を代表していた文化人か

らすれば、若造の唱えたポエティスムごときは「ブルジョワの娯楽」(ユリウス・フチーク)であり「資本主義末期の所産」(ベドジフ・ヴァーツラヴェク)にすぎなかった。すでに1930年の秋、ソ連のハリコフで開催された第2回国際革命作家会議でデヴィエトスィルは厳しい批判にさらされていた。アラゴン事件の契機となったことで名高いこの会議の後に、マルクス主義を奉じるアヴァンギャルディストたちがシュルレアリスム集団を結成するということ自体、無謀なことだったのだろう。

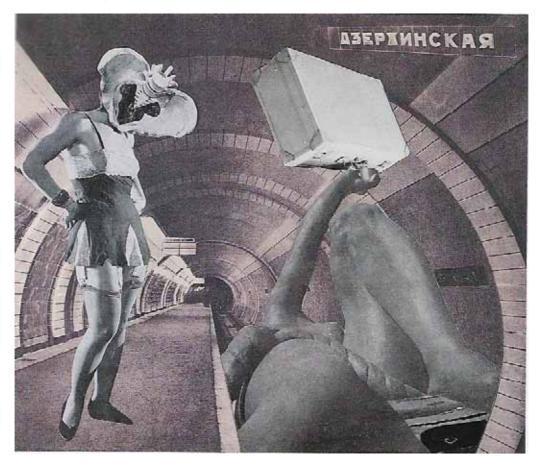
同じ 1930 年に実施された《ソヴィエト宮殿》の設計コンペも、タイゲの構成主義にとって致命的な事件となった。コンペにはル・コルビュジエをはじめとする錚々たるアヴァンギャルド建築家が応募したにもかかわらず、ソ連のアカデミスト、ボリス・イオファンの案が勝利を収めたのである。シニカルな事情通からすれば、若いながらもクレムリンに事務所を構える「宮廷」建築家イオファンの勝利は、最初から分かっていたらしい。しかし、構成主義者からすれば容認しがたい結果であり、ヴィクトル・ヴェスニンは優勝した設計案に驚き、「私が思うに、この現象は非常に危険だ」と嘆き、ル・コルビュジエもこの意見に同調したという(cf. Paperny 2002: 4)。

タイゲの建築理論が(とりわけ 1925 年以降)ソヴィエト建築というモデルに強く依存していたのは、まぎれもない事実だが、それはあくまでアヴァンギャルド建築であり、彼がアヴァンギャルド全般への信念を失うことはなかった。当然、タイゲにとってスターリン時代の文化綱領は、受け容れがたいものであった。タイゲの目には、社会主義リアリズムや建築におけるアカデミズム・歴史主義は、新しい仮面をかぶったブルジョア趣味にしか映らなかった。1936 年の著書『ソヴィエト建築』では、歴史主義の復興を糾弾したのはもちろん、その実用性と経済性に背馳する大仰なモニュメンタリティが、人々を貶め、脅迫して従属させるためのメガロマニアックなメタファーとして機能していることを厳しく断罪した。と同時に構成主義の見直しも余儀なくされ、その実用偏重、行き過ぎた合理主義が建築の持っている心理的機能を無視していると指摘するのだが、この批判は、かつてカレル・ホンジークがタイゲの建築理論に向けた批判の言葉にほかならない。

このようなロシア文化の変化、変質を踏まえた上で、タイゲのシュルレアリスティックなブックデザインを見直すと、ついうがった見方をしたくなる。1935 年から 36 年にかけて出版された『見えないモスクワ』(1935)【図 33】、『複数形の女』(1936)【図 34】、『雨の指のプラハ』(1936)【図 35】の表紙には、初めて閉ざされた空間が現れることは、すでに指摘したが、例えば『雨の指のプラハ』(1936)の連なるアーチの奥の空間は、たぶん下意識へとつながる経路か、あるいはもっと端的にワギナを表していると解釈すべきなのだろうが、同時にここに閉塞した時代の反映を見たくなる。『見えないモスクワ』(1935)の表紙の左手の棺のようなものにしても下意識へとつながる空間か、あるいはワギナと そこに挿されている鍵は下意識への扉を開く鍵か、あるいはペニスと解釈すべきだろうが、よりにもよってそれが棺とあっては、観者のうちに不安をかき立てずにはいないだろう。

同じ時期のコラージュにも似たような空間が見られることからしても、閉塞した空間が

タイゲの中にわだかまっていたのはまず間違いないように思える。1938 年の《コラージュ No.50》【図 38】に至っては、よりにもよって政治保安警察の創設者であり、抑圧の象徴であるフェリクス・ジェルジンスキィの名にちなんだ駅名をわざわざ貼り付けてあるのだから、ソヴィエト文化に対する絶望、ソ連による抑圧が表現されていると解釈したくなっても無理もあるまい。



【図 38】 《コラージュ No.50》

1932年に発表された「フォトモンタージュについて」を読む限りでは、絵画詩とフォトモンタージュとコラージュの間に原理的な区別を立てていない(Teige 1969: 79)。表題からしてフォトモンタージュを念頭に置いているためもあるのだろう、エイゼンシュテインやヴェルトフの名を挙げ、モンタージュの原理に言及しつつ、それが「平面上での同時的綜合であり」(ibid.: 74)、フォトモンタージュの基盤が「弁証法的とでも言えそうなものである」(ibid.)とタイゲは言う。その上で「フォトモンタージュの機能が形式上の対立要素の綜合によってより高次の表現性、感情面への作用」(ibid.)に至ることにあると心理的作用が重視され、エイゼンシュテインの「アトラクションのモンタージュ」を連想させる。他方で、マルクスの『資本論』やレーニンの『帝国主義論』のタイポフォトによるイラストレーションを新たな課題に挙げている点には(ibid.: 77)、エイゼンシュテインの知的映画論の影響が明らかで、言説性による伝達機能の重視が読み取れる。どちらの点でも、ソ連のプロパ

ガンダ芸術についての知識がうかがえるフォトモンタージュ観であるが、これもまたソ連に対する絶望のためであろうか、実際に彼が制作したコラージュでは全く別の方法がとられていた。

タイゲのシュルレアリスム的なコラージュには、『夜の詩』の表紙と同じように、女性のヌード(特にバスト)がフェティッシスティクなモチーフとして繰り返し現れる。シュルレアリスム以前のブックデザインにあっても女性の写真が使われていなかったわけではないし、実際『アルファベット』においてモダン・ダンサー、ミルチャ・マイェロヴァーの写真が絶大な役割を果たしているのだが、マイェロヴァーの写真は女性的なるものを観者に伝えることはない。タイゲに限らず、構成主義者たちは「男らしさ」という形容詞を好み、肯定的な意味で用いていたようだ。タイゲとも交流のあったオランダの建築家マルト・スタムは、19世紀に建設された都会の目抜き通りの装飾性と空虚なモニュメンタリティを「前世紀の女々しさ」と評したというし、スタム以外にも、リシツキィ、タイゲとは非常に親しい間柄だったバウハウスのハンネス・マイヤーなど構成主義者たちは、工学的な構成物を「男らしい」質を有する形態と定義し、タイゲ自身も、機械美について「正確に組み立てられた形式に特有の男らしい雰囲気」を指摘したという(cf. Císarová 1993: 79)。このことから、コラージュに女性のヌードばかりが現れるのは、少なくともタイゲの私的な世界で建築、構成主義や機能主義、合理性、マスキュリニティが後景に退いたとの印象を与える。







【図 38】《コラージュ No.28》

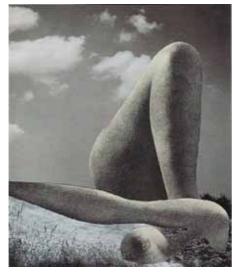
【図 39】《コラージュ No.68》

【図 40】《コラージュ No.127》

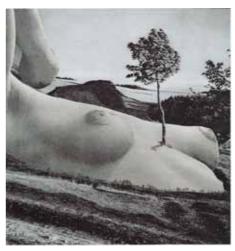
しかし、前景化するエロスやフェミニティの背景として、ディテールとして、かつて賞賛の的であった機械や関心事であった建築(の一部)も画面に登場していることにも目を惹かれる。ただ建築といっても、彼が蛇蝎のごとく嫌っていたモニュメンタルな建造物が目立つ。機械にしても、プリミティヴィズム時代の彼が憎悪した武器が、例えば、《コラージュ No. 28》【図 38】と《コラージュ No. 68》【図 39】ではリヴォルヴァーが画面に現れている。前者では銃口が画面に向かって右に、後者では手前の観者に向けて向けられているものの、ペニスの象徴であるなら、男性の欲望の代行者が、それも強圧的な代行者が画面

手前の観者の鏡像として欲望の対象と同一の画面に並置されていると考えられなくもない。タイゲのコラージュが一義的な解釈を許さないのを良いことに、No. 28 のリヴォルヴァーには目がついていることに過剰解釈をほどこせば、男性の象徴と目の隣接は画面の目に欲望の視線の源という地位を付与していることになる。タイゲのコラージュに登場する女性のほとんどが顔を奪われており、目があったとしても乳房の上に置かれたり(No.25, No. 70)、裸のトルソの顔にあたる場所に大きな目だけ据えられているのは(No. 27, No. 127【図 40】)、欲望の視線の出発点と目標が並置されていることになる。彼女たちは視る能力を奪われ、欲望の視線に目をさらすだけである。かつて男性的だとして賛美された機械をはめ込まれた女性像にしる、背景の巨大な鉄骨構造にしる、非常に抑圧的に見える。

しかし、1940 年代に入ると、そんな不安をかき立てるようなコラージュにまじって広々とした空間が現れるようになる。《コラージュ No. 344》【図 40】、《コラージュ No. 355》【図 41】を見てもらいたい。いずれも 1948 年の作品。No. 355 の方など、ちょっとクリストのプロジェクトを連想させると言えば、褒め過ぎであろうか。この風景コラージュは、タイゲの新しい建築の現れでもあった。



【図 39】《コラージュ No.344》



【図 40】《コラージュ No.355》

1947 年、ラヂスラフ・ジャークという建築家の『住まわれる自然』という本のために、タイゲは序文を書く。10 年振りの建築論で彼は、資本主義と工業のために荒廃した田園を生き返らせた上で、美学的に完成させて一種の庭園にするというジャークの構想を熱烈に支持した。彼の建築への関心は、ついに建築のない建築に辿り着いたかのようだ。構成主義は断念したとしても、ポエティストの公園、魔法の街の記憶は残っていたのだろう。今度は「シュルレアリスティックな風景」などと言い出す。自然の景観にアルプやブランクーシの彫刻を置き、彫刻が景観を「シュルレアリスティックな風景」に変えてくれることを、タイゲは夢見るのだ。ポエティスムの公園と比較すれば、このシュルレアリスティックな風景は、広がりがありそうだが、それにしてもごく限られた空間にしかすぎない。しかし、それでもタイゲは芸術なしにはいられないのだろう。そして、生活が芸術になるよ

うな新世界を夢みる中で、ポエティストの公園やシュルレアリストの風景画がごく限られた時間を占めるに過ぎないことに気づかざるをえない そんな構想でもタイゲは諦め切れなかったのだろう。都市の中のポエティスムの公園や自然の中のシュルレアリスティックな風景は、ナチスがチェコを占領し、ネズヴァルの裏切りでシュルレアリスム・グループが分裂した 1938 年以降のタイゲの生活におけるコラージュに似た位置を占めているようでもある。ただ、そのコラージュの中では、住まわれた自然、シュルレアリスティクな空間が実現していた。少なくとも、コラージュとブックデザインという小さな世界でだけは、カレル・タイゲはある種のユートピアを実現できたように思われる。

注

- 1) 図版の出典は以下の通り。ただし、個人蔵のものについては、出典を示していない。
- 【図6】『ブックデザインの源流を探して チェコにみる装丁デザイン』印刷博物館、p. 49.
- 【図 10】 Sophie Lissitzky-Küppers (ed.) EL LISSITYKY. Thomas and Hudson: London, Fig, 31...
- 【図 14】『ブックデザインの源流を探して チェコにみる装丁デザイン』印刷博物館、p. 83.
- 【図 15】 Rassegna 53, CIPIA srl: Milano, p.41.
- 【図 38】~【図 40 】 Karel Srp Karel Teige, TORST: Praha, 2001.
- 2) ここでの引用は次の論文中の英訳による: Stehlíková, "Czech Avant-garde and Book Design: An Overview", The Czech Avant-garde and Czech Book Design: The 1920s and 1930s. Florham-Madison Compus Library, p. 8.

引用文献

伊東孝之ほか(監修) 2001 『東欧を知る事典』(新訂増補版) 平凡社。

オザンファン, ジャヌレ共著『近代絵画』(吉川逸治訳) 河出書房。

- タイゲ, カレル 2005 「絵画と詩」(宮崎淳史訳) 井口壽乃ほか(編)『アヴァンギャルド 宣言 中東欧のモダニズム』 三元社。
- チャペック, ヨゼフ 2003 「本の表紙」(千野亜矢子訳) 及川さえ子(編)『チャペックの本棚 | ヨゼフ・チャペックの装丁デザイン』 P・I・E BOOKS、pp. 107-109.
- ペチンコヴァー, パヴラ 2003 「ヨゼフ・チャペックとアヴァンギャルド」(木村英明訳) 『ブックデザインの源流を探して チェコにみる装丁デザイン』図録 印刷博物館、pp. 56-60.
- Bregantová, Polana 1999 ,Typography', Eric Dluhosch and Rostislav Švácha(eds.) Karel Teige/ 1900-1951: l'enfant terrible of the Czech modernisit avan-garde. The

- MIT Press: Cambridge, London, pp.72-91.
- Byžková, Lenka 1999 ,The Avan-gaude Ideal of Poiesis', Eric Dluhosch and Rostislav Švácha(eds.) Karel Teige/ 1900-1951: l'enfant terrible of the Czech modernisit avan-garde. The MIT Press: Cambridge, London, pp.47-63.
- Císarová, Hana 1993 ,Surrealism and Functionalism: Teige's Dual Way', *Rassegna 53*, CIPIA srl: Milano, pp.79-87.
- Lissitzky, El 1967 ,Our Books', Sophie Lissitzky-Küppers (ed.) *EL LISSITYKY*. Thomas and Hudson: London, pp. 360- 363.
- Paperny, Vladimir, 2002 Architecture in the Age of Stalin: Culture Two. Cambridge University Press: Cambridge.
- Pešat, Zdeněk 1990 ,Devětsil and Literature', *Devětsil: Czech Avant-garde of the 1920s and 30s.*Museum of Modern Art Oxford & Design Museum, London, pp. 52-57.
- Teige, Karel 1922 ,Umění dnes a zítra', *Revoluční sborník Devětsil*. Nakladelství Večernice V. Vortel: Praha, pp. 187-202.
 - . 1928 O humoru, clownnech a dadaistech sv. 1. : Svět, který se směje, Studie z dvacátých let. Odeon: Praha.
 - . 1966 Výbor y díla I: Svět stabvy a básně, Studie z dvacátých let. Československý spisovatel:

 Praha.
 - . 1969 Výbor y díla II: Zápasy o smysl moderní tvorby, Studie z třicátých let. Československý spisovatel: Praha.
- Srp, Karel 1990 ,Devětsil: An Epilogue', *Devětsil: Czech Avant-garde of the 1920s and 30s.*Museum of Modern Art Oxford & Design Museum, London, pp. 80-87.
 - . 1993 ,Karel Teige and the New Typography', Rassegna 53, CIPIA srl: Milano, pp.52-61.
 - . 1999, Karel Teige during the Thirties', Eric Dluhosch and Rostislav Švácha(eds.)

 **Karel Teige/ 1900-1951: l'enfant terrible of the Czech modernisit avan-garde. The MIT Press: Cambridge, London, pp.256-291.
- Šmejkal, František 1990 "Devětsil: An Introduction", *Devětsil: Czech Avant-garde of the 1920s and 30s.* Museum of Modern Art Oxford & Design Museum, London, pp. 8-27.
- Švácha, Rostislav 1999 ,Before and After the Mundaneum', Eric Dluhosch and Rostislav Švácha(eds.) Karel Teige/ 1900-1951: l'enfant terrible of the Czech modernisit avan-garde. The MIT Press: Cambridge, London, pp.107-139.

スラヴ世界における文化の越境と交錯:平成15年度~平成18年度科学研究費補助金 (基盤研究(B))研究成果報告書

代表者:諫早 勇一

連絡先:610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 同志社大学言語文化教育研究センター内

諫早勇一研究室

電 話:0774-65-7172

E-mail: yisahaya@mail.doshisha.ac.jp

編集:石川達夫

平成19年2月発行